EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 7390

昭和九年十月十五日印刷
昭和九年十月二十日發行
昭和十一年十一月五日再版

不許複製

國譯一切經 毘曇部廿二

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

東京市芝區芝公園地七號地十番
發行所 大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番

製本所　両角製本所

索引

此の索引は舍利弗阿毘曇論上下二卷を併合せるものなるが故に頁數を區別する爲に上卷分(毘曇部十九)に括弧(　)を付せり。

—ア—

阿迦膩吒天 (252)
阿闍梨 (379)
阿僧祇 65
阿羅漢 (244)
愛 141, 201
愛因 255
愛觸 184
惡行 42
惡口 303
惡方便 (260)

—イ—

恚 202
異因 253
異緣 14, 215(329)
一護人 (254)
一向苦 132
一向樂 131
一切 70
一切等 (248)
一切入 (248)
一切入定 359
一時俱斷 (108)
一種人 (250)
一心 75
一想 132
一分等 (252)
一分等二人 (242)
因 (303)
因因 253
因緣 14, 215(229)
因非因門(24, 99, 158. 189, 195, 236)
因法 257
因品 252
陰品 (76)

—ウ—

有愛 98(16)
有愛心等 (279)
有爲無爲門 (26, 131, 159)
有因 255
有因非因門 (26, 58)
有緣射人 (257)
有緣無緣門 (26, 58)
有緣非緣門 94, (124, 154. 178)
有覺有觀定 21
有覺等 1
有行般涅槃 251
有求 98
有結 (98)
有見 (981)
有光智苦 (260)
有色無色 131
有識身 54
有取智 (262)
有勝智 (262)
有勝智無勝智 (259)
有退人 (256)
有對 (15)
有緒 (26)
有緒無緒門 (26, 58)
有邊無邊 126, 131
有煩惱 210
有報無報門 (19, 52, 54, 188 194, 202)
有微護人 (247)
有無愛門 (49, 90, 127, 148, 184, 188, 194, 202)
有無爲門 (131, 159, 185, 189 195, 203)
有無因門 (98, 130, 159, 180 185, 189, 195, 203)
有無緣門 (131, 159, 185)
有無求門 (49, 90, 122, 148, 184, 188, 194, 202)
有無取門 (49, 90, 122, 148, 184, 188, 194, 202)
有無勝門 (49, 90, 122, 148, 188, 194, 202)
有無對門 (46, 89, 121, 146, 187, 194, 202)
有無緒門 (131, 159, 185, 189, 195, 203)
有無報門 (92, 123, 150, 185)
有無漏門 (48, 90, 122, 148, 188, 184, 194, 202)
有用智 (268)
有漏 (98, 90, 316)
有漏智 (262)
有漏無漏門 (16, 90, 122, 148)
憂 (353)
憂因 255
優陀夷 (297)
優頭披羅 38
優婆塞品 (197)
優婆羅 311
優摩華 64

—エ—

依因 253
依緣 14, 215, (329)
慧 18
慧解脫人 (253)
慧分別 40
悅心 333
悅分 199
緣 (323)
緣緣 14
緣覺人 (241)
緣起行 (355)
緣生法 (323)
緣非緣門 (185, 189, 195, 203)
緣方便 (322)

—オ—

和尙 (379)
憶念等 (286)

—カ—

可不可見門 (46, 87, 146, 184 187, 194, 202)
可見等 15
迦尼伽羅 64

過去智等 (273)
過去等 (260)
我 (217)
我所 (217)
我慢 (113)
戒衰 99
戒斷 41
戒盜 (117, 343)
戒道使分 201
戒無數 (14)
界繫門 (111, 138, 172, 182, 186, 192)
界品 43(205)
海 (10)
害見 99
覺 143, 187
覺分 197
學智等 (268)
學人等 (245)
觀 143, 187, (352)
觀相 311
觀分 197

—キ—

喜愛 (183)
喜解心 (216)
喜心 76
喜分 199
起 (314)
起因 253
起緣 14, (329)
起覺想等 384
起滅行 (358)
綺語 303
擬使分 201
境界因 253
境界緣 212, (329)
經行 (371)
行 (352)
行因 254
行進等 (264)

—ク—

九次第定 68
九衆生居 116
九想 69
九滅 68
九滅等 2
口の四不善 (120)
共解脫人 256
共業非共業 (24)
共業非共業門 (56)
共心非共心門 (22, 54)
共念出息入息定 331, 341
共非共業門 (95, 127, 155, 179, 185, 189, 195, 203)
共非心門 (95, 127, 155, 179)
共不共心門 (185, 189, 195, 203)
共味定 22
垢 (314)
苦 92, (349)
苦因 255
苦智等 (260)
苦樂 132
鳩頭摩 311
求最勝人 (255)
求那 (384)
求覓道 87
空 73
空空 30
空三昧 45
空行人等 (247)
空行等三人 (241)
空處智 (14)
空定 30

—ケ—

花臺 303
家家人 (249)
假結品 263
假稱 253
假心品 291
外空 30
外身等 (271)
解 (307)
解射 (294)
解脫 98, 187, 198, (313)
解脫戒 (379)
解脫心 336
解非解門 (26, 58, 131, 159, 180, 186, 190, 203)
見 87, (116)
見使分 201
見取 (343)
見衰 99
見斷智等 (268)
見得人 (253)
見分 197
堅信等二人 (242)
堅信人 (253)
慳惜使 202
眼根等 (141)
眼識の色 (183)
眼知等 (80)

—コ—

去辯等 (260)
沽酒處 (380)
五陰等 (87)
五戒等 202
五蓋 105, (350)
五觀定 44
五下分煩惱 106, (118)
五解脫處 42
五根 42, (242)
五支定 310
五此竟人 250, (249)
五出要界 44
五上分煩惱 106
五心荒 106
五心纒 106
五智等 (261)
五道 106, 264
五無間 107
五欲 105
五力 42
向苦道速行 39
向苦道難行 39
向樂道難行 39
向樂道速行 39
劫鉢 (376)
業 (301)
業因 253
業緣 215
業相應非相應門 (23, 56, 96, 128, 156, 185, 189, 195 203)
業非業門 (22, 52, 156, 179, 185

189, 195, 203)
業品 (221)
根 (304)
根等 (248)
根品 (141)
勤念 34

—サ—

作業 (215)
作智等 (260)
作物 (215)
三愛 102
三惡 146
三惡行 103
三闇 102
三有 103
三慧 (170)
三火 10
三界繫門 (196, 204)
三界繫及不繫分別門 (72)
三覺 103
三學門 (30, 62, 102, 133, 162, 181, 186, 190, 196, 204)
三害 46
三求 103
三眼 (271)
三種の觀 (293)
三十二句 260
三十二相 (242)
三十六愛行 121
三性門 (28, 61, 101, 132, 160, 181, 186, 190, 196, 204)
三世及非世分別門 (11)
三世等四門 (192)
三世非世門 (186, 204)
三善根等 (187)
三斷因門 (36, 69, 109, 137, 170, 182, 192, 196, 204)
三斷門 (34, 67, 107, 139, 168, 182, 186, 192, 196, 204)
三衣 78
三不善根 101
三摩跋提 (255)
三明 (269)
三漏 104

—シ—

支 22
尸婆羅 6
四依人 (254)
四結 104
四語 149
四向道 39
四識住 104
四沙門果 (117)
四取 104
四修定 (40)
四十四智性 (318)
四正斷 (368)
四聖諦等 (121)
四聖諦品 (114)
四大入 135
四天王等 (305)
四顚倒 105
四比丘 (235)
四無色定 38
四無所畏 (243)
四無量 32
四扼 104
四流 104
死因 255
此岸 (10)
始堅 6
思 186(55)
思有人 (257)
思業等 (301)
思持辯才 (144)
斯陀含人 (249)
自性 197
地身 (356)
恃生 82
慈行等四人 (241)
慈行人等 (249)
慈解心 75(215, 247)
色因 253
色非色門 (184, 187, 194, 202)
色漏 39
識 73(215)
識因 254
識非識門 (26, 58, 131, 159, 180, 186, 160, 195, 203)
食因 255
七覺 2
七覺等 (176)
七覺品 (175)
七識住處 112
七種の戒 148
七十七智 (320)
七處 (287)
七生人 (249)
七正覺 49
七定因緣法 54
七想 2, 49
七慢 112
七無爲 (16)
失收摩羅 105
失念 97
嫉妬 202
舍利弗阿毘曇論 (9)
捨解心 (216)
捨心 76
邪婬 303
邪緣 (343)
邪見 99, 303
邪見の婆羅門 78
邪慢 113
寂靜 (285)
寂靜等 (260)
首等人 (256)
取因 255
衆學 148
衆苦因 255
衆生淸淨 (343)
趣阿那 (244)
趣斯陀等 (244)
趣須陀等 (244)
受 (45, 193)
受因 254
受陰 (15)
受受陰 (15)
受非受門 (7, 49, 90, 122, 185, 188, 194, 202)
修 (367)
修道等 (134)
修斷 (42)
修八等 248
修非修門 (27, 60, 100, 181

186, 190, 196, 204
十一切入 69, 359
十色入 (15)
十直 69
十善業道品 305
十邪根 (365)
十想 2, 69
十二入 (14)
十二智性 (317)
十八界等 (46)
十不善業道 118
十不善業道品 302
十力 (243)
住劫人 (242, 258)
住分智等 (261)
出世想 340
出息 341
順不順等 (294)
初肉 9
諸大 (12)
處 (302)
除身行人 (256)
少想 132
少智等 273(260)
少等 (273)
正 (366)
正覺 20, (119)
正覺、正生 74
正見行等 296
正見等二 (259)
正勤品 (365)
正定等三人 (241)
正定人等 (246)
正進 (119)
正智 (259, 353)
性人 (241. 242)
性門 160
淸淨心 311
捷疾相智 127
聖五支正定 310
聖諦 (114)
聖等 (15)
聖道 (117)
聖非聖門 (15, 46, 88, 122
146, 184,187,194, 202)
聖無染 (285)
勝進 (366)
勝入等 (248)
勝慢 113
勝妙 (285)
聲聞人 (242)
證非證門 (28,61,101,132,160
181,186,190, 196, 204)
攝 140
攝心 (366)
攝相應分 139
攝品 139
上下 70
定 18, 98,(313.367)
定意三昧 123
定慧 1
定覺 354
定根 35 4
定根分 205
定心 334
定得智 (264)
定品 308
定力 354
成壞 85
成劫 123
淨 (10, 314, 396)
常空等 30
常空無變易空 30
常見 98
常論 122, 137
掉 91
心 8
心遮分 199
心受 (79)
心除 144
心進 144
心善解脫人 (256)
心善等二人 242
心觸 184
心相應非心相應門 (21.53,94
125,153,185.189,195,202)
心數非心數門 (21, 54,94,125
153, 185, 189. 195, 202)
心等 (285)
心非心門 (21. 53, 93,124,152
185, 180,195,202)
身敎 (12)
自見 89
身證人 (253)
身觸 184
身念處 1
身の三不善 120
信解脫人 (253)
信根分 (205)
信分 200
眞實 (119)
瞋恚 303
瞋恚想 29, 38
盡智 (282)
盡法等 (321)
盡漏 (316)

—ス—

數 (117)
水 70
隨業等 24, 57
隨業轉非隨業轉門
(24, 97, 130, 158, 180)
隨心轉等 (22, 96)
隨心非隨心轉門 (22, 96, 79,
1156, 185, 189, 195203)

—セ—

世 (10, 310)
世間八法 114
殺生 302
善緣方便等 (322)
善見天 (252)
善根品 (187)
善智等 (260)
善・不善心 (20)
禪 (313)
禪間 23
禪品 (379)

—ソ—

麁智等 (260)
相 31
相應品 183
相續緣 215
相續因 253

想 70, 185
想論 131
僧伽婆尸沙 148
僧伽梨 97
憎愛の金剛 (382)
増上因 253
増上緣 14, 215(329)
増上慢 100, 113
速涅槃等 (251)
觸 186
觸因 254

—タ—

他衆生 (304)
他心智 128
他人 (304)
陀舍 74
退分等 (261)
胎始膜 6
對無對分別 (15)
大空 30
大悲 (243)
大仙 (198)
大品 (193)
第一義空 30
第三實 (198)
提舍尼 148
斷 (117, 336, 368)
斷行 (369)
斷見 (98)
斷五支人 (254)
斷智知非斷智知門 (26 ,56 98 131, 159, 180, 196, 203)
斷非斷門 (60, 99, 131, 160 186, 190, 204)
斷滅論 134

—チ—

地 70
地大 (193)
知非知門 (26, 58, 98, 159. 180 186, 189, 195, 203)
智 187
智緣盡 (14, 117)
智緣斷 42
智界 (261)
智果 (259)
癡不善根 98
擇 (119)
中涅槃等 (250)
緒分 (305)

—ツ—

頭羅草 49
通法 311

—テ—

田 (10, 43)

—ト—

兜羅 (376)
度堅人 (256)
當取 (176)
當取智 (262)
當非取門 (49, 188, 194, 202)
盜竊 (302)
道品 361
得定 362
貪 (353)
貪欲 (303)
曇摩掘多 (6)
曇摩耶舍 (9)

—ナ—

內 73
內空 30
內外空 30
內外身等 271
內外法 (364)
內外門 (52, 92, 123, 150 176, 185, 202,)
內受等 (271)
內身等 (271)
內心觀等 (272)
內法等 (272)
泥洹 136

—ニ—

二十二根 (141)
二定 (20)
二滅 (213)
尼居陀 38
尼薩耆波逸提 148
若干想 132(310)
入息 341
八定 98(314)
入品 (9)
如雲 6
如電等二 (259)
如法等 (255)
如妙善見天 (252)
如來十智 (261)
如來の十力 (296)
人品 241
忍 (261)
忍分 197

—ネ—

涅槃を得 (349)
念 353(396)
念覺等 (175)
念處品 (348)
念正覺 42, 313
念想識 (216)
念分 200
惱 92(349)
惱因 255

—ハ—

波逸提 148
波羅夷罪 148
波羅㮈 68
敗劫 123
八苦 150
八解脫 54(248)
八懈怠事 114
八支の聖道 (119)
八聖道 2,54
八勝處 64
八勝入 64, 248
八非聖語 114
八難處等 118
鉢多 38
槃頭華 64

—ヒ—

非有見 98
非有色非無苦 131
非有邊非無邊 131
非過去等 (41)
非戒無敎 (14)
非行進等 265
非苦非樂根 84
非業 233
非色 131

非取非出智 (260)
非受 (193)
非聖の無爲 (15)
非擴 140
非想非々想論 133
非智緣盡 149(14)
非當求門 (184)
非當取智 (262)
非間分 1(205)
非離非離染智 (260)
悲因 (255)
悲解心 (215)
卑智等 (260)
毘嵐風 (218)
毘梨叉 38

—フ—

不苦不樂 132
不繫 (40. 229)
不繫等四門 (39)
不苦不樂の捨 (295)
不順思惟 (99)
不順の思惟 90
不正知 97
不定 148
不定等 (264)
不淨想 341
不濁想人 (256)
不善根品 (183)
不善破 (365)
不如慢 113
不法弱者 316
不放逸 74
不放逸分 200
不樂 (216)
風 70
分陀利 311

—ヘ—

變易 (80)
變易苦 46
邊見 88
邊想 126

—ホ—

菩薩人 (242)
方便界 (266)
法住智 (321)
法智 (278)
法智等 (260)
法樂 74
法欲 74
法輪等 (198)
報 (303)
報因 253
報緣 14, 215, (329)
報智等 (268)
報等三門 (32, 64, 164, 186, 191 196, 204)
本見 122
本劫 122
凡夫人、非凡夫人 (241)
梵志 125
梵天等 (305)
煩惱 (258)
煩惱使分 (201)

—マ—

末見 130
末劫 130
末劫末見 122
慢 100
慢、增上慢 80
慢中慢 113

—ミ—

微護斷 41
名因 253
名色 (339)
名色品 254, 260
名觸 184
明照 (285)
明觸 184
明觸分 207

—ム—

無愛智 (262)
無我 (80)
無覺有觀定 23
無覺等 1
無覺無觀定 25
無願定 31
無愧 100
無行般涅槃人 (251)
無求 (178)
無間因 (253)
無間緣 14, (329)
無間道 (251)
無慚 100
無取 (176)
無取智 (262)
無受 (176)
無勝 (176)
無勝智 (262)
無勝天 252
無上安隱 74
無常 (80)
無常想 336
無相定 31, 204
無想 130
無想定心 (216)
無想論 132
無退人 (257)
無緒 (26)
無二 70
無熱天 (252)
無惱行人等 (248)
無報 1
無邊 131
無邊想 127
無明 97
無明因 254
無明使 202
無明觸 184
無明分觸 195
無命等 (255)
無用智 (268)
無量 70
無量義定 (285)
無量解 (310)
無量想 132

—メ—

滅 (80)
滅異緣實人 (254)
滅想 69, 339

—モ—

盲人等 (246)
妄語 303
物 (10)
門 (10)

門分 (9)
聞分 (183)

—ヤ—

亦常亦無常 124

—ユ—

由力 (265)
遊戯惜身見 80

—ヨ—

欲 (367)
欲界等 (277)
欲求 98
欲三摩地斷行成就神足 32
欲染の相續 (183)
欲定 (367)
欲分 200
欲漏 98, (39)

—リ—

離欲 (20)
離欲想 36
了非了門 (58, 159, 186, 190
196, 203)
兩舌 303

—ロ—

鹵上量 64
漏因 255
漏盡 (317)
老因 (255
老死等 (318)
六悅因法 49
六思身 48
六識身等 (10)
六出界 45
六十二見 (343)
六處 150
六淨根 109
六想 150
六入因 254
六明分法 45
六通 (286)
六通人 (249)
六念 45
六念等 2

—ワ—

和合 257

—毗曇部十九·二十二索引終—

國譯一切經

大東出版社藏版

LIBRARY
MAY 27 1993
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

毗曇部 二十二

渡邊楳雄譯

目次

（本丁）（通頁）

舍利弗阿毘曇論（全三十卷中 自卷第十五 至卷第三十）……〔三九二―七六二〕……一

非問分……〔三九二―五二九〕……一

道品第十（一五―一七）……一

煩惱品第十一（一八―二〇）……七九

攝相應分……〔五三〇―六〇四〕……一三九

攝品第一（二一―二三）……一六六

相應品第二（二三―二四）……一八三

緒分……〔六〇五―七六二〕……二一四

遍品第一（二五―二六）……二一四

因品第二（二六）……二五二

名色品第三（二六）……二六〇

假結品第四（二六―二七）……二六三

行品第五（二七）……二七三

觸品第六（二七）……二七九

假心品第七（二七）……二九一

十不善業道品第八（二七）……三〇三

十善業道品第九（二七）……三五
定品第十（二八―三〇）……三八

◇　◇

索引……卷末

非問分道品[一] 第十[※]【其の一】

[二]人有り世に出で、如來・無所著・等正覺にして、種種の因、種種の門、種種の道、種種の向道を說く。今當に諸の道門を集むべし。一支道・二支道・三支道・四支道・五支道・六支道・七支道・八支道・九支道・十支道・十一支道有り。

[三]云何が一支道なる。[四]身念處、是を一支道と名づく。

云何が二支道なる。[五]定・慧、是を二支道と名づく。

云何が三支道なる。(1)[六]有覺有觀定・無覺有觀定・[七]無覺無觀定・(2)空定・[八]無相定・無願定、是を三支道と名づく。

云何が四支道なる。(1)[九]四念處・(2)四正斷・(3)四神足・(4)四禪・(5)四無量・(6)四無色定・(7)四向道・(8)四修定・(9)四斷、是を四支道と名づく。

云何が五支道なる。(1)[一〇]五根・(2)五力・(3)五解脫入・(4)五出界・(5)五觀定・(9)五生解脫法、是を五支道と名づく。

云何が六支道なる。(1)[一一]六念・(2)六向・(3)六出界・(4)六明分法・(5)六悅因法・(6)六無喜正覺、是を六支道と名づく。

云何が七支道なる。(1)[一二]七覺・(2)[一三]七想(3)七定因緣法、是を七支道と名づく。

云何が八支道なる。(1)[一四]八聖道・(2)八解脫・(3)八勝入、是を八支道と名づく。

云何が九支道なる。(1)[一五]九滅・(2)九次第定・(3)九想、是を九支道と名づく。

云何が十支道なる。(1)[一六]十想・(2)十直法・(3)十一切入、是を十支道と名づく。

【※】【其の一】は原漢にはの一に作る。以下この形式に準ず。

【一】 非問分。? Apariprcc-hāvāra——毘曇部 19, p. 205(第七卷初)の註參照。

【二】 人有り等。第一段、增一數字的總標。

【三】 云何が等。第二段、各支道の項目的釋示。

【四】 身念處。後方の解脫文、並に毘曇部 19 p. 348 ff 等參照。

【五】 定・慧。後方のその解說文中參照。

【六】 有覺等。有覺有觀、無覺有觀、無覺無觀の三が一の三支道、又、定・無相・無願の三が一の三支道で、こゝには二種の三支道を合出する。何れも後の解說參照。

【七】 無覺等。この說明の中間で次卷(第十六)に歸る。

【八】 無相。大正本等には無想に作るも、Animitta の譯として相に改む。宋元明宮の四本もかく作る。

【九】 四念處以下。四念處、四正斷、四神足、四禪、四無量、四無色、四向道、四修道、四斷の九の四支道を說くこと

云何が十一支道なる。十一解脱入、是を十一支道と名づく。

[一七]何をか身念處一支向涅槃道と謂ふ。[一八]謂く、念の身に至り、身に依り身を以て觀を始むる、是を身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果[一九]乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[二〇]復次に、比丘の身の無常を思惟して無常を知り、無常を〔p. 625b〕解し、無常を受せる如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃若阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[二一]復次に、比丘の[二二]身の苦・惱・癰・箭・味・患・依緣・壞法・不定・不滿・可壞・苦・空・無我なるに、緣を思惟して緣を知り緣を受す――卽ち無明緣にして行あり。行緣にして識あり。識緣にして名色あり。名色緣にして六入ありと。〔此の時の〕如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に觀近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[二三]復次に、比丘の身の滅を思惟して滅を知り、滅を解し、滅を受す――卽ち無明滅し、無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち六入滅すと。〔此の時の〕如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば、須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[二四]復次に、比丘の行を知り行を樂み、住を知り住を樂み、坐を知り坐を樂み、臥を知り臥を樂み、是の如くにして身の住樂するときの如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[二五]復次に、比丘の去來の屈伸を應に正智にして行ずべく、衣鉢を執持する、如法の飲食、病瘦の醫藥、疲極を除く睡眠、及び大小便利、行・住・坐・臥・[二六]覺悟・說法・默然に於て應に正智して行ずべ

右の三支道下に準ず。各解說下參照。

【一〇】五根以下。右の四念處下の註に反省して知るべし。

【一一】六念等。同上。

【一二】七覺以下。同上。

【一三】七想。この說明の途中より第三卷に歸る。

【一四】八聖道等。同上。

【一五】九滅等。同上。

【一六】十想等。同上。

【一七】何をか等。第三段、各支道の別稱。

【一八】謂く等。身念處一支向涅槃道に關する第一解。
備考―以上、この身念處一支向涅槃道の復次釋、概算三十三說を記する。

【一九】乃至。斯陀含(一來)果、阿那含(不還)果の二を乃至す。

【二〇】復次に等。同上第二解。

【二一】復次に。同上第三解。

【二二】身の等。毘曇部 19, p. 350 cf.

【二三】復次に。同上第四解。

【二四】復次に等。同上第五解。

【二五】復次に。同上第六解。

【二六】覺悟。悟字、宋元明宮の四本には寤に作る。

き如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

二七 復次に、比丘の出息長きは出息、長しと知り、入息の長きは入息、長しと知り、出息の短きは出息、短しと知り、入息の短きは入息、短しと知る。旋師と旋師の弟子との、繩の長ければ長しと知り、繩の短ければ短しと知るが如く、是の如く比丘も出息の長きは長しと知り、入息の長きは長しと知り、出息の短きは短しと知り、入息の短きは短しと知る。〔是の如きの〕如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

二八 復次に、比丘の頂より足に至るまで皆〔p.625c〕是れ不淨なる此の身中に爪・齒・髮毛・薄皮・厚皮・
二九 肉・筋・脈・脾・腎・心・肺・大小穢處・涕・唾・膿・血・脂肪・腦膜・涙・汗・骨髓有る〔を觀る〕。淨眼人の一門倉に於て諸の穀・胡麻・米・豆・小豆・豌豆・大麥・小麥を觀見するが如く、是の如く、比丘の此の身中の頂より足に至るまで皆是れ不淨にして、此の身中に但、爪・齒乃至骨髓有るを觀ずる、如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念にて親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

三〇 復次に、比丘の四大を觀ずらく、此の身に地大・水大・火大・風大有りと。屠牛師と屠師の弟子との牛を屠りて四分と爲し、若しは坐し、若しは立ちて此の四分を觀ずるが如く、是の如く比丘も、此の身の地大・水大・火大・風大を觀じ、此の諸大の各各相違して、此の諸大有り、外の大たる飲食〔等〕に依して長養し、羸劣・不堅にして念念に磨滅し、暫住して久しからざるを觀ずる如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

【二七】 復次に。同上第七解。

【二八】 復次に。同上第八解。

【二九】 肉。宋元明宮の四本にはこの肉上に更に肌の字を加ふ。

【三〇】 復次に。同上第九解。

[三一]復次に、比丘の是の如く此の身の食に依りて住し、食に依りて長養し、食を緣として住し、食無ければ住せざるを觀ず。火の、薪に依りて然ゆることを得、薪無ければ卽ち滅するが如く、是の如く、比丘の此の身の、食に依りて住し、食に依りて長養し、食を緣として住し、食無ければ住せざるを觀ず。[三二]世尊の說くが如し。

身の所集の苦を觀ずるに、　一切皆食を緣とす。
若し能く食を除滅せば　則ち是の諸の苦無し。
是の如く過患にして、　食の是れ苦を成就するを知り、
比丘の食を滅し已らば　決定して涅槃を得、――

是の如き人の念・憶念を[三三]實に身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[三四]復次に、比丘の身の盡空俱空なるを觀じ、念を以て遍知解行す。竹葦の盡空俱空なるが如く、是の如く、比丘の身の盡空俱空なるを觀じ、念を以て遍知解行する如實人の念・憶念、是の身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果[p.265a]乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[三五]復次に、比丘の身の是れ癰瘡なるを觀ずらく、身中に九の瘡津漏門有り。新出の津漏は皆是れ不淨の津漏にして、是れ[三六]胎始膜、是れ腐敗、是れ臭穢、是れ可惡の津漏なり。眼より出づる眵淚膿血の津漏あり、耳より出づる耵聹膿血の津漏あり。鼻より出づる涕痰膿血の津漏あり。口より出づる涕唾膿血の津漏あり。二處より出づる便利膿血の津漏あり。人の癰瘡の乾痂、久住するが如く是の如く、九瘡津漏門より出す所は皆是れ不淨の津漏にして、是れ胎始膜、是れ腐敗、是れ臭穢、是れ可惡の津漏あり。比丘の是の如く、身の是れ癰瘡なるを觀ず。此の身に九入・九瘡・九津・九漏

【三一】復次に。同上第十解。
【三二】世尊等。S. 46,2 Kāya (5, P. 64) do. 及び集異門足論部その他參照。
【三三】實に。宋元明宮の四本には「是れ」に作る。
【三四】復次に。同上第十一解。
【三五】復次に。同上第十二解。
【三六】胎始膜。下註參照。

あり。[三七]眼・耳・鼻・口の一一の處の出す所の津漏は、皆是れ不淨の津漏にして、是れ胎始膜、是れ腐敗、是れ臭穢、是れ可惡の津漏たり。眼より出づる眵淚膿血の津漏あり。耳より出づる耵聹膿血の津漏あり。鼻より出づる涕痰膿血の津漏あり。口より出づる涕唾膿血の津漏あり。二處より出づる便利膿血の津漏あり。摩訶迦葉の所說の如し。四大身は是れ衰耗・相違し津漏あり、衆病所居の處、衆苦所依の處にして身を愛護するは死屍を愛護するが如く、壽命短促なりと。――如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[三八]復次に、比丘の三根の集業――貪根の集業、恚根の集業、癡根の集業を觀ずらく、若し貪の作業は貪共・貪緒・貪集・貪因・貪緣の身口意にして、是れ非聖業、是れ有漏業、是れ集業・非滅垢業なり。瞋恚・愚癡も亦復是の如し。若し此の業を成就せば、父母の具足する有漏心は陰に向ひ、生を受けむことを欲す。彼の陰の滅する處、母胎に初識を生ず。色有り、彼の識と共なり。四大所造の色にして、謂く色の意に由りて生ずるなり。受・想・思・觸は謂く名なり。是の如きの名色は共に生じ、共に起る。彼は東方・南・西・北方・四維・上・下より來らず、父母より出でず、業より出でず、亦餘處より出づるに非ず。衆緣の和合に因り、集に因り、業に因り、父母に因りて出づ。春後の月、雲霧有ること無きとき、日中時に人有りて火珠を持し、乾牛糞坋上を以かば、便ち[p.626b]火の生ずること有り、光の出づること有れども、是の如くにして觀る火は、東方乃至牛糞中より出でず、是の如きの衆緣の和合して火の生じ、光の出づること有るが如く、比丘も是の如くにして觀ずる名色も東方よりせず、乃至業より出でず。衆緣の和合して集に因り、父母に因りて生じ、便ち[三九]名色有り。七日時は是れ[四〇]胎始膜なり。復七日は[四一]如雲なり。復七日は[四二]初肉なり。復七日は[四三]始堅なり。乃至四十九日にして[四四]身肢節具足す。帝釋の世尊に問ふらく、諸佛は色を以て我と爲さず。云何が身

【三七】眼等。二眼、二耳、二鼻、一口及び下の二便利處で合計九瘡門となる。

【三八】復次に。同上第十三解。

【三九】名色。大正本等には「有色名」とある。故にこのまま「色の名有り」と讀みて毫も差支ない。而も、宋元明宮の四本何れも「有名色」と記すれ

に覺有りや。云何が水中に骨を生ずる。復、云何が能く胎に住するやと。問ひ已りて答有り。世尊の決疑を爲さく、一切の行は生滅す。世尊は如實に一切の行の生滅を知る。帝釋よ諦聽せよ。我、今當に說くべし。初に胎始膜有り。胎始膜に因りて便ち如雲有り。如雲に因りて便ち初肉有り。初肉に因りて便ち始堅有り。始堅に因りて便ち支節・諸入・爪髮有り。母の飲食に因りて便ち住すと。

帝釋の復問ふらく、

衆生は何の法を知らず、　衆生は何の法を覺せず。

衆生は何の法に染著し、　衆生は何の法にか繫縛せらるゝ、——

世尊の答ふらく、

衆生は生法を知らず、　衆生は滅法を覺せず。

衆生は身法に染著し、　衆生は愛法に繫縛せらる。

帝釋よ、宜しく實に諦聽せよ、　因たる法を知らば則ち能く離る。

慧者は能く死流を度し、　度し已りて終に復、還らず。——

若し母の懷妊して或は九月、或は十月、身を重じ自ら愛護す。若しは九月、若しは十月、重身愛護し已りて、便ち子を生む。生み已りて母は血を以て養ふ。聖法中には母乳を以て血と爲す。後便ち能く食す。能く食し已りて諸根增長す。諸根增長し已りて諸根具足す。後則ち衰變し、骨節離解し、皮は緩み面は皺し、氣力微弱にして齒落ち髮白く、身體は傴曲し、扗杖羸[四五]劣、氣息轉、少く、苦痛に耐えず。壯時已に過ぎて血肉漸、消え諸の苦患多く、死命迫促す。[四六]尸婆羅の說く所の如し。

人命は去つて還らず。　日夜常に衰損す。

[p.626c]魚の熱水に處るが如く　生は苦にして、死復、逼る。——

是の如きの方便を以て法の無常・有爲・緣生・盡法・變法・離法・滅法にして、我所は我が有に非ず、

ば今暫らく、名色の二者に並び闕旨せるものとして文中の如く讀むだ。蓋し、今の上文に「……觀ずる名色も……」とあるに應ぜしめむとした所である。

【四〇】胎始膜。梵 Kalala.（羯邏藍）、雜穢などいふ胎內五位の初位をさす。

【四一】如雲。梵 Arbuda.（頞部曇）、同上皰などいふもの。

【四二】初肉。梵 Peśi.（閉尸）、同上、凝結、皰、輭肉等といふもの。

【四三】始堅。梵 Ghana.（健南）、同上凝厚、肉團、堅肉等といふに當る。

【四四】身肢等。この時を同上にて支節（梵、Praśākhā——鉢羅奢佉）などいふ。——以上、從前毘曇部譯中に幾度か出したれば參照を望む。

【四五】劣。宋元明宮の四本には步に作る。

【四六】尸婆羅。梵色、Sivali. また細縛羅、尸波羅、尸拔羅、世跋羅、施跋羅等にも作る。拘利（Koliya）族、刹帝利種の出で、拘利王の女 Suppavāsā の子。七年七月七日母胎におつて佛陀の語により初めて出生すといふ。舍利弗によつて出家す。——cf. Theragāthā 60 Commentary, Udāna 2,8, DI. p. 242, 408, 410 ;&c.

我は我が所有に非ず、我と我所と皆、我有ること無と知る。是の如きの慧者は正觀して放逸ならず。勤念・正慧[47]にして寂靜行あり、若し依貪の妄想は斷じ、斷じ已りて內心の正住・正止し、獨處して定を得。〔是の如き〕如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し、多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[48]復次に、比丘の是の如く思惟すらく、人は眼・耳・鼻・舌・身・意有るに假に名づけて人と爲す。眼・耳・鼻・舌・身・意は人に非ず。眼・耳・鼻・舌・身・意を離るゝも亦人に非ず。若し是の如きの法の正生・正成就・正出を假に名づけて人と爲す。舍の梁・椽・牆・壁有るに假に名づけて舍と爲すが如し。梁・椽・牆・壁は舍に非ず。梁・椽・牆・壁を離るゝも亦舍に非ず。若し是の如きの法の正生・正成就・正出を假に名づけて舍と爲す。――比丘の是の如く思惟すらく、人は眼・耳・鼻・舌・身・意有るに假に名づけて人と爲す。眼・耳・鼻・舌・身・意は人に非ず。眼・耳・鼻・舌・身・意を離るゝも亦人に非ず。比丘の若し是の如き法の正生・正成就・正出を假に名づけて人と爲す、象經に說く所の如し。比丘よ、本に緣り、竹に緣り繩索に緣り泥に緣りて虛空を圍遶するを假に名づけて舍と爲す。比丘よ、是の如く、骨に緣り筋に緣り血肉に緣り皮膚に緣りて虛空を圍遶するを假に名づけて我と爲すと。――是の如きの方便を以て、此の法の無常・有爲・緣生・盡法・變法・離法・滅法にして、我所は我が有に非ず、我は我が所有に非ず、[49]我所と我とは皆、我有ること無しと知り、是の如く正慧もて見、是の如くにして放逸ならず、勤念・正智して、寂靜行あり、依貪の妄想は斷じて斷じ已りて內心の正住・正止し、獨處して定あり。〔是の如き〕如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[50]復次に、比丘の是の如く思惟すらく、眼有るに緣りて假に名づけて我と爲す。眼無くむば亦假に名づけて我と爲さず。眼は我に非ざるに、眼を離れて若し是れ我あらば、眼は應に當に異有るべし。眼

【四七】正慧。宋元明宮の四本には正知に作る。下文にも然り。

【四八】復次に。同上第十四解。

【四九】我所等。宋元明宮の四本には上文同樣「我と我所と」と。

【五〇】復次に。同上第十五解。

の我に非ざるを以ての故に、眼は異有ること無し。若し眼無くむば、假に名づけて我と爲さず。〔p. 627a〕眼の我に非ざるを以て、眼を離るゝも亦我に非ず。是を以ての故に、眼に緣りて假に名づけて我と爲し、眼無くむば亦假に名づけて我と爲さず。耳・鼻・舌・身・[五一]心、心に緣りて假に名づけて我と爲す。心無くむば亦假に名づけて我と爲さず。心は我に非ず。心を離るゝも我に非ず。心の若し是れ我ならば心は應に當に異有るべし。心の我に非ざるを以ての故に心は異有ること無し。若し心無くむば亦假に名づけて我と爲さず。心は我に非ざるを以て心を離るゝも亦我に非ず。是を以ての故に心に緣りて假に名づけて我と爲し、心無くむば亦假に名づけて我と爲さず。[五二]世尊の說くが如し！―若し短を說いて我と爲す者は非なり。眼は生滅有り。若し生滅せば、我も亦應に生滅すべし。則ち此の負有り。是の故に非なるなり。若し眼を說いて我と爲す者は此の事然らず。耳・鼻・舌・身・心も亦是の如しと。――是の如きの方便もて此の法の無常・有爲・緣生・盡法・變法・離法・滅法にして我所は我が有に非ず。我は我が所有に非ず。我所と我とは皆、我有ること無しと知り、是の如く正慧もて見、是の如くにして放逸ならず、勤念・正智にもて寂靜行あり、依貪の妄想を斷じ、斷じ已りて內心の正住・正止し、獨處して定あり。〔是の如き〕如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果、乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[五三]復次に、比丘の是の如く思惟すらく、若し色を是れ我・受・想・行・識を是れ我と見ば、此の見は欲を共ひ、瞋恚を共ひ、愚癡を共ひ、取を共ひ、忍住を共ひ、苦を共ひ、虛妄を共ひ、衆惱を共ひ、燋熱を共ひて解射せず、離欲せず、滅せず、寂靜ならず、正覺せず、沙門果を得ず、涅槃を得ず。若し此の見を成就せば、生・老・病・死の苦本に於て則ち聚集和合す。若し色を無我、受・想・行・識を無我と見ば、此の見は、瞋恚と共ならず、愚癡と共ならず、取と共ならず、忍住と共ならず、苦と共ならず、虛妄と共ならず、衆惱と共ならず、燋熱と共ならずして解射・離欲・滅し、寂靜・正覺に

〔五一〕心。梵、Manas. 多くの佛典には意に作る。

〔五二〕世尊。cf. 雜八、S. 35 六入處品中の諸經中參照――一例、雜8―99,209＝S.35,71―73.

〔五三〕復次に。同上第十六解。

して沙門果を得、涅槃を得。若し此の見を成就せば、生・老・病・死の苦本に於て則ち聚集・和合せず。
[五四]世尊の説くが如し――[五五]「諸の比丘よ人有りて是の如きの見あるは有我・有我所に緣り、有我所・有我に緣るも、有我・有我所と言ふの、若しは實、若しは有ならむことは盡く得可からず。諸比丘よ、此は[五六]鈍愚が法に非ざらむや」。「世尊よ、[五七]是なり。」「諸比丘よ、愚者の有常を計するが如し、〔p. 62b〕『異せず、異物せず、變法せず、常に定住す』と。是有らむや」。「世尊よ、有るなり」。「諸比丘よ、若し有常を計すらく、『異せず、異物せず、變法せず』と。常に當に定住すべけむや」。「世尊よ無きなり」。「若し愚者の有我を計すらく、『若し我は常にして異せず、異物せず、變法せず、常に定住す』と。是有らむや」。「世尊よ有るなり」。「諸比丘よ、有我計すらく、若し[五八]當に異せず、異物せず、變法せず』と。常に當に定住すべけむや」。「世尊よ無きなり」。「諸比丘よ、若し愚者の依止あり。若し常見に依すらく、『異せず、異物せず、變法せず、常に當に定住すべし』と。〔是有らむや〕」。「世尊よ、有るなり」。「諸比丘よ、若し依止あり、若し常見に依るらく、『異せず、異物せず、變法せず』と。常に當に定住すべけむや」。「世尊よ、無きなり」。是を以ての故に、諸比丘よ、若し一切の色――過去・未來・現在、內・外、麁・細、卑・勝、遠・近――是の如き一切の色は[五九]我も我が所有に非ず。我所も我有に非ず。我所と我と、皆我有ること無し。是を正慧觀と謂ふ、受・想・行・識觀も亦是の如し。――

[六〇]復次に、比丘の若し是の見を作さく、我樂しみ、世樂しみ、當にも樂しむべく、常に異せず、異物せず、變法せず。常に定住す。但、我所も我が有に非ず。我も我が所有に非ず。我と我所と皆、我有ること無し。是を正慧觀と謂ふと。若し是の見を作さく、我は斷滅す。但、我所は我が有に非ず。我は我が所有に非ず。我と我所と皆、我有ること無し。是を正慧觀と謂ふと。若し是の見を作さく、我は能く見・聞・覺知・思惟・分別す。但、我所は我が有に非ず。我は我が所有に非ず。我と我

【五四】　世尊等。丁度恰當の經を指示しかぬるも、總じて律一、二、三、cf. XXII 中等の諸經參照のこと。
【五五】　諸比丘よ等。この文甚だ讀み難し。暫く今の如く讀むで見たれど、畢竟、一途の試みのみ。
【五六】　鈍。大正本等には純に作るも、宋元明の三本に從ひ、今の如く改む。
【五七】　是なり。巴に Evam bhante とあるに當るものと暫く解、是の如く讀む。
【五八】　當に。前文に反省するに、或は「我は」の誤傳ならざるか。（但し縮藏も當に作る）。
【五九】　我等。この種の文の漢譯一般の文は「……彼は一切、我に非ず、異我に非ず、相互に非ず」、又巴一般は „Netam mama, neso ham asmi, na meso attā ti Samanupassati"（そはわがものに非ず、そはわが我に非ずと平等觀す」と各記するの常である。參照すべし。
【六〇】　復次に等。右の經文と同樣に經文を出し、復次釋を幾つか並べる仕組みなるも、漢文か傳文可晦冥に陷れるを悲しむべし。經文は前記同準の前後を探れば多々少くとも類似文に接見し得。

所と皆、我有ること無し。是を正慧觀と謂ふと。聖人は若し是の如く見、是の如く聞くらく、我有り、我所有りと。終に驚恐無し。

[六二]復次に、[六三]世尊の說くが如し。――色は我に非ず。若し色にして是れ我ならば、色は應に苦患を受くべからず。色は應に自在を得べし――是の如く有れ。是の如く有ること非ざれと。色の我に非ざるを以ての故に、色は苦患を受け、色は自在を得ず。――是の如く[六三]有れ、是の如く有ること非ざれと。受・想・行・識は我に非ず。我は識に非ず。若し識にして是れ我ならば、識は應に苦患を受くべからず。識は應に自在を得べし、――是の如く有れ、是の如く有ること非ざれと。識の我に非ざるを以ての故に、識は苦患を受け、識は自在を得ず。――是の如く有れ、是の如く有ること非ざれと。是の故に當に知るべし、此の法は無常・有爲・緣生・盡法・變法・離法・[六四]滅法にして、我所は我有に非ず。我は我が所有に非ず。我と我所は皆我有ること無し。是を正慧觀と謂ふと。

是の如く[p.627c]不放逸に勤念・正智し、寂靜行あり、依貪の妄想を斷じ、斷じ已りて內心の正住・正止し、獨處して定ある如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し、多く修學すれば、須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[六五]復次に、比丘の是の如く、世間の種種の苦を思惟すらく、此の苦は何の因、何の[六六]緒、何の集、何の生、何の尊上ぞと。是の如く、世間の種種の苦を思惟すらく、陰因・陰緒・陰集・陰生・陰尊上なり。陰を緣として、父母・兄弟・姉妹・妻子・親屬を喪ふの苦有り。衰耗・衆病の苦有り。諸不適意の觸――若しは手[六七]拳の觸・鞭杖の觸・瓦石の觸・刀杖の觸・寒熱の觸・飢渴の觸・風日の觸・蚊虻の觸有り。國王・大臣有り、枷鎖もて繫閉・[六八]縺縛し、肉斷ち骨出で、貝の利木刀に騎するが如く、石を以て脚に錘し、五事もて[六九]磔裂し、繩を以て拘結し、火鑿もて身を燒き、身を火塼と爲し、刀を以て身を削り、鉤を以て肉を鉤し、皮を剝ぎて蜜を塗り、虫をして唼食せしめ、草に裹むで火燒し、

【六二】復次に。上註に同ず。
【六三】世尊等。cf. 雜 2,1（大正99,33）；雜 2,2（大正99,34）＝S. 22,59,&c.（雜の譯文よりは今の文の方が佳し。對檢すべし）。
【六三】有れ。是の如く。宋元明宮の四本により、且つ上文に照らしつつ今補入。
【六四】滅法。宋元明宮の四本及上文に照して又補入。
【六五】復次に。同下第十七解。
【六六】緒。宋元明宮の四本には緣に作る。
【六七】拳。宋元明宮の四本には捲に作るも、？
【六八】縺。宋元明の三本には連に作る。
【六九】磔。同前三本及び宮本又は抳に作る。

扇車もて身を吹きて破れしめ鐵鍱を身に纒ひ、手足・耳鼻を斷ち、[七〇]標頭に驅上して箭を以て射殺し、最後に斬殺する――是の如き等の苦有り。[七一]世尊の說くが如し。――

欲の知きの火有ること無く、　恚の如きの毒有ること無く、
癡の如きの網有ること無く、　陰の如きの苦有ること無し。
如實に此を知り已りて、　涅槃は第一樂なり。――

是の故に當に知るべし、此の法は無常・有爲・緣生・盡法・變法・離法・滅法にして、我所も我が有に非ず。我も我が所有に非ず。我と我所と、皆我有ること無し。是を正慧觀と謂ふ。是の如く不放逸に勤念・正智して寂靜行あり、依貪の妄想を斷じ、斷じ已りて心の正住・正止し、獨處して定ある如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[七二]復次に、比丘の是の如く、身の多苦・多失・多惱・多悲・多衆苦なるを思惟し、身の生じ、正生し、起し、正起し、出し、正出し、成就・具足して種種の病を生ずるを觀ずらく、若しは熱を因として病を生じ、陰を因として病を生じ、風を因として病を生じ、自力を因として病を生じ、他が[p. 268a]惱を因として病を生じ、時の變を因として病を生じ、[七三]諸大の相違を因として病を生じ、食の不消を因として病を生じ、業報を因として病を生じ、集を因として病を生ず。――眼病、耳・鼻・舌・身病、頭痛・肩痛、牙・齒・咽・項・[七四]腦痛、蛇肌、氣逆・呼呷・咽塞・謦欬・嘔吐・下利・絞痛、熱病・腹痛、瘡癬・疥瘙、皮膚の瘤瘤して[七五]虫の行浸するが如くなる、[七六]婬瘡・癩瘡・癰瘡・白癩・枯燥・[七七]癲狂病・[七八]痔病・赤腫病、外は種種の虫――蚤・虱・壁虱・蚊・虻・蟆子の爲に噉はれ、內は乃至、一毛處として虫有らざる無き[等]なり。世尊の說くが如し、――色生じ住し、出づれば病を生じ、苦を居せしめ老死を出だす。若し受・想・行・識の生じ、住し出づれば、病を生じ、苦を居せしめ、老死を出すと。復次に、[七九]世尊の

【七〇】標。宋元明宮の四本には樹に作る。
【七一】世尊等。法句經安寧品――No. 202＝Dhammapada 202 (p.30) 參照。その漢譯は――
熱無レ過レ婬　毒無レ過レ恚
苦無レ過レ身　樂無レ過レ滅
同上巴文は――
Natthi rāgasamo aggi, natthi dosasamo kali//
Natthi khandhasamā dukkhā, natthi santiparaṃ sukhaṃ////
【七二】復次に。同上第十八解。
【七三】諸大。諸の地水火風の四大のこと。
【七四】腦。宋元明宮四本には肚に作る。
【七五】虫の行くが如くなる。同上四本には「如虫行」を「是虫行」に作る。
【七六】婬。同上四本には淫に作る。
【七七】癲。同上四本には癩に作る。
【七八】痔等。同上四本には痔赤病腫病に作る。
【七九】世尊等。長阿含衆集經 3,29; 大集法門經 3,17; Saṅgīti 3,27; S. 38,140並に集異門足論 5―毘曇部一初版 p. 150 等を見よ。

說くが如し。——三苦あり。行苦・苦苦・變苦ありと。——是の故に當に知るべし、此の法は無常・有爲・緣生・盡法・變法・離法・滅法にして、我所は我が有に非ず、我は我が所有に非ず。我と我所と、皆我有ること無し。是を正慧觀と謂ふ。是の如く不放逸に勤念・正智して寂靜行あり、依貪の妄想を斷じ、斷じ已りて內心の正住・正止し、獨處して定ある如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、〔此の〕念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

〔八〇〕復次に、比丘の是の如く思惟すらく、何が因、何が住、何が非因、何が非住なると。是の如く思惟すらく、脚骨を因として〔八一〕膞骨を住し、膞骨を因として髀骨を住し、髀骨を因として髖骨を住し、髖骨を因として脊骨を住し、脊骨を因として肋骨を住し、手骨を因として臂骨を住し、臂骨を因として肩骨を住し、肩骨を因として項骨を住し、項骨を因として頭骨を住し、髓を因として骨を住し、骨を因として筋を住し、筋を因として肉を住し、肉を因として血を住し、血を因として皮を住し、皮を因として薄皮を住し、薄皮を因として毛を住すと。空を因として風を住し、風を因として水を住し、水を因として地を住し、地を因として諸の作業及び種子聚落・衆生聚落・藥草叢林を住するが如く、比丘の是の如く思惟すらく、脚骨を因として膞骨を住し、膞骨を因として乃至頭骨あり、髓を因として骨を住し、骨を因として乃至毛を住すと。若し脚骨無くんば膞骨住せず、膞骨無くんば髀骨住せず、髀骨無くんば髖骨住せず、髖骨無くんば脊骨住せず、脊骨無くんば肋骨住せず、手骨無くんば臂骨〔p.628b〕住せず、臂骨無くんば、肩骨住せず、肩骨無くんば項骨住せず、項骨無くんば頭骨住せず、髓無くんば骨住せず、骨無くんば筋住せず、筋無くんば肉住せず、肉無くんば血住せず、血無くんば皮住せず、皮無くんば薄皮住せず、薄皮無くんは、毛住せず。如し虛空無くんば風住せず、如し風無くんば水住せず、若し水無くんば地住せず、如し地無くんば諸の作業及び種子の聚類・衆生の聚落・藥草・叢林の住せざ〔るが如く〕、比丘も是の如く思惟すらく、若し脚骨無くん

【八〇】復次に。同上第十九解。
【八一】膞。同前の四本には腨に作る。

ば膊骨住せず、膊骨無くんば乃至頭骨住せず、髓無くんば骨住せず、骨無くんば、乃至毛住せず。骨髓を盛るを以て筋は骨を纏ひ、肉は筋を覆ひ、血は肉を塗り、皮は血を裹み、薄皮膜・厚皮・毛衣薄皮ありと。世尊の說くが如し――若し法の生滅するや、行を因として行を住すと。是の故に當に知るべし、此の法は無常・有爲・緣生・盡法・變法・離法・滅法にして、我所は我が有に非ず。我は我が所有に非ず。我と我所と、皆我有ること無し。是を正慧觀と謂ふ。是の如く不放逸に勤念・正智し、寂靜行ありて、依貪の妄想を斷じ、斷じ已りて內心の正住・正止し、獨處して定ある如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、此の念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[八二]復次に、比丘の是の如く思惟すらく、何が因、何が假、何が非因、何が非假なると。是の如く思惟すらく、身を因として假身業有り。身無くんば假身業無し。口を因として假に業有り。口無くんば假に業無し。意を因として假意業有り。意無くんば假意業無し。若しは身作業、若しは口說業たる業觸の身の去來・屈伸・廻轉の身敎・集聲・音句・言語の口敎も若し意を因として作業あり。意無くんば作業無し。巧匠と巧匠の弟子との木人を刻作して機關を動作し、能く去・來・坐・臥せしむるが如く、是の如く、若しは身作業、若しは口說業たる業觸の身の去來・屈伸・廻轉の身敎・集聲・音句・言語の口敎も若し意を因として作業あり。意無くんば作業無し。[八三]世尊の說くが如し、――

心を法の本と爲す。　心尊にして心使なり。
中心に惡を念じ、　卽ち言ひ卽ち行はゞ
罪、苦は自ら追ふ。　車は轍に轢(きし)るなり。
[p.628c]心を法の本と爲す。　心重にも心使なり。
中心善を念じ、　卽ち言ひ卽ち行はゞ

【八二】復次に。同上第二十解。

【八三】世尊等。法經雙要品一—二=Dhammapada, Yamakavaggo 1—2 (p. 1) cf. 雜三六—大正99,1009=雜12—100, 236=S. 1,7,2

禍樂の自ら追ふこと、　　影の形に隨ふが如し。――

是の故に當に知るべし、此の法は無常・有爲・緣生・盡法・變法・離法・滅法にして、我所は我が有に非ず。我は我が所有に非ず。我と我所と、皆我有ること無し。是を正慧觀と謂ふ。是の如く不放逸に勤念・正智し、寂靜行ありて、依し、貪の妄想を斷じ、斷じ已りて內心の正住・正止し、獨處して定ある如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、「此の」念に親近し、多く修學すれば、須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[八四]復次に、比丘の是の如く思惟すらく、若し最後行の未知にして而も滅し、若し無間に行の滅し已りて識續き、餘道に生じ、彼の行緣にして彼の識あるを[八五]無間緣と名づく。若し行を因として彼の識の續き餘道に生じ、彼の行緣にして彼の識あるを[八六]因緣と名づく。若し行を思惟して識の續き、餘道に生じ、彼の行緣にして彼の識あるを[八七]緣緣と名づく。若し行に依りて識の續き餘道に生じ、彼の行緣にも彼の識あるを[八八]依緣と名づく。若し行に報たる識の續きて餘道に生じ、彼の行緣にして彼の識あるを[八九]報緣と名づく。若し行の起りて識の續き餘道に生じ、彼の行緣にして[九〇]彼の識あるを[九一]起緣と名づく。若し行にし相應して識の續き餘道に生じ、彼の行緣にして彼の識あるを[九二]異緣と名づく。若し增上趣に彼の識の增上なるが續き餘道に生じ、彼の行緣にして彼の識あるを[九三]增上緣と名づく。此の最後識の滅して初識續き餘道に生ずるや、最後識の滅し已りて初識即ち生じ、中間有ること無し。影の移れば日續き、日の移れば影續き、影と日と中間有ること無きが如く、是の如く、[九四]最後識の滅し、初識續きて餘道生ずるや、後識滅し已りて卽ち初識を生じ、中間有ること無し。此の最後識若しは最後識の相應法は初識に至らざるが如く、若し初識・初識相應法は後識に至らず。眼識の滅し已りて耳識を生じ、耳識の滅し已りて眼識を生じ、眼識相應法は耳識に至らず、耳識相應法は眼識に至らざるが如く、是の如く、後識・後識相應法は初識に至らず。初識・初識相應

【八四】復次に。同上第二十一偈。
【八五】無間緣。Anantara-pratyaya.
【八六】因緣。Hetupratyaya.
【八七】緣緣。Ālambana-pratyaya.
【八八】依緣。? Āśraya or niśraya-pratyaya.
【八九】報緣。Vipāka-pratyaya.
【九〇】彼の。大正本彼を行に作るも、宋元明宮の四本によりて改む。
【九一】起緣。巴、Janaka-paccaya.
【九二】異緣。巴、Aññamañña-paccaya.
【九三】增上緣。Adhipati-pratyaya.
【九四】最後識の上。宋元明宮の本には上文に準じて「此の」の字を加ふ。

法は後識に至らず。若し後識の滅し已りて卽ち初識を生ず。謂く此の時の過ぐるなり。謂く、此滅して〔九五〕後生ずるなり。謂く、此の終りて彼始るなり。命は是れ身に非ず。身は是れ命と非ず。命は身に異るに非ず。身は命に異るに非ず。〔p. 629a〕命に非ず、斷に非ず、生に生ず、住に非ず、有變に非ず、無因に非ず、天の所作に非ず、此が作して此が受くるに非ず。異が作して異が受くるに非ず。去來有るを知り、生死有るを知り、業相續有るを知り、說法有るを知る。緣有るを知り、此より彼に至る者有ること無く、彼より此に至る者有ること無し。但、行の相續して生ず、業緣を以ての故に。世尊の說くが如し、――我所は空にして、我は我所に於て應に疑ふべからず。我と我所は應に說くべからず。一切法に於て應に疑ふべからずと。是の故に當に知るべし、此の法は無常・有爲・緣生・盡法・變法・滅法・離法にして、我所は我が有に非ず。我は我が所有に非ず。我所と我と、皆我有ること無し。是を正慧觀と謂ふと。是の如くにして不放逸に懃念・正智し、寂靜行あり、依食の妄想を斷じ、斷じ已りて內心の正住・正止し獨處して定ある如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

〔九六〕復次に、比丘の若しは嬰兒の心の愚癡・無識にして穢處に眠臥するを見、是の如く思惟すらく、我も亦是の如きの法にして是の如きの相あり。未だ是の法を離れず。我身も亦是れ生法有り。過患を生ずること有りと。〔是の如きの〕如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

〔九七〕復次に、比丘の、若しは男子・女人の年老ひて衰熟し、髮白く、齒落ち、皮緩み、面に皺し、身體僂曲し、杖に〔九八〕柱りて羸歩して氣息し、調はざるを見、是の如く思惟すらく、我身も亦是の如きの法にして是の如きの相あり。未だ是の法を離れず。我身も亦是れ老法有り。〔九九〕過患有りと。〔是の如きの〕如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を

〔九五〕復。宋元明宮の四本には彼に作る。

〔九六〕復次に。同上第二十二解。

〔九七〕復次に。同上第二十三解。

〔九八〕柱。宋元明宮本には拄に作る。

〔九九〕過患。宋元明宮本には「老の過患」と。

得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[一〇〇]復次に、比丘の若しは男子・女人の身の患苦有りて穢處に眠臥し、羸劣無力にして、動止、人に須つを見、是の如く思惟すらく、我身も亦是の如き法にして是の如きの相あり。未だ是の法を離れず。我身も亦病有り。病の過患有りと。〔是の如きの〕如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

復次に、比〔p.629.b〕丘の若しは男子・女人の身壞して時過ぎ、若しは是れ親屬、若しは親屬に非さるものの其の死屍を棄つること草糞土の如くなるを見、是の如く思惟すらく、我身も是の如きの法にして是の如きの相あり。未だ是の法を離れず。我身も亦壞法にして死の過患有りと。〔是の如きの〕如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば、須陀洹果乃至阿漢羅果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[一〇一]復次に、比丘の死屍の棄てゝ塚間に在り、一日より三日に至るを見、自身の是の如きの法にして是の如きの相あり。未だ是の法を離れざるを觀ずる如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば、須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[一〇二]復次に、比丘の死屍の棄てゝ塚間に在り、一日より三日に至り、膖脹青瘀なるを見、自身も是の如きの法にして、是の如きの相あり、未だ是の法を離れざるを觀ずる如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば、須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[一〇三]復次に、比丘の死屍の棄てゝ塚間に在り、一日より三日に至り、若しは[一〇四]烏・鳥・虎・狼、若干の諸の獸の爲に食噉せらるるを見、自身も是の如きの法にして、是の如きの相あり、未だ是の法を離れざるを觀ずると、如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

【一〇〇】復次に。同上第二十三解。

【一〇一】復次に。同上第二十四解。

【一〇二】復次に。同上第二十五解。

【一〇三】復次に。同上第二十六解。

【一〇四】烏・鳥。宋元明宮の四本には烏・鳥と。

一〇五 復次に、比丘の死屍の骨節相連り、青赤爛壞し、膿血不淨の臭穢惡む可きを見、自身も是の如きの法にして、是の如きの相あり、未だ是の法を離れざるを觀ずる如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

一〇六 復次に、比丘の死屍の骨節相連り、血肉を覆ふ所の筋脈未だ斷ぜざるを見、自身も是の如きの法にして是の如きの相あり、未だ是の法を離れざるを觀ずる如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば、須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

一〇七 復次に、比丘の死屍の骨節相連り、血肉已に離れて筋脈の未だ斷ぜざるを見、自身も是の如きの法にして、是の如きの相あり、未だ[p.629c]是の法を離れざるを觀ずる如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

一〇八 復次に、比丘の死屍の骨節已に壞して未だ本處を離れざるを是、自身も是の如きの法にして、是の如きの相あり、未だ是の法を離れざるを觀ずる如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

一〇九 復次に、比丘の死屍の骨節已に壞し、遠く本處を離れて、脚・髀・膞・髖・脊・脇・肋・手・足・肩・臂・項・髑髏の各自、處を異にするを見、自身も是の如きの法にして、是の如きの相あり、未だ是の法を離れざるを觀ずる如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

一一〇 復次に、比丘の死屍の骨節久しく故り、色白きは貝の色の如く、青きは鴿の朽敗、碎壞せるが如くなるを見、自身も是の如きの法にして、是の如きの相あり、未だ是の法を離れざる、觀ずる如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば、須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を

【一〇五】復次に。同上第二十七解。

【一〇六】復次に。同上第二十八解。

【一〇七】復次に。同上第二十九解。

【一〇八】復次に。同上第三十解。

【一〇九】復次に。同上第三十一解。

【一一〇】復次に。同上第三十二解。

身念處一支向涅槃道と名づく。

[二一]復次に、比丘の死屍の火聚上に在り、一切の髮・毛・皮膚・血肉・筋脈・骨髓ありて、一切の髮毛乃至骨髓の漸漸に消盡するを見、此の身法を觀じ、東方・南・西・北方・四維・上・下に至つて住せず。此の身法は本、無く、而も生じ已りて還滅有りとする如實人の念・憶念、是を身念處と名づけ、念に親近し多く修學すれば須陀洹果乃至阿羅漢果を得。是を身念處一支向涅槃道と名づく。

[二二]何をか身念と謂ふ。身の發・起・生、是を身念と名づく。身の生を思惟する、是を身念と名づく。身境界の生ずる、是を身處と名づく。依身の生ずる、是を身念と名づく。身分別の生ずる、是を身念處と名づく。

[二三]何をか定慧二支向涅槃道と謂ふ。

何をか[二四]定と謂ふ。心の住・正住、是を定と名づく。

何をか[二五]慧と謂ふ。智の分別、是を慧と名づく。——是の如きの定と是の如きの慧と、是を定慧と名づけ、[二六]定慧に親近し多く修學し已りて須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得れば、是を定慧二支向涅槃道と名づく。

[二七]復次に、[p.630a]比丘の若しは一切の有爲法、若しは一處の有爲の法にて無常を思惟し、無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く不放逸に觀じて、定を得て心の住し、正住する、是を定と名づけ、如實人の若し智の分別は是を慧と名づく。——是の如きの定と是の如きの慧と、是を定慧と名づけ、定慧に親近し多く修學して須陀洹果乃至阿羅漢果を得れば是を定慧二支向涅槃道と名づく。

[二八]復次に、比丘の若しは一切の有爲法、若しは一處の有爲法にて苦・患・癰・箭・著・味・依緣・壞法・不定・不滿・變滅・可壞・苦・空・無我を思惟し、緣を思惟し、緣を知り、緣を解し、緣を受す——卽ち

【二一】復次に。同上第三十三解。
【二二】何をか等。以上身念處に關する三十三復次釋をのべ終つてまづ身念の字釋をのぶ。
【二三】何をか等。以下第二に二支道としての定慧を釋す。——今はそのまづ第一解。(全體で三十八釋を出す)。
【二四】定。Samādhi.
【二五】慧。Prajñā.
【二六】定慧に。宋元明三本によりて補入。下文參照。
【二七】復次に。同上第二釋。
【二八】復次に。同上第三釋。

無明緣にして行あり、行緣にして識あり、識緣にして名色あり、名色緣にして六入あり、六入緣にして觸あり、觸緣にして受あり、受緣にして愛あり、愛緣にして取あり、取緣にして有あり、有緣にして生あり、生緣にして老・死・憂・悲・苦・惱あり、純苦の聚集ありと。是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し正住する、是を定と名づけ、如實人の若し智の分別は是を慧と名づく。是の如きの定と是の如きの慧と是を定慧と名づけ、定慧に親近し多く修學して須陀洹果乃至阿羅漢果を得れば是を定慧二支向涅槃道と名づく。

二九 復次に、比丘の若しは一切の有爲法・一處の有爲法にて滅を思惟し、滅を知り、滅を解し、滅を受す——即ち無明滅す、無明滅すれば則ち行滅し、乃至純苦の聚集滅すと。是の如く、不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を定と名づけ、如實人の若し智の分別、是を慧と名づく。是の如きの定と是の如きの慧と、是を定慧と名づけ、定慧に親近し多く修學して須陀洹果乃至阿羅漢果を得れば、是を定慧二支向涅槃道と名づく。

三〇 復次に、比丘の行を知り、行を樂み、住を知り、住を樂み、坐を知り、坐を樂み、臥を知り、臥を樂み、身の行・住・坐・臥の樂の如く如實に知り、不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を定と名づけ、如實人の若し智の分別、是を慧と名づく。是の如きの定と是の如きの慧と、是を定慧と名づけ、定慧に親近し多く修學して須陀洹果乃至阿羅漢果を得れば、是を定慧二支向涅槃道と名づく。

三一 乃至、若し死屍の火聚上に在るを見る〔等〕亦上に說くが如し。

三二 復次に、比丘の是の如く思惟すらく、我は內に欲染有れば如實に、內に欲染ありと知り、若し內に欲染無ければ如實に〔p.630b〕、內の欲染無しと知り、欲染の未だ生ぜざるが如きは如實に未だ生ぜずと知り、欲染の生ずるが如きは如實に生ずと知り、欲染の生じ已りて斷ぜる如きは如實に斷ず

【二九】復次に、同上第四釋。

【三〇】復次に。同上第五釋。

【三一】乃至。前の一支道下の三十三解に準じ、ここにも同準の三十三釋を作るべき所を乃至略註するの意を示す。

【三二】復次に。同上第三十四釋。

と知り、欲染の斷じ已れる如きは、如實に更に復、生ぜずと知り、内に瞋恚・睡眠・掉悔・疑有るも亦是の如し。――是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を定と名づけ、如實人の若し智の分別、是を慧と名づく。是の如きの定と是の如きの慧と、是を定慧と名づけ、定慧に親近し多く修學して須陀洹果乃至は阿羅漢果を得れば、是を定慧二支向涅槃道と名づく。

[二三]復次に、比丘の是の如く思惟すらく、我内の眼〔所〕識の色に欲染・瞋恚有らば如實に、内の眼〔所〕識の色に欲染・瞋恚有りと知り、内の眼〔所〕識の色に欲染・瞋恚無ければ、如實に内の眼〔所〕識の色に欲染・瞋恚無しと知り、未だ眼〔所〕識の色に欲染・瞋恚を生ぜざる如きは如實に未だ生ぜずと知り、未生の眼〔所〕識の色の欲染・瞋恚の生ずる如きは如實に生ずと知り、眼〔所〕識の色に欲染・瞋恚を生じ已りて斷ぜる如きは如實に斷ずと知り、眼〔所〕識の色に欲染・瞋恚の斷已る如きは如實に更に復生ぜずと知り、耳〔所〕識の聲、鼻〔所〕識の香、舌〔所〕識の味、身〔所〕識の觸、意〔所〕識の法も亦是の如し。〔是の如く〕不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を定と名づけ、如實人の若し智の分別、是を慧と名づく。是の如きの定と是の如きの慧と、是を定慧と名づけ、定慧に親近し、多く修學して須陀洹果乃至阿羅漢果を得れば、是を定慧二支向涅槃道と名づく。

[二四]復次に、比丘の是の如く思惟すらく、我内に念正[二五]覺有るは如實に、内に念正覺有りと知り、内に念正覺無くんば如實に、内に念正覺無しと知り、念正覺の未だ生ぜざる如きは如實に未だ生ぜずと知り、念正覺の未生なるの生ぜざる如きは如實に生ずと知り、念正覺の已に生じ具足し修する如きは如實に具足し修すと知る。擇法正覺・精進正覺・除正覺・定正覺・捨正覺も亦是の如し。是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を定と名づけ、如實人の若し智の分別、是を慧と名づく。是の如きの定と是の如きの慧と、是を定慧と名づけ、定慧に親近し多く修學して須陀洹果乃至阿羅漢果を得れば、是を定慧二支向涅槃道と名づく。

【二三】復次に。同上第三十五釋。

【二四】復次に。同上第三十六釋。

【二五】正覺。覺支、等覺支の—Sambodhyaṅga のこと。

[一二六]復次に、比丘の如實に苦・苦の集・苦の滅・苦滅の道を知り、如實に漏・漏の集・漏の滅〔p.630.〕漏滅の道を知り、是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を定と名づけ、如實人の若し智の分別、是を慧と名づく。是の如きの定と是の如きの慧と、是を定慧と名づけ、定慧に親近し多く修學して須陀洹果乃至阿羅漢果を得れば、是を定慧二支向涅槃道と名づく。

[一二七]復次に、比丘の心の畏怖の故に一切の有爲を出でて甘露界に入る。此は寂靜勝にして一切の有爲を離れ、愛盡涅槃なりと、是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を定と名づけ、如實人の若し智の分別、是を慧と名づく。是の如きの定と是の如きの慧と、是を定慧と名づけ、定慧に親近し多く修學して須陀洹果乃至阿羅漢果を得れば、是を定慧二支向涅槃道と名づく。

[一二八]何をか定と謂ふ。煩惱の未だ斷ぜざる者の欲染の斷じ、正斷し、寂靜し、瞋恚・愚癡・煩惱障礙・覆・蓋・諸縛の惡行の滅し、正滅し、寂靜す。秋時に多く塵土雲霧を起さば、卽時に雨の墮滅して塵土・雲霧の滅し、正滅し寂靜するが如く、是の如く定も煩惱の未斷の者の如きの欲染を斷じ、正滅し寂靜にし、瞋恚・愚癡・障礙・覆・蓋・諸縛の惡行を滅し、正滅し寂靜にす。是を定と名づく。

何をか慧と謂ふ。如實人の若し智の色分別するときは如實に色を分別し、受・想・行・識も亦是の如し。明眼人の高山頂に上り、若し東方を觀れば如實に分別し、若し南西北方も如實に分別するが如く、是の如く慧も如實に色・受・想・行・識を分別す。是の慧と名づく。

(1)[一二九]云何が[一三〇]有覺有觀定なる。若しは定の覺、觀と相應と覺、觀と共生・共住・共滅する、是を有覺有觀定と名づく。

(2)復次に、有覺有觀定は若し定の覺觀を得・正得・緣得する、是を有覺有觀定と名づく。

(3)復次に、有覺有觀定は比丘の欲惡不善法を離れ、覺有り、觀有り離生の喜樂ある初禪を成就して[一三一]行ぜば、比丘は覺有り觀あり、喜・樂・一心にして、若し此の定に入る者は五支を得・正得・緣

【一二六】復次に。同上第三十七釋。

【一二七】復次に。同上第三十八釋。

【一二八】何をか等。以上三十八釋を揭げ已つて定慧の釋を記す。

【一二九】云何が等。三支道の第一有覺有觀定等を別釋す。

【一三〇】有覺有觀定。Savitarka-Savicāra-Samādhi 新譯有尋有伺定のこと。

【一三一】行じ。viharati の次に當らむ。

得す。覺・觀・喜・樂・一心なり。是を初禪の有覺有觀定と名づく。

(4)復次に、比丘あり、若し有覺有觀定の有喜の[一三二]共味定を得、比丘の喜の麁にして、心の悲有り、無喜の樂は勝・寂靜なりと觀ず。比丘の喜の麁を觀じ已りて、喜は寂靜・正寂靜・滅・沒・除す。喜の寂靜・正寂靜・滅・沒[p.631a]・除し已るが故に覺・觀・無喜の樂・一心有り。若し此の定に入る者は四[一三三]支を得・正得・緣得す。覺・觀・無喜の樂・一心なり。是を非禪非禪間の有覺有觀定と名づく。

如し比丘の若しは行じ、若しは受敎し、若しは法相あり、若しは方便し、若しは專心し、若しは思惟し、若しは觸して有覺有觀有喜の共味定を得。如し比丘は行じ、受敎し、法相あり、方便し、專心し、思惟し、觸して親近し多く修學す。如し比丘の行じ、乃至觸して親近し多く修學し已りて、心は寂靜に向ふ。心の寂靜に向ひ已りて寂靜を尊上す。寂靜を尊上し已りて寂靜に傾向す。寂靜に傾向し已りて喜は寂靜す。喜の寂靜し、正寂靜す。正寂靜して滅・沒・除す。滅・沒・除し已りて覺・觀・無喜の樂・一心有り。若し此の定に入る者は四支を得・正得・緣得す。覺・觀・無喜の樂・一心なり。是を非禪非禪間の有覺有觀定と名づく。

(5)復次に、比丘の若し有覺有觀無喜樂の共味定を得、此の比丘の無喜樂の麁にして心の作有り、不苦不樂の捨は寂靜勝なるを觀ず。此の比丘は無喜樂の麁を觀じ已りて無喜の樂は寂靜す。寂靜して正寂靜す。正寂靜して滅・沒・除す。滅・沒・除し已るが故に覺有り觀有り不苦不樂の捨あり、一心あり。若し此の定に入る者は四支を得・正得・緣得す。覺・觀・不苦不樂の捨・一心なり。是を非禪非禪間の有覺有禪定と名づく。

如し比丘の若しは行じ、若しは受敎し、若しは法相あり、若しは方便し、若しは專心し、若しは思惟し、若しは觸して有覺有觀無喜樂の共味定を得。如し比丘の行じ乃至觸して親近し多く修學し已りて心は寂靜に向ふ。心の寂靜に向ひて寂靜を尊上す。寂靜を尊上して寂靜に傾向す。寂靜に傾

【一三二】共味定。Āsvādanasamprayukta-dhyāna. 婆沙一六二に曰く、初靜慮に三種有り。謂く味相應と淨と無漏となり。味相應とは謂く愛相應なり。能く心を持して境に於て流注す。其相順定の故にと。倶舍二八に曰く、初の味等至は謂く愛相應なり。愛は能く味著す。故に名づけて味と爲す。彼と相應するが故に此は味の名を得すと。

【一三三】支。Aṅga. 支分、成分の義。

向し已りて無喜の樂は寂靜す。寂靜して正寂靜す。正寂靜して滅・沒・除す。滅・沒・除し已りて覺有り觀有り、不苦不樂の捨あり、一心あり。若し此の定に入る者は四支を得・正得・緣得す。覺・觀・不苦不樂の捨・一心なり。是を非禪非禪間の有覺有觀定と名づく。

(1)云何が[一三四]無覺有觀定なる。若しは定の覺を離れて觀と相應し、覺と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せず、觀と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を無覺有觀定と名づく。

(2)復次に、無覺有觀定とは、若し定の覺を得せず、正得せず、緣得せず、觀を得し、正得し〔p.631b〕緣得する、是を無覺有觀定と名づく。

(3)復次に、無覺有觀定とは、若し比丘あり、覺有り、觀有り、有喜の共味定を得。此の比丘の覺の麁にして、無覺有觀定の寂靜・勝なるを觀ずるに、此の比丘は覺の麁を觀じ已りて覺・寂靜す。覺の寂靜して正寂靜す。正寂靜して滅・沒・除す。滅・沒・除し已るが故に觀・喜・樂・一心有り。若し此の定に入る者は四支を得し、正得し、緣得す。觀・喜・樂・一心なり。是を禪間の無覺有觀定と名づく。

如し比丘の若しは行じ、若しは受敎し、若しは法相あり、若しは方便し、若しは專心用意し、若しは思惟し、若しは觸して有覺有觀有喜の共味定を得。此の比丘は彼を行じ、乃至觸し、親近し多く修學す。如し比丘の行じ、乃至觸し、親近し多く修學し已りて心は寂靜に向ひ寂靜を尊上し、寂靜に傾向す。心の寂靜に向ひ寂靜を尊上し、寂靜に傾向し已りて覺の寂靜し、正寂靜し、滅・沒・除す。覺の寂靜し、正寂靜し、滅・沒・除し已るが故に觀・喜・樂・一心有り。若し此の定に入る者は四支を得し、正得し、緣得す。觀・喜・樂・一心なり。是を禪間の無覺有禪定と名づく。

何をか[一三五]禪間と謂ふ。是れ初禪と二禪の間にして初禪より二禪に趣く時なり。

(4)復次に、比丘あり、無覺有觀有喜の共味定を得。比丘の喜の麁にして喜心の猶、悲有り、無喜の樂・寂靜・勝を觀ず。比丘の喜の麁を觀じ已りて、喜は寂靜・正寂靜・滅・沒・除す。喜の寂靜・正

【一三四】無覺有觀定。Avitarka-savicāra-Samādhi. 新譯の無尋有（又は唯）伺定。

【一三五】禪間。Dhyānāntara 新譯に靜慮中間といふもの。初禪及第二禪中間の中繼的又は中の島的な一種特定の禪。倶舍二八等參照。

寂靜・滅・沒・除し已るが故に觀・無・喜・樂・一心有り。若し此の定に入る者は三支を得し、正得し、緣得す。觀・無喜の樂・一心なり。是を非禪非禪間の無覺有觀定と名づく。

如し比丘の若しは行じ、若しは受敎し、若しは法相あり、若しは方便し、若しは專心し、若しは思惟し、若しは觸して無覺有觀有喜の共味定を得。如し比丘は行じ、乃至觸し、親近し、多く修學す。親近し多く修學し已りて、心は寂靜に向ふ。心の寂靜に向ひ已りて寂靜を尊上す。寂靜を尊上して寂靜傾向す。寂靜に傾向し已りて喜は寂靜・滅・沒・除す。〔寂靜・滅・沒・除し〕已るが故に觀・無喜の樂・一心有り。若し此の定に入る者は三支を得し、正得し、緣得す。觀・無喜の樂・一心なり。是を非禪非禪間の無覺有觀定と名づく。

(5)復次に比丘あり、無覺有觀無喜の共味定を得。比丘〔p. 631c〕は無喜の樂の麁にして、無喜樂心の猶、作有り、不苦不樂の捨の、寂靜時なるを觀ず。比丘の無喜の樂の麁を觀じ已りて無喜の樂は寂靜す。寂靜して正寂靜す。正寂靜して滅・沒・除す。滅・沒・除し已るが故に觀・不苦不樂の捨・一心有り。若し此の定に入る者は二支を得し、正得し、緣得す。不苦不樂の捨・一心なり。是を非禪非禪間の無覺有觀定と名づく。

如し比丘の若しは行じ、若しは受敎し、若しは法相あり、若しは方便し、若しは專心し、若しは思惟し、若しは觸して無覺有觀無喜樂の共味定を得。如し比丘は行じ、乃至、觸し、親近し、多く修學す。行じ、乃至觸し、親近し、多く修學し已りて心は寂靜に向ひ、寂靜を尊上し、寂靜に傾向す。寂靜に傾向し已りて無喜の樂は寂靜し、正寂靜し、滅・沒・除す。滅・沒・除し已るが故に觀・不苦不樂の捨・一心有り。若し此の定に入る者は三支を得し、正得し、緣得す。觀・不苦不樂の捨・一心なり。是を非禪非禪間の無覺有觀定と名づく。

――是を無覺有觀定と名づく。

(1)何をか[一三六]無覺無觀定と謂ふ。若しは定の覺・觀を離れ、覺觀と共生せず、共住せず、共滅せざる、是を無覺無觀定と名づく。

(2)復次に、無覺無觀定とは、若し定の覺・觀に於て得せず、正得せず、緣得せざる、是を無覺無觀定と名づく。

【一三六】無覺無觀定。Avitarka-avicāra-samādhi. 新譯の無尋無伺定に當る。

卷の第十六〔p.631c〕

非問分道品　第十【其の二】

(3)復次に無覺無觀定とは、如し比丘の覺・觀を滅して內に淨信あり、一心にして覺無く、觀無く、定生の喜樂あるの二禪を成就して行ず。此の比丘は故に內の淨信・喜・樂・一心有り。若し此の定に入る者は四支を得し、正得し、緣得す。內の淨信・喜・樂・一心なり。是を第二禪の〔p.632a〕無覺無觀定と名づく。

(4)復次に、比丘あり、有覺有觀有喜の共味定を得・如し比丘の觀覺・觀の麁にして、無覺・無觀定の寂靜・勝なるを觀ずるに、比丘の觀覺・觀の麁を觀じ已りて覺觀は寂靜し、正寂靜し、滅・沒・除す。滅・沒・除し已るが故に內の淨信・喜・樂・一心有り。若し此の定に入る者は四支を得し、正得し、緣得す。內の淨信・喜・樂・一心なり。是を第二禪の無覺無觀定と名づく。

如し比丘は若しは行じ、若しは受教し、若しは法相あり、若しは方便し、若しは專心し、若しは思惟し、若しは觸して有覺有觀有喜の共味定を得。如し比丘の行じ、乃至觸し、親近し、多く修學す。修學し已りて心、寂靜に向ひ、寂靜を尊上し、寂靜に傾向す。寂靜に傾向し已りて覺觀は寂靜・正寂靜・滅沒除す。滅沒除し已るが故に內の淨信・喜・樂・一心有り。若し此の定に入る者は四支を得し、正得し、緣得す。內の淨信・喜・樂・一心なり。是を第二禪の無覺無觀定と名づく。

(5)復次に、比丘あり、無覺無觀有喜の共味定を得・比丘の喜の麁にして喜心の猶、悲有り、無喜の樂の寂靜・勝を觀ずるに、比丘の喜の麁を觀じ已りて喜は寂靜・正寂靜・滅沒除す。滅沒除し已るが故に內の淨信・無喜の樂・一心有り。此は初禪に入りて捨心す、第三禪定に入りて捨心するに及ばず。若し此の定に入る者は三支を得し、正得し、緣得す。內の淨信・無喜の樂・一心なり。是

を禪間の無覺無觀定と名づく。第二・第三の禪間は二禪より三禪に趣く。

(6)復次に、比丘あり、無覺無觀無喜樂の共味定を得・比丘の無喜樂の麁にして無喜の心の猶、作有り、不苦不樂の捨の寂靜勝を觀ずるに、比丘の無喜樂の麁を觀じ、已りて、無喜樂は寂靜・正寂靜・滅・沒・除し、滅・沒・除し已るが故に內の淨信・不苦不樂の捨・一心有り。若し此の定に入る者は三支を得し、正得し、緣得す。內の淨信・不苦不樂の捨・一心なり。是を非禪非禪間の無覺無觀定と名づく。

如し比丘あり、若しは行じ、若しは受敎し、若しは法相あり、若しは方便し、若しは專心し、若しは思惟し、若しは觸して無覺無觀無喜樂共味定を得。如し比丘は行じ、乃至觸し、親近し、多く修學す。多く修學し已りて心は寂靜に向ふ。心の寂靜に向ひて〔p.632b〕寂靜を尊上す。寂靜を尊上して寂靜に傾向す。寂靜に傾向し已りて喜樂は寂靜・正寂靜・滅・沒・除す。滅・沒・除し已るが故に內の淨信・不苦不樂の捨・一心有り。是を非禪非禪間の無覺無觀定と名づく。

(7)復次に、比丘あり、喜を離れて捨行じ念・正智ありて身に樂を受し、諸の聖人の捨・念・樂行ずと解する如き三禪を成就して行ず。比丘は故に共味定の捨・念・正智・無喜の樂・一心有り。若し此の定に入る者は五支を得し、正得し、緣得す。共味の捨・念・正智・無喜の樂・一心なり。是を第三禪の無覺無觀定と名づく。

如し比丘あり、若しは行じ、若しは受敎し、若しは法相あり、若しは方便し、若しは專心し、若しは思惟し、若しは觸して無覺無觀有喜樂の共味定を得。如し比丘の行じ、乃至觸し、親近し、多く修學するに、多く修學し已りて心は寂靜に向ひ、寂靜を尊上し、寂靜に傾向す。寂靜に傾向し已りて喜は寂靜・正寂靜・滅・沒・除す。滅・沒・除し已るが故に共味の捨・念・正智・無喜の樂・一心有り。若し此の定に入る者は五支を得、正得・緣得す。共味の捨・念・正智・無喜の樂・な一心

り。是を第三禪の無覺無觀定と名づく。

(8)復次に、比丘あり、無覺無觀無喜樂の共味定を得・如し比丘の無喜樂の麁にして、無喜樂心の猶、作有り、不苦不樂の捨の寂靜・勝を觀ずるに、比丘の無喜樂の麁を觀じ已りて無喜樂は寂靜・正寂靜・滅・沒・除す。滅・沒・除し已りて捨・念・正智・一心あり。此の人は出息・入息を滅するも、第四禪に入る者に及ばず。若し此の定に入る者は四支を得、正得、緣得す。不苦不樂の捨・念・正智・一心なり。是を禪間の無覺無觀定と名づく。第三・第四の禪間は三禪より第四禪に趣く。

如し比丘あり、若しは行じ、若しは受敎し、若しは法相あり、若しは方便し、若しは專心し、若しは思惟し、若しは觸して無覺無觀無喜樂の共味定を得るに、比丘は行じ乃至觸し、親近し、多く修學し、多く修學し已りて心は寂靜に向ひ、寂靜を尊上し、寂靜に傾向し、寂靜に傾向し已りて無喜樂は寂靜・正寂靜・滅・沒・除し、滅・沒・除し已りて不苦不樂の捨・念・正智・一心有り。此の人は出息・入息を滅するも、[p.632c] 第四禪に入る者に及ばず。若し此の定に入る者は四支を得、正得、緣得す。不苦不樂の捨・念・正智・一心なり。是を禪間の無覺無觀定を名づく。第三・第四の禪間は第三禪より第四禪に趣く。

(9)復次に、比丘あり、苦を斷じ、樂を斷じ、先に憂と苦とを滅して不苦不樂の捨・念・淨ある四禪を成就して行ず。如し比丘は[一]有喜の不苦不樂の捨・念・淨・一心あり。若し此の定に入る者は四支を得、正得、緣得す。不苦不樂の捨・念・淨・一心なり。是を第四禪の無覺無觀定と名づく。

(10)復次に、比丘あり、無覺無觀無喜樂の共味定を得、比丘の無喜樂の麁にして、無喜樂心の猶、作有り、不苦不樂の捨の寂靜・勝を觀ずるに、比丘の無喜樂の麁を觀じ已りて無喜樂は寂靜・正寂靜・滅・沒・除し、滅・沒・除し已るが故に不苦不樂の捨・念・淨・一心有り。若し此の定に入る

【一】有喜。宋元明宮の四本には憂喜に作るも、？

者は四支を得、正得、緣得す。不苦不樂の捨・念・淨・一心なり。是を第四禪の無覺無觀定と名づく。

如し比丘あり、若しは行じ、若しは受敎し、若しは法相あり、若しは方便し、若しは專心し、若しは思惟し、若しは觸して無覺無觀無喜樂の共味定を得るに、如し比丘は行じ、乃至觸し、親近し、多く修學し、多く修學し已りて心は寂靜に向ひ、寂靜を尊上し、寂靜に傾向し、寂靜に傾向し已りて無喜樂は寂靜・正寂靜・滅・沒・除し已りて不苦不樂の捨・念・淨・一心有り。若し此の定に入る者は四支を得、正得、緣得す。不苦不樂の捨・念・淨・一心なり。是を第四禪の無覺無觀定と名づく。

(11)復次に、比丘あり、一切の色想を離れ、[二]瞋恚想を滅し、若干の想も思惟せず、無邊空處を成就して行ず。如し比丘は空處想・不苦不樂の捨・一心有り。若し此の定に入る者は三支を得、正得、緣得す、空處想・不苦不樂の捨・一心なり。是を空處の無覺無觀定と名づく。

(12)復次に、比丘あり、一切の空處想を離れ、無邊識處を成就して行ず。如し比丘は識處想・不苦不樂の捨・一心有り。若し此の定に入る者は三支を得、正得、緣得す。識處想・不苦不樂の捨・一心なり。是を識處の無覺無觀定と名づく。

(13)復次に、比丘あり、一切の識處想を離れ、無所有處を成就し行ず[p.633b]行ず。如し比丘は無所有處想・不苦不樂の捨・一心有り。若し此の定に入る者は三支を得、正得、緣得す。無所有處想・不苦不樂の捨・一心なり。是を不用處の無覺無觀定と名づく。

(14)復次に、比丘あり、一切の不用處を離れ、非想非非想處を成就して行ず。如し比丘は非想非非想處想・不苦不樂の捨・一心有り。若し此の定に入る者は三支を得、正得、緣得す。非想非非想處想・不苦不樂の捨・一心なり。是を非想非非想處の無覺無觀定と名づく。

【二】瞋恚想。Pratigha-saṃjñā. 支那は有對想と譯す。

[三]何をか[四]空定と謂ふ。如し比丘の一切法若しは一處の法にて空を思惟し、空を知り、空を解し、空を受すらく、何の義を以てか空なる。我空を以て我所も亦空なりと。是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する是を空定と名づく。

復次に、空定に六空あり。內空・外空・內外空・空空・大空・第一義空なり。

何をか[五]內空と謂ふ。如し比丘の一切の內法若しは一處の內法にて空を思惟し、空を知り、空を解し、空を受すらく、何の義を以てか空なる。我空を以て我所も亦空・常空・不變易空なりと。是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を內空と名づく。

何をか[六]外空と謂ふ。如し比丘の、一切の外法若しは一處の外法にて空を思惟し、空を知り、空を解し、空を受すらく、何の義を以てか空なる。我は空を以て我所も亦[七]空・常空・不變易空なりと、是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し正住する、是を外空と名づく。

云何か[八]內外空なる。如し比丘の、一切の內外法、若しは一處の內外法にて空を思惟し、空を知り、空を解し、空を受すらく、何の義を以てか空なる。我空を以て我所も亦空・[九]常空・不變易空なりと、是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し正住する、是を內外空と名づく。

何をか[一〇]空空と謂ふ。如し比丘の空定を成就して行じ、比丘の空を思惟し、空を知り、空を解し、空を受すらく、何の義を以てか空なる。我空を以て我所も亦空・常空・不變易空なりと、是の如く不放逸に觀じて[一一]空定を得、心の住し正住する、是を空空と名づく。

何をか[一二]大空と謂ふ。如し比丘、一切法にて空を思惟し、空を知り、空を解し、空を受すらく、何の義を以てか空なる。我空を以て、我所も亦空なりと、是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住して正住する、是を大空と名づく。

何をか[一三]第一義空と謂ふ。[一四]第一は謂く涅槃なり。如し比丘の涅槃の空を思惟し〔p.632b〕空を知り、

【三】何をか等。三支道の第二、空等の三空を明かす。

【四】空定。Śūnyatā-samādhi.

【五】內空。Adhigātenaśūnyatā.

【六】外空。Bahirdhaśūnyatā.

【七】常空・無變易空。宋元明宮の四本により補入。

【八】內外空。Adhyātmabahirdhaśūnyatā.

【九】常空等。また上註に準ず。

【一〇】空空。Śūnyatāśūnyatā.

【一一】空。宋元明宮の四本、この字なく、上來の文も亦然り。

【一二】大空。Mahāśūnyatā.

【一三】第一義空。Paramārthaśūnyatā.

【一四】第一。Parama.

空を解し、空を受すらく、何の義を以てか空なる。我空を以て我所も亦空・常空・不變易空なりと、是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を第一義空と名づく。——是の如き六空、是を空定と名づく。

何をか無相定[15]と謂ふ。空定を除く若し餘の定の、聖涅槃を以て境界と爲す、是を無相定と名づく。

復次に、無相定とは、行は[16]相有り、涅槃は相無し。行は三相有り。生・住・滅なり。涅槃は三相無し。不生・不住・不滅なり。是の如く行は相有り、涅槃は相無し。涅槃は是れ[17]寂滅・是れ舍宅・是れ救護・是れ燈明・是れ依止・是れ不終沒・是れ歸趣・是れ燋熱無し、是れ憂惱無し、是れ憂悲苦惱及び餘の諸行無しと、涅槃を思惟して定を得心の住し正住する、是を無相定と名づく。

何をか[18]無願定と謂ふ。空定を除く若し餘の定の聖有爲を以て境界と爲す、是を無願定と名づく。

復次に、無願定とは願に二種有り。愛著と見著となり。比丘の行の苦・患・癰・箭・著味・依緣・壞法・不定・不足・可壞・無苦を思惟して、空・無我を思惟せずして定を得、心の住し、正住するに比丘は愛斷じ、見斷じ、此の定は能く愛見を斷ず。是を無願定と名づく。

[19]何をか四念處と謂ふや。(1)如し比丘の內身にて身を觀じて行じ、勤念・正智ありて希望[20]世憂を調へ、外身にて身を觀じて行じ、勤念・正智ありて希望・世憂を調へ、內外身にて身を觀じて行じ、行勤念・正智ありて希望・世憂を調へ。(2)心・(3)法・(4)受も亦是の如し。是の四念處と名づく。

[21]何をか四正斷と謂ふ。(1)如し比丘の惡・不善法の未だ生ぜざるを生ぜざらしむと欲して[22]欲を起し、自ら勉め、勝進し、攝心し、正斷す。(2)惡法の已に生ぜるを斷ぜしめむと欲して欲を起し、

【一五】 無相定。Animittasamādhi.

【一六】 相。Nimitta.

【一七】 寂滅等。

【一八】 無願定。Apranihitasamādhi.

【一九】 何をか等。四支道の隨一、四念處を釋す。集異門足論六（毘曇部一、初版 p. 193 f.）; 法蘊足論四（同上三、p. 138）その他參照。

【二〇】 世憂。宋元明宮の四本には世愛に作る。巴、Lokeabhijjhādomanassa（世の貪愛）と。

【二一】 何をか等。四支道の第二、四正斷を釋す。集異門足論六（毘曇部一初版 p. 1935）法蘊足論三、正勝品（同上三 p. 94）等參照。

【二二】 欲を起し以下。集異門足論中の註を見るべし。

自ら勉め、勝進し、攝心し、正斷す。(3)善法の未だ生ぜざるを生ぜしめむと欲して欲を起し、自ら勉め、勝進し、攝心し正斷す。(4)善法の已に生ぜるを[二三]住し、具足し、修し、忘れず、廣大・増長せしめむと欲して、欲を起し、自ら勉め、勝進し、攝心し正斷す。是を四正斷と名づく。

[二四]何をか四神足と謂ふ。(1)如し比丘の[二五]斷行を成就して神足を修する・(2)精進定・(3)心定・(4)念定慧定斷行を成就して神足を修する、是を四神足と名づく。

[二六]四禪は[二七]禪品に說く所の如し。

何をか[二八]四無量と謂ふ。慈・悲・喜・捨なり。

何をか慈と謂ふ。如し比丘の衆生の樂を思惟し、樂を知り、樂を解し、樂を受するなり。或は[p.636c]衆生有り、曾て比丘を侵惱するに、比丘は是の衆生に於て心に障礙あり、清淨ならず、親近せず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生已に我を侵惱し、衆生の我を侵損すと雖も、我は法として應に報ずべからず。我若し衆生を瞋惱せば則ち自らを損ずと爲す。他の已に我を侵惱して若し我還つて報ぜば、自ら損ずること甚しと。彼の比丘は是の如く思惟し已りて衆生に於て堪忍し、瞋惱心を除滅し、思惟して衆生をして樂しみ、樂を知り、樂を解し、樂を受せしめむと欲す。或は衆生有り、先に未だ曾て比丘を侵惱せず、今侵惱するに、比丘は衆生に於て心に障礙あり、清淨ならず、親近せず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生の、先に未だ曾て我を侵惱せず、今現に侵惱す。衆生は現に我を侵惱すと雖も、或は是れ我が宿業の報にして我能く遮る「所」に非ず。我若し衆生を瞋惱せば、則ち自らを損ずと爲す。他の已に我を侵して若し我還て報ぜば、自ら損ずること甚しと。彼の比丘は是の如く思惟し已りて、衆生に於て堪忍し、瞋惱心を除滅し、思惟して衆生をして樂しみ、樂を知り、樂を解し、樂を受せしめむと欲す。或は衆生有り、先に未だ曾て比丘を侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せむと欲すべきに、比丘の衆生に於いて心に

【二三】住し以下。有部諸典や大乘諸傳等には、以上三正斷にもすべてこの文句を一、一附記してゐる。對檢すべし、「住し」以下の諸字に對しては同前に集異門足論中の註を見るべし。

【二四】何をか等。四支道の第三、四神足を釋す。集異門足論六（毘曇部一、初版、p. 195）、法蘊足論四（同上三、p. 117）その他參照。

【二五】斷行。集異門足論等には以下の四を此の如く作る。
(一)欲三摩地斷行成就神足 Chandasamādhi-Prahāṇasaṃskārasamanvāgato ṛddhipādaḥ//
(二)勤三摩地……Vīryasamādhi
(三)心……Citta-a.
(四)觀……Mīmāṃsā-s.

【二六】四禪。四支道の第四を釋す。集異門足論等には四靜慮に作る。その卷六（毘曇部同前p. 196）、法蘊足論六（同上三、p. 172）等參照。

【二七】禪品。卷十四中を見よ。

【二八】四無量。同上四支道の第五を釋す。集異門足論卷六（毘曇部一、p. 197 f）、法蘊足論七（同上三、p. 188ff）等を見よ。

障礙あり、清淨ならず、親近せず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生は先に未だ曾て我を侵惱せず、今侵惱せず、當に我を侵惱せむとす。衆生は當に侵惱せむと欲すと雖も、或は作さず、或は因緣集せざらむ。我若し衆生を瞋惱せば則ち自らを損ずと爲す。他は我を侵惱せむと欲すと雖も、若し我還て報ぜば、自らを損ずること甚しと。彼の比丘の是の如く思惟し已りて衆生に於て堪忍し、瞋惱心を除滅し、思惟して衆生をして樂しみ、樂を知り、樂を解し、樂を受せしめむと欲す。或は衆生有り、先に未だ曾て比丘を侵惱せず。今侵惱せず。當に侵惱せざるべし。[二八]先に未だ曾て我愛喜・適意の者を[二九]侵惱せず。今現に我愛喜・適意の者を侵惱するに、比丘は衆生に於て心に障礙あり。清淨ならず、親近せず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生は先に未だ曾て我を侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せず。我愛喜・適意する所の者を曾て侵惱せり。衆生の我愛喜・適意の者を侵惱せりと雖も、我は應に彼を侵惱すべからず。我若し衆生を瞋惱せば、則ち自らを損ずと爲す。他の已に侵惱して、若し我還て報ぜば、自らを損ずること甚しと。彼の比丘の是の如く思惟し、已りて衆生に於て堪忍して瞋惱心を除滅し〔p.634a〕思惟して衆生を樂しみ、樂を知り、樂を解し、樂を受せしめむと欲す。或は衆生有り、先に未だ曾て比丘を侵惱せず、今侵惱せず、當にも侵惱せざるべし。先に未だ曾て我愛喜・適意の者を侵惱せず、今現に我愛喜・適意の者を侵惱するに、比丘は衆生に於て心に障礙あり。清淨ならず、親近せず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生は先に未だ曾て我を侵さず、今侵さず、當に侵さゞらむ。我愛喜・適意の者を侵さず、先に未だ曾て侵さず。我愛喜・適意の者を今現に侵す。衆生は我愛喜・適意の者を侵すと雖も、或は是れ宿業の報にして、我能く他の宿業を遮すべきには非ず。我若し衆生を瞋惱せば則ち自らを損ずと爲す。他が我を侵すを以て、我若し還て報ぜば、自らを損ずる甚しと。彼の比丘に於て是の如く思惟し已りて、衆生に於て堪忍して瞋惱心を除滅し、思惟して衆生を樂しみ、樂を知り、樂を解し、樂を受せ

【二八】先に等。次文中に見るが如く、ここは「先に曾て我愛喜・適意の者を侵惱せり」の誤で、從て今現にの一文は全然衍文ならざるべからず。
【二九】惱。宋元明宮の四本に從て補入。

しめむと欲す。或は衆生有り、先に未だ曾て比丘を侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我愛喜適意の者を先に未だ曾て侵惱せず、今侵惱せず。清淨ならず、親近せず、解せず。若しは我愛喜・適意の者を當に侵惱せむと欲すべきに、比丘は衆生に於て心に障礙あり。清淨ならず、親近せず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生は先に未だ曾て我を侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我愛喜・適意の者を先に未だ曾て侵惱せず、今侵惱せず、若しは我愛喜・適意の者を當に侵惱せんと欲すべし。衆生は我愛喜・適意の者を侵惱せむと欲すと雖も、或は作さず、或は因緣集せざらむ。我若し衆生を瞋惱せば則ち自らを損ずと爲す。他の已に侵惱して、若し我還て報ぜば、自らを損ずること甚しと。彼の比丘は是の如く思惟し已りて、衆生に於て堪忍して瞋惱心を除滅し、思惟して衆生を樂しみ、樂を知り、樂を解し、樂を受せしめむと欲す。或は衆生有り、先に未だ曾て比丘を侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我愛喜・適意の者を先に未だ曾て侵惱せず、今曾て侵惱せず、當に曾て侵惱せざるべし。若しは我愛喜・適意せざる者を已に曾て利益せるに、比丘は衆生に於て心に障礙あり。清淨ならず、親近せず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生は先に未だ曾て我を侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我愛喜・適意の者を先に未だ曾て侵惱せず、[三〇]今曾て侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我愛喜適意せざる者を〔p.634b〕已に曾て利益せり。若し衆生の已に我が愛喜・適意せざる者を利益せりと雖も、我は應に彼を侵惱すべからず。我若し衆生を瞋惱せば、則ち自らを損ずと爲す。他の已に我を損じて、我若し還て報ぜば自らを損ずること甚しと。彼の比丘は是の如く思惟し已りて、衆生に於て堪忍して瞋惱心を除滅し、思惟して衆生を樂しみ、樂を知り、樂を解し、樂を受せしめむと欲す。或は衆生有り、先に未だ曾て比丘を侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せず、若しは我が愛喜適意の者を先に未だ曾て侵惱せず、今侵惱せず當に侵惱せざるべし。若しは我が愛喜・適意せざる者を先に未だ曾て利益せず。若しは我

【三〇】曾て。宋元明宮の四本にはこの字を省く。蓋し當然といふべし。

が愛喜・適意せざる者今利益するに、比丘は衆生に於て心に障礙あり、清淨ならず、親近せず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生は先に未だ曾て我を侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我が愛喜・適意の者を先に未だ曾て侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我愛喜・適意せざる者を先に未だ曾て利益せず。若しは我が愛喜・適意せざる者を今利益する衆生は我愛喜・適意せざる者を利益すと雖も、或は是れ宿業の報にして、我能く他の宿業の報を遮すべきには非ず。我若し衆生を瞋惱せば、則ち自らを損ずと爲す。他の已に我を損じて、我若し還て報ぜば、自らを損ずること甚しと。彼の比丘は是の如く思惟し已りて、衆生に於て堪忍して瞋惱心を除滅し、思惟して衆生を樂しみ、樂を知り、樂を解し、樂を受せしめむと欲す。或は衆生有り、先に未だ曾て比丘を侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我愛喜・適意の者を先に未だ曾て侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我愛喜・適意せざる者を先に未だ曾て利益せず、今利益せず。若しは我愛喜・適意せざる者を當に利益せむと欲するに、比丘は衆生に於て心に障礙あり、清淨ならず、親近せず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生は先に未だ曾て我を侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我が愛喜・適意の者を先に未だ曾て侵惱せず。今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。[三二]若しは我愛喜・適意せざる者を先に未だ曾て利益せず、今利益せず。當に利益せむと欲すべし。若しは我不愛喜・適意者、當に利益せんと欲すべし。衆生は我愛喜・適意せざる者を利益せむと欲すと雖も或は作さず、或は因緣集らざらむ。我若し衆生を瞋惱せば則ち[p.634c]自らを損ずと爲す。他の已に我を損じて、我若し還て報ぜば、自らを損ずること甚しと。彼の比丘の是の如く思惟し已りて、衆生に於て堪忍して瞋惱心を除滅し、思惟して衆生を樂しみ、樂を知り、樂を解し、樂を受せしめむと欲す。或は衆生有り、先に未だ曾て比丘を侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我が愛喜・適意の者を先に未だ曾て侵惱せず、今侵惱せず、當

【三二】若しはの一文。衍文なるべし。

に侵惱せざるべし。若しは我愛喜・適意せざる者を先に未だ曾て利益せず、今利益せず、當に利益せざるに、是の如く、比丘の因緣なきに、便ち横に衆生を瞋り、比丘の衆生に於て心に障礙あり、清淨ならず、親近せず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生は先に未だ曾て侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我愛喜・適意の者を先に未だ曾て侵惱せず、今侵惱せず、當に侵惱せざるべし。若しは我愛喜・適意せざる者を今に未だ曾て利益せず、今利益せず、當に利益せざるべし。我は因緣無くして便ち横に衆生を瞋り、我は衆生に於て心に障礙あり、清淨ならず、親近せず、解せず。我若し衆生を瞋惱せば、則ち自らを損ずと爲す。他の已に我を損じて我若し還て報ぜば、自らを損ずること甚しと。彼の比丘は是の如く思惟し已りて、衆生に於て堪忍して瞋惱心を除き、思惟して衆生を樂しみ、樂を知り、樂を解し、樂を受せしめむと欲す。如し比丘の若しは東方の衆生に於て瞋惱心を滅し、思惟して衆生をして樂しみ、樂を知り、樂を解し、樂を受せしめむと欲し、南・西・北方にて、衆生に於て瞋惱心を滅し、思惟して衆生をして樂しみ、樂を知り、樂を解し、樂を受せしめむと欲し、如し比丘の慈心を以て遍く一方を解して行じ、第二・第三・第四・四維・上・下の一切にも、慈心を以て廣大・尊勝・無二・無量・無怨・無瞋恚に遍く諸の世間を解して行ず。是を慈と名づく。

何をか悲と謂ふ。如し比丘の衆生の樂を思惟せず、樂を知らず、樂を解せず、樂を受せず。比丘の衆生の苦と受苦とを見、若しは父母・若しは兄弟・姉妹・妻子・親屬・知識・大臣・地獄・畜生・餓鬼、若しは人中の貧賤・鬼神中の貧賤にて、彼の衆生を憐みて悲心を起すなり。或は衆生有り、已に比丘を侵惱せるに、比丘は衆生に於て心に障礙あり、清淨ならず、親近せず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生は曾て我を侵惱せり。衆生は我を侵惱せりと雖も、我は應に彼を侵惱すべからず。我若し衆生を侵惱せば、〔p.635a〕則ち自らを損ずと[三三]爲す。他の已に我を損じて若し我、

【三三】爲す。宋元明三本には「是れ」に作る。

還て報ぜば自らを損ずること甚しと。彼の比丘は是の如く思惟し已りて、衆生に於て堪忍して瞋惱心を除滅し、衆生に於て憐愍して悲心を起す。或は衆生有り、先に未だ曾て比丘を侵惱せず、[三三]乃至因緣無くして横に瞋ること上に說く所の如し。如し比丘の若しは東方の衆生に於て瞋惱心を滅し、衆生に於て憐愍して悲心を起し、東・西・北方の衆生に瞋惱心を滅し、衆生に於て憐愍して悲心を起し、比丘の悲心を以て遍く一方を解して行ず。第二・第三・第四・四維・上・下の一切にも悲心を以て、廣大・尊勝・無二・無量・無怨・無恚に遍く諸の世間を解して行ず。是を悲と名づく。

何をか喜と謂ふ。如し比丘の衆生の樂を思惟せず、樂を知らず、樂を解せず、樂を受せず。比丘の衆生に於て憐愍を得ず、悲心を起さず。如し比丘の若しは衆生の快樂と受樂とを見、若しは父母・兄弟・姉妹・妻子・親屬・知識・大臣、若しは諸天、若しは諸天子、若しは佛、若しは佛弟子あるに、彼の衆生に於て悅喜を得欲染想に依らざるなり。或は衆生有り、已に曾て比丘を侵惱せるに、比丘は衆生に於て心に障礙あり、淸淨ならず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生は已に曾て我を侵惱せり。衆生は我を侵惱せりと雖も、我は應に彼を侵惱すべからず。我若し衆生を侵惱せば則ち自らを損ずと爲す。他の已に我を損じて、若し我還て報ぜば、自らを損ずること甚しと。彼の比丘は是の如く思惟し已りて、衆生に於て堪忍して瞋惱心を除滅し、衆生に於て悅喜を得、欲染想に依らず。或は衆生有り、先に未だ曾て比丘を侵惱せず、乃至、因緣無くして横に瞋ること上に說く所の如し。比丘の若しは東方の衆生に於て瞋惱心を除し滅、衆生に於て悅喜を得て欲染想に依らず。南・西・北方の衆生に於て瞋惱心を滅し、衆生に於て悅喜心を得て欲染想に依らず。比丘の喜心を以て遍く一方を解して行じ、第二・第三・第四・四維・上・下・一切にも、喜心を以て廣大・尊勝・無二・無量・無怨・無恚に遍く諸の世間を解して行ず。是を喜と名づく。

【三三】乃至。上の慈の場合同準のすべての型をここにもくりかへすべきを乃至する心。

何をか捨と謂ふ。如し比丘の衆生の樂を思惟せず、樂を知らず、樂を解せず、樂を受せず。憐愍を得ず、悲心を起さず。悅喜を得ず、欲染想に依らず。如し比丘の但（ただ）〔p.635b〕、衆生に縁るが故に捨を得るなり。人の叢林中に入りて此は是れ[三四]鉢多樹・[三五]尼居陀樹・[三六]毘梨叉樹・[三七]優頭披羅樹・家枝樹・加毘耶樹・若しは毘耶羅樹・家尼柯羅樹・彌陀樹・伊陀伽樹と分別せず。但、叢林を見て諸の樹を分別せざるが如く、是の如く、比丘も衆生の樂を思惟せず、樂を知らず、樂を解せず、樂を受せず。憐愍を得ず、悲心を起さず。悅喜を得ず、欲染想に依らず。但衆生に縁るが故に捨を得るなり。或は衆生有り、已に曾て比丘を侵惱せるに、比丘は衆生に於て心に障礙あり、清淨ならず、[三八]觀ぜず、解せず。比丘の是の如く思惟すらく、衆生は已に曾て我を侵惱せり。衆生は我を侵惱せりと雖も、我は應に侵惱すべからず。我若し衆生を瞋惱せば則ち自らを損ずと爲す。他の已に我を損じて若し我還て報ぜば、自らを損ずること甚しと。彼に於て比丘の是の如く思惟し已りて、衆生に於て堪忍して瞋惱心を除滅し、但、衆生に縁るが故に捨を得。或は衆生有り、先に未だ曾て比丘を侵惱せず。乃至因縁無くして横に瞋ること上に說く所の如し。如し比丘の若しは東方の衆生に於て瞋惱心を滅し、但、衆生に縁るが故に捨を得、南・西・北方の衆生に於て瞋惱心を除滅し、但、衆生に縁るが故に捨を得、如し比丘の捨心を以て遍く一方を解して行じ、第二・第三・第四・四維・上・下の一切にも但、捨心を以て廣大・尊勝・無二・無量・無怨・無恚に遍く諸の世間を解して行ず。是を捨と名づく。

――是を四無量と名づく。

何をか[三九]四無色定と謂ふ。(1)如し比丘の一切の色想を離れ、[四〇]瞋恚想を滅し、若干想も思惟せずして無邊空處を成就して行ず。(2)一切の空處を離れて識處を成就して行ず。(3)一切の識處を離れて不用處を成就して行ず。(4)一切の不用處を離れて非想非非想處を成就して行ず。――是を四無色定と

【三四】鉢多。? Pattra.
【三五】尼居陀。Nyagrodha. 居は四本には倶に作る。
【三六】毘梨叉。? Vṛkṣa
【三七】優頭披羅。? Udumbara = The tree ficus glomerata.
【三八】觀ぜず。宋元明宮の四本には上來諸文の如く「親近せず」に作る。
【三九】四無色定。四支道の第六、四無色定を明かす。集異門足論六（毘曇部一、p. 198 c）、法蘊足論八（同上三、p. 263 a）その他參照。
【四〇】瞋恚想。Pratigha saṃjñā. 前註參照。

名づく。

何をか[四一]四向道と謂ふ。向苦道難行・向苦道速行・向樂道難行・向樂道速行なり。

何をか[四二]向苦道難行と謂ふ。如し比丘あり、性として貪欲多く、性として瞋恚多く、性として愚癡多し。是の比丘の道を行ずるや、欲染を防ぐの故に、數（しばしば）、憂苦を受け、瞋恚を防ぐの故に數、憂苦を受け、愚癡を防ぐの故に數、憂苦を受く。是の比丘の〔p.635c〕聖五根は鈍行なり、何等か五なる。信根・精進・念・定・慧根なり。比丘の五根の鈍行の故に無間定を證し諸漏を盡くす。是を向苦道難行と名づく。

何をか[四三]向苦道速行と謂ふ。如し比丘あり、性として貪欲多く、性として瞋恚多く、性として愚癡多し。是の比丘の道を行ずるや、欲染を防ぐが故に數、憂苦を受け、瞋恚を防ぐが故に數、憂苦を受け、愚癡を防ぐが故に數、憂苦を受く。是の比丘の[四四]聖行の五根は利行なり。何等か五なる。信根・精進・念・定・慧根なり。比丘の五根の利行にして、速に無間定を證して諸漏を盡くす。是を向苦道速行と名く。

何をか[四五]向樂道難行と謂ふ。如し比丘あり、性として欲染少く、性として瞋恚少く、性として愚癡少し。是の比丘は欲染の少を緣とするが故に數、憂苦を受けず。瞋恚の少を緣とするが故に、數、憂苦を受けず。愚癡の少を緣とするが故に數、憂苦を受けず。是の比丘の聖五根は鈍行なり。何等か五なる。信根、精進・念・定・慧根なり。比丘は五根の鈍行にして無間定を證して諸漏を盡くす。是を向樂道難行と名づく。

何をか[四六]向樂道速行と謂ふ。如し比丘あり、性として貪欲少く、性として瞋恚少く、性として愚癡無し。是の比丘は行道して欲染のみを緣とするが故に數、憂苦を受けず。瞋恚の少を緣とするが故に數、憂苦を受けず。愚癡の少を緣とするが故に、數、憂苦を受けず。是の比丘の聖五根は最も

【四一】四向道。四支道の第七、四向道を明す。集異門足論等には四通行に作る。同七（毘曇部一、p. 221）、法蘊足論三、（同上三、p. 81 c）等參照。

【四二】向苦道難行。玄奘等は苦遲通行と。

【四三】向苦道速行。玄奘等は苦速通行と。

【四四】聖行。宋元明宮の四本には聖五根に作る。

【四五】向樂道難行。玄奘等は樂遲通行と。

【四六】向樂道速行。玄奘等は樂速通行と。

利行なり。何等か五なる。信根・精進・念・定・慧根なり。比丘は五根の利行にして無間定を證して諸の漏を盡くす。是を向樂道速行と名づく。

――是を四向道と名づく。

何をか[四七]四修定と謂ふ。[四八]世尊の説くが如き四修定なり。何等か四なる。(1)修定有り、親近し多く修學して現世の樂を得て行ず。(2)修定有り、親近し多く修學して知見を得。(3)修定有り、親近し多く修學して[四九]慧分別を得。(4)修定有り、親近し多く修學して漏盡を得と。

[五〇](1)何をか修定あり、親近し多く修學して現世の樂を得て行ずと謂ふ。如し比丘あり、欲・惡・不善法を離れ、離生の喜樂ある初禪を成就して行じ、覺・觀を滅し、内の淨信・一心あり、覺無く觀無く、定生の喜樂ある二禪を成就して行じ、喜を離れて捨を行じ、念・正・智あり、身に樂を受し、諸の聖人の、捨・念・樂を行ずと解する如き三禪を成就して行じ、苦と樂とを斷じ、先に憂と喜とを滅して不苦不樂の捨・念・淨ある四禪を成就して行ず。是の如きの修定に[p.636a]親近し多く修學せば現世の樂を得て行ず。

(2)何をか修定あり、親近し多く修學して知見を得と謂ふ。如し比丘あり、善く明想を取り、善く晝想を持し、[五一]比丘の晝、明想を修するが如く、夜も亦是の如く、夜、明想を修するが如く、晝も亦是の如くなれば、心の開悟するを以て心を覆蓋せず、心は修して明有り。此の定に親近し多く修學せば知見を得。

(3)何をか修定あり、親近し多く修學して慧・分別を得と謂ふ。如し比丘あり、受の生を知り、受の住を知り、受の滅を知り、想の生を知り、想の住を知り、想の滅を知り、覺の生を知り、覺の住を知り、覺の滅を覺するを知る。此の定に親近し多く修學せば慧・分別を得。

(4)何をか修定あり、親近し多く修學して漏盡を得と謂ふ。如し比丘あり、五受陰の生滅を知る

【四七】四修定。四支道の第八、四修定を釋す。集異門足論七(毘曇部一、初版、P. 222ff)、法蘊足論八(同上、三、P. 208ff)その外參照。

【四八】世尊等。A. 4,141 (2, P. 44) ;D. 33,4,5=大集法門經4,21 (四三摩地想) その外を見よ。

【四九】慧分別。巴には正念・正知 (Sati-Sampajañña)と記す。

【五〇】何をか等。法蘊足論の同準の解 (毘曇部三、P. 208ff) と對照すべし。

【五一】比丘の等。法蘊足論同前の文を參照せよ。今の文中には誤譯少からざるなきか。

――色を知り、色の集を知り、色の滅の知り、受・想・行・識を知り、識の集を知り、識の滅を知る。此の定に親近し多く修學せば、漏盡を得。[五二]波羅延經に問ふ所の如し。――一切の欲想を斷じ、憂・惱を滅し、睡眠・遮・掉・悔を滅し、捨・念・淨ありて先に覺を滅し、覺を知り、解脫して無明を斷ずと。――是を四修定と名づく。

何をか[五三]四斷と謂ふ。戒斷・微護斷・修斷・知緣斷なり。

(1)何をか戒斷[五四]と謂ふ。如し比丘あり、眼に色を見て相を取せず分別して眼根を發せしめず、常に自ら攝して行じ、[五五]希望・世の憂惡・不善法に依ること莫し。眼根を愼護し、眼根戒を得。耳・鼻・舌・身・意――意に法を知りて相を取し分別して意根を起さしめず。常に自ら攝して行じ、希望・世の憂・惡・不善法に依ること莫し。意根を愼護し意根戒を得。是を戒斷と名づく。

(2)何をか[五六]微護斷と謂ふ。如し比丘あり、善相を取りて微護を生ず。若しは骨節、若しは腫胞、若しは靑瘀、若しは赤黑、若しは爛壞、離散なり。是の如く、善相を觀じて微護を生ず。是を微護斷と名づく。

(3)何をか修斷[五七]と謂ふ。如し比丘あり、[五八]念正覺を修して離欲に依り、無染に依り、滅愛に依り、――擇法正覺・進正覺・喜正覺・除正覺・定心覺――捨正覺を修して、離欲に依り、無染に依り、滅度に依る、是を修斷と名づく。

(4)何をか智緣斷[五九]と謂ふ。如し比丘あり、或は樹下・露處に在りて是の如く思惟すらく、身の不善・惡行の報は今世及び後世なりと。〔是の〕如くにして比丘は堪忍して身の惡行を斷じて身の善行を修す。口の不善・[六〇]惡行の報は今世及び後世なりと。〔是の〕如くにして比丘は堪忍して口の惡行を斷じ、口の善行を修す。意の不〔bp.636〕善・[六一]惡行の報は今世及び後世なりと。〔是の〕如くにして比丘は堪忍して意の不善行を斷じ意の善行を修す。是を智緣斷と名づく。

【五二】波羅延經等。實は波羅延所問經といふべし。現、Suttanipāta, v. Pārāyanavagga のことで、よく漢譯諸典にも引用せらるる所である。この偈も集異門足論七（毘曇部一、初版、p. 224）に引用せられ、その（註一五一）(p. 232 f.) に詳細釋出してゐきたれば參照のこと。

【五三】四斷。四支道の第九、四斷を明かす。雜31,20（大正2, p. 221 a)—ibid, 24 (ibid 2, p. 221 b);A.4,14,A.4,69;&c. 參照。

【五四】戒斷。巴、Saṃvarappadhāna.（雜阿含には律儀斷—その說明は前の四正斷同樣に作る。對檢せよ)。

【五五】希望以下。A. 4,14には「ここに比丘あり、眼に色を見已りて、相を取せず、隨相を取せず。何となれば、彼の眼根を攝護せずして住せば、昔の貪・憂・惡・不善法の隨起せむが故に。「故に」それの攝護に入り、眼根を護り、眼根に於て律儀を得」と。

【五六】微護斷。巴、Anurakkhaṇappadhāna（巴増一には第四とす)。雜阿含には隨護斷に作る。

(六二)戒・護・緣・修の斷は、　自性を如來と說く。
比丘あり、是の法を行ぜば、　一切の苦際を盡くす。
是を四斷智と名づく。

何をか(六三)五根と謂ふ。信根・進根・念根・定根・慧根なり。是を五根と名づく。(六四)五力も亦是の如し。

何をか(六五)五解脫處と謂ふ。謂く比丘あり、不放逸に勤念・正智・寂靜にして行ぜば、心の未だ解脫せざるは解脫を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。

何をか五と謂ふ。(1)若しは世尊の比丘の爲に法を說き、若しは師が說き若しは慧ある梵淨行者の說く。如來の說、若しは師、若しは慧ある梵淨行者の說に隨順——、聽き已りて法を受け、義を受く。法を受け、義を受け已りて悅を生ず。悅び已りて喜を生じ。喜び已りて身除を得。身除し已りて樂を受く。樂を受け已りて心定す。心の定し已りて如實に知見す。〔是の〕如く、比丘の不放逸に勤念・正智・寂靜にして行ぜば、心の未だ解說せざるは解脫を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。是を初解脫處と名づく。

(2)復次に比丘あり、世尊に非ず、師に非ず、慧ある梵淨行者の說く時に非ずして、先に聞法する所の如く、廣く讀誦して利に通ず。比丘の先に聞法する所の如く、廣く讀誦し利に通じて法を受け、義を受く。如し比丘の法を受け義を受け已りて悅を生ず。悅び已りて喜を生ず。喜び已りて身除を得。身除し已りて樂を受く。樓を受け已りて心定す。心の定し已りて如實に知見す。比丘の是の如く不放逸に勤念・正智・寂靜にして行ぜば、心の未だ解脫せざるは解脫を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。是を第二解脫處と名づく。

(3)復次に比丘の世尊に非ず、師に非ず、慧ある梵淨行者の說く時に非ず。先に聞く所の法を廣く

【五七】修斷。巴、Bhāvanappadhāna. 雜等も同字。（第三位）

【五八】念正覺。巴、Sātisambojjhaṅga.

【五九】智緣斷。巴、Pahānappadhāna. 雜等には斷斷と記す（雜は第二位に作る）。

【六〇】惡。宋元明の三本によりて補入。

【六一】惡行。大正本等、行惡と記するも、宋元明の三本に從って改め讀む。

【六二】戒等。雜31,24（大正99, 879）參照。記しく曰く、斷斷と律儀斷と隨護と修習斷と比四種の正斷は正覺の所說なり。比丘の勤方便せば、諸の漏を盡くすことを得——A 4,14 (2, p. 17) には記すらく、戒と斷と修、隨護と、此等四正斷は日種の說く所なり。比丘のそれらによつて正勤せば苦の盡を得——。

【六三】五根。五支道の第一を明かす。集異門足論十四（毘曇部二、p. 87）等參照。

【六四】五力。同上第二を釋す。同上參照。

【六五】五解脫處。五支道の第三を釋す。集異門足論一三（毘曇部二、初版、p. 77 f）等參照。

讀誦して利に通ずる。時にも非ず。如し比丘の先に聞く所の法に通利して廣へ他が爲に說く。如し比丘の隨つて彼の聞く所の法に通利し、廣く他の爲に說いて法を受け、義を受く。比丘の法を受け、義を受け已りて悅を生ず。悅び已りて喜を生ず。喜び已りて身除を得。身除し已りて樂を受く。樂を受け已りて心定す。心の定し已りて如實に知見す。比丘の是の如く不放逸に勤念・[p.636c]正智・寂靜にして行ぜば、心の未だ解脫せざるは解脫を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは隱穩を得。是を第三解脫處と名づく。

(4)復次に、如し比丘あり、世尊に非ず、師に非ず、慧ある梵淨行者の說く時に非ず。先に聞く所の法を廣く讀誦して利に通ずる時に非ず。先に聞く所の法に通利して廣く他の爲に分別する時に非ず。如し比丘あり、先に聞く所の法に通利して自ら心に分別す。如し比丘の隨つて聞く所の法に通利し、自ら心に分別して法を受け、義を受く。比丘の法を受け、義を受け已りて悅を生ず。悅び已りて喜を生ず。喜び已りて身除を得。身除し已りて樂を受く。樂を受け已りて心定す。心の定し已りて如實に知見す。比丘是の如く不放逸に勤念・正智・寂靜にして行ぜば、心の未だ解脫せざるは解脫を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざる安隱を得。是を第四解脫處と名づく。

(5)復次に、比丘あり、世尊に非ず、師に非ず、慧ある梵淨行者の說く時に非ず。先に聞く所の法を廣く讀誦して利に通ずるの時に非ず。先に聞く所の法に通利して廣く他の爲に分別する時に非ず。先に聞く所の法に通利して自ら心に分別するの時に非ず。如し比丘あり、善く定相を取りて善く思惟し、善く解射す。比丘善く[六六]定想を取りて善く思惟し、善く解射し已りて法を受け、義を受く。法を受け、義を受け已りて悅を生ず。悅び已りて喜を生ず。喜び已りて身除を得。身除し已りて樂を受く。樂を受け已りて心定す。心の定し已りて如實に知見す。比丘あり、是の如く不放逸に

【六六】定想。想は相の寫誤ならむ。

勤念・正智・寂靜にして行ぜば、心の未だ解脱せざるは解脱を得、諸漏の未だ盡きざる漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。是を第五解脱處と名づく。――是を五解脱處と名づく。

[六七]五出界は[六八]界品に說くが如し。

云何が[六九]五觀定なる。正信經の如し。舍利弗の佛に白して言く、世尊よ復、無勝法有り。世尊の說法の如くに定に入りて觀ず。(1)世尊よ此の入定觀有り。或は沙門・婆羅門有りて勤めて精進し、勇猛に正思惟し、多く學して行じ、心に如法に思惟して入定し、入定し已りて身を觀じ、頂より足に至り、足より頂に至り、乃薄皮に至るまで皆、是れ不淨なりと。是を初の入定觀と名づく。

(2)復次に、或は沙門・婆羅門有り、勤めて精進し勇猛に正思惟し、多く學して行じ心に如法に思惟して入定し、入定し已りて皮血肉を觀ぜず、但、人骨を觀ず[p. 637a]、此の身中に骨・齒・爪有りと。是を第二の入定觀と名づく。

(3)復次に、或は沙門・婆羅門有り、勤めて精進し、勇猛に正思惟し、多く學して行じ、心に如法に思惟して入定し、入定し已りて皮・血・肉・骨を觀ぜず、但、人の識を觀ず、――識、此の世に住す、他の世に住す、識未だ斷ぜず、二世を離れずと。是を第三の入定觀と名づく。

(4)復次に、或は沙門・婆羅門有り、勤進し、勇猛に正思惟し、多く學して行じ、心に如法に思惟して入定し、入定し已つて皮・血・肉・骨を觀ぜず、復、人の識を觀ず、――識、此の世に住せず、他の世に[七〇]住す。識、此の世を斷離す、未だ他の世を斷離せずと。是を第四の入定觀と名づく。

(5)復次に、或は沙門・婆羅門有り、勤進し、勇猛に正思惟し、多く學して行じ、心に如法に思惟して入定し、入定し入定し已りて[七一]內の血・肉・皮・骨を觀ぜず、復、人の識を觀ず、――識は此の世に住せず、他の世に住せず、識は善く二世を斷離すと。是を第五入定觀と名づく。

是の如きは無勝の入定觀にして、世尊善知無勝にして、世尊は善く通達して能く過ぐる者有るこ

【六七】五出要界。五支道の第四を明かす。

【六八】界品。卷七―毘曇部十九、p. 214 f. を見よ。

【六九】五觀定。五支道の第五を明かす。

【七〇】住す。大正本等には「住せず」に作るも、宋元明宮の四本に照して正す。

【七一】內の等。同前四本には上文同樣に「皮・血・肉・骨」に作る。

と無し。我が意の知る所の如くむば、或は沙門・婆羅門有りて、[七二]能く世尊の知に出づと稱すれば、是の處(ことわり)有ること無し。是を分五入定觀と名づく。

何をか[七三]五起解脫法と謂ふ。世尊の說くが如し、――五法に親近し、多く修學し已りて解脫を得。何をか五と謂ふ。如し比丘の身の不淨想を觀じ、食不淨想を觀じ、諸行無常想を觀じ、世の不樂想を觀じ、身の死想を觀ずるなり。是の如きの五法に親近し多く修學せば、能く解脫を得。是を五起解脫法と名づく。

云何が[七四]六念なる。念佛乃至念天なり。(1)何をか念佛と謂ふ。佛を以て境界と爲し、善を念じて順にして逆ならざる、是を念佛と名づく。(2)何をか念法と謂ふ。法を以て境界と爲し、善を念じ、順にして逆ならざる、是を念法と名づく。(3)何をか念僧と謂ふ。僧を以て境界と爲し、善を念じて順にして逆ならざる、是を念僧と名づく。(4)何をか念戒と謂ふ。戒は謂く身口の戒なり。戒を以て境界と爲して善を念じて順にして逆ならざる、是を念戒と名づく。(5)何をか念施と謂ふ。施に二種有り。財施・法施なり。施を以て境界と爲し、善を念じて順にして逆ならざる、是を念施と名づく。(6)何をか念天と謂ふ。[七五]若し摶食を過ぎたる化生天なり。彼の天は宿業を觀ぜず。宿業を分別せず。――天を以て境界と爲し、善を念じて順にして逆ならざる、是を念天と名づく。――是を六念と名づく。

[p. 637b]・[七六]六空は[七七]空三昧〔中〕に說くが如く、[七八]六出界は[七九]界品に說くが如し。

何をか[八〇]六明分法と謂ふ。世尊の說くが如し、六法に親近し多く修學せば明を生じ明分を得、能く明をして廣大ならしむと。何をか六と謂ふ。無常想・無常苦想・苦無我想・食不淨想・一切世間不樂想・死想なり。

(1)何をか無常想明分法と謂ふ。如し、比丘の或は樹下・露處にて是の思惟を作さく、色は無常な

【七二】能く等。宋元明の三本には「能く世尊の知る勝(稱の代り)出すとは」を作る。
【七三】五起解脫法。五支道の第六を明す。D. 33, V, 18; 長部衆集經五、十二、A. 5,62 (3, p. 76 f); A. V, 72 (3, p. 85 f); 集異門足論十三(毘曇部二、p. 75 ff)その外參照。(但、集異門足論のは稍〻異がある。對檢すべし)。集異門足論には五成熟解脫想、衆集經には五趣解脫想、巴、Pañca vimutti Paripācaniyā Saññā.
【七四】六念。六支道の第一を明かす。集異門足論十六(毘曇部二、p. 130 ff)等參照。
【七五】若し。宋元明宮の四本には「名づく」に作る。
【七六】六空。六支道の第二を明かす。
【七七】空三昧。本卷の初の方を見よ。
【七八】六出界。六支道の第三を明かす。集異門足論十五(毘曇部二、p. 114 ff)參照。
【七九】界品。毘曇部十九、p. 215 f を見よ。
【八〇】六明分法。六支道の第四を明かす。集異門足論十六(同前二、p. 129ff)等を見よ。(六順明分想に作る)。

り。受・想・行・識は無常なりと。若し是の如く五受陰の無常を觀じて行ず。世尊の說くが如し、有爲法は、[八一]三相あり、生・住・滅なりと。是の如く比丘の生・住・滅を思惟して、調心し、修して柔軟ならしむ。柔軟より已りて色の無常・受・想・行・識の無常を思惟し行ずる人の若しは想・憶想・是を無常想と名づけ、親近して多く修學し、親近して多く修學し已りて明を生じ明を得、明分を得、能く明をして廣大なしむ。是を無常想明分法と名づく。

(2)何をか無常苦想明分と謂ふ。如し、比丘あり、或は樹下・露處に在りて是の如く思惟すらく、色は無常なり。若し無常なるは則ち是れ苦なり。受・想・行・識は無常なり。若し無常なるは則ち是れ苦なりと。是の如く、五受陰にて苦を觀じて行ず。世尊の說くが如し、若しは色の生・住せば則ち是れ苦を生じ、病有り、老死有り。若し受・想・行・識の生・住せば卽ち是れ苦を生じ、病有り、老死有りと。復次に世尊の說くが如し、[八二]三苦あり、行苦・苦苦・變易苦なり。何をか行苦と謂ふ。五受陰の行は自性苦形あり、或は苦の自相苦あり。是を行苦と名づく。何をか苦苦と謂ふ。五受陰の行は自性として苦にして、生・等生・起・等起・出・等出・具足・成就して種種の病を生ず。――熱に因りて病を生じ、痰癊に因り、風に因り、過力に因り、他が惱に因り、時の變に因り、諸大の相違に因り、食飮の不消に因り、宿業の報に因り、諸大の不調に因りて病を生ず。眼病・耳鼻舌身病を生じ、頭痛・面痛、口・齒・咽痛、胸痛の病を生じ、蛇身病・呼[八三]唶痛・瞽欬病・嘔吐病を生じ、[八四]絞病・身熱腹痛病を生じ、癬胞・疥瘙・微風・侵婬・瘡・癰・蛆・白癩・乾枯・癲狂病を生じ、痔病・癖下赤腫・虫食病等を生じ蚤・[八五]蜋・虱・蚊・虻・蟻子――此の身乃至一毛處として虫有らざる無し。人の癰腫上に毒腫を生ずるが如く、五受陰の行は性として苦なるも[p. 637c]是の如く、生・等生・起・等起・出・等出・具足・成就して種種の病を生ず――熱に因りて病を生じ、乃至、一毛處として虫有らざる無し。是を苦苦と名づく。(3)何をか[八六]變易苦と謂ふ。如し五受陰の行は轉變・衰熱・壞敗・盡滅・終沒・離滅す。是を變易

【八一】三相。有爲の三相・四相(今の三に異を加ふ)に關しては異論がある。今の論は三相論者として著目すべし。

【八二】三苦。集異門足論五(毘曇部一、初版、p. 140 b)等參照。

【八三】唶。宋元明には唧に作り、宮には唶痛を唶病に作る。

【八四】絞。宋元明三本には疞に作る。

【八五】蜋。宋元明宮四本には壁に作る。

【八六】變易苦。集異門足論等には壞苦。

苦と名づく。——如し比丘あり、彼の行苦・苦苦・變易苦に於て、調心し修して柔軟ならしめ、柔軟にして已りて色苦を思惟し、受・想・行・識苦を思惟する、[八七]如し行人の若しは想・憶想、是を無常苦想と名づけ、親近し、多く修學せば明を生じ、明を得、明分を得、能く明をして廣大ならしむ。是を無常苦想明分法と名づく。

(3)何をか苦無我想明分法と謂ふ。如し比丘あり、樹下・露處に在りて、是の如く思惟すらく、色は無常なり。若し無常なるは卽ち是れ苦なり。若し苦なるは卽ち無我なり。受・想・行・識は無常なり。若し無常なるは卽ち是れ苦なり。若し苦なるは卽ち是れ無我なり、と。若しは此の想に於て、五受陰に無我を觀じて行ず。世尊の說くが如し、色は無我なり。色の若しは是れ我ならば、色は應に苦患を受けざるべく、色は應に自在を得べし、——是の如く有れ、是の如く有ること非ざれと。色の我に非ざるを以ての故に、色は苦患を受け、色は自在を得ず、——是の如く有れ、是の如く有ること非ざれと。受・想・行・識は無我なり。受・想・行・識の若し是れ我ならば、識は應に苦患を受くべからず、識は應に自在を得べし、——是の如く有れ、是の如く有ること非ざれと。如し比丘の是の如く調心し修して柔軟ならしめ柔軟ならしめ已りて色は無我なり、受・想・行・識は無我なりと思惟する如し行人の若しは想・憶想、是を苦無我想と名づけ、親近し多く修學せば、明を生じ、明を得、明分を得、能く明をして廣大ならしむ。是を苦無我想明分法と名づく。

(4)何をか食不淨明分法と謂ふ。何等か[八八]食なる。食に四種有り。謂く摶食・觸食・思食・識食なり。[八九]世尊の說くが如し、衆生は四種の食有り。此の食を食せば、能く衆生をして住せしめ、能く陰を和合せしめ、能く利益[九〇]有りと。何等か四なる。一には謂く摶食、二には觸食、三には思食、四には識食なり。何等をか摶食と謂ふ。摶食に二種有り。麁と細となり。何をか麁と謂ふ。天の淨食と天の香食とを除き、衣服・澡浴・調身食を除く[九一]若し餘の摶食、是を麁の摶食と名づく。何をか細の

【八七】如し。前にも如實人の語があつたが、ここも如行人と訓ずるを可とするかも知れぬ。下もすべて同ず。

【八八】食。集異門足論一（毘曇部一、初版、Ｐ 40 中）等參照。

【八九】世尊。同上中を見よ。

【九〇】有りと。集異門足論中の引文に準じ、暫くここまでを經文として讀む。

【九一】若し。大正本には「苦」に作るも、誤刷で、縮刷等は今の如く作る。

食と謂ふ。天の淨食・天の香食・衣服澡浴調身食、是を細の摶食と名づく。復次は、麁の摶食とは天の香食を除き、衣服・澡浴食を除く〔p. 638a〕若し餘の摶食、是を麁の摶食と名づく。復次に、細摶食とは天の香食・衣服澡浴調身食、是を細の摶食と名づく。何をか觸食と謂ふ。六觸――眼觸、耳・鼻・舌・身意觸、是を觸食と名づく。何をか思食と謂ふ。[九二]六思身――色思、聲・香・味・觸・法思、是を六思身と名づけ、是を思食と名づく。何をか識食と謂ふ。六識身――眼識、耳・鼻・舌・身・意識、是を六識身と名づけ、是を識食と名づく。摶食には或は是食あり、或は非食あり。觸・思・識食にも或は是食あり、或は非食あり。何をか摶食の是食と謂ふ。若し摶食を緣として諸根の增長を得て損壞せず、壽を減ぜざる、是を摶食の[九三]是食と名づく。云何が摶食の非食なる。若し摶食を緣とし諸根の增長せずして損壞し、壽を減ずる、是を摶食の非食と名づく。何をか觸・思・觸食の是食と謂ふ。若し識食を緣として諸根の增長して損壞せず、壽を減ぜざる、是を識食の是食と名づく。何をか識食の非食と謂ふ。若し識食を緣として諸根の增長せず、損壞して壽を減ずる、是を識食の非食と名づく。比丘は摶食を受くること、子の肉を食らふが如く、不淨想を觀じ、觸・思・識食も〔然く〕、解射想有り、依を滅し、欲染を離るゝことを思惟する如し行人の若し想・憶想、是を食不淨想と名づけ、親近し多く修學し已りて明を生じ、明を得、明分を得、能く明をして廣大ならしむ。是を食不淨想明分法と名づく。

(5)何をか一切世間不樂想明分法と謂ふ。如し比丘あり一切の世間に於て厭離して樂はず。地獄世・畜生世・餓鬼世・人世・天世・衆生世・行世を厭離して樂はず。如し比丘の、此の世間に於て取心有る者は、必ず所見に執す。如し比丘の斷離して是の如き諸見を受せさる如し行人の若しは想・憶想、是を一切世間不樂想と名づけ、親近し多く修學し已りて明を生じ、明を得、明分を得、能く明をして廣大ならしむ。是を一切世間不樂想明分法と名づく。

【九二】六思身。この六思身を集異門足論十五、(毘曇部二、p. 108) 等のそれに對比せよ。
【九三】是。宋元明宮の四本により補入。

(6)何をか死想明分法と謂ふ。如し比丘あり、或は樹下、露處に在りて是の如く思惟すらく、我は是れ死法にして死の過患有り。若しは餘の衆生も亦死法有り、死の過患有り。若しは地獄・畜生・餓鬼・人天及び一切の衆生も生死を往來し、衆生と名づくることを得る者は皆、死法有り、死の過患有りと。比丘の陰の壞して身を捨することを思惟し、死を憶〔p. 638〕念し、比丘の死を思惟して死を知り、死を辨し、死を覺する如し、行人の若しは想・憶想、是を死想と名づけ、親近し多く修學し已りて明を生じ、明を得、明分を得、能く明をして廣大ならしむ。是を死想明分法と謂ひ、是を六明分法と謂ふ。

何をか[九五]六悦因法と謂ふ。如し比丘あり、(1)悦び已りて(2)喜を生じ、喜び已りて(3)身除を得、身除し已りて(4)樂を受け、樂を受け已りて(5)心定し、心の定し已りて(6)如實に知見する、是を六悦因法と名づく。

何をか[九六]無喜六正覺と謂ふ。念正覺乃至、捨正覺是を無喜六正覺と名づく。

何をか[九七]七正覺と謂ふ。念正覺乃至捨正覺、是を七正覺と名づく。

何をか[九八]七想と謂ふ。世尊の說く亦如し、七想あり、親近し多く修學せば大功德を得、甘露に至ることを得。何をか七と謂ふ。(1)不淨想・(2)食厭想・(3)一切世間不樂想・(4)死想・(5)無常想・(6)無常苦想・(7)苦無我想なりと。不淨想に親近し多く修學せば、多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得と謂ふは、何の緣を以ての故にか是の說を作す。如し比丘の心に不淨想を知り分別し、欲心をして退沒して展ぜず。當に漸漸に除盡せしめ、背捨・厭離し已りて正住すること、筋の如く、鳥の羽の如く、[九九]頭羅草を火中に投ぜば燋捲して展ぜず、後に便ち消盡するが如く、比丘も是の如く、心に不淨想を知り分別して欲心をして退沒して展ぜず、後に便ち消盡せしめ、背捨・厭離し已りて正住す。如し比丘の或は心に不淨想を知り分別すること有るも、心の欲想に於て猶、津漏

【九五】六悦因法。六支道の第五を明かす。

【九六】無喜の六正覺。六支道の第六を明かす。

【九七】七正覺。七支道の第一を所謂七覺分し明かす（正の字、四本によりて補入）。集異門足論十六、（毘曇部二、p. 142 ff.）法蘊足論八（同上三、p. 217 ff.）等參照。

【九八】七想。七支道の第二を明かす。(D. 33, XII, 8; 衆集經七、五。大集法門經七の三。A. VII, 45 (4, p. 46) その他を見よ。

【九九】頭羅草。〜Dūli (A Kind of potherb)。

を生じ、本の如くにして異無く、心の背捨せず、厭離せず、正住せされば、比丘は如實に自ら知る——我は便ち僞れ未だ不淨想を修せず、我は未だ異名色を增益せず、我は未だ果報を修するを得ずと。是の如く比丘は正智有り。如し比丘の心に不淨想を知り分別し、欲想に於て心に津漏を生ぜず、本に於て異有り、背捨厭離して正住するときは、比丘は如實に正知す、——我は已に不淨想を修し、我は名色を增益すること有り、我は果報を修するを得たりと。此の比丘は正智有りて、不淨想を行じ、親近し多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得。是の因緣を以ての故に說く。

一〇〇 (2)如し食不淨想に親近し多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得。

【一〇〇】如し以下。無想の第二、食厭想を釋す。

巻の第十七〔p.638c〕

非問分道品　第十【其の三】

[一]何の因を以ての故にか是の說を作す。如し比丘あり、心に食不淨想を知り分別せば、揣食に於て心の退沒して進まず、漸に當に除盡し背捨し厭離し已りて正住すべし。筋の如く、鳥の羽の如く、頭羅草の火中に投ぜば、燋捲して展ぜず、後に便ち消滅するが如く、比丘も是の如く、心に揣食不淨想を知り分別せば揣食淨想をして退沒して進ましめず、漸に當に除盡し背捨し厭離し已りて正住すべし。如し比丘あり、或は心に揣食不淨想を知り分別すること有りて、心の揣食に於て猶、津漏を生じ、本に於て異無く、心の背捨せず、厭離せず、正住せざれば、比丘は如實に自ら知る——我は便ち僞れ未だ揣食不淨想を修せず。我は未だ異名色を増益せず。我は未だ果報を修するを得ずと。是の如く比丘は正智有り。如し比丘あり、心に揣食不淨想を知り分別し、揣食に於て心の津漏を生ぜず、本に於て異有り。背捨し厭離して正住するとき、比丘は如實に正知す——我は已にして揣食不淨想を修せり。我は異名色を増益せること有り。我は果報を修することを得たりと。此の比丘、正智有り。〔是の如く〕揣食不淨想に親近し多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得。是の因緣を以ての故に說く。

如し一切世間不樂想に親近し多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得と。何の因緣を以ての故にか是の說を作す。如し比丘あり、心に一切世間不樂想を知り分別せば、世間の種種想は心に退沒して進まず、漸に當に除盡し背捨し、厭離し已りて正住すべし。筋の如く、鳥の羽の如く、頭羅草を火中に投ぜば、燋捲して展ぜず、後に便ち消滅するが如く、比丘も是の如く心に〔p.639a〕、一切世間の不樂想を知り分別せば、世間の種種想をして退沒して進ましめず、漸に當

[一] 何の等。七想の第一、不淨想の說明中の續き。

に除盡し背捨し厭離し已りて正住すべし。如し比丘あり、或は心に一切世間の不樂想を知り分別すること有りて世間の種種想の心に猶、津漏を生じ、本の如くにして異無く、背捨せず、「厭離せず、正住せざれば、比丘は如實に自ら知る——我は便ち僞れ未だ一切世間不樂想を修せず、我は未だ異名色を増益せず、我は未だ果報を修することを得ずと。是の如く比丘は正智有り。如し比丘あり、心に一切世間不樂想を知り分別して、世間の種種想に於て心に津漏を生ぜず、本に於て異有り、背捨し厭離して正住するとき、比丘は如實に正知す、——我は已に一切世間不樂想を修せり。我は異名色を増益せること有り。我は果報を修することを得たりと。此の比丘は正智有り。〔是の如く〕一切世間不樂想に親近し多く修學し、多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得。是の因緣を以ての故に說く。

如し死想に親近し多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得と。何の因緣を以ての故にか是の說を作す。如し比丘あり、心に死想を知り分別して、命根に倚恃し、而も自ら貢高し、命根を以て決定して堪忍して常住すとし、心の命根に貪著する、是の如きの盡く斷じて餘無し、如し比丘あり、或は心に死想を知り分別すること有りて、命根を倚恃し、自ら貢高して命根を以て決定堪忍して常住すとし、心の命根に貪著する、是の如きの未だ斷ぜずむば、比丘は如實に自ら知る——我は便ち僞れ未だ死想を修せず、我は未だ異名色を増益せず、我は未だ果報を修せずと。是の如く比丘は正智有り。如し比丘あり、心に死想を知り分別して命根を倚恃して自ら貢すること高く、命根を以て決定堪忍して常住すとし心の命根に貪著する、是の如きの盡く斷じて餘無きときは、如し比丘は如實に自ら知る——我は已に死想を修し、異名色を増益し、我は果報を得たりと。是の如く比丘は正智有り。〔是の如く〕死想に親近し多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得。是の因緣を以ての故に說く。

如し無常想に親近し多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得と。何の因緣を以ての故にか是の說を作す。如し比丘あり、心に無常想を知り分別して、利養・名譽・恭敬に於て心の退沒して進まずむば〔p. 639b〕漸に當に除盡し、背捨し厭離し已りて正住すべし。筋の如く、鳥の羽の如く、頭羅草を火中に投ぜば燋捲して展ぜず、後に便ち消盡するが如く、比丘も是の如く、心に無常想を知り分別し、利養・名譽・恭敬に於て心の退沒して進まずむば、漸に當に除盡し背捨し厭離し已りて正住すべし。如し比丘あり、或は心に無常想を知り分別すること有りとも、利養・名譽・恭敬に於て心の猶、津漏を生じて本の如く異無く、背捨せず、厭離せず、正住せずむば、比丘は如實に自ら知る――我は便ち爲れ未だ無常想を修せず、我は未だ異名色を增益せず、我は未だ果報を修することを得ずと。是の如く比丘は如實に自ら知る。如し比丘あり、心に無常想を知り分別して利養・名譽・恭敬に於て心に津漏を生ぜず、本に於て異有り、背捨し厭離して正住せば、比丘は如實に正知す、我は已に無常想を修し、我は異名色を增益すること有り、我は果報を修するを得たりと。比丘は正智・無常想有りて親近し多く修學し、多く修學し已つて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得。是の因緣を以ての故に說く。

如し無常苦想に親近し多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得と。何の因緣を以ての故にか、是の說を作す。如し比丘あり、心に無常苦想を知り分別せば、懈怠・竊惰・不信・放逸・不勤・不觀等に於て恐怖・大畏・切逼想を生ずること、死に臨んで刀を擧げ、無常苦想を觀ずるが如し。比丘あり、或は心に無常苦想を知り分別すること有るも、竊惰・懈怠・不信・放逸・不勤・不觀等に於て恐怖・大畏・切逼想を生ぜず、死に臨んで刀を擧ぐるが如くには非ざれば、如し比丘は如實に自ら知る――我は便ち爲れ未だ無常苦想を修せず、我は未だ異名色を增益せず、我は未だ果報を修することを得ずと。是の如く比丘は如實に自ら知る。如し比丘あり、[二]心に無常苦想を知り分別

【二】 心にの下。大正本等「則ち」の字を入るるも、宋・元・明・宮の四本によりて除く。

し、嬾惰・懈怠・不信・放逸・不勤・不觀等に於て恐怖・大畏・切逼想を生じ、死に臨んで、刀を擧げ、無常苦想を觀ずるが如きときは、如し比丘は如實に正知す、――我は[三]以に無常苦想を修し、我は異名色を增益し、我は果報を得たりと。此の比丘は正智有り。〔是の如く〕無常苦想に親近し多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得。是の因緣を以ての〔p.639c〕故に說く。

如し苦無我想に親近し多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得と。何の緣を以ての故にか是の說を作す。如し比丘あり、心に苦無我想を知り分別せば、諸の[四]有識身及び諸の外物に於て我・我所を計し、憍慢を生ずることを俱に離し、寂靜し、正解脫す。如し比丘あり、或は心に苦無我想を分別すること有るも、諸の有識身及び諸の外物に於て、我・我所を計し、憍慢を生じ、心の猶、離せず、寂靜せず、解脫せざれば、如し比丘は如實に自ら知る――我は便ち爲れ未だ苦無我想を修せず、未だ異名色を增益せず、我は未だ果報を修することを得ずと。是の如く比丘は如實に自ら知る。如し比丘あり、心に苦無我想を知り分別して、諸の有識身及び諸の外物に於て、我・我所を計し、憍慢等を生ずることを、心の俱に離し、寂靜し、正解脫せば、是の如く比丘は如實に知る。――我は已に苦無我想を修し、我は異名色を增益し、果報を修することを得たりと。此の比丘は正智有り。〔是の如く〕苦無我想に親近し多く修學し已りて大果報を得、大功德を得、甘露に至ることを得。是の因緣を以つての故に說く。――是を七想と名づく。

何をか[五]七定因緣法と謂ふ。正見・正覺・正語・正業・正命・正進・正念、是を七定因緣法と名づく。

何をか[六]八聖道と謂ふ。正見乃至正定、是を八聖道と名づく。

何をか[七]八解脫と謂ふ。(1)色の色を觀ずる解脫、是を初解脫と名づく。(2)內に色想無くして外色を觀ずる、是を第二解脫と名づく。(3)淨解脫、是を第三解脫と名づく。(4)一切の色想を離れ、瞋恚想を滅し、若干想を思惟せずして無邊空處を成就する、是を第四解脫と名づく。(5)一切の空處を離れ、

【三】以に。同上の四本には「已に」に作る。

【四】有識身。巴、Saviññāṇaka Kāya.

【五】七定因緣法。七支道の第三を明かす。集異門足論十六、七定具（毘曇部二、p. 147 ff）參照。

【六】八聖道。八支道の第一と釋す。集異門足論十八部、法蘊足論六、聖諦品中（毘曇部三、p. 169 ff）、品類足論八（同上五、p. 223 ff）その他參照。

【七】八解脫。八支道の第二を釋す。集異門足論十八（毘曇部二、p. 198 ff）、品類足論七（同上五、p. 217 ff）その外參照。

無邊識處を成就して行ずる、是を第五解脫と名づく。(6)一切の識處を離れて無所有處を成就する、是を第六解脫と名づく。(7)一切の無所有處を離れて非想非非想處を成就する、是を第七解脫と名づく。(8)一切の非想非非想處を離れて滅受想行を成就する、是を第八解脫と名づく。

(1)[八]何をか色の色を觀ずるを初解脫と謂ふ。如し比丘あり、內の色想を滅せずして外の色想を取り、比丘の外の色を以て心を調し修して柔軟ならしめ、修して柔軟ならしめ已りて色解脫を得。如し比丘あり、心に[p.140a]外の色想を知り分別して心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て解脫す。

何をか色と謂ふ。如し比丘あり、未だ內の色を分別せず、未だ滅せず、沒せず、除かざる、是を色と名づく。

何をか觀と謂ふ。若しは外色を眼識を以て曾見し、如實見し、微見し、緣見し、意識を以て分別し、如實に分別し、微分別し、緣分別する、是を觀と名づく。

何をか初と謂ふ。八解脫の次の順にして逆ならず、次を以て定して行ずるに、是れ初、是れ始、是れ前なれば、是を初と名づく。

何をか解脫を得と謂ふ。心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て解脫を爲す、是を解脫と名づく。

(2)何をか內に色想無くして外色を觀ずる第二解脫と謂ふ。如し比丘あり、內の色想を滅し已りて外の色相を取り、外の色を以て心を調し、修して柔軟ならしめ、修して柔軟ならしめ已つて解脫を得。[九]如し比丘あり、心に外の色相を知り分別して、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て解脫す。

何をか內に色想無しと謂ふ。如し比丘あり、內の色想を分別し、滅・沒・除し已る、是を內に色想

【八】何をか以下。また前出二阿毘達磨中の論釋を參照すべし。

【九】如し。大正本には知に作るも縮藏等すべて如に作る。

無しと名づく。

何をか觀と謂ふ。若し外の色を眼識を以て曾見し、如實見し、微見し、緣見し、意識を以て分別し、如實に分別し、微分別し、緣分別する、是を觀と名づく。

何をか第二と謂ふ。八解脫の次を以てし、順にして逆ならず、次を以て入定して行じ、第二と初と中間有ること無ければ、是を第二と名づく。

何をか解脫と謂ふ。心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て解脫を得る、是を解脫と名づく。

(3)何をか第三淨解脫と謂ふ。如し比丘あり、一の淨色相を取る――若しは[一〇]火相、[一一]日・月・星・宿・摩尼珠・七寶宮殿・綵色衣被・華果・金・銀・銅、環琉璃・眞珠・珂貝・珊瑚・玉石及び餘の寶性なり。比丘は是の諸の淨色相を取り已りて淨解脫を得。比丘は心に淨色相を知り分別して心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て解脫を爲す。

何をか淨と謂ふ。諸の色の好にして、展轉して相照し、適意にして、觀じて厭無き是を淨と名づく。

何をか解と謂ふ。心の彼に向ふ。是を[一二]解脫と名づく。

何をか第三と謂ふ。八解脫の次を以てし、順にして逆ならず、次を以て入定して行ずるに、第三と二と、中間有ること無き、是を第三と名づく。

何をか解脫と謂ふ。心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て解脫する、是を解脫と名づく。

(4)何をか一切の色想を離れ、瞋恚想を滅し、若干の想を思惟せずして[p. 640b]無邊空處を成就して行ずる第四解脫と謂ふ。

【一〇】火相等。集異門足論の文と對照せよ。

【一一】日・月等。毘曇部二、p. 229 その外の已註參照のこと。

【一二】解脫。宋・元・明・宮の四本には脫の字無し。

何をか色想と謂ふ。若し眼識相應の想なる、是を色想と名づく。

何をか瞋恚想と謂ふ。若し忿怒相應の想なる、是を瞋恚想と名づく。

何をか若干想と謂ふ。若し外の穢濁にして善分想に非ざる、是を若干想と名づく。

復次に色想とは若し色界の想及び眼識相應の想を離れざる、是を色想と名づく。

復次に瞋恚想とは若し五識身相應の想及び忿怒相應の想、是を瞋恚想と名づく。

復次に若干想とは若し諸の衆生・諸の物・諸の境界・諸の清淨・諸の煩惱、是を若干想と名づく。

〔是の〕如きが比丘あり、一切の色想を離れ、瞋恚想を滅し、若干想を思惟せざるなり。

如し比丘あり、身中の孔――若しは耳孔・鼻孔・口門、飲食の入處・飲食の住處・飲食の出處――にて空を思惟し、空を知り、空を解し、空を受す。如し比丘あり、身の飲有りて猶、蒜皮の如くなるを知り、思惟して漸に薄ならしめ、薄を知り、薄を解し、薄を受し、思惟して漸に破散せしめ、破散を知り、破散を解し、破散を受す。是の如く比丘は內の色想を知り已る。若しは外物中の孔、――若しは地中の孔穴・井・窖・坑谷・坎窟――にて空を思惟し空を知り空を解し、空を受す。如し比丘あり、內・外の色想を分別し已つて空處の空靜を觀じ、無邊の空を思惟し、無邊の空を知り、無邊の空を解し、無邊の空を受する、[三]如し行人の若しは想・憶想、是を空處想と名づけ、此の想の定と共生し共住し共滅する、是を空處定に入ると名づく。

復次に比丘あり、大地及び須彌山に火聚の想を作し、烟を思惟し、烟を知り、烟を解し、烟を受し、然を思惟し、然を知り、然を解し、然を受し、燒を思惟し、燒を知り、燒を解し、燒を受し已りて、比丘の無邊の空處の寂靜・勝なるを思惟し、無邊の空處を思惟し、無邊の空處の寂靜・勝なるを知・解・受する如し行人の若しは想・憶想、是を空處想と名づけ、此の想の定と共生・共住・共滅する、

【三】如し。或は如行人とも讀むべし。前卷中の註參照。

是を入空處定と名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、若しは現世の欲想・未來の欲想、現世の色想・未來の色想——此の想は麁にして空處の想は寂靜・勝・微細・善淨なりと。比丘の無邊空處の寂靜・勝なる處を思惟し、無邊空處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を空處想と名づけ、此の想の定と共生・共住・共[p. 640c]滅する、是を入空處定と名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、現世の欲想・未來の欲想、現在の色想・未來の色想——此の想は麁にして、但、無邊空處のみ永く滅して餘無く、寂靜・勝なりと。比丘の無邊空處の寂靜を思惟し無邊空處を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を空處想と名づけ、此の想の定と共生・共住・共滅する、是を入空處定と名づく。

何をか第四と謂ふや。八解脫の次を以てし、順にして逆ならず、次を以て入定して行ずるに、第四と三と、中間有ること無き、是を第四と名づく。

何をか解脫と謂ふ。心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て解脫する、是を解脫と名づく。

(5)何をか一切の空處を離れ、無邊の識處を成就して行ずる、是れ第五解脫なりと謂ふ。如し比丘あり、是の如く思惟すらく、我は已に無邊の空處を成就して行ず。頗し法の無邊空處に勝る有りや不やと。比丘の便ち是の念を作さく、唯、空處の行有りて人の大器を以て小器を覆ふが如しと。是の如く思惟すらく、此の器は彼の器に勝る。此の器は何の因を以ての故に勝るや。我此の器を以て彼の器に覆ふが故なりと。如し比丘の是の如く思惟すらく、我は已に遍く無邊空處を解して行ず。頗し法の無邊空處に勝る有りや不やと。比丘の便ち是の念を作さく、唯、識の無邊空處の行に勝る有り。識は何の因を以ての故に勝るや。我識を以て遍く無邊空處を解するが故なりと。如し比丘の

無邊識處の寂靜を思惟し、無邊識處の寂靜を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を識處想と名づけ、此の想の定と共生・共住・共滅する、是を入識處定と名づく。

復次に比丘の是の如く思惟すらく、若しは現在の欲想・未來の欲想・現在の色想・未來の色想・空處の想等の麁にして、識處の想は寂靜・勝なりと。比丘の無邊識處の寂靜・勝を思惟し、無邊識處の寂靜勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を識處想と名づけ、此の想の定と共生・共住・共滅する、是を入識處定と名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、若しは現在の欲想・未來の欲想・現在の色想・未來の色想・空處の想等は但識處に永く滅して餘無く、唯、識處のみ寂靜・勝なりと。如し比丘の無邊識處の寂靜・勝を思惟し無邊識處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の〔p. 641a〕若しは想・憶想、是を識處想と名づけ、此の想の定と共生・共住・共滅する、是を入識處定と名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、無邊空處は麁に入り、無邊識處は寂靜・勝・微細・善淨に入ると。如し比丘の無邊識處の寂靜・勝を思惟し、無邊識處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を識處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を入識處定と名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、若しは空處定の麁に入り、若しは識處定の寂靜・勝・微細・善淨に入ると。如し比丘の無邊識處の寂靜・勝を思惟し、無邊識處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を識處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を入識處定と名づく。

何をか第五と謂ふ。八解脫の次を以てし、順にして逆ならず、次を以て入定して行ずるに、第五と四と中間有ること無し。是を五と名づく。

何をか解脫と謂ふ。心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て解脫する、是を解脫と名

づく。

(6)何をか一切の識處を離れ、無所有處を成就して行ずる、是れ第六解脫なりと謂ふ。如し比丘あり、是の如く思惟すらく、我は已に遍く無邊識處を解して行ず。頗し法の無邊識處に勝る有りや不やと。比丘の便ち是の念を作さく、唯、[一四]識無所有處の勝る有りと。如し比丘の無所有處の寂靜・勝を思惟し、無所有處の寂靜・勝を知・解・受する如し行人の若しは想・憶想、是を無所有處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を無所有處定に入ると名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、我は我が所有に非ず。我所は我が有に非ずと。〔是の〕如く比丘の無所有處の寂靜・勝を思惟し、無所有處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の想・憶想、是を無所有處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を無所有處定に入ると名づく。

復次に比丘あり、一切の世間の空を觀じ、世間を空じ已りて想の依止處無し。〔是の〕如く比丘の無所有處の寂靜・勝を思惟し、無所有處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を無所有處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を無所有處定に入ると名づく。

復次に比丘あり、大〔p. 641b〕地・須彌山を以て火聚の想を作し、烟を思惟し烟を知・解・受し、然を思惟し然を知・解・受し、燒を思惟し燒を知・解・受して燒し已りて、比丘の無所有處の寂靜・勝を思惟し無所有處[一五]想の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を無所有處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を無所有處定に入ると名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、若しは現在の欲想・未來の欲想・現在の色想・未來の色想・空處想・識處想――此の想は麁にして無所有處は寂靜・勝・微細・善淨なりと。如し比丘の無所有處の寂靜・勝を思惟し無所有處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を無所有處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を無所有處定に入ると名づく。

【一四】識。衍字か。

【一五】想。また衍字か。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、若しは現在の欲想・未來の欲想・現在の色想・未來の色想・空處想・識處想は[一六]餘無く、寂靜・勝なりと。如し比丘の無所有處の寂靜・勝を思惟し無所有處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、〔是を無所有處想と名づけ〕、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を無所有處定に入ると名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、無邊空處は麁に入り、識處は麁に入り、無所有處は寂靜勝・微細・善淨に入ると。如し比丘あり、無所有處の寂靜・勝を思惟し無所有處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を無所有處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を無所有處定に入ると名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、若しは空處定・識處定の麁なるに入り、若しは無所有處定の寂靜・勝・微細・善淨なるに入り、如し比丘の無所有處の寂靜・勝を思惟し無所有處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を無所有處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を無所有處定と名づく。

何をか第六と謂ふ、八解脫の次を以てし、順にして逆ならず、次を以て入定して行ずるに、第六と五と中間有ること無き、是を六と名づく。

何をか解脫と謂ふ。心の、彼に向ひ、彼を尊上し、彼を傾向し、彼を以て解脫する、是を解脫と名づく。

(7)何をか一[p. 641c]切の無所有處を離れ、非想非非想處を成就して行ずる、是れ第七解脫なりと謂ふ。如し比丘あり、是の如く思惟すらく、想は是れ我が過患なり、想は是れ癰瘡なり、想は是れ我が箭なり。非想非非想處は寂靜・勝なりと。比丘の非想非非想處の寂靜・勝を思惟し、非想非非想處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を非想非非想處想と名づけ、此の想と定

【一六】餘無く。前の識無邊處下の同準の文下を參照せよ。「――想は無所有處には永く滅して餘無く、無所有は寂靜・勝なり」とあるべきなり。

と共生・共住・共滅する、是を非想非非想處定に入ると名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、若しは現在の欲想・未來の欲想・現在の色想・未來の色想・空處想・識處想・無所有處想等は麁にして、非想非非想處想は寂靜・勝・微細・善淨なりと。比丘の非想非非想處の寂靜・勝を思惟し、非想非非想處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を非想非非想處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を非想非非想處定に入ると名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、若しは現在の欲想・未來の欲想・現在の色想・未來の色想・空處想・識處想・無所有處想等は麁にして非想非非想處想は寂靜・勝・微細・善淨なりと。比丘の非想非非想處の寂靜・勝を思惟し、非想非非想處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を非想非非想處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を非想非非想處定に入ると名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、若しは現在の欲想・未來の欲想・現在の色想・未來の色想・空處想・識處想・無所有處想は但、非想非非想處に永く滅して餘無く寂靜・勝なりと。比丘の非想非非想處の寂靜・勝を思惟し非想非非想處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を非想非非想處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を非想非非想處定と名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、若しは無邊空處は「麁に」入り無邊識處は「麁に」入り、無所有處は麁に入り、非想非非想處は寂靜・勝・微細・善淨に入ると。比丘の非想非非想の寂靜・勝を思惟し、非想非非想處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を非想非非想處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を非想非非想處定に入ると名づく。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、若しは無邊空處定の〔麁に〕入り、若しは識處定の〔麁に〕入り、若しは無所有處定の麁に入り、若しは非想非非想處は寂靜・勝・微細・善淨なりと。比丘の非想非非想處の寂靜・勝を思惟し〔p. 642a〕非想非非想[一七]處の寂靜・勝を知・解・受する如し、行人の若しは想・憶想、是を非想非非想處想と名づけ、此の想と定と共生・共住・共滅する、是を非想非非想處定に入ると名づく。

何をか第七と謂ふ。八解脫の次を以てし、順にして逆ならず、次を以て入定して行ずるに、第七と六と中間有ること無き、是を七と名づく。

何をか解脫と謂ふ。心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て解脫する、是を解脫と名づく。

(8)何をか一切の非想非非想處を離れ、滅受想定を成就する、是れ第八解脫なりと謂ふ。如し比丘あり、戒に依し、戒に住し、二法――定・慧を增修し、定・慧に依して受・想を滅し、若し受・想なる、是を滅盡定と名づく。

復次に比丘あり、觸證勝想に住す。觸證勝想に住するの時、是の如く思惟すらく、我は猶、惡を思ふ有りて便ち善を思ふこと無し。我(わが)思有らば則ち作有り。作有らば則ち樂想有りと爲す。樂想有らば則ち餘地の麁想の生ずる有りと。比丘の是の如く思惟すらく、若し我思無ければ作無し。作無くなり已らば則ち樂想生ぜず。樂想生ぜざれば、餘地の麁[一八]想も亦生ぜずと。如し比丘の思惟無ければ作無く、作無くなり已らば則ち樂想滅し、樂想滅すれば餘地の麁想も亦滅し、滅盡定を觸證することを得るなり。

何をか第八と謂ふ。〔八〕解脫の次あり、順にして逆ならず、次を以て入定して行ずるに、第八と七と中間有ること無き、是を〔第〕八と名づく。

【一七】處。宋・元・明・宮の四本によりて補入。

【一八】想。大正本には相とあるも、縮藏等は想に作る。今改め讀む。

何をか解脫と謂ふ。心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て解脫する、是を解脫と名づく。——是を八解脫と名づく。

云何が[一九]八勝入なる。(1)內に色想ありて外色を觀ず、好色・非好色なり。勝知・勝見あり、如是想有り。(2)內に色想あり、外色の無量を觀ず。好色・非好色なり。勝知・勝見あり、如是想有り。(3)內に色想無く、外色の少を觀ず。好色・非好色なり。勝知・勝見あり、如是想有り。(4)內に色想無く、外色の無量を觀ず。好色・非好色なり。勝知・勝見あり、如是想有り。(5)內に色想無く、外色の青・青色・青光を觀ず。[二〇]優摩華の青・青色・青光なるが如く、[二一]波羅㮈衣の善染なるが青・青色・青光なるが如く、是の如き妙色の青・青色・青光を觀じ、勝知・勝見あり、如是想有り。(6)內に色想無く、外色の黃・黃色・黃光なるを觀ず。[二二]迦尼伽羅華の黃・黃色・黃光なるが如く、波羅㮈の善染衣の黃・黃色・黃光なるが如く、是の如き妙色の[p. 642b]黃・黃色・黃光なるを觀じ、勝知・勝見あり、如是想有り。(7)內色想無く、外色の赤・赤色・赤光なるを觀ず。[二三]槃頭華の赤・赤色・赤光なるが如く、波羅㮈の善染衣の赤、赤色・赤光なるが如く、是の如き妙色の赤・赤色・赤光・なるを觀じ、勝知・勝見あり、如是想有り。(8)內に色想無く、外色の白・白色・白光なるを觀ず。[二四]鹵土星の白・白色・白光なるが如く、波羅㮈の善浣衣の白・白色・白光なるが如く、是の如き妙色の白・白色・白光なるを觀じ、勝知・勝見あり、如是想有り。

[二五](1)何をか「內に色想ありて外色の少を觀ず。好色・非好色なり。勝知・勝見あり、如是想有り」と謂ふ。謂く比丘の未だ內の色想を滅せずして外の少色の好色・非好色・適意・不適意・可惡・不可惡なるを取り、比丘の外の少色を以て心を調へ、修して柔軟ならしめ、修して柔軟ならしめ已りて色の勝解脫を得、比丘の外の少色を知見・分別し、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て勝解するなり。

【一九】八勝入。八支道の第三を釋す。集異門足論十九（毘曇部一、p. 210 ff）品類足論七（同上五、p. 219 ff）その外參照。

【二〇】優摩華。Umakapuṣka—集異門足論同前參照。

【二一】波羅㮈。Vārāṇaseya.——同上。

【二二】迦尼伽羅。Karṇikāra.——同前參照。

【二三】槃頭華。Bandhujīvaka-puṣka.——同前參照。

【二四】鹵土星。集異門足論同前には烏沙斯星（梵、Uśanas-tārakā）。

【二五】何をか等。品類足論七——毘曇部五、p. 219 ff）參照。今の釋の方が詳し。

何をか內に色想ありと謂ふ。比丘の未だ內の色想を滅せず、不滅・不沒・不除なる、是を內の色想と名づく。

何をか外色を觀ずと謂ふ。若し外の少色を眼識もて會見し、如實見し、緣見し、意識の分別し、如實分別し、緣分別する、是を外色を觀ずと名づく。

何をか少と謂ふ。若し計る可き數量の無邊・無量に非ず、[26]阿僧祇に非ず、無邊無際に非ざる、是を少と謂ふ。

何をか好色・非好色と謂ふ。淨・不淨、是を好色・非好色と名づく。

何をか勝知・勝見ありと謂ふ。彼の勝解、是を勝知・勝見と名づく。

何をか如是想有りと謂ふ。若しは分散せず、相離せざる一向の少色想有る、是を如是想有りと名づく。

(2)何をか內に色想ありて外色の無量を觀ず。好色・非好色なり。勝知・勝見あり、如是想有りと謂ふ。謂く、比丘の少色想を滅せずして、外の無量の色想を取る。好色・非好色、適意・非適意、可惡・不可惡なり。比丘の彼の外の無量色を以て心を調へ、修して柔軟ならしめ、修して柔軟ならしめ已りて色の勝解を得、比丘の外の無量色を知見・分別して心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼に於て勝解あるなり。

何をか內に色想ありと謂ふ。比丘の未だ內の色想を滅せず、未だ沒せず、未だ除かざる、是を內に色想[27]ありと名づく。

何をか外色を觀ずと謂ふ。若し外の無量の色を眼識もて會見し、如實見し、緣[p.642c]見し、意識の分別し、如實分別し、緣分別する、是を外色を觀ずと名づく。

何をか無量と謂ふ。少に非ず、稱量す可きに非ず、無邊・無量・阿僧祇・無邊・無際なる、是を無量

【二六】阿僧祇。Asaṃkhyn or Asaṃkheyn. 無數のこと。

【二七】あり。大正本等「無し」に作る。宋元明宮の四本によって改む。

と名づく。

何をか好色・非好色と謂ふ。若し淨・不淨なる、是を好色・非好色と名づく。

何をか勝知・勝見ありと謂ふ。若し彼の法に於て、勝受し已りて知見し分別する、是を勝知・勝見ありと名づく。

何をか如是想有りと謂ふ。若しは想の分散せず、相離せず、一定の無量色想ある、是を如是想有りと〔二八〕謂ふ。

(5)何をか內に色想無くして外色の青・青色・青光なるを觀じ、若し是の色に於て勝知見あり、如是想有りと謂ふ。如し比丘の內の色想を滅し已りて外の青色想を取り、比丘の外の青色を以て心を調へ、修して柔軟ならしめ、柔軟にし已りて色の勝解を得、比丘の外の青色を知見・分別し、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼に於て勝解あるなり。

何をか內に色想無くと謂ふ。內の色想の滅・沒・除する、是を內に色想無くと名づく。

何をか外色を觀ずと謂ふ。若し外の青色を眼識もて曾見し、如實見し、緣見し、意識の分別し、如實分別し、緣分別する、是を外色を觀ずと名づく。

何をか青と謂ふ。青に二種有りて性として青なると染めて青なると有り。是を青と名づく。

何をか勝知見ありと謂ふ。若し彼の色に於て勝受し已りて知見・分別し、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼に於て勝解ある、是を勝知見ありと謂ふ。

何をか如是想有りと謂ふ。若しは想有りて分散せず、相離せず、一定の青想有る、是を如是想有りと名づく。

(6)何をか內に色想無くして外色の黃・黃光なるを觀じ、是の色に於て勝知見あり、如是想有りと謂ふ。如し比丘の內の色想を滅して外の黃色想を取り、比丘の外の黃色を以て心を調へ、修して柔軟

【二八】謂ふ。この下、第三、第四兩勝入の解說を脫す。蓋し逸脫か、それとも、上文に準知し得との理由にて略述せるか。

ならしめ、柔軟にし已りて黄の勝解を得、比丘の外の黄色を知見・分別し、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼に於て勝解あるなり。

何をか內に色[二九]想無くと謂ふ。比丘の內の色想を滅・沒・除する、是を內に色想無くと名づく。何をか外色を觀ずと謂ふ。若し外の黄色を眼識もて曾見し、如實見し、緣見し、意識の分別し、如實分別し、緣分別する、是を外色を觀ずと名づく。

何をか黄と謂ふ。黄に二種有りて、性として黄なると染めて黄なると有り。是を黄と謂ふ。何をか勝知見ありと謂ふや。若し彼の色に於て勝受し已りて知見・分別し、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾〔p. 643a〕向し、彼に於て勝解ある、是を勝知見ありと名づく。

何をか如是想有りと謂ふ。若し想有りて分散せず、相離せず、想の一定して黄なる、是を如是想有りと謂ふ。

(7)何をか內に色想無くして、外色の赤・赤光を觀じ、若し是の色に於て勝知見あり。如是想有りと謂ふ。如し比丘の內の色を滅し已りて外の赤色の想を取り、比丘の外の赤色を以て心を調へ、修して柔軟ならしめ、柔軟にし已りて比丘の赤の勝解を得、比丘の赤色を知見・分別して心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼に於て勝解あるなり。

何をか內に色想無くと謂ふ。比丘の內の色想を滅・沒・除する、是を內に色想無しと謂ふ。何をか外色を觀ずと謂ふ。若し外の赤色を眼識もて曾見し、如實見し、緣見し、意識の分別し、如實分別し、緣分別する、是を外色を觀ずと謂ふ。

何をか赤と謂ふ。赤に二種有りて、性として赤き有り、染めて赤き有り。是を赤と名づく。何をか勝知見ありと謂ふ。若し彼の色に於て、勝受し已りて知見・分別し、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼に於て勝解ある、是を勝知見ありと謂ふ。

【二九】想。宋元明宮の四本により補入。

何をか如是想有りと謂ふ。若し想有りて分散せず、相離せず、一定して赤なる、是を如是想有りと名づく。

(8)何をか內に色想無くして外色の白・白光なるを觀じ、若し是の色に於て勝知見あり、如是の想有りと謂ふ。如し比丘の內の色想を滅して外の白色想を取り、比丘の外の白色を取りて心を調へ、修して柔軟ならしめ、柔軟にし已りて白の勝解を得、比丘の白色を知見・分別し、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼に於て勝解あるなり。

何をか內に色想無くと謂ふ。比丘の內の色を滅・沒・除する、是を內に色想無くと謂ふ。

何をか外色を觀ずと謂ふ。若し外の白色を眼識もて曾見し、如實見し、緣見し、意識の分別し、如實分別し、緣分別する、是を外色を觀ずと名づく。

何をか白と謂ふ。白に二種有りて、性として白なると染めて白なると有り。是を白と名づく。

何をか勝知見ありと謂ふ。若し彼の色に於て勝受し已りて、知見・分別し、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼に於て勝解ある、是を勝知見ありと名づく。

何をか如是想有りと謂ふ。若し想有りて分散せず、相離せず、一定の白色なる、是を如是想ありと謂ふ。——是を[三〇]八勝處と名づく。

(1)何をか[三一]九滅と謂ふ。(1)若し初禪定に入れば言語を刺滅す。(2)若し二禪定に入れば、覺・觀を刺滅す。(3)若し三禪定に入れば、喜を刺滅す。(4)若し[p.643b]四禪定に入れば、出息・入息を刺滅す。(5)若し空處定に入れば、色想を刺滅す。(6)若し識處定に入れば、空處を刺滅す。(7)若し無所有處定に入れば、識處を刺滅す。(8)若し非想非非想定に入れば無所有處を刺滅す。(9)若し滅盡定に入れば受想を刺滅す。——是を九滅と名づく。

何をか[三二]九次第定と謂ふ。(1)如し比丘の欲・惡・不善法を離れ覺有り、觀有り、離生の喜樂ある初

【三〇】八勝處。前には八勝入と記す。

【三一】九滅。九支道の第一を釋す。——cf. A. IX. 31 (4, p. 409); D. 33, IX, 6; D. 34, 2, 2(×); vo.

【三二】九次第定。九支道の第二を釋す。c. f. 33, IX, 5; A. IX. 32 (4, p. 410); D. 34, 2, 2 (IX.); vo.

禪を成就して住す。乃至、(9)非想非非想處を離れ滅受想定を成就す。是を九次第定と名づく。

何をか[三三]九想と謂ふ。(1)不淨想・(2)食厭離想・(3)一切世間不樂想・(4)死想・(5)無常想・(6)無常苦想・(7)苦無我想・(8)斷想・(9)離欲想、是を九想と名づく。

何をか[三四]十想と謂ふや。(1)不淨想・(2)食厭想・(3)一切世間不樂想・(4)死想・(5)無常想・(6)無常苦想・(7)苦無我想・(8)斷想・(9)離欲想・(10)滅想[三五]、是を十想と名づく。

何をか[三六]十直と謂ふ。正見・正覺・正語・正業・正命・正進・正念・正定・正解脫・正智、是を十直と名づく。

何をか[三七]十一切入と謂ふ。(1)地一切入ありと。一想を以て上・下、縱廣・無二・無量なり。(2)水一切入・(3)火一切入・(4)風一切入・(5)青一切入・(6)黃一切入・(7)赤一切入・(8)白一切入・(9)空一切入・(10)識一切入ありと、一想を以て、上・下・縱廣・無二・無量[三八]なり。

(1)何をか地一切入ありと[三九]。一想を以て、上下・縱廣・無二・無量なりと謂ふ。――何を地と謂ふ。

[四〇]地は謂く地界・地大、是を地と名づく。

何をか[四一]一切と謂ふ。若し盡く餘の方便無き、是を一切と名づく。

何をか[四二]一と謂ふ、若し獨にして餘の界に非ざること、人の地一切入に入るが如き、是を一と名づく。

何をか[四三]想と謂ふ。若し想の分散せず、相離せず、一向に地想なる、是を想と名づく。

何をか[四四]上下・縱廣と謂ふ。上は謂く虛空、下は謂く地、縱廣は謂く四方にして、人の若しは上下縱廣に、皆地を思惟し地を知・解・受するが如き、是を上下・縱廣と名づく。

何をか[四五]無二・無量[四六]と謂ふ。上無二・下無二・縱廣無二・上無量・下無量・縱廣無量に二想無く、唯、地想有り、無量・無邊・阿僧祇・無邊・無際にして、地に於て異想無き、是を無量と名づく。

【三三】九想。九支道の第三を釋す。cf. A. IX. 16 (4, p. 387); D. 34, IX. 8,――
1, Asubhasaññā. (不淨想)
2, Maraṇa-s. (死想)
3, Āhāre paṭikkūla-s. (食厭想)
4, Sabbaloke anabhirata-s. (一切世間不可樂想)
5, Anicca-s. (無常想)
6, Anicce dukkha-s. (無常苦)
7, Dukkhe anatta-s. (苦無我想)
8, Pahāna-s. (斷想)
9, Virāga-s. (離欲想)

【三四】十想。巴 Dasa saññā ――十支道の第一を釋す。――cf. A. X. 56 (5, p. 105), A. X. 217 (5, p. 309) (A. X, 56 には別の十想といふもある)。

【三五】滅想。巴、Nirodha-saññā.

【三六】十直。Dasa Samattā ――十支道の第二を釋す。――A. X. 133 (5, p. 240)。その巴、梵語等は集異門足論二〇 (毘曇部二、p. 254 f.) 參照。

【三七】十一切入。Dasa Kasiṇāyatanāni――集異門足論十九 (毘曇部二、p. 221 f.)、品類足論八 (同上五、p. 227 f.) その他參照 (右兩典等には一遍處に作る)。

(2)何をか水一切入ありと。一想もて上下・縱廣なりと謂ふ。——何をか〔p. 643c〕[四七]水と謂ふ。水界・水大、是を水と名づく。

何をか一切と謂ふ。若し盡く餘の方便無き、是を一切と名づく。

何をか一と謂ふ。若し獨にして餘の界に非ざること、人の水一切入に入るが如き、是を一と名づく。

何をか想と謂ふ。若し分散せず、相離せず、一向に水想ある、是を想と謂ふ。

何をか上下・縱廣と謂ふ。上は謂く虛空、下は謂く地、縱廣は謂く四方にして、人の若しは上下・縱廣に皆、水を思惟し、水を知・解・受するが如き、是を上下・縱廣と名づく。

何をか無二・無量と謂ふ。上無二・下無二・縱廣無二・上無量・下無量・縱廣無量に二想無く、唯、水想有り、無量・無邊・阿僧祇・無邊無際にして、水に於て異想無き、是を無二・無量と名づく。

(3)何をか火一切入ありと。一想もて上下・縱廣なりと謂ふ。——

何をか[四八]火と謂ふ。火界・火大、是を火と名づく。

何をか一切と謂ふ。若し盡く餘の方便無き、是を一切と名づく。

何をか一と謂ふ。若し獨にして餘の界に非ざること、人の火一切入に入るが如き、是を一と名づく。

何をか想と謂ふ。若し分散せず、相離せず、一向に火想ある、是を想と名づく。

何をか上下・縱廣と謂ふ。上は謂く虛空、下は謂く地、縱廣は謂く四方にして、人の若し上下・縱廣に〔皆、火を思惟し、火を知・解・受するが〕如き、〔是を上下・縱廣と名づく〕。

何をか無二無量と謂ふ。上無二・下無二、縱廣無二、上無量、下無量、縱廣無量に二想無く、唯、火想有り、無量・無邊・阿僧祇・無邊・無際にして、火に於て異想無き、是を無二・無量と名づく。

(4)何をか風一切入ありと。一想もて上下・縱廣なりと謂ふ。——何をか[四九]風と謂ふ。風界・風大、是

【三八】なり。大正本等にはここに「知る」とつけ加ふるも、宋元明宮の四本により省く。
【三九】何をか以下。集異門足論十九(毘曇部二、p. 222ff)の釋參照。
【四〇】地。巴、Apthivi.
【四一】一切。Kṛtsnāṃ.
【四二】一。Eke.
【四三】想。Saṃjānate.
【四四】上下。Ūrdhvaṃ adhas.
【四五】無二。Advayaṃ.
【四六】無量。Apramāṇaṃ.
【四七】水。Ap.
【四八】火。Tejas.
【四九】風。Vāyu.

を風と名づく。

何をか一切と謂ふ。若し盡く餘の方便無き、是を一切と名づく。

何をか一と謂ふ。若し獨にして餘の界に非ざること、人の風一切入に入るが如き、是を一と名づく。

何をか想と謂ふ。若し分散せず、相離せず、一向に風想ある、是を想と名づく。

何をか上下・縱廣と謂ふ。上は謂く虛空、下は謂く地、縱廣は謂く四方にして、人の上下・縱廣に皆、風を思惟し、風を知・解・受するが如き、是を上下・縱廣と謂ふ。

何をか無二・無量と謂ふ。上無二・下無二・縱廣無二・上無量・下無量・縱廣無量に二想無く、唯、風想有り、無量・無邊・阿僧祇・無邊・無際にして、風に於て異想無き、是を無二・無量と名づく。

(5)何をか青一切入ありと。一想も上下・縱廣・無[p. 64a]二・無量なりと謂ふ。——[五〇]何をか青と謂ふ。青に二種有りて性としての青と染めての青となり。是を青と名づく。

何をか一切と謂ふ。若し盡く餘の方便無き、是を一切と名づく。

何をか一と謂ふ。若し獨にして餘に非ざること、人の青一切入に入るが如き、是を一と名づく。

何をか想と謂ふ。若し分散せず、相離せず、一向に青想ある、是を想と名づく。

何をか上下・縱廣と謂ふ。上は謂く虛空、下は謂く地、縱廣は謂く四方にして、人の上下・縱廣に皆、青を思惟し、青を知・解・受するが如き、是を上下・縱廣と謂ふ。

何をか無二・無量と謂ふ。上無二・下無二・縱廣無二・上無量・下無量・縱廣無量に二想無く、唯、青想有り、無量・無邊・阿僧祇・無邊・無際にして、青に於て異想無き、是を無二・無量と名づく。

(6)何をか黃一切入ありと。一想もて上下・縱廣・無二・無量なりと謂ふ。——何をか黃と謂ふ。黃に二種有りて性としての黃と染めての黃となり。是を黃と名づく。

【五〇】青。Nīla.

何をか一切と謂ふ。若し盡く餘の方便無き、是を一切と名づく。

何をか一と謂ふ。若し獨にして餘に非ざること、人の黃一切入に入るが如き、是を一と名づく。

何をか想と謂ふ。若し分散せず、相離せず、一向に黃想ある、是を想と名づく。

何をか上下・縱廣と謂ふ。上は謂く虛空、下は謂く地、縱廣は謂く四方にして、人の上下・縱廣に皆、黃を思惟し、黃を知・解・受するが如き、是を上下・縱廣と名づく。

何をか無二・無量と謂ふ。上無二・下無二・縱廣無二・上無量・下無量・縱廣無量に二想無く、唯、黃想有り、無量・無邊・阿僧祇・無邊・無際にして、黃に於て異想無き、是を無二・無量と名づく。

(7)何をか赤一切入ありと一想もて上下・縱廣・無二・無量なりと謂ふ。——何をか赤[五一]と謂ふ。赤に二種有りて性としての赤と染めての赤となり。是を赤と名づく。

何をか一切と謂ふ。若し盡く餘の方便無き、是を一切と名づく。

何をか一と謂ふ。若し獨にして餘に非ざること、人の赤一切入に入るが如き、是を一と名づく。

何をか想と謂ふ。若し分散せず、相離せず、一向に赤想ある、是を想と名づく。

何をか上下・縱廣と謂ふ。上は謂く虛空、下は謂く地、縱廣は謂く四方にして、人の上下・縱廣に皆、赤を思惟し、赤を知・解・受する、是を上下・縱廣と名づく。

何をか無二・無量と謂ふ。上無二・下無二・縱廣無二・上無量・下無量・縱廣無量に二想無く、唯、赤想有り、無[p. 644b]量・無邊・阿僧祇・無邊・無際にして、赤に於て異想無き、是を無二・無量と名づく。

(8)何をか白一切入ありと一想もて上下・縱廣・無二・無量なりと謂ふ。——何をか白と謂ふ。白に二種有りて、性としての白と染めての白となり。是を白と名づく。

何をか一切と謂ふ。若し盡く餘の方便無き、是を一切と名づく。

何をか一と謂ふ。若し獨にして餘に非ざること、人の白一切入に入るが如き、是を一と名づく。

【五一】赤。Lohita.

何をか想と謂ふ。若し分散せず、相離れず、一向に白想ある、是を想と名づく。
何をか上下・縱廣と謂ふ。上は謂く虛空、下は謂く地、縱廣は謂く西方にして、人の上下・縱廣に皆、白を思惟し白を知・解・受するが如き、是を上下・縱廣と名づく。
何をか無二・無量と謂ふ。上無二・下無二・縱廣無二・上無量・下無量・縱廣無量に二想無く、唯、白想有り、無量・無邊・阿僧祇・無邊・無際にして、白に於て異想無き、是を無二・無量と名づく。
(9)何をか空一切入ありと。一想もて上下・縱廣・無二・無量なりと謂ふ。何をか空[五二]と謂ふ。空に二種有りて、[五三]內の空界と外の空界となり。是を空と名づく。
何をか一切と謂ふ。若し盡く餘の方便無き、是を一切と名づく。何をか一と謂ふ。若し獨にして餘に非ざること、人の空一切入に入るが如き、是を一と名づく。
何をか想と謂ふ。若し分散せず、相離せず、一向に空想ある、是を想と名づく。
何を上下・縱廣と謂ふ。上は謂く虛空、下は謂く地、縱廣は謂く四方にして、人の上下・縱廣に皆、空を思惟し、空を知・解・受するが如き、是を上下・縱廣と名づく。
何をか無二・無量と謂ふ。上無二・下無二・縱廣無二・上無量・下無量・縱廣無量に二想無く、唯、空想有り、無量・無邊・阿僧祇・無邊・無際にして、空に於て異想無き、是を無二・無量と名づく。
(10)何をか識一切入ありと。一想もて上下・縱廣・無二・無量なりと謂ふ。——何をか識[五四]と謂ふ。六識身——眼識・耳・鼻・舌・身・意識身、是を識と名づく。
何をか一切と謂ふ。若し盡く餘の方便無き、是を一切と名づく。
何をか一と謂ふ。若し獨にして餘に非ざること、人の識一切入に入るが如き、是を一と名づく。
何をか想と謂ふ。若し分散せず、相離せず、一向に識想ある、是を想と名づく。
何をか上下・縱廣と謂ふ。上は謂く虛空、下は謂く地、縱廣は謂く四方にして、人の上下・縱廣に

【五二】空。Ākāśa.
【五三】內。Adhyātmika (ajjhattika) 我身の實體なるをいふ。
【五四】識。Vijñāna.

識を思惟し、識を知・解・受するが如き、是を上下・縱廣と名づく。

〔p. 644c〕何をか無二・無量と謂ふ。上無二・下無二・縱廣無二・上無量・下無量・縱廣無量に二想無く、唯、識想有り、無量・無邊・阿僧祇・無邊・無際にして、識に於て異想無き、是を無二・無量と名づく。

——是を十一切入と名づく。

何をか[五五]十一解脱入と謂ふ。[五六]陀舍長者の如し、阿難の所に詣り、稽首し畢りて却いて一面に坐し、尊者阿難に問うて言く、頗し一法有り、如し比丘の[五七]不放逸にして[五八]勤念・[五九]正智あり、寂靜にして[六〇]行ぜば、心の未だ解脱せざるは解脱を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ[六一]無上安隱を得ざるは安隱を得むや不やと。尊者阿難の陀舍長者に答へて言く、有るなりと。長者の問うて言く、何者か是なると。阿難の長者に謂ひて言く、(1)如し比丘あり、欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂ある初禪を成就して行ず。比丘の是の如く思惟すらく、此の定を[六二]正學・正生せり。若し一切を正學・正生し已りて、盡く是の無常滅法を知ると。比丘の如實に知見して、一切の諸漏を斷じ、心に解脱を得、未だ諸漏を斷ぜずと雖も、比丘は[六三]法欲・[六四]法樂を以ての故に、[六五]五下分煩惱を斷じ、[六六]彼に於て化生し般涅槃して[六七]此の世に還らず。長者よ、此は是れ一法にして、如し、比丘あり、不放逸にして勤念・正智あり、寂靜にして行ぜば、心の未だ解脱せざるは解脱を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。(2)復次に長者よ、如し比丘あり、覺・觀を滅して、[六八]內に正信・[六九]一心あり、覺無く、觀無く、定生の喜樂ある二禪を成就して行ず。比丘の是の如く思惟すらく、此の定を正學・正生せり。若し一切を正學・正生し已りて、盡く是の無常滅法を知ると。比丘は如實に知見して一切諸漏を斷じ、心に解脱を得。未だ諸漏を斷ぜずと雖も、比丘は法欲・法樂を以ての故に五下分煩惱を斷じ、彼(かしこ)に於て化生し、般涅槃して、此の世に還らず。長者よ、此は是れ一法にして、如し比丘あり、不放逸にして勤念・正智あり、寂靜にして行ぜば心の未だ解脱

【五五】　十一解脱入。十一支洹を釋す。——A. 11, XVII. (5, p. 342 註)參照。(四禪・四無量・初三無色をいふ)。
【五六】　陀舍。巴、Dasama.
【五七】　不放逸に。巴、Appamattassa.
【五八】　勤念。巴、Atāpino.
【五九】　正智あり以下。巴、pahitattassa to the one who is of resolute will.)と。
【六〇】　行ぜば。巴、viharato.
【六一】　無上安隱。巴、Anuttaraṃ yogakkhemaṃ.
【六二】　正學・正生。巴、Abhisaṅkhataṃ, abhisañcetayitaṃ.
【三】　法欲。巴、Dhammarāgena (inst.)
【六四】　法樂。巴、Dhammanandiyā. (inst.)
【六五】　五下分煩惱。集異門足論十二、(毘曇部二、p. 51ff)等參照。
【六六】　彼に於て等。巴、opapātiko hoti tattha parinibbāyī
【六七】　此の世に還らず。Anāvattidhammo tasmā lokā.

せざるは解脱を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。(3)復次に長者よ、如し比丘あり、喜を離れて捨行じ、念・正智あり、身に樂を受し、諸の聖人の捨・念・樂・行ずと解するが如き三禪を成就して行ず。比丘の是の如く思惟すらく、此の定を正學・正生せり。若し一切を正學・正生し已りて盡く是れ無常〔p.645n〕滅法なるを知ると。比丘は如實に知見して一切諸漏を斷じ、心に解脱を得、未だ諸漏を斷ぜずと雖も、比丘は法欲・法樂を以ての故に、五下分煩惱を斷じ、彼に於て化生し般涅槃して、此の世に還らず。長者よ此は是れ一法にして、如し比丘あり、不放逸にして勤念・正智あり、寂靜にして行ぜば、心の未だ解脱を得ざるは解脱を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。(4)復次に長者よ、如し比丘あり、苦と樂とを斷じ、先に憂と喜とを滅し、不苦・不樂にして捨・念・淨あるに四禪を成就して行ず。比丘の是の如く思惟すらく、此の定を正學・正生せり。若し一切を正學・正生し已りて盡く是れ無常滅法なるを知ると。比丘は如實に知見して一切諸漏を斷じ、心に解脱を得。未だ諸漏を斷ぜずと雖も、比丘は法欲・法樂を以ての故に、五下分煩惱を斷じ、彼に於て化生し、般涅槃して此の世に還らず。長者よ、此は是れ一法にして、如し比丘あり、不放逸にして勤念・正智あり、寂靜にして行ぜば、心の未だ解脱を得ざるは解脱を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。(5)[七〇]復次に長者よ、如し比丘あり、心を[七一]慈解心もて遍く一方を解して行じ、南・西・北方、四維・上・下の一切に慈解心あり、廣大・尊勝・無二・無量・無怨・無恚にして、遍く諸の世間を解して行ず。比丘の是の如く思惟すらく、此の慈解心を正學・正生せり。若し一切を正學・正生し已りて盡く是れ無常滅法なるを知ると。比丘は如實に知見して一切諸漏を斷じ、心に解脱を得。未だ諸漏を斷ぜずと雖も、比丘は法欲・法樂を以ての故に、五下分煩惱を斷じ、彼に於て化生し般涅槃して、此の世に還らず。長者よ、此は是れ一法にして如し比丘あり、不放逸にして勤念・正智あり、寂靜にして行ぜば、心の

(彼の世より還らず)。

【六八】 内に正信。巴、Ajjhattaṃ sampasādanaṃ.

【六九】 一心。巴、Cetaso ekodibhāvaṃ

【七〇】 復次に以下四無量心に約す。從つて巳註のそれ下參照のこと。

【七一】 慈解心。巴、Mettāsahagatena Cetasā (inst.)。

未だ解脫を得ざるは解脫を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。(6)復次に長者よ、如し比丘あり、悲心もて遍く一方を解し、南・西・北方・四維・上・下の一切に[七二]悲心あり、廣大・尊勝・無二・無量・無怨・無恚に遍く諸の世間を解して行ず。比丘の是の如く思惟すらく、此の悲解心を正學・正生せり。若し一切を正學・正生し已りて、盡く是れ無常滅法なるを知ると。比丘は如實に知見して、一切諸漏を斷じ、心に解脫を得。未だ諸漏を斷ぜずと雖も比丘は法欲・法〔p. 645b〕樂を以ての故に五下分煩惱を斷じ、彼に於て化生し、般涅槃して此の世に還らず。長者よ、此は是れ一法にして、如し比丘あり、不放逸にして勤念・正智あり、寂靜にして行ぜば、心の未だ解脫を得ざるは解脫を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。復次に長者よ、如し比丘あり、[七三]喜心もて遍く一方を解して行じ、南・西・北方・四維・上・下の一切に喜心あり、廣大・尊勝・無二・無量・無怨・無恚に遍く世間を解して行ず。比丘の是の如く思惟すらく、此の喜解心を正學・正生せり。若し一切を正學・正生し已りて、盡く是れ無常滅法なるを知ると。比丘は如實に知見して一切諸漏を斷じ、心解脫を得。未だ諸漏を斷ぜずと雖も、比丘は法欲・法樂を以ての故に、五下分煩惱を斷じ、彼に於て化生し般涅槃して、此の世に還らず。長者よ、此は是れ一法にして、如し比丘あり、不放逸にして勤念・正智あり、寂靜にして行ぜば、心に未だ解脫を得ざるは解脫を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。(8)復次に長者よ、如し比丘あり、[七四]捨心もて遍く一方を解して行じ、南・西・北方・四維・上・下の一切に捨心ありて廣大・尊勝・無二・無量・無怨・無恚に遍く世間を解して行ず。比丘の是の如く思惟すらく、捨解心を正學・正生せり。若し一切を正學・正生し已りて盡く、是れ無常滅法なるを知ると。比丘は如實に知見して一切諸漏を斷じ、心に解脫を得。未だ諸漏の斷ぜずと雖も、法欲・法樂を以ての故に、五下分煩惱を斷じ、彼に於て化生し、般涅槃して此の世に還らず。長者よ、此は是れ一法にして如し比丘あり、不放逸

【七二】悲心。宮本には前に準じて悲解心に作る。巴は Karuṇāsahagatena cetasā (inst.)

【七三】喜心。Muditāsahagatena cetasā (inst.)

【七四】捨心。巴、upekhāsahagatena Cetasā (inst)

にして勤念・正智あり、寂靜にして行ぜば、心の未だ解脱を得ざるは解脱を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。(9)復次に長者よ、如し比丘あり、[七五]一切の色想を離れ、瞋恚想を滅し、若干想をも思惟せずして、無邊空處を成就して行ず。比丘の是の如く思惟すらく、此の定に入りて正學・正生せり。若し一切を正學・正生し已りて盡く、是れ無常滅法なるを知ると。比丘は如實に知見して一切諸漏を斷じ心に解脱を得。未だ諸漏を斷ぜずと雖も、比丘は法欲・法樂を以ての故に、五下分煩惱を斷じ、彼に於て化生し、般涅槃して此の世に還らず。長者よ、此は是れ[p. 645c]一法にして、如し比丘あり、不放逸にして勤念・正智あり、寂靜にして行ぜば、心の未だ解脱を得ざるは解脱を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。復次に長者よ、如し比丘あり、一切の空處を離れて無邊識處を成就して行ず。比丘の如く思惟すらく、此の定に入りて正學・正生せり。若し一切を正學・正生し已りて、盡く是れ無常滅法なるを知ると。比丘は如實に知見して一切諸漏を斷じ心に解脱を得。未だ諸漏を斷ぜずと雖も、比丘は法欲・法樂を以ての故に、五下分煩惱を斷じ、彼に於て化生し、般涅槃して、此の世に還らず。長者よ、此は是れ一法にして、如し比丘あり、不放逸にして勤念・正智あり、寂靜にして行ぜば、心の未だ解脱を得ざるは解脱を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を得。(11)復次に長者よ、如し比丘あり、一切の識處を離れ、無所有處を成就して行ず。比丘の是の如く思惟すらく此の定に入りて正學・正生せり。若し一切を正學・正生し已りて、盡く是れ無常滅法なるを知ると。比丘は如實に知見して一切諸漏を斷じ心に解脱を得。未だ諸漏を斷ぜずと雖も、比丘は法欲・法樂を以ての故に、五下分煩惱を斷じ、彼に於て化生し、般涅槃して此の世に還らず。此は是れ一法にして如し比丘あり、不放逸にして勤念・正智あり、寂靜にして行ぜば、心の未だ解脱を得ざるは解脱を得、諸漏の未だ盡きざるは漏盡を得、未だ無上安隱を得ざるは安隱を[七六]得と。阿難の

【七五】一切以下。初三無色に關す。

【七六】得。この下、宋元明の三本には、更に「復次に、長者よ、如し比丘あり、一切無所有處を離れ、非想非非想處を成就して行ず。……」として、第十二解脱入を完く上同樣の文として記してゐる。これは修行從目その自身としては當然のことで、寧ろこの非想非非想處のみ、何うして省かれたか、その理由は惑はさるゝ所なるが、然し反面、十一解脱入といふ數字關係よりいへば、何といつても、この記あるは過剩といふべく、今の諸本の無之をもつて正とすべきならむ。

說き已りて、陀舍長者の言く、人の一[七七]寶藏を求めて十一寶藏を得るが如く、尊者阿難よ、我も亦是の如く、一解脱入を求めて、[七八]十一解脱入を得たり。尊者阿難よ、長者子の如し、舍に十一門有り、火の爲に燒かれ、猛焰、熾盛にして、長者と長者子とは意に出でむと欲するの時、諸門中に於て自在に出づることを得。尊者阿難よ、我も亦是の如し、十一法門中に於て、所欲の出處より意に隨て出づることを得。尊者阿難よ、如し[七九]邪見の婆羅門も猶、師の爲に財を求めて師を供養す。況や、正見を聞いて而も供養せざらむやと。時に陀舍長者は[八〇]毘耶離の衆僧[八一]波多離の衆僧に請じ、請じ已りて種種の餚饍を作り、以て衆僧に飯し、食の充足し已りて、我は履屧を以てし、或は白氎、萬張を以てして以て衆僧に施し、別に[八二]三衣及び好房舍を以て〔p. 646a〕阿難に奉上せり。——是を十一解脱入と名づく。

【七七】寶藏。巴、Nidhimukham (an excellent treasure)

【七八】十一解脱入。巴には Ekādasa amatadvārā（十一甘露門十一不死戸）と。

【七九】邪見の婆羅門。巴は、Aññatitthiya（諸の外道）と。

【八〇】毘耶離の。巴、Vesālikaṃ (acc.)

【八一】波羅離の。巴、Pāṭaliputtakaṃ (acc.)

【八二】三衣。巴、Ticivara. 佛教に相當正規の衣制で、（一）安陀衣、（二）鬱陀羅僧衣、（三）僧伽梨衣をいふ——以上、（一）は腰卷で、日本で常識的にいへば白衣又は俗人の着物、（二）は同じく衣または羽織、（三）は同じく袈裟（但、以上三を印度では皆、袈裟といふ）又はマントにもあてて解すべし。詳細は已に幾度か毘曇部第一—五中等に註しおきたれば參照のこと。

非問分煩惱品第十二【其の一】

一人の出世する有り、如來・無所著・等正覺なり。惡・不善法を斷じて諸の善法を生じ、苦法を斷じて樂法を得、諸漏を寂靜し、諸漏を滅し、諸の所作業を除き、能く寂靜・第一義・清涼を得、究竟を盡くし、究竟梵行あり、究竟安樂あり、苦際を究竟して涅槃を得。是の因緣を以ての故に、今當に諸の不善法門を集むべし。

(1)恃生・(2)恃姓・(3)恃色・(4)恃財・(5)恃貴・(6)恃尊勝・(7)恃豪族・(8)恃無病・(6)恃年壯・(10)恃命(11)恃功巧・(12)恃多聞・(13)恃辯才・(14)恃得利養・(15)恃得恭敬・(16)恃尊重・(17)恃備足・(18)恃師範・(19)恃戒・(20)恃徒衆・(21)恃黨侶・(22)恃長宿・(23)恃力・(24)恃神足・(25)恃禪・(26)恃無求・(27)恃知足・(28)恃獨處・(29)恃阿蘭若・(30)恃乞食・(31)恃糞掃衣・(32)恃我能離荒食・(33)恃一受食・(34)恃塚間・(35)恃露處・(36)恃樹下・(37)恃常端坐・(38)恃隨敷坐・(39)恃但三衣・(40)諛諂・(41)邪敬・(42)現相求利・(43)依使・(44)歎索・(45)以利求利・(46)我勝・(47)嗜味・(48)不護戒・(49)瞋相變・(50)忿尊敎・(51)違尊敎・(52)戾尊敎・(53)欺陵・(54)捶打・(55)斛斗欺・(56)稱欺・(57)財物欺・(58)傷・(59)害・(60)繫閉・(61)批摸・(62)侵奪・(63)故作・(64)長語・(65)横語・(66)輕謗・(67)迫惱・(68)欺善・(69)隱藏・(70)共畜・(71)好むで官事を説く・[二](72)世間事・(73)兵諍事・(74)鬪戰事・(75)大臣事・(76)車乘事・(77)婦女事・(78)華鬘事・(79)酒肉事・(80)婬欲事・(81)床臥事・(82)衣服事・(83)飮食事・(84)沽酒處事・(85)親里事・(86)若干〔p. 646b〕語(87)世間事を思惟す・(88)海事を説く・(89)法を知らず・(90)義を知らず・(91)時を知らず・(92)足るを知らず・(93)自身を知らず・(94)[三]衆生を知らず・(95)人を知らず・(96)勝劣人を知らず・(97)[四]如邪見・(98)邊見・(99)倒見・(100)求覓見・(101)求覓戒・(102)〔求覓道〕・(103)求覓戒道・(104)身見・(105)躁動・(106)自讃・(107)無信・(108)不覺・(109)慳惜・(110)面譽・(111)遮惜・(112)〔業を信ぜず〕・(113)業報を信ぜず・(114)毀施・(115)毀學・(116)自歎・(117)譽怨・(118)虛歎・(119)不自在・(120)屬

【一】 功。四本には工に作る。
【二】 世間事以下。また「好むで……を説く」を略する意。
【三】 如。衍字に非ざるか。
【四】 衆生。論釋下にも註せる如く、生の字は衍字。

他・(121)事他・(122)不怨憎・(123)怨憎・(124)沈没・(125)心悲・(126)不厭足・(127)不勤進・(128)不忍辱・(129)非威儀・(130)不受教・(131)悪知識に近づく・(132)悪親厚・(133)悪行を取す・(134)悪行・(135)怯弱者に親近す・(136)怯弱法を受す・(137)怯弱を知る・(138)怯弱法を持す・(139)不順の思惟・(140)怯弱道に親近す・(141)〔劣心〕・(142)亂心(143)喜諍・(144)寛禁戒・(145)敬邪法・(146)退善法・(147)掉・(148)嚴身・(149)險・(150)耐恥・(151)狂言・(152)不記・(153)外念・(154)隨愛喜・(155)自高・(156)毀他・(157)不敬・(158)不自卑・(159)不實敬・(160)難滿・(161)難養・(162)緩惰・(163)懈怠・(164)中退・(165)後善・(166)欲勤・(167)苦勤・(168)貪・(169)貪[五]勤纒・(170)惱・(171)悲・(172)苦・(173)憂念・(174)衆苦・(175)恐怖・(176)弱顔・(177)強顔・(178)疑惑・(179)無親・(180)善障礙・(181)不相可・(182)善妨・(183)邊實・(184)不親近・(185)近離・(186)卑下・(187)自強・(188)耐辱・(189)隨貪・(190)自舉・(191)自放・(192)無持・(193)離禪・(194)不悔・(195)含忿・(196)悋惜・(197)邪教・(198)諍訟・(199)非遜・(200)敬失・(201)災喜・(202)求失・(203)悲行・(204)求禪・(205)無益禪・(206)恩を知らず・(207)已恩を知らず・(208)輕毀・(209)瞋恚・(210)性惡・(211)剛強・(212)斷修學・(213)呵諫して反て責呵し已りて亂說し、横に瞋恚を生ず・(214)所呵を成ぜず・(215)呵して自ら明さず・(216)取身・(217)見身・(218)見餓・(219)舉身見憧・(220)憂身見・(221)求身見・(222)親近身見・(223)身慢見・(224)[六]遊戲・(225)惜身見・(226)我身見・(227)欲染・(228)共欲染・(229)悲・(230)不親・[七]增・(231)樂欲・(232)悕望・(233)不足重悕望・(234)究竟悕望・(235)不足・(236)不滿・(237)凝著灑散水の津流の如し、(378)愛支に沈没す。(379)能く苦を生ずるの本・(380)欲得嗜著・(381)燋渴・(382)居安・(383)堪忍・(384)塵瘖・(385)愛法・〔以上一法竟り〕、(1)失念・不正智・諸の根門を護らず・(2)食に足るを知らず・(3)無明・有愛・(4)有見・非有見・(5)欲漏・有漏(6)欲求・有求・(7)害戒・害見・(8)戒衰・見衰・(9)衰命・衰儀〔P. 646c〕・(10)衰行・〔?〕・(11)作惡不作善・(12)在家に親近す・出家に親近す・(13)二緣を以て欲染を生ず。二緣を以て邪見を生ず・(14)瞋恚・伺怨・(15)懷恨・燋熱・(16)嫉妬・慳惜・(17)幻變・多姦・(18)無慚・無愧・(19)矜高・諍訟・(20)貢高・放逸・(21)[八]慢・增上慢・[九]〔二法竟り〕、(1)內和合・外和合・內外

【五】勤。衍字なるが如し。

【六】遊戲惜身見。下の釋文を見ると、本來は遊戲身見、惜身見とあるべきもののやうであるから、今暫らく一一に讀む。

【七】增。宋元明宮の四本には憎に作る。

【八】二法。大正本等には本文中に取入れたるも、假に後代、支那にての挿入と見てかく作る。

【九】慢・增上慢。以上で、第十七卷終り。以下第十八卷。

合・(2)悕望・大悕望・惡悕望・(3)貪・惡貪・非法欲染・(4)三不善根・(5)三難伏・(6)三闇・(7)三荒・(8)三縛・(9)三動・(10)內の三垢・(11)內の三競・(12)內の三[一〇]怨・(13)內三網力・(14)內三害・(15)內三憎・(16)三毒・(17)三勝・(18)三闇聚・(19)三[一一]力・(20)復三・力有り、(21)三愛・(22)三不攝・(23)三惡行・(24)身三惡行・(25)意三惡行・(26)三不淨・(27)三不覺・(28)三不直・(29)三痰陰・(30)三欲・(31)三想・(32)三覺・(33)三求・(34)三火・(35)三[一二]熅・(36)三熯・(37)三炙・(38)三熱・(39)三燋・(40)三惡・(41)三有・(42)三漏・(43)三不輕・(44)三不軟・(45)三不除、〔二法竟り〕、(1)四流・(2)四[一三]扼・(3)四取・(4)四染・(5)口の四惡行・(6)四結・(7)四箭・(8)四識住處・(9)四緣あり愛を生ず。(10)四愛和合・(11)四惡道行・(12)四業煩惱・(13)四顚倒・(14)四怖・(15)復四怖有り、(16)復[一四]四怖有り・〔(17)復、四怖有り〕・(18)復四退轉有り〔四法竟り〕、(1)五欲・(2)五蓋・(3)五下分煩惱・(4)五上分煩惱・(5)五道・(6)五心荒・(7)五心縛・(8)五怖・(9)五[一五]怨・(10)五無間・(11)五犯戒・(12)五非法語・(13)五不樂・(14)五相憎(15)五瞋恨法・(16)五憂根法・(17)五嫉妬・(18)五緣にして・睡眠を生ず・(19)犯戒の五過患あり・(20)犯戒に緣者が故に復五過患有り、(21)父母を敬せず、沙門婆羅門を敬せず、親長を敬せず〔五法竟り〕、(1)六依貪喜・(2)六依貪憂・(3)六依貪捨・(4)六染・(5)六樂、(6)復六樂有り、(7)六愛・(8)六恚・(9)六鉤・(10)六[一六]不護・(11)六諍根〔六法竟り〕、(1)七共染・(2)七共欲染・(3)七識住處・(4)七慢・(5)七不敬・(6)七漏・(7)七[一七]怯弱法・(8)七動・(9)七自恃〔p. 647a〕・(10)七求・(11)七摸・(12)〔七作〕・(13)七生〔七法竟り〕、(1)八世間法・(2)八非聖語・(3)八懈怠事・(4)八難處あり修梵行を妨ぐ〔八法竟り〕、(1)九若干法・(2)九愛根法・(3)九衆生居・(4)九犯戒過患〔九法竟り〕、(1)[一八]十煩惱使・(2)十煩惱結・(3)十想・(4)十覺・(5)十邪・(6)十惱事・(7)十不善業道・(8)十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること讚鉾の如し〔十法竟り〕、十一心[一九]垢・(1)二十種身見・(2)二十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること讚鉾の如し、二十一心垢・三十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること讚鉾の如し、三十六愛行・三十法

【一〇】怨。宋元明宮の四本には惡に作る。
【一一】力。宋元明宮の四本には刀に作る。
【一二】熅。宋元明宮の四本には溫に作る。
【一三】扼。宋元明宮の四本は軛に作る。
【一四】(16)。復、四怖有りは四本によりて補入（但し長行の文中に更に今一ある）。
【一五】怨。宋元明宮の四本には恐る作る。
【一六】不。宋元明宮の四本には防に作る。
【一七】怯。大正本等には御に作るも、宋元明宮の四本によりて改む。
【一八】十煩惱使以下。卷第二〇。
【一九】垢。大正本等には姤に作るも、同上四本に從ひて改む。

を成就すれば地獄に墮することの〔速かなること、讃鉢の如し〕[二〇]四十法を成就すれば地獄に墮することの速なること讃鉢の如し。六十二見。——

[二一](1)何をか[二二]恃生と謂ふ。衆生の生を貴び、生を以て自ら高うし、生を以て境界と爲して若し心に憶念して謂く、生の妙好にして而も以て自ら高うすべしと。是を恃生と名づく。復次は恃生とは、我生は彼の中の生に勝り、彼が生は卑なり。世間の諸の生中、我生（わが）は最も勝るとて、衆生の生を重じ、常に生を敬し、若し心に憶念して、諸の生の妙好にして而も以て自ら高うする、是を恃生と名づく。

(2)恃姓・(3)恃色・(4)恃財・(5)〔恃〕貴・(6)恃尊勝・(7)恃豪族・(8)恃無病・(9)恃年壯・(10)恃命壯・(11)恃功巧・(12)恃多聞・(13)恃辯才・(14)恃得利養・(15)恃得恭敬・(16)恃尊重・(17)恃備足・(18)恃師範・[二三](20)恃徒衆・(21)恃黨侶・(22)恃長宿・(23)恃力・(24)恃神足・(25)恃禪・(26)恃無求・(27)恃知足・[二四](28)恃獨處・(29)恃阿蘭若・(30)恃乞食・(31)恃糞掃衣・(32)恃我能離荒食・(33)恃一受食・(34)恃塚間・(35)恃露處・(36)恃樹下・(37)恃常端坐・(38)恃隨敷坐・(39)恃但三衣も亦上の如く廣く說く。

(41)何をか諛諂と謂ふ。若し他に依りて利を求め儀式を改變し、現に諸根を攝する、是を諛諂と名づく。

(41)何を邪敬と謂ふ。若し他に依りて利を求め飾辭美言して、將に他に順むとし意を詐りて巧便を現じ、是を以て、[二五]敬を行ずる。是を邪敬と名づく。

(42)何をか現相求利と謂ふ。若し他に依つて利を求め、衣食・臥具・醫藥・諸物有るを見て、心に得むことを希欲して現相稱好欲する、是を現相求利と名づく。

(43)何をか依使と謂ふ。人の爲に役使せられ、復輕賤せらると雖も、利を以ての故に隨逐して息まざる、是を依使と名づく。

【二〇】四十法等。同上四本には缺く。

【二一】何をか等。以下一法二百八十五を釋す。

【二二】恃生。以上毘崩伽論（Vibhaṅga）の小事分別中を參照すべし。

【二三】(20)。(19)、持戒をここには脫する故に（但、こは恐らく遺脫なるべし）。

【二四】恃獨處以下。所謂頭陀行關係のそれ。

【二五】敬。宋元明宮の四本には「恭・恭敬を行ずる」と。

(44)何をか歎求と謂ふ。若し他に依りて利を求め〔p.647b〕衣服・飲食・臥具・湯薬・諸物有るを見て心に得むことを希欲し、先に其の善を歎じ、復、我須ゆるを言ふ。是を歎求と名づく。

(45)何をか利を以て利を求むと謂ふ。心に得むことを希欲して若し彼の人に從ひて得るの利は以て此の人に示し、若し此の人に從つて得るの利は以て彼の人に示し、此より得る所の利あらば、彼に向ひて此の施主に歎譽し、彼より得る所の利あらば、此に向ひて彼の施主を歎譽す。——若し是の如くにして利を得る、是を利を以て利を求むと名づく。

(46)何をか我勝と謂ふ。若し慢を以て自ら高うし身の勝を謂ふ、是を我勝と名づく。

(47)何をか嗜味と謂ふ。食を貪りて多く種種の味を求むる、是を嗜味と名づく。

(48)何をか不護戒と謂ふ。若し出家の威儀を捨する、是を不護戒と名づく。

(49)何をか瞋相變と謂ふ。若し不善心を起して、諸根をして變異せしめ、若し十惱の一一を以て發起して、諸根を變異せしむる、是を瞋相變と名づく。

(50)何をか忿尊敎と謂ふ。尊は謂く佛・佛弟子にして、若しは敎授を便ち拒違・瞋忿し、或は多語し、或は嚬蹙して瞋を現じ、若しは敎へて愼護・重禁をして便ち拒逆・瞋忿し、或は多説し、或は復、嚬蹙して瞋を現ぜしむる、是を忿尊敎と名づく。

(51)何をか違尊敎と謂ふ。尊は謂く佛・佛弟子にして、若し敎授に、順護・重禁をして違返せしむる、是を違尊敎と名づく。

(52)何をか戾尊敎と謂ふ。若し世尊の所制あり。是の説を作すこと莫れ。是の作を作すこと莫れ。是の言を作すこと莫れと。是の分別を作すこと莫れと。彼の是の説を作すべからざるに、故らに説き、應に是の作を作すべからざるに故らに作し、應に是の言を作すべからざるに故らに言ひ、應に是の分別を作すべからざるに、故らに分別する、是を戾尊敎と名づく。

(53)何をか[二六]欺陵と謂ふ。若し衆生に於て觸惱・輕蔑するも、其の命を斷害せむことを欲せざる、是を欺陵と名づく。

(54)何をか捶打と謂ふ。若しは輕易に手拳もて捶打する、是を捶打と名づく。

(55)何をか[二七]斗欺と謂ふ。若し不等心もて多少を受出する、是を斗欺と名づく。

(56)何をか稱欺と謂ふ。若し不等心もて輕重を受出する、是を稱欺と名づく。

(57)何をか財物欺と謂ふ。若しは好物中に惡物を雜じる、若しは種種の物を分ち、若しは繩界定を以て本處を移す。是を財物欺と名づく。

(58)何をか傷と謂ふ。若し他人の身を侵破する、是を傷と名づく。

(59)何をか侵害と謂ふ。若しは衆生を輕蔑し、瞋恚して害を希ひ、其命を斷ぜむと欲する、是を侵害と名づく。

(60)何をか繫閉と謂ふ。若しは衆生の生死の爲に纒縛せられ、常に幽闇に處る。〔p. 647c〕是を繫閉と名づく。

(61)何をか批摸と謂ふ。若し不善心を起し、手を以て求覓する、是を批摸と名づく。

(62)何をか侵奪と謂ふ。若し不善心を起し、他が財物に於て侵欺・刧奪する、是を侵奪と名づく。

(63)何をか故作と謂ふ。若し心に不寂靜行を起し、心に知りて而も造る。是を故作と名づく。

(64)何をか長語と謂ふ。若し横言・輕謗する、是を長語と名づく。

(65)何をか横言と謂ふ。若し無義の語ある、是を横言と名づく。

(66)何をか輕謗と謂ふ。若し實無くして他を誣する。是を輕謗と名づく。

(67)何をか迫惱と謂ふ。若しは國王・國王の臣吏の、若しは蹴蹋し困苦せしめて他が財物を取る。是を迫惱と名づく。

【二六】陵。宋元宮の三本には淩に作る。

【二七】斗欺。四本には斗斛欺に作る。

(68)何をか詐善と謂ふ。若しは欺誑せむと欲し、若しは財物を取らむとて而も親附を現ずる是を詐善と名づく。

(69)何をか隱藏と謂ふ。若しは人の共物を未だ分たずして私かに好者を取りて覆匿する、是を隱藏と名づく。

(70)何をか共畜と謂ふ。若し人の已にして籌を行じて物を分つに、物の不善なるを以て强ひて擇びて好者を取る、是を共畜と名づく。

(71)何を[二八]好むで官事を說くと謂ふ。常に官法を以て言の首とし、或は籌算を言ひ、或は長短を言ひて其の事を染樂（せんげう）する、是を好むで官事を說くと名づく。

(72)[二九]世間事・(73)兵甲事・(74)鬪戰事・(75)[三〇] (76)車乘〔事〕・(77)婦女事・(78)華鬘事・(79)酒肉事・(80)婬欲事・(81)床臥事・(82)衣服事・(83)飲食事・(84)沽酒事・(85)親里事も亦、復、是の如し。若し其の事を染樂するなり。

(86)何をか若干語と謂ふ。上の樂說（げうせつ）の事を除く若し餘の事の衆生異・物異・境界異・自然異なる、是を若干語と名づく。

(87)何をか世間事を思惟すと謂ふ。若し憶念を首と爲して世間の[三一]成・壞を思惟する、是を世間事を思惟すと名づく。

(88)何をか海事を說くと謂ふ。若しは海を以て言首と爲して或は諸寶を說き、或は眞僞を說き、其の事を染樂する、是を海事を說くと名づく。

(89)何をか[三二]法を知らずと謂ふ。若しは善・不善・無記の法に於て自相を知らず、相を觀ぜず、相を分別せざる、是を法を知らずと名づく。

(90)何をか[三三]義を知らずと謂ふ。若し諸法の今世・沒世の義に於て、自相を知らず、相を觀ぜず、

【二八】好むで等。以下、阿含經中、またよく一連よく記するから、對檢すべし。—一例、雜16. 5(大正99, 411)=S. 56, 10; 中 207 箭毛經 = M. 77 Mahāsakuludāyi-s.

【二九】世間事等。論母中の註參照。

【三〇】(76)。(75)、大臣事はまたここに逸するが故に。

【三一】成壞。物理世界の成立、敗壞のことを指す。詳しくは論集部一の拙譯立世阿毘曇中等を見よ。

【三二】法を等。集異門足論十七—毘曇部二、P. 157 參照。

【三三】義を等。同上參照。

相を分別せざる、是を義を知らずと名づく。

(91)何をか[三四]時を知らずと謂ふ。若し時節の、應に聚落に入るべく、應に聚落を出づべく、應に誦讀すべく、應に受學すべく、應に思惟すべきを知らず。此らの時に於て、自相を知らず、相を觀ぜず、相を分別せざる、是を時を知らずと名づく。

(92)何をか[三五]足るを知らずと謂ふ。食に足るを知らず、言に足るを知らざることにて、自相を知らず、相を觀ぜず、相を分別せざる。是を足るを知らずと名づく。

(93)[p. 648a]何をか[三六]自身を知らずと謂ふ。我(わが)應に是の如きの信・是の如きの戒・是の如きの學問・是の如きの施・是の如きの慧有り、是の如く應に答ふべきを知らず、若し此らの法に於て、自相を知らず、相を觀ぜず、相を分別せざる、是を自身を知らずと名づく。

(94)何をか[三七]衆を知らずと謂ふ。[三八]若しは刹利衆・婆羅門衆・居士・沙門衆の應に是の如く住反すべく、應に是の如く坐起すべく、應に是の如く言默すべきに、若し衆中に於て自相を知らず、相を觀ぜず、相を知り分別せざる、是を衆を知らずと名づく。

(95)何をか[三九]人を知らずと謂ふ。若しは持戒・毀戒の人、若しは觀る可きの人、若し此らの人に於て自相を知らず、相を觀ぜず、相を分別せざる、是を人を知らずと名づく。

(96)何をか[四〇]勝劣人を知らずと謂ふ。若し尊卑の人の自相を知らず、相を觀ぜず、相を分別せざる、是を勝劣人を知らずと名づく。

(97)何をか[四一]邪見と謂ふ。或は人有りて是の如きの見を起さく、[四二]施無く、與無く、祠無く、善惡の業・報無く、今世・後世無く、父母無く、天無く、化生衆生無く、世間に沙門・婆羅門の正趣・正至にして、若しは今世・後世を自ら知證分別て說くもの無しと。是を邪見と名づく。

(98)何をか[四三]邊見と謂ふ。若し一切有りと見、一切無しと見、一切一なりと見、一切異りと見、

【三四】時を等。左註同下參照。

【三五】足るを等。左註同下參照。

【三六】自身等。集異門足論左註下參照。

【三七】衆。巴、Parisā-group. cf. 集異門足論十七（毘曇部初版、p. 158）。

【三八】若しは。大正本等には生に作り、上の衆に加へて「衆生を知らず」かに見せざるも、宋元明の三本（宮本にはこの字を缺く）に從ひ、今の如く改む。

【三九】人を等。集異門足論十七―同上本、p. 158 參照。

【四〇】勝劣人等。同上。

【四一】邪見。Mithyā-dṛṣṭi. 集異門足論を初め、成多、已に註出しおきたれば參照のこと。（一例、毘曇部一、初版 p. 247）

【四二】施無く等。集異門足論二（同上、p. 80）等參照。

【四三】邊見。Antagrāha-dṛṣṭi（同上下等參照）。

若し一切を種種に見る、是を邊見と名づく。

(99)何をか倒見と謂ふ。若しは正覺を見て正覺に非ずと謂ひ、若しは正覺に非ざるを是れ正覺なりと謂ひ、若しは善法を見て善法に非ずと謂ひ、若しは不善法を見て是れ善法なりと謂ひ、若しは正趣の沙門・婆羅門を見て正趣に非ずと謂ひ、若しは正趣に非ざる沙門・婆羅門を是れ正趣なりと謂ひ、若しは有るが是の見を作さく、我樂み、世樂み、後生に當に樂むべし。恒常・不斷・不變易法にして、常に當に定住すべしと。是を倒見と名づく。

(100)何をか求覓見と謂ふ。若し諸の[四四]見の中に於て選擇し、選擇し[四五]已る、是を求覓見と名づく。

(101)何をか求覓戒と謂ふ。若し戒を以て淨と爲して若し貪求・批摸する。是を求覓戒と名づく。

(102)何をか[四六]求覓道と謂ふ。若しは道を以て淨と爲して貪求・批摸する、是を求覓道と名づく。

(103)何をか求覓戒[四七]道と謂ふ。若し[四八]倶に以て淨と爲して若し貪求・批摸する、是を求覓戒道と名づく。

(104)何をか[四九]身見と謂ふ。若し我見——何をか我見と謂ふ。或は人有りて謂く、「色は是れ我なり」、「色中に我有り」、「色は是れ我有なり」、「我は是れ色の有なり、」と。受・想・行・識を見るも亦[p. 648b]是の如し。——是を身見と名づく。

(105)何をか躁と謂ふ。若し動止の輕く速疾なる、是を躁と名づく。

(106)何をか自稱と謂ふ。若しは歎美して觸に過る、是を自稱と名づく。

(107)何をか無信と謂ふ。若し信せず、入信せず、勝信せず、眞信せず、若し心の不信なる。是を無信と名づく。

(108)何をか不覺と謂ふ。若し無慧なる。是を不覺と名づく。

【四四】見。Dṛṣṭi ——善不善のあらゆる意見をいふ。
【四五】已る。大正本には已に作るも非。
【四六】求覓道。前の論母中には不記。
【四七】道。宮本は盜に作る。
【四八】倶。戒（Sīla）及び道（Unnta ?）の兩者のこと。
【四九】身見。Satkāna-dṛṣṭi 集異門足論八、毘曇部一、初版、P. 247 の註中等參照。

(109)何をか慳惜と謂ふ。若しは貪して捨せざる、是ら慳惜と名づく。復次に、慳惜とは他の利養・所須を施與するを惜む、是を慳惜と名づく。

(110)何をか面譽と謂ふ。他が財利を求めず、他が意に隨順し、其の善を對稱する、是を面譽と名づく。

(111)何をか遮惜と謂ふ。若し財物を慳悋し、人をして門戸を防護せしめ、沙門・婆羅門の入り得て乞求するを恐る、是を遮惜と名づく。

(112)何をか[五〇]不信業と謂ふ。若し善・不善・無記業中に於ける不解・重不解、究竟不解、是を不信業と名づく。

(113)何をか不信業報と謂ふ。善・不善業は報有り。若し此の報に於いて不解、重不解、究竟不解なる、是を不信業報と名づく。

(114)何をか毀施と謂ふ。若し非法にして行施する者、是を毀施と名づく。

(115)何をか毀學と謂ふ。若しは非學者なる、是を毀學と名づく。

(116)何をか自勝と謂ふ。若しは自ら高うして、我は信・戒・施・聞・智慧・辯才有りとする、是を自勝と名づく。

(117)何をか譽怨と謂ふ。若し人の怨家に有るに、其の惡を現ぜむと欲し、反(かへつ)て其の善を稱して信・戒・施・聞・慧・辯才有りといふ、是を譽怨と名づく。

(118)何をか虛歎と謂ふ。心に邪悔有りて、若し信・戒・施・聞・慧・辯才無きに、歎說して有りと言ふ、是を虛歎と名づく。

(119)何をか不自在と謂ふ。若し煩惱心の起りて所作の衆善の隨意を得ざる、是を不自在と名づく。

【五〇】不信業。前の論母中には不記。

(120)何をか他に屬すと謂ふ。若しは業は不淨にして、若しは親を現ぜむと欲し、或は奴僕・侍從と作る。是を他に屬すと名づく。

(121)何をか他に事すと謂ふ。若し貴勝と遨遊・戲笑し、恃むで形勢と爲す 是を他に事すと名づく。

(122)何をか不怨憎と謂ふ。若し愛・喜ある、是を不怨憎と名づく。

(123)何をか怨憎と謂ふ。若し瞋忿ある、是を怨憎と名づく。

(124)何をか沈沒と謂ふ。若し善法の[五一]廢退する、是を沈沒と名づく。

(125)何をか心悲と謂ふ。若し心に不善の悲ある、是を心悲と名づく。

(126)何をか無厭と謂ふ。若し生活に於て、多欲を具して止まざる、是を無厭と名づく。

(127)何をか不勤進と謂ふ。若しは善法に於て意の專樂せざる、是を不勤進と名づく。

(128)何をか[p.648c] 不忍辱と謂ふ。若し善法に於て能く堪えて忍受せざる、是を不忍辱と名づく。復次に、不忍辱とは、或は有るが飢・渴、寒・熱、風・雨、蚊・虻・蟆子に耐えず、不適意の語あり、若しは身心の苦痛酸楚にして終時は刀風解形し、能く堪えて忍受せざる、是を不忍辱と名づく。

(129)何をか非威儀と謂ふ。若し佛の結戒を毀す、是を非威儀と名づく。

(130)何をか敎を受けずと謂ふ。若し如法の敎授に、心敬順せざる、是を敎を受けずと名づく。

(131)何をか惡知識に近づくと謂ふ。若しは殺生・盜竊・邪婬・妄語・飮酒・放逸の處——若し此らの人に近づきて知識・重知識・究竟知識を作り相ひ敬念する、是を惡知識に近づくと名づく。

(132)何をか惡親厚と謂ふ。若しは殺生・盜竊・邪婬・妄語・飮酒・放逸の處——若し此らの人と共に親厚・重親厚・究竟親厚し、相ひ敬して離れざる、是を惡親厚と名づく。

(133)何をか惡行を取すと謂ふ。殺生者に依りて殺生を學び、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に

【五一】廢。宋元明宮の四本には發に作る。

傾向し、彼を以て伴と僞す、盜竊者に依つて盜竊を學び、邪婬者に依りて邪婬を學び、妄語者に依りて、妄語を學び、飲酒・放逸處の者に依りて、飲酒・放逸の處を學び、心の彼に向し、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て伴を僞す、是を惡行を取すと名づく。

(134)何を惡行と謂ふ。若し不善の境界に行ずる、是を惡行と名づく。

(135)何をか怯弱の者に親近すと謂ふ。若しは不信者、無慚・無愧者・不學問者・懈怠者・失念者・無慧者――若し此らの人に親近し、恭敬承事する、是を怯弱〔者〕に親近すと名づく。

(136)何をか怯弱法を受くと謂ふ。若し怯弱者が說く所の法を恭敬し受行する、是を怯弱法を受くと名づく。

(137)何をか怯弱を知ると謂ふ。若し怯弱者が說く所の法たる惡法を善く聽受し、心に能く分別する、是を怯弱法を知ると名づく。

(138)何をか怯弱法を持すと謂ふ。若し怯弱者が說く所の法あるに、若し此の法を持し、正持し、住して忘れず、相續念して失はざる、是を怯弱法を持すと名づく。

(139)何をか[五二]不順の思惟と謂ふ。若し善の思惟に順ぜざる、是を不順の思惟と名づく。

(140)何をを怯道に親近すと謂ふ。謂く邪見乃至邪定に若し親近し多く修學する、是を怯道に親近すと名づく。

(141)何をか劣心と謂ふ。若し心の懈怠ある、是を劣心と名づく。

(142)何をか亂心と謂ふ。若しは心、五欲＝色〔p.649r〕聲・香・味・觸に散在する、是を亂心と名づく。

(143)何をか喜諍と謂ふ。若しは諍訟し、若しは繫閉し、常に相ひ違返する、是を喜諍と名づく。

(144)何をか寬禁戒と謂ふ。若しは禁戒を缺き、若しは荒し、若しは垢離する、是を寬禁戒と名づく。

【五二】不順の思惟。巴、Ayoniso-Manasikāra ―― 不正思惟のこと。

(145)何をか邪法を敬ふと謂ふ。若し惡・不善法あるに、此を以て尊と爲して能く定を得る、是を邪法を敬ふと名づく。

(146)何をか善法を退すと謂ふ。若しは出世間法あるに、此の法に於て廢退する、是を善法を退すと名づく。

(147)何をか[五三]掉と謂ふ。若し掉動して心の亂れて寂靜ならず、正寂靜ならざる、是を掉と名づく。

(148)何をか嚴身と謂ふ。若しは自ら捫飾する、是を嚴身と名づく。

(149)何をか[五四]險と謂ふ。若し身に意業の起動して不順なる、是を險と名づく。

(150)何をか「恥に耐ゆ」と謂ふ。若しは衆〔中〕に在りて問はれずして妄に說く、是を恥に耐ゆと名づく。

(151)何をか狂言と謂ふ。若し縱に語りて攝せざる、是を狂言と名づく。

(122)何をか不記と謂ふ。若し善を念ずることを失ふ、是を心不記と名づく。

(153)何をか外念と謂ふ。若し念の五欲――色・聲・香・味・觸に在る、是を外念と名づく。復次に、外念とは、若し外道を念じ、若し外道を敬念じ、心の彼が法に在る、是を外念と名づく。

(154)何をか憂喜に隨ふと謂ふ。若し俗間に種種の喜樂・種種の憂苦有るに、心の希求・隨順和同すること有る、是を憂喜に隨ふと名づく。

(155)何をか自高と謂ふ。若し身相・[五五]好名・能を歎ずる、是を自高と名づく。

(156)何をか毀他と謂ふ。若し他が長短を說く、是を毀他と名づく。

(157)何をか不敬と謂ふ。若しは尊長を輕慢して敬畏有ること無き、是を不敬と名づく。

(158)何をか不自卑と謂ふ。若しは人に下らざる、是を不自卑と名づく。

【五三】掉。Audhatya――毘曇部五、p. 81 &c. 參照。

【五四】險。宋元二本は嶮に作る。

【五五】好名。大正本等には是多(身相是多能)と作るも、宋元明の三本によりて改む(尙、宮本には是多を是名と記す)。

(159)何をか不實敬と謂ふ。若し淨行者に於て種種に稱美するも、虛僞にして眞ならざる、是を不實敬と名づく。

(160)何をか難滿と謂ふ。若し飲食を厭くこと無き、是を難滿と名づく。

(161)何をか難養と謂ふ。美味を求むる、是を難養と名づく。

(162)何をか疏惰と謂ふ。若し懈怠ある、是を疏惰と名づく。

(163)何をか懈怠と謂ふ。若し疏惰なる、是を懈怠と名づく。

(164)何をか中止と謂ふ。若し上利を求むれば則ち易きも、懈怠に緣るが故に便ち息む、是を中止と名づく。

(165)何をか後善と謂ふ。若し善法中に於て失・滅・沒する、是を沒善と名づく。

(166)何をか欲勤と謂ふ。若し欲に樂著する、是を欲勤と名づく。

(167)何をか勤苦と謂ふ。若し種種に身を苦しめて、但、聖法に非ず、儀無く、益無く、義無き、是を勤苦と名づく。

(168)何をか貪と謂ふ。若し愛の廣大にして彼岸に極まる、是を貪と名づく。

(169)何をか貪纒と謂ふ。若し愛の廣大にして、彼岸に極まる、是を貪纒と名づく。

(170)何をか[56]惱と謂ふ。若し衆生の若干の色に逼られて若しは惱み、重惱し、究竟惱し、內の燋熱し、內心の憂瞢する、是を惱と名づく。

(171)何をか悲心と謂ふ。若し衆生の苦・惱の爲に逼惱せられて惱箭の心に入り、若しは哭泣に說し、追憶して捨てざる、是を悲心と名づく。

(172)何をか[57]苦と謂ふ。若し身に、眼觸の苦受、鼻舌・身觸の苦受を忍受せざる、是を苦と名づく。

【五六】惱。Pradāsa —— 毘曇部五、p. 8; &c 參照。

【五七】苦。Duḥkha.

(173)何をか憂と謂ふ。若し心の苦を忍受せざる、是を憂と名づく。
(174)何をか衆苦と謂ふ。若し種種の苦の爲に逼られて心の停息無き、是を衆苦と名づく。
(175)何をか恐怖と謂ふ。若し心の驚動する、是を恐怖と名づく。
(176)何をか弱顏と謂ふ。若し善法を作して耽闇・喜著する、是を弱顏と名づく。
(177)何をか强顏と謂ふ。小兒の如く言の忌難無き、是を强顏と名づく。
(178)何をか疑惑と謂ふ。二心ありて猶豫して斷結すること能はざる、是を疑惑と名づく。
(176)何をか無親と謂ふ。若し善法を遠離する、是を無親と名づく。
(180)何をか善障礙と謂ふ。若し善法に背く、是を障礙と名づく。
(181)何をか不相可と謂ふ。若し鬪諍・繫縛を喜び、共に相ひ言訟する、是を不相可と名づく。
(182)何をか善妨と謂ふ。若しは善法を作し、因りて自高を生ずる、是ら善妨と名づく。
(183)何をか邊實と謂ふ。若し邊見者の所見を執して堅實と爲す、是を邊實と名く。
(184)何をか不親近と謂ふ。若し佛・佛弟子に親近せず、供養・恭敬・禮拜せざる、是を不親近と名づく。
(185)何をか近離と謂ふ。若し曾て佛・佛弟子に親近し、供養・恭敬・禮拜し、後に便ち廢退して、復、親近・供養・恭敬・禮拜せざる、是を近離と名づく。
(186)何をか卑下と謂ふ。身・口・意業に欺誑を作し、不實にして卑劣法ある。是を卑下と名づく。
(187)何をか自强と謂ふ。若し不善心を起して身・口・意を現ずる、是を自强と名づく。
(188)何をか耐辱と謂ふ。若し世俗法に貪著し、希求・往來して息まざる、異を耐辱と名づく。
(189)何をか隨貪と謂ふ。若しは利養を貪逐して息まず、善人の相を失ふ。是を隨貪と名づく。
(190)何をか自擧と謂ふ。若し身・口・意業の共の掉する、是を自擧と名づく。

(191)何をか自放と謂ふ。若しは心の涌散して不攝なる。是を自放と名づく。

(192)何をか[五九]無持と謂ふ。若し手足の煩惱して定操有ること無く、縱横に地を畫く、是を無持と名づく。復次に無持とは、若し好行來は、是を無持と名づく。

(193)何をか離禪と謂ふ。若し寂靜處に親近せざる、是を離禪と名づく。

(194)何をか不悔と謂ふ。若し不善心を起して歡喜・踊躍し、變失有ること無き、是を不悔と名づく。

(195)何をか含〔p.649c〕忿と謂ふ。若し有るが常使す可からず、因を息めずして煩惱を增す、是を含忿と名づく。

(196)何をか悋惜と謂ふ。若し財法に於て護念して捨せざる、是を心悋惜と名づく。

(197)何をか邪教と謂ふ。若し邪法を說く、是を邪教と名づく。若しは邪見者の集聲・音句・言語の口教、是を邪教と名づく。

(198)何をか諍訟と謂ふ。他が長・短を求めて和順を生ぜざる、是を諍訟と名づく。

(199)何をか非遜と謂ふ。若し所作の業に心の高うして敬順有ること無き、是を非遜と名づく。

(200)何をか敬失と謂ふ。若し自下の非法を敬ふ、是を敬失と名づく。

(201)何をか災喜と謂ふ。若し他が衰失を見て反つて喜快を生ずる、是を災喜と名づく。

(202)何をか失を求むと謂ふ。若し怨嫌有りて常に缺漏を伺ふ。是を失を求むと名づく。

(203)何をか非行と謂ふ。若し比丘の、威儀を犯失し、非威儀行を作す、是を非行と名づく。

(204)何をか禪を求むと謂ふ。若し人の聚集する處にて、心に名利を求め、便ち坐禪の相を現ずる、是を禪を求むと名づく。

(205)何をか無益禪と謂ふ。若し人の坐禪して無儀なる。是を無益禪と名づく。

【五八】持。宋元明宮の四本には恃に作り、下も應ずるも、果して如何？

(206)何をか恩を知らずと謂ふ。若し他より財施・法施を得、知分別・正分別せず、緣分別せざる、是を恩を知らずと名づく。

(207)何をか[五九]已が恩を知らずと謂ふ。若し曾て他より財物施・法施を得て恩を受せざる、是を已が恩を知らずと名づく。

(208)何をか輕毀と謂ふ。若し他が過失を說いて心に忌難せざる、是を輕毀と名づく。

(209)何をか瞋恚と謂ふ。若し忿怒して、他意を護らざる、是を瞋恚と名づく。

(210)何をか性惡と謂ふ。若し身・口・意の卒暴なる、是を性惡と名づく。

(211)何をか[六〇]鏐鞹と謂ふ。若し忍辱行有ること無き、是を鏐鞹と名づく。

(212)何をか修學を斷ずと謂ふ。若し他が善を作すを遮する、是を修學を斷ずと名づく。

(213)何をか呵諫して反て譏責を生ずと謂ふ。若し人の惡を作して善諫するも受けざる、是を呵諫するも反て譏責すと名づく。

(214)何をか呵諫と謂ふ。亂語して恚を生ずるなり。

(215)何をか呵諫不成と謂ふ。

(216)何をか呵諫を明さずと謂ふ。皆、上に說くが如し。

(217)何をか身見を取すと謂ふ。身見に緣るが故に身見を取し、身見の惡の故に身見を取す。險難の道に草木・叢林有りて上を覆はゞ、彼の道を趣く者の、高下・深淺を知らさるが如く、是の如く身見を取する者の、是・非・好・惡を識らざる、是を身見取すと名づく。

(218)何をか身見餓と謂ふ。身見に緣るが故に身見に餓え、身見の惡の故に身見に餓ゆ。[六一]衆生をして、諸の苦難に處せしむれば、是の如きの中には渴餓し、禽獸・惡蟲も餓え、人・非人も餓ゆ。是の如くならば、彼の[p.650a]道を趣く者は無量の種種の苦を受く。是の如く身見を取り、諸苦痛を受

【五九】已。已の寫誤に非ざるか。下も同ず（但し、大正、縮藏等、すべて、今の如く記する）。

【六〇】鏐鞹。宋元明宮の四本には剛硬に作る。

【六一】衆生等。譯文、甚だ拙し。讀者は更改して讀むの要あるべし。

けて彼岸に至らす。是を身見餓と名づく。

(219)何をか身見幢を立つと謂ふ。若し樂うて身見を起す、是を身見幢を立つと名づく。

(220)何をか身見を憂ふと謂ふ。若し身見を緣とするが故に憂惱を生じ、重生し、憂惱を究竟生する、是を身見を憂ふと名づく。

(221)何をか身見を求むと謂ふ。若し身見に緣るが故に色・受・想・行・識を求々する、是を身見を求むと名づく。

(222)何をか身見に親近すと謂ふ。若し身見に緣るが故に色・受・想・行・識に親近する、是を身見に親近すと名づく。

(223)何をか身慢見と謂ふ。若し身見に緣るが故に、身慢あり、己が身を嚴飾する、是を身慢見と名づく。

(224)何をか遊戲身見と謂ふ。若し身見に緣る……。[六二]

(225)〔何をか惜身見と謂ふ〕。若し身見に緣るが[六三]故に色・受・想・行・識を取し愛する。是を身見を惜しむと名づく。

(226)〔何をか我身見と謂ふ〕。若し身見に緣るが故に我の[六四]色・受・想・行・識を取する。是を我身見と名づく。

(227)何をか欲染と謂ふ。若し欲界の欲・色・無色界の欲、是を欲染と名づく。(228)共欲染・(229)悲・(230)不親增[六五]・(231)樂欲も亦是の如し。

(232)何をか悕望と謂ふ。若し愛の初觸、是を悕望と名づく。

(233)何をか重悕望と謂ふ。愛の若し廣大にして、未だ彼岸を極めざる、是を重悕望と名づく。

(234)何をか究竟悕望と謂ふ。愛の若し廣大にして以て彼岸を極むる、是を究竟悕望と名づく。

【六二】……。釋文を逸せるものの如く、然らざれば、下文を明に解釋し得ず。

【六三】故。宋元明宮の四本には欲に作る(かく全文は……を欲・取・愛する、是を……となる)。

【六四】色。宋元明の三本によりて補へ。

【六五】增。宋元明宮の四本には憎に作る。

(235)何をか難足と謂ふ。若し欲界もて不足・色・無色界もて不足なる、是を難足と名づく。(236)難滿(237)著[六七]灑津流・(378)沒枝・(379)網生本・(380)希嗜・(381)燋渴・(382)宅・(383)忍・(384)塵瘖・(385)受[六八](一法 覚り)も亦上に說くが如し。

(1a)何をか[六九]失念と謂ふ。若し善念を捨する、是を失念と名づく。

(1b)何をか[七〇]不正知と謂ふ。或は比丘有り正知を以てせずして、去來・屈伸・廻轉し僧伽梨[七一]を服し、衣を執り、鉢を持し、飲食・便利し、解息・睡眠・行・住・坐・臥し、眠時・覺時・默時に自護して行ぜざる、是を不正知と名づく。

(2a)何をか[七二]根門を護らずと謂ふ。若し色を見て取する、是を根門を護らずと名づく。

(2b)何をか[七三]食に足るを知らずと謂ふ。若し量らずして食する、是を食に足るを知らずと名づく。

(3a)何をか[七四]無明と謂ふ。若し[七五]癡不善根は是を無明と名づく。

(3b)何をか[七六]有愛と謂ふ。若し色・無色界の愛、是を有愛と名づく。

(4a)何をか[七七]有見と謂ふ。若し[七八]常見、是を有見と名づく。

(4b)何をか[七九]非有見と謂ふ。若し[八〇]斷見、是を非有見と名づく。

(5a)何をか[八一]欲漏と謂ふ。若し欲界の法に貪著する、是を欲漏と名づく。

(5b)何をか[八二]有〔p.650b〕漏と謂ふ。若し色・無色界の法に貪著する、是を有漏と名づく。

(6a)何をか[八三]欲求と謂ふ。若し欲界を未だ度せず、欲界を未だ知らず、欲界を未だ斷ぜず、欲界の陰・界・入の色・聲・香・味・觸・法を若し求覓・聚集する、是を欲求と名づく。

(6b)何をか[八四]有求と謂ふ。若し色界・無色界を未だ度せず、色・無色界を未だ知らず、色・無色界を未だ斷ぜず、色・無色界の陰・界・入[八五]・禪[八六]・解脫[八七]・定・入定[八八]を若し、求覓聚集する、是を有求と名づく。

(7a)何をか[八九]持戒せずと謂ふ。若しは破戒し、若しは戒を持せさる、是を持戒せずと名づく。

【六七】著灑以下。或は更に多數に讀み分くべきやも知れぬが、今は暫く所記の如く試みに句切る。
【六八】受。本卷の初の論母中(愛法と)及び宋元明宮の四本には何れも愛に作る。
【六九】失念。巴、Muṭṭhassati—cf. D. 33, 3, XVII (Muṭṭhasaccaṃ に作る); A. 2, 15-16 (1, p. 95); do.
【七〇】不正知。巴、Asampajaññaṃ—cf. D. 33, 3. XII (3, p. 213); A. 2, 15-16(1, p. 95).
【七一】僧伽梨。Saṅghāṭi——今日所謂袈裟で、大衣と譯す。上の三衣の註中その外參照。
【七二】根門を護らず。巴、Indriyesu agutta-dvāratā——cf. D. 33, 2, XIX(3, p. 213); A. 2, 15, 6 (1, p. 94); 集異門足論二(毘曇部—p.72)
【七三】食に量を知らず。巴、Bhojane amattaññutā—cf. D. 33, 2, 19(3, p. 213); A. 2, 15, 6 (1,p.94); 集異門足論三(同上下)等參照。
【七四】無明。巴、Avijjā—cf. D. 33, 2, 13; A. 2, 15, 2; 集異門足論一、(同上、p. 54)その他。

(7b)何をか[九〇]害見と謂ふ。若し[九一]六十二見及び[九二]邪見、是を害見と名づく。

(8a)何をか[九三]戒衰と謂ふ。若し毀戒して護持せざる、是を戒衰と名づく。

(8b)何をか[九四]見衰と謂ふ。若し六十二見及び邪見、是を見衰と名づく。

(9a)何をか衰命と謂ふ。若し邪命、是を衰命と名づく。

(9b)何をか衰儀と謂ふ。若しは非威儀にして行ずる、是を衰儀と名づく。

(10a)何をか[九五]衰行と謂ふ。若し比丘の非自の境界にて行ずる、是を衰行と名づく。

(11a)何をか惡を作すと謂ふ。不善法を成就する、是を惡を作すと名づく。

(12b)何をか善を作さずと謂ふ。出世間の善法を若し作さず、成就せざる、是を善を作さずと名づく。

(12a)何をか在家に親近すと謂ふ。若し世間に順じて正行に違する、是を在家に親近すと名づく。

(12b)何をか出家に親近すと謂ふ。若し在家[九六]法に順ぜず、世行に違する、是を出家に親近すと名づく。

(13a)何をか二緣にして欲染[九七]ありと謂ふ。若しは淨色を緣とし、[九八]不順の思惟を緣として欲染を生ずる、是を二緣にして欲染ありと名づく。

[九九]何をか二緣にして瞋恚[一〇〇]ありと謂ふ。怨憎を緣とし、不順の思惟を緣とする、是を二緣にして瞋恚を生ずと名づく。[一〇一]

(13b)何をか二緣にして邪見を生ずと謂ふ。他の邪說を緣とし不順の思惟を緣として邪見を生ずる、是を二緣にして邪見を生ずと名づく。

(14a)何をか瞋恚と謂ふ。若しは忿怒・重忿怒・究竟忿怒、[一〇二]若しは瞋恚の熏ずること烟荒の如くなる、是を瞋恚と名づく。

【七五】癡不善根。集異門足論卷三—同上、p. 101; &c. 參照。

【七六】有愛。巴、Bhavataṇhā—集異門足論下同上、p. 54等を見よ。

【七七】有見。巴、Bhava-diṭṭhi—集異門足論同上參照。

【七八】常見。巴、Sassata-diṭṭhi.

【七九】非有見。巴、Vibhava-diṭṭhi.—集異門足論同上參照（無見に作る）。

【八〇】斷見。巴、Uccheda-diṭṭhi.

【八一】欲漏。巴、Kāma-āsava.—集異門足論四—同上、p. 137 f 參照。

【八二】有漏。巴、Bhava-āsava.—同上參照。

【八三】欲求。巴、Kāmesanā.—同上、p. 133 參照。

【八四】有求。巴、Bhavesanā.—同上參照。

【八五】禪。四禪のこと（巳出參照）。

【八六】解脫。八解脫のこと。

【八七】定。Samādhi 有覺有觀等三定及び空・無願・無相等の三定のこと。

【八八】入定。Samāpatti の譯で、四無色定の意。—以上、毘曇部十九、p. 313 f 參照。

【八九】持戒せず。巴、Sīlavipatti—論母中には害戒に作る。集異門足論二—同前、p. 81參照犯戒及びに作る）。

(14b)何をか伺怨と謂ふ。若し仇を報ぜむと欲する纒・究竟纒ありて[一〇四]心の癡業を行ずる、是を伺怨と名づく。

(15a)何をか懷恨と謂ふ。若し心に垢穢あり、煩惱に汚せらるゝ、是を懷恨と名づく。

(15b)何をか燋熱と謂ふ。若し不適意にして而も憂惱を生ずる、是を燋熱と名づく。

(16a)何をか嫉妬と謂ふ。若し他が利養・尊・重・恭敬・禮拜を得るに、而も嫉妬・生嫉妬・究竟嫉妬を生ずる、是を嫉妬と名づく。

(16b)何をか慳惜と謂ふ。若し財施・法施を貪悋して捨せず、聚集・樂著する、是を慳惜と名づく。

(17a)何をか[一〇五]幻變と謂ふ。若し〔p.650c〕尊勝及び餘人の前に於て、名聞・虛譽の爲の故に、自ら過失を覆ひ、他人を諂謟する、是を[一〇六]幻變と名づく。

(17b)何をか姦欺と謂ふ。若し心の邪曲して正しからさる、是を姦欺と名づく。

(18a)何をか[一〇七]無慚と謂ふ。若し自ら惡を作して内心に悔ひざる、是を無慚と名づく。復次に無慚とは、若し人の慚くして、恥ず可きの法に於て、恥ぢず、惡・不善法に於て恥ぢざる、是を無慚と名づく。

(18b)何をか[一〇八]無愧と謂ふ。若し自ら惡を作して、他人を羞ぢさる、是を無愧と名づく。復次に無愧とは、若し人の不愧にして、羞ず可きの法に於て羞ぢず、惡・不善法に於て羞ぢざる、是を無愧と名づく。

(19a)何をか矜高と謂ふ。他を慢りて自ら譽する。是を矜高と名づく。

(19b)何をか諍訟と謂ふ。若し身・口・意の不善なるを起して掉動・麁言し、忿惱する、是を諍訟と名づく。

(20a)何をか貢高と謂ふ。若し不善心を起して、己が身を嚴飾し、己が善を稱歎し、意の開解せさ

【九〇】 害見。巴、Diṭṭhi-vipa-tti 同上參照破見に作る)。
【九一】 六十二見。本論卷二十中參照。
【九二】 邪見。本卷已出。參照すべし。
【九三】 戒衰。集異門足論同上の一遺戒に當るか。
【九四】 見衰。同上、一遺見に當るか。
【九五】 衰行。これの半對としての「哀?」を脫落せざるか。
【九六】 法。宋元明の三本には不記。
【九七】 あり。同上三本には「を生ず」に作る。
【九八】 不順の思惟。巴、ayoniso-manasikāra —— 多くは不正の思惟と譯せらる。
【九九】 何をの等。この一文、論母になく、數字上の關係に反省し識入の疑あること、甚だ大であるが、果して如何?よつて暫く、順番以外とす(但し、說明には何ら?を挾む餘地を見ず。)の點も一考の餘地を存す)。
【一〇〇】 ある。宋元明三本には「を生ず」と記す。
【一〇一】 名づく。この下、原漢文には「焦(四本は纒に作る)如烟荒」の四字あるも、今は假に下に移し讀む。
【一〇二】 究竟忿怒若しは瞋恚等。これは左註の如く、原漢文に

る、是を貢高と名づく。

(20b)何をか放逸と謂ふ。若し念を攝せずして亂す、是を放逸と名づく。

(21a)何をか[一〇九]慢と謂ふ。若し我勝るを言ふ、是を慢と名づく。

(21b)何をか[一一〇]增上慢と謂ふ。我は勝と等しと言ふ、是を增上慢と名づく。　二法竟り

は何怨下、にあつたのを暫くここに移し讀む。

【一〇三】焦ずること烟荒の如くなる。右註の如く、原漢譯には二椽生瞋恚の下にあつたものである。今、暫くここに移し來つて讀む。

【一〇四】焦。宋元明宮の四本には纒る作る。

【一〇五】幻。宋元明宮の四本には句に作る。左註も參照。

【一〇六】是を等。宋元明宮の四本によりて補入(句の字は上の如く、大正本等には幻に作る)。

【一〇七】無慚。Ahri or Āhrikya—集異門足論一、—同前、p. 54 參照。

【一〇八】無愧。Anapatrāpya. 同上參照。

【一〇九】慢。Māna.

【一一〇】增上慢。Abhimāna.

巻の第十九 [p.650c]

非問分煩惱品第十二【其の二】

(1a) 何をか內集と謂ふ。[一] 若し內法中に於ける欲染・共欲染の樂欲を增さざるに非ざる、悕望・重悕望・究竟悕望・難足・難滿・貪・灑・津漏・沒枝・・網・生本・希・嗜・著・焦・渴・宅・忍・塵・瘡・愛、是を內集と名づく。

(1b) 何をか外集と謂ふ。若し法に於ける欲染・共欲染・乃至塵・瘡・愛、是を外集と名づく。

(1c) 何をか內外集と謂ふ。若し內外法に於ける欲染・共欲染、乃至、塵・瘡・愛、是を內外集と名づく。

(2a) 何をか悕望と謂ふ。若し自ら善法有りて悕望して故らに他をして知らしめむと欲する、是を悕望と名づく。

(2b) 何をか大悕望と謂ふ。若し恃望多き、是を大悕望と名づく。[p.651a]

(2c) 何をか惡悕望と謂ふ。若し自ら善法無くして悕望して故(こと)さらに他をして知らしめむと欲する、是を惡悕望と名づく。

(3a) 何をか貪と謂ふ。自の物・財・賂・妻子等に於ける貪・欲染・貪著、是を貪と名づく。

(3b) 何をか惡貪と謂ふ。若し他が物・財・賂・妻子等に於て、我有(わがう)たらしめむと欲する貪・欲染・貪著、是を惡貪と名づく。

(3c) 何をか非法の欲染と謂ふ。若し母・師の妻等に欲染行を作す、是を非法の欲染と名づく。

(4) 何をか[二]三不善根と謂ふ。貪不善根・恚不善根・癡不善根、是を三不善根と名づく。

【一】何をか等。以下三法四十五經を釋す。

【二】三不善根。集異門足論三—毘曇部一、初版、p.97 a 等參照。

(5)何をか三難伏と謂ふ。欲難伏・恚難伏・癡難伏、是を三難伏と名づく。
(6)何をか[三]三闇と謂ふ。貪闇・恚闇・癡闇、是を三闇と名づく。
(7)何をか三荒と謂ふ。欲荒・恚荒・癡荒、是を三荒と名づく。
(8)何をか三纏と謂ふ。欲纏・恚纏・癡纏、是を三纏と名づく。
(9)何をか三動と謂ふ。欲動・恚動・癡動、是を三動と名づく。
(10)何をか內の三垢と謂ふ。欲垢・恚垢・癡垢、是を內の三垢と名づく。
(11)何をか內の三鏡と謂ふ。欲鏡・恚鏡・癡鏡、是を內の三鏡と名づく。
(12)何をか內の三怨と謂ふ。欲怨・恚怨・癡怨、是を內の三怨と名づく。
(13)何をか內の三網と謂ふ。欲網・恚網・癡網、是を內の三網と名づく。
(14)何をか內の三害と謂ふ。欲害・恚害・癡害、是を內の三害と名づく。
(15)何をか內の三憎と謂ふ。欲憎・恚憎・癡憎、是を內の三憎と名づく。
(16)何をか內の三毒と謂ふ。欲毒・恚毒・癡毒、是を內の三毒と名づく。
(17)何をか三勝と謂ふ。我慢・不如慢・增上慢、是を三勝と名づく。
(18)何をか三闇聚と謂ふ。(a)我過去は有か。我過去は無か。何の姓か過去の有なる。何の因か過去有なるを疑惑する、(b)我當來は有か。我當來は無か。何の姓か當來の有ならむ。何の因か當來の有なるを疑惑する、(c)我現在は有か。現在は無か。何の姓か現在の有なる。何の因か現在の有なるを疑する、是を三闇聚と名づく。
(19)何をか[四]三刀と謂ふ。欲刀・恚刀・癡刀、是を三刀と名づく。
(20)何をか復、三刀有りと謂ふ。身刀・口刀・意刀、是を復、三刀有りと名づく。
(21)何をか三愛と謂ふ。欲愛・有愛・非有愛、是を三愛と名づく。

【三】三闇。同上四三集闇―同上、p. 141 f 參照。

【四】三愛。集異門足論四―同前 p. 136 f 等參照。

(22) 何をか三不攝と謂ふ。身の不攝・口の不攝・意の不攝、是を三不攝と名づく。
(23) 何をか[五]三惡行と謂ふ。身の惡行・口の惡行・意の惡行、是を三惡行と名づく。
(24) 何をか身の三惡行と謂ふ。殺・盜・邪婬、是の身の三惡行と名づく。
(25) 何をか [p.651b] 意の三惡行と謂ふ。貪・恚・邪見、是を意の三惡行と名づく。
(26) 何をか三不淨と謂ふ。身・口・意の不淨、是を三不淨と名づく。
(27) 何をか三不覺と謂ふ。身・口・意の不覺、是を三不覺と名づく。
(28) 何をか三曲と謂ふ。身・口・意の不直、是を三曲と名づく。
(29) 何をか三瘀瘡と謂ふ。欲瘀瘡・恚瘀瘡・癡瘀瘡、是を三瘀瘡と名づく。
(30) 何をか三欲と謂ふ。欲欲・恚欲・害欲、是を三欲と名づく。
(31) 何をか三想と謂ふ。慾想・恚想・癡想、是を三想と名づく。
(32) 何をか[六]三覺と謂ふ。欲覺・恚覺・害覺、是を三覺と名づく。
(33) 何をか[七]三求と謂ふ。身求・口求・意求、是を三求と名づく。
(34) 何をか[八]三火と謂ふ。欲火・恚火・癡火、是を三火と名づく。
(35) 何をか三熅と謂ふ。欲熅・恚熅・癡熅、是を三熅と名づく。
(36) 何をか三煖と謂ふ。欲煖・恚煖・癡煖、是を三煖と名づく。
(37) 何をか三炙と謂ふ。欲炙・恚炙・癡炙、是を三炙と名づく。
(38) 何をか三熱と謂ふ。欲熱・恚熱・癡熱、是を三熱と名づく。
(39) 何をか三焦と謂ふ。欲焦・恚焦・癡焦、是を三焦と名づく。
(40) 何をか三惡と謂ふ。身惡・口惡・意惡、是を三惡と名づく。
(41) 何をか[九]三有と謂ふ。欲有・色有・無色有、是を三有と名づく。

【五】三惡行。同上三―同前本、P. 10 註等參照。
【六】三覺。集異門足論三―同前本 P. 101 註 に三不善尋及び三善尋と記する等を參照。
【七】三求。同上四(同前本、P. 128 註)には欲求・有求・梵行求の三求を記す。
【八】三火。同上五(同前本、P. 152 註)等參照。
【九】三有。集異門足論四―同前本、P. 141 註 等參照。

(42)何をか三漏[一〇]と謂ふ。欲漏・有漏・無明漏、是を三漏と名づく。
(43)何をか三濁と謂ふ。身・口・意の濁、是を三濁と名づく。
(44)何をか三不軟と謂ふ。身不軟・口不軟・意不軟、是を三不軟と名づく。
(45)何をか三不除と謂ふ。身不除・口不除・意不除、是を三不除と名づく。三法竟り
(1)[一一]何をか四流[一二]と謂ふ。欲流・有流・見流・無明流、是を四流と名づく。
(2)何をか[一三]四扼と謂ふ。欲扼・有扼・見扼・無明扼、是を四軛と名づく。
(3)何をか[一四]四取と謂ふ。欲取・有取・戒取・我取、是を四取と名づく。
(4)何をか四染と謂ふ。欲染・色染・無色染・見染、是を四染と名づく。
(5)何をか口の四惡行と謂ふ。妄語・綺語・兩舌惡口、是を口の四惡行と名づく。
(6)何をか[一五]四結と謂ふ。悕望身結・瞋恚身結・戒道身結・見實身結、是を四結と名づく。
(7)何をか四箭と謂ふ。欲箭・瞋箭・慢箭・見箭、是を四箭と名づく。
(8)何をか[一六]四識住處と謂ふ。(a)比丘あり、識の色に依り色に[一七]住して境界と爲し、色〔p.651c〕中に愛を止めて相續し、增長・廣大なるを得、(b)受・(c)想・(d)行の住處も亦是の如くなる、是を四識住處と名づく。
(9)何をか[一八]四緣ありて愛を生ずと謂ふ。若し比丘の(a)衣を緣として愛を生じ、(b)食を緣として愛を生じ、(c)臥具を緣として愛を生じ、(d)醫藥を緣として愛を生ずる、是を四緣ありて愛を生ずと名づく。
(10)何をか四愛相緣と謂ふ。若し(a)愛を緣として愛を生じ、(b)愛を緣として憎を生じ、(c)憎を緣として憎を生じ、(d)憎を緣として愛を生ずる、是を四愛相緣と名づく
(11)何をか四惡道行と謂ふ。欲惡道行・恚惡道行・畏惡道行・癡惡道行、是を四惡道行と名づく。

【一〇】三漏。同上四―同上本、p. 137 f 參照。
【一一】何をか以下。四法十八組を釋す。
【一二】四流。集異門足論八―同上本、p. 245 f、毘曇部一、初版、四瀑流の下等參照。
【一三】四扼。同上、四軛―同上本、p. 243 f を見よ。
【一四】四取。同上、四取―同上本、p. 246 f を見よ。
【一五】四結。集異門足論八―同上本、p. 247 f 四身繫參照。
【一六】四識住。同上―同上本、p. 253 f 等參照。
【一七】住し。大正本等「作」に作るも、宋元明三本により、暫く改め讀む。
【一八】四緣等。集異門足論八―同前本、p. 254 f「四愛」參照。

(12)何をか四業煩惱と謂ふ。(a)殺生業煩惱・(b)竊盜業煩惱・(c)邪婬業煩惱・(d)妄語業煩惱、是を四業煩惱と名づく。

(13)何をか[一九]四顚倒と謂ふ。(a)無常を常と謂ふの想顚倒・心顚倒・見顚倒、(b)苦を樂と謂ふの想顚倒・心顚倒・見顚倒、(c)無我を我と謂ふの想顚倒・心顚倒・見顚倒、(d)不淨を淨と謂ふの想顚倒・心顚倒・見顚倒、是を四顚倒と名づく。

(14)何をか四怖と謂ふや。王法怖・賊盜怖・火怖・水怖、是を四怖と名づく。

(15)何をか復、四怖有りと謂ふ。老怖・病怖・死怖・惡趣怖、〔是を復、四怖有りと名づく〕。

(16)何をか復、四怖有りと謂ふ。波怖・濤涌怖・洄澓怖・[二〇]失收摩羅怖(秦には鰐魚と言ふ)〔是を復四怖有りと名づく〕。

(17)何をか復、四怖有りと謂ふ。自衰怖・誹謗怖・孤遺怖・無子怖、是を復、四怖有りと名づく。

(18)何をか四の退轉法と謂ふ。世尊の說くが如し——「。四の退轉法なり。何をか四と謂ふ。(a)比丘あり、瞋恚を尊重して、正法を尊重せず・(b)憎嫉を尊重して正法を尊重せず、(c)利養を尊重して、正法を尊重せず、(d)恭敬を尊重して、正法を尊重せざるなり。

瞋恚と憎嫉と　利養と恭敬と
是の如きを尊重せば、比丘は道を失ふ。
良田の敗種にして　善法を生ぜず。

是を四退轉法と名づく(四法竟り)。

[二二](1)何をか[二三]五欲と謂ふ。眼[二四]〔所〕識の色の愛・喜・適意・愛色・欲染・相續、耳・鼻・舌・身・識・觸も亦是の如く說く、是を五欲と名づく。

(2)何をか[二五]五蓋と謂ふ。欲染蓋・瞋恚・睡眠・掉悔・疑蓋、是を〔p.652a〕五蓋と名づく。

【一九】四顚倒。大集法門經四法の三四、その他參照(顚倒。—Viparyāsa)

【二〇】失收摩羅。Siśumāra. 鰐魚のこと。

【二一】秦に等。宋元明三本には鰐を鰐に、又、宮本には鰐に作る。

【二二】何をか以下。五法二十一組を釋す。

【二三】五欲。集異門足論十一毘曇部二、p. 22 f. の五妙欲參照。

【二四】眼「所」知以下。毘曇部十九、p. 80 の註を見よ。

【二五】五蓋。集異門足論十二、初(同上本、p. 30 ff.)參照。

(3)何をか[二六]五下分煩惱と謂ふ。身見・疑・戒盜・欲染・恚、是を五下分煩惱と名づく。
(4)何をか[二七]五上分煩惱と謂ふ。色染・無色染、無明・慢・掉、是を五上分煩惱と名づく。
(5)何をか[二八]五道と謂ふ。地獄・畜生・餓鬼・人・天、是を五道と名づく。
(6)何をか[二九]五心荒と謂ふ。(a)如し比丘あり、世尊を疑惑して信ぜず、度せず、解せず。比丘の心に世尊を疑惑し、心に信ぜず、度せず、解せず已りて、比丘の心は世尊に向はず、信ぜず、親近せず、解せずし已る、此を初の心荒と謂ふ。(b)法・(c)僧も亦是の如し。(d)復次に比丘ありて、戒に缺行・荒行・垢行有り。比丘の戒に缺行・荒行・垢行あり已りて、比丘の心は戒に向はず、信ぜず、親近せず、解せず。比丘の戒に向はず、信ぜず、親近せず、解せずし已る。是を四の心荒と名づく。(a)復次に比丘あり、心の諸の淨梵行者を惱害し、心荒にして信ぜず、毀罵・惡言し、諸梵淨行者を輕謗す。比丘の諸の梵淨行を惱害し、諸の惱害あり、心荒にして不信に於て毀罵・惡言し、諸の梵淨行者を輕謗し已りて、比丘の心は諸の梵淨行者に向はず、信ぜず、親近せず、解せず。比丘の心の諸の梵淨行者に向はず、信ぜず、親近せず、解せずし已る、是を五の心荒と名づく。
(7)何をか[三〇]五心縛と謂ふ。(a)如し比丘あり。身に染を離れず、欲を離れず、愛を離れず、渇を離れず、燋熱を離れず。比丘の染を離れず、欲を離れず、愛を離れず、渇を離れず、燋熱を離れずし已り、比丘の心は勤進・信・寂靜・斷結に向はず。比丘の、勤精進・信・寂靜・斷結に向はずし已る、此を初の心縛と謂ふ。(b)復次に比丘あり、色欲等の樂を勤行し、(c)臥具睡眠の樂を勤行す。比丘の色欲等の樂を勤行し、臥具睡眠を勤行し已りて、比丘の心は勤精進・正信・寂靜行・斷結に向はず。比丘の心の勤精進・正信・寂靜行・斷[三一]結に向はずして已る、是を第二・第三の心縛と名づく。(d)復次に比丘あり、少進を得て便ち住し、上求して未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲せず。比丘の少進を得て、便ち住し、上求して未だ得ざるを得

[二六] 五下分煩惱。同上十二—同上本、p. 51 ff 五順下分結參照。
[二七] 五上分煩惱。同上、p. 52 ff 五順上分結參照。
[二八] 五道。集異門足論十一—同上本、p. 26 ff 五趣參照。
[二九] 五心荒。同上十二、—同上本、p. 32 ff 五心栽參照。
[三〇] 五心縛。集異門足論十二—同上本 p. 40 ff 五心縛參照。
[三一] 結。宋元明宮の四本によりて補入。

むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲せずして已りて、比丘は勤精進・正信・寂靜行・〔p.652b〕斷結に向はず。比丘の心の勤精進・正信・寂靜行・斷結に向はずして已る。是を第四の心纒と名づく。(b)復次に比丘あり、種種の天上に生ぜむことを悕望するが故に、梵淨行を行ずらく、我は此の戒道・苦行・梵淨行を以てす。我をして天王と作り、或は輔臣と作らしめよと。比丘の種種の天上に生ぜむことを悕望するが故に、梵淨行を行ずらく、我は此の戒道・苦行・梵淨行を以てす。我をして天王と作り、或は輔臣と作らしめよとし已りて、比丘の心は勤精進・正信・寂靜行・斷結に向はず。比丘の心の勤精進・正信・寂靜行・斷結に向はずして已る、是を五の心纒と名づく。

(8)何をか五怖と謂ふ。(a)若し殺生せば殺生を緣とするが故に現世に於て怖あり、未來世に怖あり。(b)竊盜・(c)邪婬・(d)妄語・(e)飮酒放逸の處の怖も亦是の如し。是を五怖と名づく。

(9)五[三三]怨も亦是の如し。

(10)何をか[三四]五無間と謂ふ。父を殺すの無間、母を殺すの無間、阿羅漢を殺すの無間。衆僧を破するの無間、惡心もて佛身血を出すの無間、是を五無間と名づく。

(11)何をか五犯戒と謂ふ。(a)殺生・(b)盜竊・(c)邪婬・(d)妄語・(e)飮酒放逸、是を五犯戒と名づく。

(12)何をか五非法語と謂ふ。非時語・無實語・無義語・非法語・不調順語、是を五非法語と名づく。

(13)何をか五不樂と謂ふ。(a)獨處を樂はず・(b)出世を樂はず・(c)寂靜を樂はず・(d)梵行を樂はず・(e)諸の善法を樂はざる、是を五不樂と名づく。

(14)何をか五憎惡と謂ふ。(a)自の親に親しまず・(b)應に呵すべからざるを横に呵し・(c)數、白衣の家に到り・(d)常に喜むで多語し・(e)好むで同求を行ずる、是を五憎惡と名づく。

(15)何をか五瞋恚本法と謂ふ。作礙・觸惱・瞋恚・諍訟・專執、是を五瞋恚本法と名づく。

【三三】怨。宋元明宮の四本には恐に作る。
【三四】五無間。巴、Pañca ānantarī kāni — 毘崩伽の小事分別中その他參照。

(16)何をか五憂本法と謂ふ。憂・悲・苦・惱・衆苦、是を五憂本法と名づく。

(17)何をか五嫉妬と謂ふ。(a)舍宅嫉妬・(b)豪族嫉妬・(c)利養嫉妬・(d)名聞嫉妬・[三四](e)恭敬嫉妬、是を五嫉妬と名づく。

(18)何をか五緣もて睡眠ありと謂ふ。缺呿・瞢憒・不樂・身重・心の沈〔p.652Cn〕沒、是を五緣もて睡眠あると名づく。

(19)何をか犯戒の五過患と謂ふ。(a)自ら衰損を招き・(b)他の爲に呵責せられ・(c)惡名を流布し・(d)死時に悔有り・(e)沒に惡道に墮す。是を犯戒の五過患と名づく。

(20)何をか復、犯戒の五過患有りと謂ふ。犯戒を緣とするが故に・(a)未だ得ざるの財物を得ず・(b)已に得たるの財物を欺奪せられ・(c)若し刹利衆・婆羅門衆・居士衆・歡門衆の中に至りて心に恐懼を懷き・(d)沙門・婆羅門の爲に遠く過惡と稱せられ、(e)身壞命終し便ち惡道に墮す。是を犯戒五過患と名づく。

(21)何をか五不敬順と謂ふ。父・母・沙門・婆羅門・尊長を敬順せざる、〔是を五〕不敬順と〔名づく〕五法竟り。

(1)何[三五]をか[三六]六の食に依る喜と謂ふ。眼識の色の愛・喜・適意・愛色・欲染相續を現に得、當得を希望し、曾得は過去に變滅せるを憶念して喜を生ずる、此を初の食に依る喜と謂ふ。耳・鼻・舌・身・意も亦是の如し。是を六の食に依る喜と名づく。

(2)何[三七]をか六の食に依る憂と謂ふ。眼識の色の愛・喜・適意・愛色・欲染相續を現在に得ず、未來に得ざるを恐れ、曾得は過去に變滅せるを憶念して憂を生ずる、是を初の食に依る憂と名づく。耳・鼻・舌・身・意も亦是の如し。是を六の食に依ると名づく。

(3)何[三八]をか六の食に依る捨と謂ふ。凡夫人は眼に色を見て捨を生じ、癡なること、小兒の如く、過

【三四】恭敬嫉妬。明本に從つて補入。
【三五】何をか等。六法十一組を釋す。
【三六】六の等。毘曇部十九、p. 80 參照。
【三七】例を等。同上下參照。
【三八】六の等。同上。

恚を觀ぜず、果報を知らず。是の如く色を知らず、分別せずして、便ち捨ある、是を初の食に依る捨と名づく。耳・鼻・舌・身も亦是の如し。是を六の食に依る捨と名づく。

(4)何をか六染と謂ふ。色中に於ける染、聲・香・味・觸・法中の染、是を六染と名づく。

(5)何をか六樂と謂ふ。色の中に於ける樂、聲・香・味・觸・法の中の樂、是を六樂と名づく。

(6)何をか復、六樂有りと謂ふ。諸業を樂み、語を樂み、睡眠を樂み、聚集を樂み、居宅を樂み、調戲を樂む、是を復、六樂有りと名づく。

(7)何をか六愛と謂ふ。色・聲・香・味・觸・法の中の愛、是を六愛と名づく。

(8)何をか六恚と謂ふ。色・聲・香・味・觸・法の中の恚、是を六恚と名づく。

(9)何をか六鉤と謂ふ。色・聲・香・味・觸・法の中の鉤、是を六鉤と名づく。

(10)何をか六不護と謂ふ。色・聲・香・味・觸・法の中に於ける不護、是を〔p.653a〕六不護と名づく。

(11)[三九]何をか六諍根と謂ふ。[四〇]世尊の説くが如し、——諸比丘よ六諍根有り。應に當に解すべし。解し已りて勤修して斷ぜしめよ。何をか六と謂ふ。(a)比丘の瞋恚ありて、常に怨嫌を念じ、世尊に於て恭敬・尊重・讃歎せず。香花を以て供養せず。法僧も亦是の如し。戒に於て缺行・荒行・垢行す。諸比丘に告ぐ、若しは比丘の瞋恚ありて、常に怨嫌を念じ、衆僧中に於て瞋恚を起して共に諍ひ、諍を緣として、多くの衆生を損減せしめ、多くの衆生をして苦を受けしめ、天人を衰耗せしむ。諸比丘に告ぐ、是の如き不善諍根を、自他の未だ斷ぜざるを觀じ、當に共に和合して勤精進・勇猛し、應に不善の諍根を斷ずべし。諸比丘に告ぐ、是の如きの不善諍根を自他の斷ぜるを觀じ已りて、自心に專念して復、生ぜざらしむべし。是の如くして便ち不善諍根を斷ずることを得るを知る。(b)復次に、比丘の若しは恨を懷いて燋熱し・(c)若しは嫉妬・慳惜あり・(d)若しは諂欺・姦非あり・(e)若しは諸見を

【三九】六諍根。集異門足論十五—毘曇部二、p. 118 a参照。
【四〇】世尊等。同上中参照。

求めて、他人を誹謗し。常に憶して捨せず。(f)若しは邪見・邊見あるも亦是の如し。是を六諍根と名づく。六法覺り

(1)何[四一]をか七共染と謂ふ。若し女人あり、自ら女身・女形・女相・女服飾・女欲・女音聲・女瓔珞・を思惟し、女人の此の物に樂染す。此の物に樂染し已りて外の男身・男形・男相・男服飾・男欲・男音聲・男瓔珞を思惟し、女人の此の物に樂染す。此の物に樂染し已りて、和合を思惟す。和合を緣とするが故に喜樂を生じ、女身を貪著・愛樂す。和合を樂しみ已りて是の如きを以ての故に、常に[四二]女身を轉ずることを欲せず。男子あり、自ら若しは男身……を思惟し、乃至男身を轉ずることを欲せざるも亦是の如し、是を七共染と名づく。

(2)何をか[四三]七共欲染と謂ふ。一の好種姓の婆羅門有り、往いて如來の所に至る。到り已りて問訊し、却いて一面に坐し、世尊に問うて曰く、瞿曇沙門よ、自ら是れ梵淨行ありや不やと。世尊の、婆羅門と答うらく、若し正梵淨行者を言はゞ、我は是なり。何の緣を以ての故にとならば、婆羅門よ、我は梵淨行を缺さず、荒せず、垢穢せざればなりと。婆羅門の復問うらく、瞿曇沙門よ、梵淨行に荒・缺・垢穢ありやと。世尊の答へて曰く、梵淨行に、荒・缺・垢穢有りと。婆羅門の復問らく、云何が梵淨行に荒・缺・垢穢有ると。世尊の答うらく、(a)或は有る人の言く、我は是れ梵[p.653b]淨行者なりと。女人と交通せずと雖も、然れども、女人の澡浴・衣服・按摩・調身を受け、以て喜樂と爲し、以て氣味と爲す。婆羅門に告げて言ふ、是を共欲染と謂ふ。清淨の梵行に非ず。荒・缺・垢穢有りて、未だ生・老・病・死、憂・悲・苦・惱を脫せず、衆苦聚集す。我は此を未だ苦を脫せずと謂ふ。(b)復次に婆羅門よ、或は有る人の言く、我は是れ梵淨行者にして、女人と交通せず。女人の澡浴・衣服・按摩・調身を受けずと。然れども女人と親近して、言說・戲笑・調弄し、以て喜樂と爲し、以て氣味と爲す。婆羅門に告げて言ふ、是を共欲染と謂ひ、清淨の梵行に非ず。荒・缺・垢穢有りて未

【四一】何をか以下。七法十三種を釋す。
【四二】女身を轉ぜず云々。法華經の變生男子思想と想合すべし。
【四三】七共。宋元明宮の四本により補入。

だ生・老・病・死、憂・悲・苦・惱を脱せず、衆苦聚集す。我は此を未だ苦を脱せずと謂ふ。(c)復次に、婆羅門よ、或は有る人の言く、我は是れ梵淨行者にして、女人と交通せず、女人の澡浴・衣服・按摩・調身を受けず。女人に親近して言說・戲笑・調弄せずと。然れども女人と對目・相視して、以て喜樂と爲し、以て氣味と爲す。婆羅門に告げて言ふ、是を共欲染と謂ひ、淸淨の梵行者に非ず、荒・缺・垢穢有りて、未だ生・老・病・死、憂・悲・苦・惱を脱せず。衆苦聚集す。我は此を未だ苦を脱せずと謂ふ。(d)復次に婆羅門よ、或は有る人の言く、我は是れ梵淨行者にして、女人と交通せず、女人の澡浴・衣服・按摩・調身を受けず、女人に親近して言說・戲笑・調弄せず、女人と對目・相視せずと。然れども障外に女人の音聲・歌舞・語笑・啼哭を聞いて、以て喜樂と爲し、以て氣味と爲す。婆羅門に告げて言ふ、是を共欲染と謂ひ、淸淨の梵行に非ず、荒・缺・垢穢有りて、未だ生・老・病・死、憂・悲・苦・惱を脱せず、衆苦聚集す。我は此を未だ苦を脱せずと謂ふ。(c)復次に婆羅門よ、或は有る人の言く、我は是れ梵淨行者にして、女人と交通せず、女人の澡浴・衣服・按摩・調身を受けず、女人に親近して、言說・戲笑・調弄せず、女人と對目・相視せず、障外に女人の音聲・歌舞・語笑・啼笑を聞かずと。然れども、女人と曾て共に從事・戲笑・言語・相ひ娛樂せし時を憶念して以て喜樂と爲し、以て氣味と爲す。婆羅門に告げて言ふ、是を共欲染と名づけ、淸淨の〔p653c〕梵行者に非ず、荒・缺・垢穢ありて、未だ生・老・病・死、憂・悲・苦。惱を脱せず、衆苦聚集す。我は此を未だ苦を脱せずと謂ふ。(f)復次に婆羅門よ、或は有る人の言く、我は是れ梵淨行者にして、女人と交通せず、女人と親近して、澡浴・衣服・按摩・調身を受けず、女人と親近して言說・戲笑・調弄せず、女人と對目・相視せず、障外に於て音聲・歌舞・語笑・啼哭を聞かず、女人と曾て共に從事・戲笑・言語・相ひ娛樂せし時を憶念せずと。然れども、長者・或は長者子の以て五欲を以て具足して相ひ娛樂するの時を見て、以て喜樂と爲し、以て氣味と爲す。婆羅門に告げて言ふ、是を共欲染と名づけ、梵淨行者に非ず、荒・缺・

垢穢有りて、未だ生・老・病・死、憂・悲・苦・惱を脫せず、衆苦聚集す。我は此を未だ苦を脫せずと謂ふ。(g)復次に婆羅門よ、或は有る人の言く、我は是れ梵淨行者にして、女人と交通せず、女人の澡浴・衣服・按摩・調身を受けず、亦女人に親近して、言說・戲笑・調弄せず、女人と對目・相親せず、障外に於て、女人の音聲・歌舞・啼哭を聞かず、女人と曾て共に從事・戲笑・言語・相娛樂せし時を憶念せず、長者及び長者子の五欲を以て具足して相ひ娛樂するの時を見ずと。然れども、天上に生ぜむと願ふが故に、梵淨行を行ず。我は此の戒を以てし、此の道を以てし、此の苦・梵淨行を以てす。我をして天王と作り、或は輔臣と作らしめよと。以て喜樂と爲し、以て氣味と爲す。婆羅門に告げて言ふ。是を共欲染と謂ひ、清淨の梵行者に非ず、荒・缺・垢穢有りて、未だ生・老・病・死、憂・悲・苦・惱を脫せず、衆苦聚集す。我は此を未だ苦を脫せずと謂ふ。復次に婆羅門よ、此の七欲染を我の內心に觀じて、設し當に七共欲染の未だ斷ぜざるべくむば、我も亦自ら正梵淨行有りと說かず。婆羅門よ、我は七共欲染を斷ぜるを以ての故に、正梵淨行有りて、無所畏を得と說くと。是を七共欲染と名づく。

(3)何をか[44]七識住處と謂ふ。或は衆生の若干身・若干想なる有り。欲界の人或は天なり。此を初識住處と謂ふ。若しは衆生の若干身にして一想なる有り。若し初生の梵天なり。是を第二識住處と名づく。若しは衆生の一身にして若干想なる有り。光音天なり。是を第三識住處と名づく。或は〔p. 54a〕衆生の一身・一想なる有り。遍淨天なり。是を第四識住處と名づく。若しは衆生の無邊空處なる有り。此を第五識住處と名づく。若しは衆生の無邊識處なる有り。此を第六識住處と謂ふ。若しは衆生の無所有處なる有り、此を第七識住處と謂ふ。是を七識住處と名づく。

(4)何をか[45]七慢と謂ふ。慢・不如慢・勝慢・增上慢・我慢・邪慢・慢中慢、

何をか[46]慢と謂ふ。若し我の勝るとて心の彼に於て貢高ある、是を慢と名づく。

【四四】七識住處。集異門足論十七—毘曇部二、P. 159 ff.參照。

【四五】七慢。法蘊足論九—毘曇部三、P. 236 f. 參照。

【四六】慢。Māna.

何をか[四七]不如慢と謂ふ。彼の我に如かずとて心の彼に於て貢高ある、是を不如慢と名づく、何を[四八]勝慢と謂ふ、我と勝者と等しとて心に彼に於て貢高ある、是を勝慢と名づく。

何をか[四九]增上慢と謂ふ。未だ得起せざるに得想ありて心に彼に於て貢高ある、是を增上慢と名づく。

何をか[五〇]我慢と謂ふ。我に善法有りとて、心に彼に於て貢高ある、是を我慢と名づく。

何をか[五一]邪慢と謂ふ。若し善法無しとて心に彼に於て貢高ある、是を邪慢と名づく。

何をか[五二]慢中慢と謂ふ。若し他の慢を見て慢心を生じ、彼に於て貢高ある、是を慢中慢と名づく。

復次に、我慢とは、若し身[五三]見有る者の、心に彼に於て貢高を生ずる、是を我慢と名づく。

復次に、邪慢とは、若しは邪見有る者の、心は彼に於て貢高を生ずる、是を邪慢と名づく。

復次に、慢中慢とは、我(わが)勝中に勝に、貴中に貴なるに於いて、心に彼に於て貢高を生ずる、是を慢中慢と名づく。

——是を七慢と名づく。

(5)何をか七不敬と謂ふ。若しは佛を恭敬せず、法を恭敬せず、僧を恭敬せず、戒を恭敬せず、定を恭敬せず、慧を恭敬せず、善法を恭敬せざる、是を七不敬と名づく。

(6)何をか七漏と謂ふ。見斷漏・忍辱斷漏・新近斷漏・離斷漏・調伏斷漏・戒斷漏・思惟斷漏、是を七漏と名づく。

(7)何をか七怯弱法と謂ふ。殺生・竊盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・綺語是を七怯、弱法と名づく。

(8)何をか七動と謂ふ。(a)我は當有なり。(b)我は當無なり。(c)我色は當有なり。(d)我色は當無なり。(e)我想は當有なり。(f)我想は當無なり。(g)我非有想非無想は當有なりと、是を七動と名づく。

(9)七自恃・[一〇]七求・[一一]七横・[一二]七作・[一三]七生も亦是の如し、(七法覺り)

【四七】不如慢。法蘊足論等の卑慢(Ūnamāna)に當るか。
【四八】勝慢。Atimāna (法蘊論には過慢)。
【四九】增上慢。Abhimāna. (同上も同字)。
【五〇】我慢。Asmimāna (同上)。
【五一】邪慢。Mithyāmāna
【五二】慢中慢。法蘊足論の慢過慢(Skt. Mānātimāna)に當るか。(說明、可成り、異り)。
【五三】見。宋元明宮の四本によりて補入。

[五四](1)何をか[五五]世間八法と謂ふ。利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂・是を世〔p.654b〕八法と名づく。

(2)何をか[五六]八非聖語と謂ふ。若しは見ざるを見ると言ひ、見るを見ずと言ひ、聞かざるを聞くと言ひ、聞くを聞かずと言ひ、覺せざるを覺すと言ひ、覺するを覺せずと言ひ、識せざるを識すと言ひ、識するを識せずと言ふ、是を八非聖語と名づく。

(3)何をか[五七]八懈怠事と謂ふ。若しは懈怠の比丘有りて是の如く思惟すらく、我は今日聚落に入り乞食し已りて、我は麁細食を得るも充足せず。不足を以ての故に、我をして羸痩ならしめ、經行・坐禪を樂はず。我は眠臥を欲すと。懈怠の比丘は卽ち便ち眠臥して、勤進して、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲することを爲す能はず。是を初懈怠事と名づく。復次に、是の如く思惟すらく、我は今日、聚落中に入りて乞食し、麁細食を得て充足し、身體重妨にして、肉嚢に錢を盛るが如く、經行・坐禪を樂はず。我は眠臥を欲すと。懈怠の比丘は卽ち便ち眠臥し、勤進して、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲することを爲す能はず。此を第二懈怠事と謂ふ。復次に、懈怠の比丘あり、是の如く思惟すらく、我は今日、作務有りて疲懈せり。經行・坐禪を樂はず、我は眠臥を欲すと。懈怠の比丘は卽ち便ち眠臥し、勤進して、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲することを爲す能はず。此を第三懈怠事と謂ふ。復次に、懈怠の比丘あり、是の如く思惟すらく、我は明日、當に作務あるべく、身の當に疲懈すべし。便ち經行・坐禪を樂はず。我は今豫め眠臥すべしと。懈怠の比丘は卽ち便ち眠臥し、勤進して、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲することを爲す能はず。此を第四懈怠事と謂ふ。復次に、懈怠の比丘あり、是の如く思惟すらく、我は今日、行來して、身體疲極し、經行・坐禪を樂はず。我は眠臥を欲すと。懈怠の比丘は卽ち便ち眠臥し、勤進して、未だ

【五四】何をか等。以下八法四類を稱す。
【五五】世間八法。集異門足論十八—毘曇部二、P. 194 c八世法參照。
【五六】八非聖語。集異門足論十の二の四非聖語參照。
【五七】八懈怠事。同上十八—毘曇部二、P. 188 c參照。

得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲することを爲す能はず。此を第五懈怠事と謂ふ。復次に、懈怠の比丘あり、是の如く思惟すらく、我は明日當に行くべく、身の必ず疲極せむ。便ち經行・坐禪を樂はず。我は眠臥を欲すと。懈怠の比丘は卽ち便ち眠臥し、勤進して、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲することを爲す能はず、此を第六懈怠事と謂ふ。復次に、懈怠の比丘は、是の如く思惟すらく、我は今患苦あり。經行・坐禪を樂はず。我は眠臥を欲すと。懈怠の比丘は卽ち便ち眠臥し、勤進して、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲することを爲す能はず、此を第七懈怠事と謂ふ。復次に、懈怠の比丘あり、是の如く思惟すらく、我は患の差えて未だ久しからず。我身は羸弱にして經行・坐禪を樂はず。我は眠臥を欲すと。懈怠の比丘は、卽ち便ち眠臥し、勤進して、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲することを爲す能はず。是を八懈怠事と名づく。

(4) 何をか[五八]八難處あり、修梵行を妨ぐと謂ふ。佛有りて出世す。如來・無所著・等正覺・明行足爲・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊なり。寂靜・滅盡・離欲の法を說き、正趣にして涅槃に至るの道なるに、或は衆生有りて地獄處に在る、是を初の難處あり、修梵行を妨ぐと名づく。復次に、佛出世す。如來・無所著乃至佛・世尊なり。寂靜・滅盡・離欲の法を說き、正趣にして涅槃に至るの道なるに、或は衆生有りて、畜生處・餓鬼處・長壽天處、若しは邊地の愚癡人にして、若しは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の所不至處に在る、是を乃至、第五の難處あり、修梵行を妨ぐと名づく。復次に、佛出世す。如來・無所著乃至、佛世尊なり。寂靜・滅盡・離欲の法を說き、正趣にして涅槃に至るの道なるに、或は衆生有り、共に國中に生ずるも然も邪見・倒見あり。邪見・倒見の果報の純熟するが故に畢に地獄に生ずる。是を第六の難處あり、修梵行を妨ぐと名づく。復次に、佛

【五八】 八難處等。Aṣṭāv akṣaṇāḥ—cf. D. 33, 9, 4(3, p. 263 巴には九事に作り記す。普通はその八の方が多い。參照すべし)。

出世す。如來・無所著・乃至、佛・世尊なり。寂靜・滅盡・離欲の法を說き、正趣にして涅槃に至るの道なるに、或は衆生有り、共に國中に生ずるも然も聾盲瘖瘂にして、羊の如く、手に語相を現じて、善惡業報を說くを知らず。是を第七の難處あり、修梵行を妨ぐと名づく。復次に、佛出世せず。如來、乃至、佛・世尊と名けず。寂靜・滅盡・離欲の法・正趣・至涅槃の道を說かず。或は衆生有り、生じて、國中に在り、聾盲瘖瘂ならず、亦能く善惡業報を分別するも、然も佛世に値はず。〔是を第八の難處あり、修梵行を妨ぐと名づく〕。——是を八難處あり、修梵行を妨ぐと名づく。八法覺り

五九 何をか九若干法と謂ふ。若干界を緣とするが故に若干觸を生じ、若干觸を緣とするが故に若干受を生じ、若干受を緣とするが故に若干想を生じ、若干想を緣とするが故に若干覺を生じ、若干覺を緣とするが故に若干欲を生じ、〔p.655a〕若干欲を緣とするが故に若干利養を生じ、若干利養を緣とするが故に若干求を生じ、若干求を緣とするが故に若干燋熱を生ずる。是を九若干法と名づく。

(2)何をか九愛本法と謂ふ。愛を緣とするが故に求を生じ、求を緣とするが故に利養を生じ、利養を緣とするが故に所作を生じ、所作を緣とするが故に欲染を生じ、欲染を緣とするが故に堪忍を生じ、堪忍を緣とするが故に慳惜を生じ、慳惜を緣とするが故に積聚を生じ、積聚を緣とするが故に愛護・傷害・捶打・相繫閉・共鬪諍を生ずる、是を九愛本法と名づく。

(3)何をか 六〇 九衆生居と謂ふ。或は衆生有り、若干身・若干想あり。欲界の人・天なり。此を初衆生居と謂ふ。或は衆生有り、若干身にして一想あり。謂く初生の梵天なり。此を第二衆生居處と謂ふ。或は衆生有り、一身にして若干想あり。謂く光音天なり。此を第三衆生居處と謂ふ。或は衆生有り、一身・一想なり。謂く遍淨天なり。此を第四衆生居處と謂ふ。或は衆生有り、無受・無想なり。謂く無想天なり。此を第五衆生居處と謂ふ。或は衆生有り、無邊空處なり。此を第六衆生居處と謂ふ。或は衆生有り、無邊識處なり。此を第七衆生居處と謂ふ。或は衆生有り、無所有處なり。

【五九】何をか以下。九法四種を明かす。

【六〇】九衆生居。集異門足論十九—毘曇部二、p. 216 f.參照。

此を第八衆生居處と謂ふ。或は衆生有り、非想非非想處なり。〔是を第九衆生居處と謂ふ〕。是を第九衆生居處と名づく。

(4)何をか犯戒の九過患と謂ふ。悔・不悅・不喜・不除・心苦・散・亂・不如實知見・不解射・不方便、是を犯戒の九過患と名づく。九法覺り

巻の第二十〔p.655b〕

非問分煩惱品　第十一【其の三】

(1)何をか十煩惱使と謂ふ。見煩惱使・疑煩惱使・戒道煩惱使・愛煩惱使・瞋恚煩惱使・嫉妬煩惱使・慳惜煩惱使・無明煩惱使・憍慢煩惱使・掉煩惱、是を十煩惱使と名づく。

(2)何をか十煩惱結と謂ふ。見煩惱結・疑煩惱結・戒盜煩惱結・欲染煩惱結・瞋恚煩惱結・色染煩惱結・無色染煩惱結・無明煩惱結・慢煩惱結・掉煩惱結、是を十煩惱結と名づく。

(3)何をか十想と謂ふ。欲想・瞋恚想・害想・貪想・諍論想、此の[一]內外想・國土想・卑想・不善想・若干想・依貪想、是を十想と名づく。

(4)何をか十覺と謂ふ。瞋恚覺・害覺・親里覺・國土覺・不死覺・他不覺・識相應覺・無慈相應覺・依利養覺・依貪覺、是を十覺と名づく。

(5)何をか十邪法と謂ふ。邪見・邪覺・邪語・邪業・邪命・邪進・邪定・邪慧・邪解脫・邪智、是を十邪法と名づく。

(6)何をか十惱と謂ふ。(1)若しは已に侵されて惱心を生ずる、(2)今侵されて惱心を生ずる、(3)當に侵されむと欲して惱心を生ずる、([二]4……6……)、(7)若しは我愛喜(わが)・適意ならざる者を已に利益せられて惱心を生ずる、、(8)今利益せられて惱心を生ずる、(9)當に利益せられむと欲して惱心を生ずる(10)横(ほしいまま)に瞋りて惱心を生ずる、是を十惱と名づく。

(7)何をか[三]十不善業道と謂ふ。殺生・竊盜・邪婬・妄言・惡口・兩舌・綺語・貪恚・邪見、是を十不善業道と名づく。

(8)何をか十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること積鉾の如しと謂ふ。殺生、乃至、邪

【一】內。宋元明宮の四本にはこの字無し。

【二】(4)……。恐らく、こゝは左の如くなるべきを脱落せるものなるべし。——(4)我愛喜・適意の者を已に侵されて惱心を生ずる、(5)今に侵されて惱心を生ずる、(6)當に侵されむと欲して惱心を生ずる——。

【三】十不善業道。巴、Dasa akusala-kammapathā. D. 33, X, 3; D. 34, 2, 3(V); do. 参照。

兄、此は十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること稍〔p.655c〕鉾の如しとなり。十法覺り

何をか十一心垢と謂ふ。(1)疑は是れ心垢、(2)不思惟は是れ心垢、(3)怖は是れ心垢、(4)悲は是れ心垢、(5)惡は是れ心垢、(6)睡眠は是れ心垢、(7)過精進は是れ心垢、(8)軟精進は是れ心垢、(9)無能は是れ心垢、(10)若干想は是れ心垢、(11)著色は是れ心垢なり。

(1)何ぞ疑は是れ心垢なりと謂ふ。或は人有り、過去を緣じて疑ふらく、或は我過去は有なりや。我過去は非有りや。何の姓か我過去の有なる。何の因か我過去の有なると。若しは未來を緣じて、疑惑すらく、我未來は有なりや。我未來は非有なりや。何の姓か我未來の有なる。何の因か我未來の有なると。若しは現在を緣じて疑惑すらく、我現在は有なりや。我現在は非有なりや。何の姓か現在の有なる。何の因か現在の有なる。諸の衆生は何の處よりか來る。何の處に至りてか去ると。〔四〕若しは彼の佛・世尊に於て疑惑すらく、是は佛・世尊なりや佛に非ざるや。世尊は善く說法するや。世尊は善く說法するに非ざるや。世尊の聲聞衆は善趣なりや。世尊の聲聞衆は　善趣行に非ざるや。常行なりや、非常行なりや。苦行ありや、非苦なりや。無我法ありや、無我法に非ざるや。寂滅涅槃ありや。寂滅涅槃非ざるや。與有りや。與無きや。施有りや。施無きや。祀有りや、祀無きや。善惡業と果報と有りや、善惡業と果報と無きや。今世有りや、今世無きや。後世有りや、後世無きや。父母有りや、父母無きや。天有りや、天無きや。衆生に化生有りや、衆生に化生非ざるや。世に沙門・婆羅門の正趣・正至にして、若し今世・後世を自ら證知して說くものありや。世に沙門・婆羅門の正趣・正至にして若し今世・後世を自ら證知して說くもの無きやと。若しは彼の法に於て、疑惑し、重疑惑し、究竟疑惑し、心の決定せず、猶豫・二心・疑あり、無量の疑を了せず、非解脫を盡くさず、猶豫し、重猶豫し、究竟猶豫する、是を疑は是れ心垢なりと名づく。

(2)何ぞ不思惟は是れ心垢なりと謂ふ。若しは色・聲・香・味・觸法、若しは衆生及び法、正しく計

〔四〕去るとの下。現在を緣じての全文を今一度、原漢譯には繰返すも、全然衍文として今は削除した。

校・分別・籌量・憶念せざる、是を不思惟は是れ心垢なりと名づく。

(3)何ぞ怖は是れ心垢なりと謂ふ。色・聲・香・味・觸法、若しは衆生及び法、此らを緣じて畏怖し、究竟[p. 656a]畏怖し、驚愕し毛は竪ち色は變ずる、是を怖は是れ心垢なりと名づく。

(4)何ぞ悲は是れ心垢なりと謂ふ。若しは不善心の悲を起す。是を悲は是れ心垢なりと名づく。

(5)何ぞ惡は是れ心垢なりと謂ふ。身・口・意の惡、是を惡は是れ心垢なりと名づく。

(6)何ぞ睡眠は是れ心垢なりと謂ふ。若し煩惱を未斷なれば、沈沒・在睡して身の不樂あり、身の不調あり、身の不輕あり、身の不軟あり、身の不除あり。是を睡と名づく。若しは睡若しは煩惱の未斷なれば、沈沒在睡して、若しは睡を欲し、瞪瞢にして、眠が心を鎭む。是を眠と名づく。――是の如きの睡眠、是を睡眠は是れ心垢なりと名づく。

(7)何ぞ過精進は是れ心垢なりと謂ふ。若し精進掉ある、是を過精進は是れ心垢なりと名づく。

(8)何ぞ軟精進は是れ心垢なりと謂ふ。若し精進の沒する、是を軟精進は是れ心垢なりと名づく。

(9)何ぞ無能は是れ心垢なりと謂ふ。若し心怯弱なる、是を無能は是れ心垢なりと謂ふ。

(10)何ぞ若干想は是れ心垢なりと謂ふ。若しは衆生異・事異・境界異・初生異、是を若干想は是れ心垢なりと名づく。

(11)何ぞ著色は是れ心垢なりと謂ふ。若し色を見て專著する、是を著色は是れ心垢なりと名づく。

――是を十一心垢と名づく。

何をか二十種の身見と謂ふ。或は人有りて謂く、色は是れ我なり。色中に我有り。我は是れ色の有なり。色は是れ我有(わが)なりと。受・想・行・識も亦是の如し。是を二十種の身見と名づく。

何をか二十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること穳鉾の如しと謂ふ。(1)自ら殺生し、(2)他に殺生を殺せしめ、[五]乃至、(19)自ら邪見あり、(20)他に敎へて邪見あらしむる、此は二十法を

【五】乃至。前の十不善業道同様の項目についてすべて同様の見方を施す心。

成就すれば地獄に墮することの速かなること積鉾の如しとなり。

何をか二十一心垢と謂ふ。(1)希望は是れ心垢なり。(2)瞋恚・(3)睡眠・(4)掉悔・(5)疑・(6)惱害・(6)(7)常怨嫌を念ず、(8)懷恨・(9)燋熱・(10)嫉妬・(11)慳惜・(12)詭詐・(13)姦欺・(14)無慚・(15)無愧・(16)矜高・(17)諍訟・(18)自高・(19)放逸・(20)慢・(21)增上慢〔は心垢〕なり。是を二十一心垢と名づく。

何をか三十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること積鉾の如しと謂ふ。(1)自ら殺生し、(2)他に敎へて殺生せしめ、(3)殺生を讃歎し、乃至、(28)自ら邪見あり、(29)他に敎へて邪見あらしめ、(30)邪見を讃歎する、是を三十法を成就すれば、地獄に墮することの速かなること積鉾の如しと名づく。

何をか[六]三十六愛行と謂ふ。內生の十八愛行と外生の十八〔p.656b〕愛行となり。

何をか內生の十八愛行と謂ふ。世尊の說くが如し、——(1)此を因として此有り。(2)彼を因として而も有り。(3)是の如きの因有り。(4)異因有り。(5)當に因有るべし。(6)當[七]に因有らざるべし。(7)我は當に有るべし。(8)彼の我は當に有るべし。(9)是の如きの我は當に有るべし。(10)異我は當に有るべし。(11)因得あり。(12)彼得あり。(13)是の如きの得あり。(14)異得あり。(15)悕望は當に有るべし。(16)悕望は彼、當に有るべし。(17)悕望は是の如く當に有るべし。(18)悕望異、當に有るべしと。——是を內生の十八愛行と名づく。

何をか外生の十八愛行と謂ふ。世尊の說くが——如し(1)是れ此に因りて此有り。(2)是れ彼に因りても而も有り。(3)是れ是の如きの因有り。(4)是れ異因有り。(5)是れ當に因有るべし。(6)是れ當に因有るべからず。(7)是れ我は當に有るべし。(8)是れ彼我、當に有るべし。(9)是れ是の如きの我、當に有るべし。(10)是れ異我、當に有るべし。(11)是れ因得あり。(12)是れ如得なり。(13)是れ是の

【六】三十六愛行。本論卷四問分四聖諦品第四—毘曇部十九、p. 116 a 參照。

【七】當。宋元明宮四本には常に作る。

如きの得あり。(14)是れ異得あり。(15)是れ希望は當に有るべし。(16)是れ希望は彼、當に有るべし。(17)是れ希望は是の如く當に有るべし。(18)是れ希望の異、當に有るべしと。是を外生の十八愛行と名づく。

——是の如きの內生の十八愛行と、是の如きの外生の十八愛行と、是を三十六愛行と名づく。

何をか四十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること穳鉾の如しと謂ふ。(1)自ら殺生し、(2)他に敎へて殺生せしめ、(3)殺生を讃歎し、(4)他の殺を見て隨つて其を歡喜する、乃至、(37)自ら邪見あり、(38)他に敎へて邪見あらしめ、(39)邪見を讃歎し、(40)他の邪見を見て隨つて其を歡喜する・是を四十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること穳鉾の如しと名づく。

何をか六十二見と讃ふ。[八]梵網經の說の如し——佛の諸比丘に告ぐらく、[九]更に餘法有り、甚深・微妙の大法にして光明あり。唯、賢聖弟子有りて能く此の法を以て如來を讃歎す。何等か是れ甚深・微妙の大法にして光明あり、賢聖の弟子のみ能く、此の法を以て、如來を讃歎する。諸の沙門・婆羅門あり、[一〇]本劫・[一一]本見・[一二]末劫・末見に於て、種種無數に意に隨つて說く所は盡く六十二見に入る。本劫・本見・末劫・末見にて、種種無數に意に隨つて說く所は盡く六十二見を出過すること能はず。彼の沙門・婆羅門は何等の緣を以てか本劫・本見・末劫・末見に於て、種種無數に各意に隨つて說いて盡く此の六十二見に入り、能く過ぐるもの有ること無きや。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に於て、種種無數に各、意に隨ひて說いて盡く十八見中に入り、本劫・本見にて、種[p. 656c]種無數に名、意に隨ひて說いて盡く皆、十八見中を過ぐること能はず。諸の沙門・婆羅門は何等の緣を以て本劫・本見に於て、種種無數に各、意に隨ひて說いて盡く十八見中に入り、能く過ぐるもの有ること無き。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に於て、[一三]常論を起し言く、我及び世間は常に存すと。此は盡く四見中に入り、本劫・本見に於て言く、我及び世間は常に存すと。盡く四見中に入りて、能く過ぐるもの有ること無

【八】梵網經。長阿含21、梵動經＝支謙譯梵網六十二見經＝D. 1. Brahmajālasuttanta 等參照。

【九】更に等。大正 vol. 1. p. 89cff; D. vol. 1. p. 12 § 28 ff 參照（殊に長阿含の文とは殆ど一言一句相應する趣を見る。或は幾分同經を、參考する所ありしものか）。

【一〇】本劫。巴、Pubbantakappikā.

【一一】本見。同、Pubbantānudiṭṭhino.

【一二】末劫末見。巴、不見。長にはこれ有り。

【一三】常論。巴、Sassatavādā.

し。諸の沙門・婆羅門は何等の縁を以てか本劫・本見に於て、常論を起して言く、我及び世間は常に存すと。此は盡く四見中に入つて能く過ぐるもの有ること無き。或は沙門・婆羅門有り、種種方便して定意三昧に入り、三昧心を以て、二十の[一四]成劫・[一五]敗劫を憶ひ、彼の是の說を作さく、我及び世間は是れ常なり、——此れは實にして餘は虛妄なり。所以は何。我は種種の方便を以て、定意三昧に入り、三昧心を以て、二十の[一六]成劫・[一七]敗劫を憶ふに其の中の衆生は不增・不減にして、常に聚して散せず。我此を以て知る、我及び世間は是れ常なり——此は實にして餘は虛妄なりと。此は是は初の見なり。諸の沙門・婆羅門は此に因りて、本劫・本見に於て、我及び世間は是れ常なりと計し、四見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。或は沙門・婆羅門有り、種種方便して、[一八]定意三昧に入り、三昧心を以て、四十の成劫・敗劫を憶ひ、彼の是の說を作さく、我及び世間は是れ常なり——此は實にして餘は虛妄なり。所以は何。我は種種の方便を以て、定意三昧に入り、三昧心を以て、四十の成劫・敗劫を憶するに、其の中の衆生は不增不減にして、常に聚して散せず。我は此を以て知る、我及び世間は是れ常なり、——此は實にして餘は虛妄なりと。此は是れ二見なり。諸の沙門・婆羅門は此に因つて、本劫・本見に於て、我及び世間は是れ常なりと計し、四見中に於て、能く過るもの有ること無し。或は沙門・婆羅門有り、種種の方便を以て定意三昧に入り、三昧心を以て、八十の成劫・敗劫を憶し、彼の、是の言を作さく、我及び世間は是れ常なり——此は實にして餘は虛妄なり。所以は何。我種種の方便を以て、定意三昧に入り、三昧心を以て八十の成劫・敗劫を憶するに、其の中の衆生は不增・不減にして、常に聚して散せず。我は此を以て知る、我又び世間は是れ常なり、——此は實にして餘は虛妄なりと。此は是れ三の見なり。諸の沙門[p. 657a]・婆羅門は此に因りて本劫・本見に於て我及び世間は是れ常なりと計し、四見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。或は沙門・婆羅門有り、捷疫相智有りて、善く能く觀察し、捷疾相智を以て方便觀察し謂ひて審諦と爲し、

【一四】成劫。世界成立の關係時間二十劫で、詳細は論集部一、拙譯立世毘曇部中を見よ。
【一五】敗劫。同上、世界の壞する關係時間二十劫で、同上中參照（普通は壞劫といふ）。
【一六】成劫。巴、Samvaṭṭa-Kappa.
【一七】敗劫。巴、Vivaṭṭa-Kappa.
【一八】定意三昧。巴、Ceto-Samādhi.

己の所見を以て、己の辯才を以て、是の說を作して言く、我及び世間は是れ常なり、——此は實にして餘は虛妄なりと。此は是れ四の見なり。諸の沙門・婆羅門は此に因つて、本劫・本見に於て、我及び世間は是れ常なりと計し、四見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。

此の沙門・婆羅門は本劫・本見に於て、我及び世間は是れ常なりと計す。是の如きは一切、盡く四見中に入る。我及び世間は是れ常なりと。此の四見中に於て能く過ぐるもの有ること無し。唯、如來有りて、是の見處を是の如く持し、是の如く執するを知り、亦報應を知る。如來の知る所は、又、復、是に過ぐ。知ると雖も若せず。著せざるを以て則ち寂滅を得。愛の集・滅・味・過・出要を知り、平等觀を以て、餘無く解脫す。故に如來と名づく。是を餘に甚深・微妙の大法の光明あり、賢聖の弟子をして、眞實平等に如來を讚歎せしむと名づく。

復、餘の甚深・微妙の大法の光明有り、賢聖の弟子をして、眞實平等に如來を讚歎せしむ。何等の法か是なる。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に於て論を起して言く、我及び世間は[一九]亦常亦無常なりと。諸の沙門・婆羅門は此に因つて、本劫・本見に於て我及び世間は半常半無常なりと計す。四見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。[二〇]或は是の時有りて此の劫始めて成る。餘の衆生有り、福盡き命盡き行盡きて光音(天)より命終して空梵得の中に生じ、便ち彼處に於て愛著心を生じ、復、餘の衆生の共に此の處に生ぜむことを願ふ。此の衆生は既に愛著と願とを生じ已りて復、餘の衆生有り、命・行・福盡きて光音(天)に於て命終し、來つて此の空梵宮中に生ず。其の先生の衆生の便ち是の念を作さく、我は此の處に於て、是れ梵なり、大梵なり、我は自然に有りて、能く我を造る者無し。我は盡く諸の義を知り、千世界を典し、中に於て自在なり。最も尊貴と爲す。能く變化を爲し微妙第一なり。衆生の父なり。我は獨り先に有り。餘の衆生は後に來る。後來の衆生は我が化成する所なりと。其の後の衆生は復、是の念を作さく、彼は是れ大梵なり。彼は能く自ら造る。彼を造

【一九】亦常亦無常。巴、Ekaccaṃ sassataṃ, ekaccaṃ asassataṃ

【二〇】或は以下。詳細、立世毘曇中等を見るべし。

る者無し。盡く諸〔p.657b〕の義を知り、千世界を典し、中に於て自在なり。最も尊貴と爲す。能く變化爲し、微妙第一なり。衆生の父[二一]母たり。彼は獨り先に有りて後に我等有り。我等衆生は彼が化成する所なりと。彼の梵衆生は命・行の盡き已りて[二二]此の間に來生す。漸く已に長大し、鬚髮を剃除し、出家して法服を破り、[二三]梵志行を修し、定意三昧に入り、三昧心に隨つて、自ら本生を識り、便ち是の言を作さく、彼の大梵は能く自ら造作して、彼を造る者無し。盡く諸義を知り、千世界を典し、中に於て自在なり。最も尊貴と爲す。能く變化を有し、微妙第一にして衆生の父たり、常住不變なり。而も彼の梵は我等を化作す。我等は無常・變易して久しく住することを得ず。是の故に當に知るべし、我及び世間は亦常・亦無常なり、——此は實にして、餘は虚妄なりと。是を初の見と謂ふ。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因りて論を起さく、亦無常亦無常なりと。此の四見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。或は衆生有り、喜むで戲笑・懈怠し、數數、戲笑し以て自ら娛樂す。戲笑・娛樂の時、身體疲極し、便ち自ら意を失す。意を失するを以ての故に、便ち命終して此の間に來生し、漸く已に長大し、鬚髮を剃除し、出家して法服を被り、梵志行を修し、定意三昧に入り、三昧力を以て自ら本生を識り、便ち是の言を作さく、彼の餘の衆生は數數、戲笑娛樂せず。常に彼の處に在り常住・不變なり。我は數數・戲笑するに由るが故に、此の無常變易法を致す。是の故に知る、我及び世間は亦常亦無常なり。——此は實にして餘は虚妄なるを。是を第二の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因りて論を起さく、我及び世間は亦常亦無常なりと。此の四見中に於て能く過ぐるもの有ること無し。或は衆生有り、展轉して相ひ視、相ひ視已りて便ち自ら意を失し、此に由つて命終して此の間に來生し、漸く已にして長大し、鬚髮を剃除して出家し法服を被り、梵志行を修し、定意三昧に入り、三昧力を以て本の所生を識り、便ち是の言を作さく、彼の衆生の如きは、展轉して相ひ視ず、意を失せざるを以ての故に、常住・不變なり。我等の數數、相ひ視るに由

【二一】母。衍字。宋元明宮の四本、何れも缺く。
【二二】此の間。欲界のこと。
【二三】梵志。Brāhmaṇa（婆羅門）。

るが故に便ち意を失して此の無常・變易法を致す。我は是を以て知る、我及び世間は亦常亦無常なり——此は實にして餘は虚妄なるをと。是を第三見と名づく。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因りて論を起さく、我及び世間は亦〔p. 657c〕常亦無常なりと。此の四見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。或は沙門・婆羅門有り、捷疾相智もて善く能く觀察す。捷疾相智を以て觀察し已りて言く、我及び世間は亦常亦無常なり——此は實にして餘は虚妄なりと。是を第四の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因りて論を起さく、我及び世間は亦常亦無常なりと。——此の四見中に於て能く過ぐるもの有ること無し。

諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に於て論を起さく、我及び世間は亦常亦無常なりと。——盡く四見中に入り能く過るもの有ること無し。唯、佛のみ能く此の見處を是の如く持し、是の如く執するを知り亦、報應を知る。如來の所知は復是に過ぐ。知ると雖も著せず。著せざるを以て則ち寂滅を得。愛の集・滅・味・過・出要を知り、平等觀を以て、餘無く解脱するが故に如來と名づく。是を餘の甚深・微妙の大法の光明あり、賢聖の弟子をして如來を讃歎せ使むと名づく。

復、餘の甚深・微妙の大法の光明有り、賢聖の弟子をして、眞實平等に如來を讃歎せむ。何等か是の法なる。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に於て論を起さく、我及び世間は[二四]有邊無邊なりと。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因りて論を起さく、我及び世間は有邊無邊なりと。——此の四見中に於て能く過ぐるもの有ること無し。(1)或は沙門・婆羅門有りて、種種の方便もて、定意三昧に入り、三昧力を以て、世間を觀じ[二五]邊想を起す。彼の是の說を作さく、此の世間は有邊なり。是は實にして餘は虚妄なり。所以は何。我種種の方便を以て、定意三昧に入り、三昧力を以て觀ずるに、世間は有邊なり。是の故に知る、世間は有邊なり。此は實にして餘は虚妄なるをと。是を初の見と名づく。(2)諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因つて論を起さく、我及び世間は有邊なりと。——四見中に於て、

【二四】有邊無邊。巴、antānantaṃ lokassa.

【二五】邊想。巴、Antavā ayaṃ loko.（この世界は有邊なり）。

能く過ぐるもの有ること無し。或は沙門・婆羅門有り、種種の方便もて定意三昧に入り、三昧力を以て、世間を觀じて、[26]無邊想を起し、彼の、是の言を作さく、世間は無邊なり、――此は實にして餘は虚妄なり。所以は何。我種種の方便を以て、定意三昧に入り、三昧力を以て觀ずるに、世間は無邊なり。是の故に知る、世間は無邊なり、――此は實にして餘は虚妄なるをと。是を第二の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因りて論を起さく、我及び世間は無邊なりと〔p. 658a〕。――此の四見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。(3)或は沙門・婆羅門有り、種種の方便もて定意三昧に入り、三昧力を以つて世間を觀じ、[27]上方は有邊、四方は無邊と觀じて、彼の是の言を作さく、世間は有邊無邊なり――此は實にして餘は虚妄なり。所以は何。我、種種の方便を以て、定意三昧に入り、三昧力を以て觀ずるに、上方は有邊、四方は無邊なり。是の故に知る、我は世間は有邊無邊なり――此は實にして餘は虚妄なりと。是を第三の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因りて論を起さく、我及び世間は有邊無邊なりと。――此の四見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。(4)或は沙門・婆羅門有り、[28]捷疾相智有りて、善く能く觀察す。彼は捷疾・相智を以て觀察し已りて言く、我及び世間は[29]有邊に非ず、無邊に非ず、――此は實にして餘は虚妄なりと。是を第四の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因りて論を起さく、我及び世間は有邊に非ず、無邊に非ず、此は實にして餘は虚妄なりと。――此の四見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。

諸の沙門・婆羅門本劫・本見に於て論を起さく、我及び世間は有邊無邊なりと。――盡く四見中に入りて能く過ぐるもの有ること無し。唯、佛のみ能く此の見處を是の如く持し、是の如く執すと知り、亦報應を知る。如來の所知は、又、復、是に過ぐ。知ると雖も、著せず。著せざるを以て則ち寂滅を得。愛の集・滅・味・過・出要を知り、平等觀を以て、餘無く解脫す。故に如來と名づく。

復、餘の甚深・微妙の大法の光明有り、賢聖の弟子をして眞實平等に如來を讚歎せしむ。何等か是

【二六】無邊想。巴、anantavā ayaṃ loko.

【二七】上方等。巴は「世界は亦有邊亦無邊」と。

【二八】捷疾相智。巴、Takkī hoti vīmaṁsī (is one who thinks and considers)。

【二九】有邊に非ず等。N'evāyaṃ loko antavā na panānanto.

れ、餘の甚深・微妙の大法の光明あり、賢聖の弟子をして、眞實平等に如來を讃歎せしむる。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に於て異問異答す。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因りて、異問・異答して、此の四見中に於て能く過ぐるもの有ること無し。或は沙門・婆羅門有りて、是の如き論を作し、是の如き見を作さく、我は善惡業報有りや、善惡業報無きやを知らず。我は見ず、知らざるが故に。若しは善惡業報有りと言ひ、若しは善惡業報無しと言はば、世に沙門・婆羅門有り、廣博・多聞・聰明・智慧ありて、常に閑靜を樂ひ、機辯精微にして、世の尊重する所たり。能く智慧を以て、善く諸の見を分別す。設し當に我に諸の見の深妙の義を問ふべくむば我は[p. 658b]、答ふること能はず。則ち慚愧有り。我は心に恐怖を懷く。[三〇]當に是を以て答へ、——以て歸依と爲し、洲と爲し、舍と爲し、究竟道と爲すべし。若し彼の問はゞ當に是を以て答ふべし、「此の事、[三一]是の如しと非なり。此の事は[三二]實なりとは非なり。此の事は[三三]異なりと非なり。此の事は[三四]異に非ずとは非なり。[三五]異ならずとは非なり」と。是を初の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は此の問異・答異に因るに此の四見中に於て能く過ぐるもの有ること無し。(2)或は沙門・婆羅門有り、是の如き論を作し、是の如き見を作さく、我見ず、知らず、他世有りと爲むや、他世無きやを。世間に諸の沙門・婆羅門有り、[三六]天眼及び[三七]他心智を以て、遠處に在りて、能く我を見る。我は若し近くとも、猶、見ること能はず。是の如きの人は能く他世有り、他世無きを知る。我は他世有りや、他世無きやを知らず、見ず。若し我説かば、則ち妄語と爲す。我は妄語を畏るゝが故に、以て歸依と爲し、洲と爲し、舍と爲し、究竟道と爲す。彼の設し問はゞ、當に是を以て答ふべし、「此の事は、是の如しとは非なり。此の事は實なりとは非なり。此の事は異なりとは非なり。此の事は異に非ずとは非なり。異ならずとは非なり」と。是を第二の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は此の問異・答異に因るに、此の四見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。(3)或は沙門・婆羅門有り、是の如き見を作し、是の如き論を作さく、

【三〇】 當に以下究竟道と爲すべしまで。巴には相當の文なく、以上、何とも答ふべき所以を理解せぬので、その畏の爲に應答せず、次の如く、完く要領を得ぬ返答を作るべしとの意をのぶ。蓋し何らかの錯誤より、今の文の如き無意義の文言の入り來れるものには非ざるか。次段の方も參照のこと(巴文は次段に準ず)。

【三一】 是の如しとは非なり。巴、Evaṃ pi me no.

【三二】 實なりとは非なり。巴、Tathā ti me no.

【三三】 異なりとは非なり。巴、Aññathā ti me. no.

【三四】 異に非ずとは非なり。巴、No ti pi me no.

【三五】 異ならずとは非なり。巴、No no ti pi me no.

【三六】 天眼。巴、Dibba-cakkhu.

【三七】 他心智。巴、Paracitta-ñāṇa.

我は何者か善、何者か不善なるを知らず、見ず。我は知らず、見ざるが故に、若し是は善、是は不善と言はば、我は則ち愛を生じ、愛より恚を生ず。愛有り恚有れば則ち受有り。我欲を生ず、受を滅し、受を惡畏するが故に、以て歸依と爲し、以て洲と爲し、舍と爲し、究竟道と爲す。彼の設し問はば、當に是を以て答ふべし、「此の事は是の如しとは非なり。此の事は實なりとは非なり。此の事は異なりとは非なり。此の事は異に非ずとは非なり。異ならずとは非なり」と。是を第三の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は此の問異・答異に因るに、此の四見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。(4)或は沙門・婆羅門有り、愚冥闇鈍なり。愚冥・闇鈍の故に他の問ふ有らば、便ち他の言に隨つて答ふらく、此の事は是の如しとは非なり。此の事は實なりとは非なり。此の事は異なりとは非なり。此の事は異に非ずとは非なり。異ならずとは非なり」と。是を四の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は此の異問・異答に因るに、此の四見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。

諸の沙門・婆羅門有り、本劫・本見に於て、異問・異答するに盡く四見中に入りて能く過ぐるもの有ること無し。唯、佛のみ[p. 658c]能く此の見處を是の如く持し、是くの如執すと知り、亦報應を知る。如來の所知は復、是に過ぐ。知ると雖も著せず。著せざるを以て則ち寂滅を得、受の集・滅・味・過・出要を知り、平等觀を以て、餘無く解脫す。故に如來と名づく。是を甚深・微妙の大法の光明あり、賢聖の弟子をして、眞實平等に如來を讃歎せしむと爲す。

復、餘の甚深・微妙の大法の光明有り、賢聖の弟子をして、眞實平等に如來を讃歎せしむ。何等か是れ餘の甚深。微妙の大法の光明あり、賢聖の弟子をして、眞實平等に如來を讃歎せしむなる。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に於て、無因にして此の世間有りと謂ふ。彼は盡く二見中に入る。諸の沙門・婆羅門の本劫・本見に因り、無因にして、此の世間有りといふは此の二見中に於て能く過ぐるもの有ること無し。彼の諸の沙門・婆羅門は何の因緣を以てか、本劫・本見に於て、無因にして而も有

りと謂ひ、此の二見中に於て、能く過ぐるもの有ること無き。(1)或は衆生有り、[三八]無想無受なり。若し彼の衆生の想を起さば則ち便ち命終して、世間に來生し、漸く以て長大し、鬚髮を剃除して出家し法服を被り、梵志行を修して定意三昧に入り、三昧力を以て、本の想の生ずるを見、便ち是の念を作さく、我は本、想有る無し。自然に此有り。是れ無因にして世間有り――此は實にして餘は虛妄なりと。是を初の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因り無因にして而も有りを謂ふは此の二見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。(2)或は沙門・婆羅門有り、捷疾相智有りて善く能く觀察す。彼は捷疾相智を以て觀察し已りて是の如く說けらく、此の世間は無因にして而も有り。――此は實にして餘は虛妄なりと。是を第二の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因り無因にして而も此の世間有りとは、此の二見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。

諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に於て、無因にして而も有りとは盡く二見中に入りて、能く過ぐるもの有ること無し。唯、佛のみ能く此の見處を……と知り、乃至、餘無く解脫す。故に如來と名づく。……も、亦上に說く所の如し。

諸の沙門・婆羅門は本劫・本見中に於て、無數・種種に意に隨ひて說く所、彼は盡く十八見中に入る。諸の沙門・婆羅門の本劫・本見に因りて、無數・種種に意に隨ひて說く所は、此の十八見に於て、[p. 659a] 能く過ぐるもの有ること無し。唯、佛のみ能く此の見處を……知る。乃至、餘無く解脫す。故に如來と名づくるも、亦上に說く所の如し。

復、餘の甚深・微妙の大法の光明有り、唯、賢聖の弟子有りて、能く此の法を以て如來を讚歎す。何等か是れ甚深・微妙の大法の光明あり、賢聖の弟子の能く此の法を以て如來を讚歎する。諸の沙門・婆羅門は[三九]末劫・[四〇]末見に於て、無數・種種に意に隨ひて說く所、彼は盡く四十四見中に入り、末劫・末見にて、種種・無數に意に隨ひて說く所は四十四見に於て、能く過ぐるもの有ること無し。諸

【三八】無想。巴、Asaññā-Sattā(pl.)

【三九】末劫。巴、? Aparantakappikā.

【四〇】末見。巴、Aparantānudiṭṭhino.

の沙門・婆羅門は何かの因緣を以てか末劫・末見に於て、種種・無數に意に隨ひて說く所、四十四見に於て、能く過ぐるもの有ること無き。諸の沙門・婆羅門有りて、末劫・末見に於て[四一]想論有り、想は是れ我、是れ世なりと謂ふも、盡く十六見中に入る。末劫・末見に於て、想論有り、想は是れ我・是れ世と謂ふも十六見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。諸の沙門・婆羅門は何の因緣を以て、末劫・末見に於て、想論有り、想は是れ我・是れ世と謂ひ、盡く十六見中に入りて、能く過ぐるもの有ること無き。(1)或は沙門・婆羅門有りて、是の如きの論を作さく、[四二]色は是れ我、想は是れ世にして、命終し已りて我は復、有らず――此は實にして餘は虛妄なりと。是を初の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に因りて、想論有り、想は是れ我・是れ世と謂ひ、十六見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。(2)復有るが言く、[四三]非色は是れ我、想は是れ世なり。命終し已りて我は復有らず――此は實にして餘は虛妄なりと。是をこの見と名づく。復有るが言く、[四四]有色無色は是れ我、想は是れ非世なり。命終し已りて我は復、有らず――此は實にして餘は虛妄なりと。是を三の見と名づく。(4)復 有るが言く、[四五]非有色非無色は是れ我、想は是れ世なり。命終し已りて我は復、有らず――此は實にして餘は虛妄なりと。是を四の見と名づく。復有るが言く、我は是れ[四六]有邊、想は是れ世にして、命終し已りて我は復、有らず――此は實にして餘は虛妄なりと。是を五の見と名づく。(6)復有るが言く、我は是れ[四七]無邊想は是れ世にして、命終し已りて我は復、有らず――此は實にして、餘は虛妄なりと。是を六の見と名づく。(7)復有るが言く、我は[四八]有邊無邊、想は是れ世にして、命終し已りて我は復有らず――此は實にして餘は虛妄なりと。是を七の見と名づく。(8)復、有るが言く、我は[四九]非有邊・非無邊、想は是れ世にして命終し已りて我は復有らず〔p. 659b〕――、此は實にして餘は虛妄なりと。是を八の見と名づく。(9)復有るが言く、我は[五〇]一向樂にして、想は是れ世なりと。命終し已りて我は復、有らず――此は實にして餘は虛妄なりと。是を九の見と名づく。(10)

【四一】想論。巴、Saññi-vādā.

【四二】色は是れ我等。巴には Rūpī attā hoti arogo param maraṇā saññī. とありて、「有色が我で、死後、有想なり」との意の文に作る。漢譯梵動經には、「我、此に命終し、後生は有色有想なり」と。以下も準ず。

【四三】非色。巴、Arūpī.

【四四】有色無色。巴、rūpī ca arūpī ca.

【四五】非有色非無色。巴、N'eva rūpī nārūpī.

【四六】有邊。巴、Antavā.

【四七】無邊。巴、Anantavā.

【四八】有邊無邊。巴、Antavā ca anantavā ca.

【四九】非有邊非無邊。巴、N'evantavā nānantavā.

【五〇】一向樂。巴、Ekanta-sukhī

復、有るが言く、我は[五一]一向苦にして想は是れ世なりと。命終し已つて我は復、有らず——此は實にして餘は虛妄なりと。是を十の見と名づく。(11)復有るが言く、[五二]苦樂は是れ我、想は是れを世なり。命終し已りて我は復有らず。——此は實にして餘は虛妄なりと。是を十一の見と名づく。(12)復有るが言く、[五三]不苦・不樂は是れ我、想は是れ世なり。命終し已つて、我は復有らず——此は實にして餘は虛妄なりと。是を十二の見と名づく。(13)復有るが言く、[五四]一想は是れ我、想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虛妄なりと。是を十三の見と名づく。(14)復有るが言く、[五五]若干想は是れ我、想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虛妄なりと。是を十四の見と名づく。(15)復有るが言く、[五六]少想は是れ我、想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虛妄なりと。是を十五の見と名づく。(16)復有るが言く、[五七]無量想は是れ我、想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虛妄なりと。是を十六の見と名づく。諸の沙門、婆羅門は末劫・末見に於て、想論有り、〔想は〕是れ我、想は是れ世なりと謂ふも、此の十六見中に於て能く過ぐるもの有ること無し。唯、佛のみ能く此の見處……を知り、乃至、餘無く解脫す。故に如來と名づくるも、亦上に說く所の如し。

　復餘の甚深・微妙の大法の光明有り。唯、賢聖の弟子有りて、能く此の法を以て如來を讚歎す。何等か是れ甚深・微妙の大法の光明あり、賢聖の弟子の能く此の法を以て如來を讚歎するなる。諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に於て、[五八]無想論有り。無想は是れ我、是れ世と謂ふ。彼は盡く八見中に入る。末劫・末見に於て、無想論有り。無想は是れ我、是れ世なりと謂ふ。彼は盡く八見中に入りて、能く過ぐるもの有ること無し。(1)或は沙門・婆羅門有り、是くの如き論を作さく、[五九]色は是れ我、無想は是れ世にして、命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虛妄なりと。是を初の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に因りて無相論有り。無想は是れ我、是れ世なりと謂ふは此の八見中

【五一】 一向苦。巴、Ekanta-dukkhī.

【五二】 苦樂。巴、Sukha-dukkhā.

【五三】 不苦不樂。巴、Adukkham-asukhī.

【五四】 一想。巴、Ekatta-Saññī.

【五五】 若干想。巴、Nānatta-Saññī.

【五六】 少想。巴、Paritta-Saññī.

【五七】 無量想。巴、Appamāṇa-Saññī.

【五八】 無想論。巴、Asaññī-vāda.

【五九】 色は等。巴には「色は是れ我にして死後、無想なる」の意に作る。

に於て、能く過ぐるもの有ること無し。(2)復有るが言く、非色は是れ我、無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず。——此は實にして餘は虛妄なりと。是を二の見と名づく。(3)復有るが言く、有色・無色は是れ我にして無想は是れ世なり。命終し已つて〔p. 659c〕我は復有らず——此は實にして餘は虛妄なりと。是を三の見と名づく。(4)復、有るが言く、非有色非無色は是れ我、無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虛妄なりと。是を四の見と名づく。(5)復有るが言く、我は是れ有邊にして無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず。——此は實にして餘は虛妄なりと。是を五の見と名づく。(6)復有るが言く、我は是れ有邊に非ず、無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虛妄なりと。是を六の見と名づく。(7)復有るが言く、我は有邊・無邊にして、無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虛妄なりと。是を七の見と名づく(8)復有るが言く、我は非有邊・非無邊にして、無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虛妄なりと。是を八の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に因りて無想論有り。無想は是れ我、是れ世なりと謂ふ。彼は盡く八見中に入る。唯、佛のみ能く此の見處を……知り、乃至、餘無く解脫す。故に如來と名づくるも、亦上に說く所の如し。

復、餘の甚深・微妙の大法の光明有り、唯、賢聖の弟子有りて、能く此の法を以て如來を讚歎す。何等か是れ甚深・微妙の大法の光明にして、賢聖の弟子の能く此の法を以て如來を讚歎するなる。諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に因りて、[三〇]非想非無想論有り。非想非無想は是れ我、是れを世なりと謂ふ。彼は盡く八見中に入る。末劫・末見に因りて非想非無想論有り。非想非無想は是れ我、是れ世なりと謂ふ。彼は盡く八見中に入りて能く過ぐるもの有ること無し。(1)或は沙門・婆羅門有り、是の如きの論を作さく、色は是れ我にして、非想非無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有ら

【三〇】非想非非想論。巴、Nevasaññi-nāsaññi-vāda.

ず——此は實にして餘は虚妄なりと。是を初の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に因りて、非想非無想論有り。非想非無想を是れ我、是れ世なりと謂ふ。八見中に於て能く過ぐるもの有ること無し。(2)復有るが言く、非色は是れ我にして、非想非無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虚妄なりと。是を二見と名づく。(3)復有るが言く、有色無色は是れ我にして非想非無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虚妄なりと。是を三の見と名づく。(4)復有るが言く、非有色・非無色は是れ我にして、非想非無想は是れ世なり。命終し已つて我は復 [p. 660a] 有らず——此は實にして餘は虚妄なりと。是を四の見と名づく。(5)復有るが言く、我は是れ有邊にして、非想非無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虚妄なりと。是を五の見と名づく。(6)復有るが言く、我は是れ有邊に非ずして、非想非無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず——此は實にして餘は虚妄なり。是を六の見と名づく。(7)復有るが言く、我は有邊・無邊にして、非想非無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず。——此は實にして餘は虚妄なりと。是を七の見と名づく。(8)復有るが言く、、我は非有邊・非無邊にして非想非無想は是れ世なり。命終し已つて我は復有らず。此は實にして餘は虚妄なりと。是を八の見と名づく。

諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に因りて、非想非無想論有り。非想非無想は是れ我、是れ世なりと謂ふ。彼は盡く八見中に入りて、能く過ぐるもの有ること無し。唯、佛のみ能く此の見處を……と知り、乃至、餘無く解脱す。故に如來と名づくるも、亦上に說く所の如し。

復、餘の甚深・微妙の大法の光明有り、唯、賢聖の弟子有りて、能く此の法を以て如來を讃歎す。何等か是れ甚深・微妙の大法の光明あり、賢聖の弟子の能く此の法を以て如來を讃歎するなる。諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に因りて、[六一]斷滅論有り、衆生の斷滅して餘無きを說く。彼は盡く七見

【六一】斷滅論。巴、Ucchedavāda.

中に入る。末劫・末見に因つて斷滅論有り、衆生の盡きて餘無きを說くも、七見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。諸の沙門・婆羅門は何の因緣を以てか末劫・末見に於て、斷滅論有りて、衆生の斷滅して餘無きを說き、七見中に於て能く過ぐるもの有ること無き。(1)或は沙門・婆羅門有り、是の如きの論を作し、是の如きの見を作さく、我が身の[三]四大入は父母より生じ、乳哺・衣食に長養・摩捫・擁護せらる。然れども是は無常にして必ず磨滅に歸す。是を齊りて我は所滅すと。是を初の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に因りて、斷滅論有り、衆生の斷滅を說く。七見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。(2)或は沙門・婆羅門有り、是の論を作さく、此は斷滅と名づくることを得ず。我が欲界天の斷滅して餘無き、是を齊りて我は斷滅すと。是を二の見と名づく。(3)復、沙門・婆羅門有り、是の論を作さく、此は斷滅と名づけず。色界の化身は諸根具足するが斷滅する是を齊りて我は斷滅して餘無しと謂ふ。是を三の見と名づく。(4)復有るが言く、此は[p. 660b]斷滅と名づけず。無色の空處の斷滅する、是を齊りて我は斷滅して餘り無しと謂ふ。是を四の見と名づく。(5)復有るが言く、此は斷滅と名づけず。無色の識處の斷滅する、是を齊りて我斷滅して餘り無しと謂ふ。是を五の見と名づく。(6)復有るが言く、此は斷滅と名づけず。無色の不用處の斷滅する、是を齊りて我斷滅して餘無しと謂ふ。是を六の見と名づく。(7)復有るが言く、此は斷滅と名づけず。無色の非有想非無想處の斷滅する、是を齊りて我斷滅して餘り無しと謂ふ。是を七の見と名づく。

諸の沙門・婆羅門は此に因りて末劫・末見に於て此の衆生類は斷滅して餘無しと言ふも、此の七見中に於て能く過ぐるもの有ること無し。唯、佛のみ能く此の見處を……知り、乃至、餘無く解脫す。故に如來と名づくるも、亦上に說くが如し。

復、餘の甚深・微妙の大法の光明有り、賢聖の弟子有りて、能く此の法を以て如來を讃歎す。何等

【三】四大入。巴、Cātu-mahā-bhūtiko.

か是れ甚深・微妙の大法の光明あり、賢聖の弟子、能く此の法を以て、如來を讃歎すなる。諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に因りて、[六三]現在に[六四]泥洹有るの論あり。衆生の現在に泥洹有るを説く。彼は盡く五見中に入る。末劫・末見に因りて、現在に泥洹有りと説く。五見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。諸の沙門・婆羅門は何の因線にてか末劫・末見に於て、衆生は現在に泥洹有りと説き。五見中に於て、能く過ぐるもの有ること無き。(1)或は沙門・婆羅門有り、是の見を作し、是の論を作さく、我は盡く現在の五欲を自ら恣にし、是を齊りて我は現在の涅槃を得と。是を初の見と名づく。諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に因りて、我は現世に涅槃を得と謂ひ、衆生は現在に涅槃有りとその論を謂ふ。五見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。(2)復諸の沙門・婆羅門有り、是の説を作さく、此は現在涅槃と名づけず。復、現在涅槃有り、微妙第一なり。汝の知らざる所にして、獨り我能く知る。如し欲・悪・不善法を離れ、有覺・有觀にして離生の喜樂ある初禪を成就して行ずる、是を齊りて我は現在涅槃を得と謂ふと。是を二の見と名づく。(3)復、沙門・婆羅門有り、是の如き説を作さく、此は現在涅槃と名づけず。復、現在涅槃有り、微妙第一なり。汝の知らざる所にして、獨り我能く知る。如し有覺觀を滅し、内淨信・一心あり、無覺・無觀にして定生喜樂ある [p. 600c] 二禪を成就して行ずる、是を齊りて、我は現在涅槃を得と謂ふ。是を三の見と名づく。(4)復、沙門・婆羅門有り、是の説を作さく、此は現在涅槃と名づけず。復、現在涅槃有り、微妙第一なり。汝の知らざる所にして、獨り我能く知る。如し喜を離れて捨・行じ、念・正智あり。身に樂を受し、諸の聖人の捨・念・樂行ずと解するが如し。三禪を成就して行ずる、是を齊りて現在に涅槃を得と。是を四の見と名づく。(5)復、沙門・婆羅門有り、是の説を作さく、此は現在涅槃と名づけず。復、現在涅槃有り、微妙第一なり。汝の知らざる所にして、獨り我能く知る。如し能く樂を斷じ、苦を斷じ、先に憂・喜を滅し、不苦・不樂にも捨・念にて清淨あり、四禪を成就して行ずる、是を齊りて我は

【六三】現在等。巴、Diṭṭha-dhamma-nibbāna-vāda.
【六四】泥洹。巴、Nibbāna—新譯の涅槃のこと。

現在涅槃を得と謂ふ。是を五の見と名づく。

諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に因りて、現在涅槃論有り。此の五見中に於て、能く過ぐるもの有ること無し。唯、佛のみ能く此見處を……知り。乃至、餘無く解脱す。故に如來と名づくるも亦上に説くが如し。

是の諸の沙門・婆羅門は末劫・末見に因り、種種の見を起し、意に隨ひて説く所は此の四十四見中に於て能く過ぐるもの有ること無し。唯、佛のみ能く此の是處を……知り、乃至、餘無く解脱す。故に如來と名づくるも亦上に説くが如し。

諸の沙門・婆羅門は本劫・本見末・劫末・見に因りて、種種の見を起し意に隨ひて説く所は盡く此の六十二見中に入る。本劫・本見、末劫・末見に因りて、種種の見を起し、意に隨ひて説く所は六十二見中に於て能く過ぐるもの有ること無し。唯、佛のみ能く、此の是處を……知り、乃至、餘無く解脱す。故に如來と名づくるも亦上に説くが如し。

諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因り、[六五]常論有り、我世間は是れ常なりと説く。諸の沙門・婆羅門は此に於て智を生ず。謂く、異信・異欲・異聞・異緣・異覺・異見・異定・異忍なり。此に因りて智を生じ、彼は布施を以て則ち[六六]得るを受と名づく。乃至、現在涅槃も亦復是の如し。諸の沙門・婆羅門は常論を生じ、世間は是れ常といひ、彼は受を因とし受緣として愛を生じ、而も自ら覺知せず。愛に染著して愛の爲に伏せらる。乃至、現在涅槃も亦、復、是の如し。

諸の沙門・婆羅門は本劫・本見に因り、世間は是れ常なりと言ふ。彼は觸を緣とするが故に。若し觸の緣を離れて立論するは是の處有ること無し。乃至、現在涅槃も[p. 66a] 亦復是の如し。

諸の沙門・婆羅門は本劫・本見、末劫・末見に因りて各、意の所見に隨ひて説くも、盡く六十二見中に入る。各、所見に隨つて説くも、盡く中に依在して、能く過ぐるもの有ること無し。捕魚師の細

【六五】常論。巴、sassatavāda. (cf. from p.39)

【六六】得るを。宋元明宮の四本には缺。但しこの邊には何らか相當の誤傳あるべく、文のまゝでは了解し難し。

網を以て小池の上を覆ふが如し、當に知るべし、池中の水性の類は皆、網の内に入りて、避くる處有ること無し。諸の沙門・婆羅門も亦是の如し。本劫・本見、末劫・末見に因りて種種、說く所は盡く六十二見中に入りて、能く過ぐるもの有ること無し。是を六十二見と名づく。此は是れ煩惱結・使なり。衆生を繫縛し、生・老・病・死、憂・悲・苦・惱の衆苦を取し、法を聚集して觧脫を得ずと。非問分竟り。

巻の第二十一 〔p.661a〕

一攝相應分攝品 〔第二〕【其の二】

三一切は四攝・五非攝法なり。當に知るべし、若し攝門を立つれば便ち知る。陰・界・入は一切法を攝す。陰・界・入は一切法を攝せず。陰・界・入は事の如く一切法の少分を攝す。陰・界・入は一切法の少分を攝せず。自性は自性の攝なり。自性は他性の攝に非ず。自性は自性を繫す。自性は他性の繫に非ず。亦攝・非攝あり。亦非攝・非不攝ありと。

六攝門とは謂く、(1)苦諦繫法・非苦諦繫法、(2)—(3)乃至、(4)道諦繫法・非道・諦繫法、(5)諸聖諦繫法・非諸聖諦繫法、(6)根法・非根法、(7)苦諦繫の根法・非苦諦繫の根法、(8)—(9)乃至、(10)道諦繫の根法・非道諦繫の根法、(11)諸聖諦繫の根法・非諸聖諦繫の根法、(12)苦諦繫の非根法・非苦諦繫の非根法、(13)—(14)乃至、(15)道諦繫の非根法・非道諦繫の非根法、(16)諸聖諦繫の非根法・非諸聖諦繫の非根〔p.661b〕法、(17)眼入法・非眼入法、(18)—(21)乃至、(22)意入法、非意入法、(23)色入法・非色入法、(24)—(27)乃至、(28)法入法・非法入法、(29)受法、非受法、(30)想法・非想法、(31)思法、非思法、(32)觸法・非觸法、(33)思惟法、非思惟法、(34)覺法、非覺法(35)觀法、非觀法、(36)見法・非見法、(37)慧法・非慧法、(38)解脫法・非解脫法、(39)無貪法・非無貪法、(40)無瞋法、非無瞋法、(41)無癡法・悲無癡法、(42)順信法・非順信法、(43)悔法・非悔法、(44)無悔法・非無悔法、(45)悅法・非悅法、(46)喜法・非喜法、(47)心進法・非心進法、(48)心除法・非心除法、(49)信法・非信法、(50)欲法・非欲法、(51)不放逸法・非不放逸法、(52)念法・非念法、(53)定法・非定法、(54)心捨法・非心捨法、(55)疑法・非疑法、(56)怖法・非怖法、(57)煩惱使法・非煩惱使法、(58)見使法・非見使法、(59)疑使法・非疑使法、(60)戒道使法・非戒道使法、(61)愛使法・非愛使法、(62)瞋恚使法・非瞋

【一】攝・相應分。?Saṃgraha-Saṃprayukta-vāra.——本論の全四分組織中の第三分で、大體二段の組織より成る(一)攝品(卷二十一、二十二)、(二)相當品(二十三及び二十四)、即ちそれである。これらの大局の施設は何れも他の諸阿毘達磨に準ずるも、必ずしも同じでない。その內容は次註等を參照すべし。

【二】攝品。?Saṃgraha-varga——(一)論母、(二)一切法を肯定・否定の二種の名辭的諸法(二二九對の諸法を數ふ)に分類す、(三)その諸法を所謂三科(陰・界・入)の立場より云何に攝するかを論じるといふ以上三段組織に成る。〔但し、(一)は寧ろ全攝相應分の論母〕。而しその(三)の攝論にては可成特色を有し、三科の幾陰・幾界・幾入に攝すと必ずしも各法を解說せず、三科への攝を論ずるは例へば苦諦繫法にして餘の法には非ずといつた風の檢討をなすこの點、本論の特色とすべく、下の我にその下に註記せる所をも對檢すべし。

【三】一切は以下。一種の論

恚使法、(63)嫉妬使法・非嫉妬使法、(64)慳惜使法・非慳惜使法、(65)無明使法・非無明使法、(66)憍慢使法・非憍慢使法、(97)掉使法・非掉使法、(68)生法・非生法、(69)老法・非老法、(70)死法・非死法、(71)命法・非命法、(72)煩惱法・非煩惱法、(73)無想定法・非無想定法、(74)滅盡定法・非滅盡定法、(75)得果法・非得果法、(76)戒法・非戒法、(77)無戒法・非無戒法、(78)有漏身進法・非有漏身進法、(79)有漏身除法・非有漏身除法、(80)正語法・非正語法、(81)正業法・非正業法、(82)正命法・非正命法、(83)正身進法・非正身進法、(84)正身除法・非正身除法、(85)智緣盡法・非智緣盡法、(86)非智緣盡法・非非智緣盡法、(87)決定法・非決定法、(88)法住法・非法住法、(89)緣法・非緣法、(90)空處法・非空處法、(91)―(92)乃至、(93)非想非非想法・非非想非非非想法、(94)眼界法・非眼界法、(95)―(111)[七]乃至、(112)[八]法界法・〔p.661c〕非法界法、(113)色陰法・非色陰法、(114)―(116)乃至、(117)識陰法・非識陰法、(118)苦聖諦法・非苦聖諦法、(119)―(120)乃至、(121)道聖諦法・非道聖諦法、(122)眼根法・非眼根法、[九]乃至、(143)已知根法・非已知根法、(144)念覺法・非念覺法、[一〇](145)―(149)乃至、(150)捨覺法・非捨覺法、(151)貪不善根法・非貪不善根法、(152)乃至、(153)癡不善根法・非癡不善根法(154)無貪善根法・非無貪善根法[一一](155)乃至、(156)無癡善根法・非無癡善根法(157)地大法・非地大法、(158)―(159)乃至、(160)風大法・非風大法、(161)不殺生戒法・非不殺生戒法、(162)―(164)[一二]乃至、(165)不飲酒放逸處法・非不飲酒放逸處法、(166)色法・非色法、(167)―(228)乃至、(229)過去未來現在法・非過去未來現在法なり。

[一三](1)何をか苦諦繫法と謂ふ。愛を除く餘の非聖の有爲法、是を苦諦繫法と名づく。何をか非苦諦繫法と謂ふ。愛及び聖・非聖の無爲法、是を非苦諦繫法と名づく。

(2)何をか集諦繫法と謂ふ。[一四]愛、是を集諦繫法と名づく。何をか非集諦繫法と謂ふ。愛を除く若し餘の法、是を非集諦繫法と名づく。

母で、此攝品全體に亙る總示的の論母である。この種のやり方はまた南傳界論（馱兜伽他論）にも相似のそれを見出さるゝ所で、今は所詮、彼に負ふこの形式とすべく、兩者關係の一端を示すものとして留意を傾せむ。

【四】攝。Saṃgraha.

【五】非攝、Asaṃgraha.

【六】攝門以下。右の形式的範疇としての攝・非攝等により應に論ぜらるべき諸法を示す第二の論母にして、この形式も亦同上の南傳界論に認められる所である。同前にまた對檢參照すべく（無論、諸法の分類そのものは必ずしも同（でない）また兩典の關係を示す上の一條件として注意するに足らう。

【七】法界法。之は十八界に關說するもの故、法界法は意識界法の誤なるべく、本文中（長行中）には意識界に作る。

【八】乃至。耳・鼻・舌・身・意・色・聲・香・味・觸の十法を略す。

【九】乃至。二十二根諸法中、眼の餘を略する心。

【一〇】乃至。七覺〔支〕中の餘の諸法を乃至す。

【一一】乃至。水・火を略するつもり。

【一二】乃至。偸盜・邪婬・妄語の三を乃至す。

(3)何をか滅諦繋法と謂ふ。[一五]智緣盡、是を滅諦繋法と名づく。

何をか非滅諦繋法と謂ふ。智緣盡を除く若し餘の法。是を非滅諦繋法と名づく。

(4)何をか道諦繋法と謂ふ。八聖道、是を道諦繋法と名づく。

何をか非道諦繋法と謂ふ。八聖道を除く若し餘の法、是を非道諦繋法と名づく。

(5)何をか諸聖諦繋法と謂ふ、非聖の有爲法、＝苦・集・滅・道、是を諸聖諦繋法と名づく。

何をか非諸聖諦繋法と謂ふ。苦・集・滅・道を除く若し餘の聖法、及び非聖の無爲、是を非諸諦繋法と名づく。

(6)何をか根法と謂ふ。非聖の根及び聖有爲法、是を根法と名づく。

何をか非根法と謂ふ。非聖の非根及び聖無爲法、是を非根法と名づく。

(7)何をか苦諦繋の根法と謂ふ。若し根の非聖なる、是を苦諦繋の根法と名づく。

何をか非苦諦繋の根法と謂ふ。若しは根の聖なる、是を非苦諦繋の根法と名づく。

(8)何をか集諦繋の根法と謂ふ。集諦繋の根法は無きなり。

何をか非〔p.662a〕集諦繋の根法と謂ふ。一切の根、是を非集諦繋の根法と名づく。

(9)何をか滅諦繋の根法と謂ふ。滅諦繋の根法は無きなり。

何をか非滅諦繋の根法なる。一切の根、是を非滅諦繋の根法と名づく。

(10)何をか道諦繋の根法と謂ふ。八聖道、是を道諦繋の根法と名づく。

何をか非道諦繋の根法と謂ふ。八聖道を除く若し餘の根、是を非道諦繋の根法と名づく。

(11)何をか諸聖諦繋の根法と謂ふ。若しは[一六]非繋の根及び餘の八聖道、是を諸聖諦繋の根法と名づく。

何をか非諸聖諦繋の根法と謂ふ。八聖道を除く若し餘の聖根、是を非諸聖諦繋の根法と名づく。

【一三】何をか等。以下右の攝法諸法を各一般に釋す。

【一四】愛。Tṛṣṇā.

【一五】智緣盡。新譯の擇滅のことで、毘曇部十九中の註を見よ。

【一六】非繋。宋元明宮の四本には非聖に作る。

(12)何をか苦諦繫の非根法と謂ふ。愛を除く若し餘の非根法=非根の有爲、是を苦諦繫の非根法と名づく。

何をか非苦諦繫の非根法と謂ふ。愛及び一切の無爲、是を非苦諦繫非根法と名づく。

(13)何をか集諦繫の非根法と謂ふ。愛、是を集諦繫非根法と名づく。

何をか非集諦繫の非根法と謂ふ。愛を除く若し餘の非根、是を非集諦繫の非根法と名づく。

(14)何をか滅諦繫の非根法と謂ふ。智緣盡、是を滅諦繫の非根法と名づく。

何をか非滅諦繫の非根法と謂ふ。智緣盡を除く若し餘の非根、是を非滅諦繫の非根法と名づく。

(15)何をか道諦繫の非根法と謂ふ。道諦繫の非根法は無きなり。

何をか非道諦繫の非根法と謂ふ。一切の非根、是を非道諦繫の非根法と名づく。

(16)何をか諸聖諦繫の非根法と謂ふ。若し非聖の非根なる苦・集・滅、是を諸聖諦繫の非根法と名づく。

何をか非諸聖諦繫の非根法と謂ふ。苦・集・滅を除く若し餘の非根、是を非諸聖諦繫の非根法と名づく。

(17)何をか眼入法と謂ふ。眼入、是を眼入法と名づく。

何をか非眼入法と謂ふ。眼根を除く若し餘の法、是を非眼入法と名づく。

(18)—(22)耳・鼻・舌・身・意も亦是の如し。

(23)何をか色入法と謂ふ。色界、是を色入法と名づく。

何をか非色入法と謂ふ。色界を除く若し餘の法、是を非色入法と名づく。

(24)—(28)聲・香・味・觸・法入も亦是の如し。

(29)何をか受法と謂ふ。若し意の所受なる、是を受法と名づく。

何をか非受法と謂ふ。愛を除く若し餘の法、是を非受法と名づく。
(30)何をか想法と謂ふ。若し想・憶想、是を想法と名づく。
何をか非想〔p.662b〕法と謂ふ。想を除く若し餘の法、是を非想法と名づく。
(31)何をか思法と謂ふ。若し思・正思、是を思法と名づく。
何をか非思法と謂ふ。思を除く若し餘の法、是を非思法と名づく。
(32)何をか觸法と謂ふ。六觸、是を觸法と名づく。
何をか非觸法と謂ふ。觸を除く若し餘の法、是を非觸法と名づく。
(33)何をか思惟法と謂ふ。若し計校・分別・籌量・憶念、是を思惟法と名づく。
何をか非思惟法と謂ふ。思惟を除く若し餘の法、是を非思惟法と名づく。
(34)何をか[一七]覺法と謂ふ。若し覺・憶想、是を覺法と名づく。
何をか非覺法と謂ふ。覺を除く若し餘の法、是を非覺法と名づく。
(35)何をか[一八]觀法と謂ふ。若し心の行・微行・順行、是を觀法と名づく。
何をか非觀法と謂ふ。觀を除く若しは餘の法、是を非觀法と名づく。
(36)何をか見法と謂ふ。見・慧・無癡・見使・戒・道使、是を見法と名づく。
何をか非見法と謂ふ。見を除く若し餘の法、是を非見法と名づく。
(37)慧法も亦是の如し。
(38)何をか解脫法と謂ふ。若し解脫・重解脫・究竟解脫、是を解脫法と名づく。
何をか非解脫法と謂ふ。解脫法を除く若し餘の法、是を非解脫法と名づく。
(39)何をか無貪法と謂ふ。若し法の不希望なる、是を無貪法と名づく。
何をか非無貪法と謂ふ。無貪を除く若し餘の法、是を非無貪法と名づく。

【一七】覺。Vitarka.
【一八】觀。Vicāra.

(40)何をか無恚法と謂ふ。若し無惱、是を無恚法と名づく。
何をか非無恚法と謂ふ。無恚を除く若し餘の法、是を非無恚法と名づく。
(41)何をか無癡法と謂ふ。善の見・善の慧・無癡、是を無癡法と名づく。
何をか非無癡法と謂ふ。無癡を除く若し餘の法、是を非無癡法と名づく。
(42)何を順信法と謂ふ。善信・信根・順信、是を順信法と名づく。
何をか非順信法と謂ふ。順信を除く若し餘の法、是を非順信法と名づく。
(43)何をか悔法と謂ふ。作・非作の處に於て、作・非作し已りて若し悔ひて心の燋熱する、是を悔法と名づく。
何をか無悔法と謂ふ。悔を除く若し餘の法、是を無悔法と名づく。
(44)何をか[一九]無悔法と謂ふ。作・非作の處に於て作・非作し已りて若し悔ひず、心の燋熱せざる、是を[一九]無悔法と名づく。
何をか非無悔法と謂ふ。非悔を除く若し餘の法、是を非無悔法と名づく。
(45)　何をか悅法と謂ふ。若し心の悅豫、是を悅法と名づく。
何をか非悅法と謂ふ。悅法を除く若し餘の法、是を非悅法と名づく。
(46)何をか喜法と謂ふ。若しは喜び踊躍し、重踊躍し、寂靜心の歡ぶ、是を喜法と名づく。
何をか非喜法と謂ふ。喜法を除く若し餘の法、是を非喜法と名づく。
(47)何をか[二〇]心進法と謂ふ。若し心の發起し顯出し、越度する、是を心進法と名づく。
何をか非心進法と謂ふ。心進を除く若し餘の法、是を非心進法と名づく。
(48)何をか[二一]心除法と謂ふ。若し心の樂・心の調・心の輕・心の軟、是を心除法と名づく。
何をか非心除法と謂ふ。心除を除く若し餘の法、是を非心除法と名づく。

【一九】無。大正本等には非に作るも、宋元明の三本に照し、及び下方の文に反省して今改め讀む。
【二〇】心進。心心種無きこと。毘曇部十九、p. 13 等參照。
【二一】心除。心輕安のこと。同上參照。

(44)何をか信法と謂ふ。若し信・入信、是を信法と名づく。
何をか非信法と謂ふ。信法を除く若し餘の法、是を非信法と名づく。
(50)何をか欲法と謂ふ。若し作を悕望し欲する、是を欲法と名づく。
何をか非欲法と謂ふ。欲を除く若し餘の法、是を非欲法と名づく。
(51)何をか不放逸法と謂ふ、若し心を護る、是を不放逸法と名づく。
何をか非不放逸法と謂ふ。不放逸を除く若し餘の法、是を非不放逸法と名づく。
(52)何をか念法と謂ふ。若し念・憶念、是を念法と名づく。
何をか非念法と謂ふ。念を除く若し餘の法、是を非念法と名づく。
(53)何をか定法と謂ふ。若し一心、是を定法と名づく。
何をか非定法と謂ふ。定を除く若し餘の法、是を非定法と名づく。
(54)何をか心捨法と謂ふ。若し捨・勝捨・順捨・心の無作・非受、是を心捨法と名づく。
何をか非心捨法と謂ふ。心捨を除く若し餘の法、是を非心捨法と名づく。
(55)何をか疑法と謂ふ。若し所斷の煩惱處に到らざる、是を疑法と名づく。
何をか非疑法と謂ふ。疑を除く若し餘の法、是を非疑法と名づく。
(56)何をか怖法と謂ふ。若し驚畏、是を怖法と名づく。
何をか非怖法と謂ふ。怖を除く若し餘の法、是を非怖法と名づく。
(57)何をか煩惱使法と謂ふ。若し[三]十使、是を煩惱使法と名づく。
何をか非煩惱使法と謂ふ。十使を除く若し餘の法。是を非煩惱使法と名づく。
(58)何をか見使法と謂ふ。不善の見・不善の慧、若しは見使分見使なる、是を見使法と名づく。
何をか非見使法と謂ふ。見使を除く若し餘の法、是を非見使法と名づく。

【三】十使。前卷初の十煩惱使を見よ。

(59)何をか疑使法と謂ふ。[二三]上に説くが如し。
何をか非疑使法と謂ふ。疑使を除く若し餘の法、是を非疑使法と名づく。
(60)何をか戒道使法と謂ふ。不善の見・不善の慧、若し戒道分戒道なる、是を戒道使法と名づく。
何をか非戒道使法と謂ふ。戒道使を除く若し餘の法、是を非戒道使法と名づく。
[p.663a] (61)何をか愛使法と謂ふ。欲染、是を愛使法と名づく。
何をか非愛使法と謂ふ。愛使を除く若し餘の法、是を非愛使法と名づく。
(62)何をか瞋恚使法と謂ふ。悩害、是を瞋恚使法と名づく。
何をか非瞋恚使法と謂ふ。瞋恚使を除く若し餘の法、是を非瞋恚使法と名づく。
(63)何をか嫉妬使法と謂ふ。若し他が利養・尊重・恭敬を得るとき彼に於て憎嫉・重憎嫉・究竟憎嫉ある、是を嫉妬使法と名づく。
何をか非嫉妬使法と謂ふ。嫉妬使法を除く若し餘の法、是を非嫉妬使法と名づく。
(64)何をか慳惜使法と謂ふ。若し財物に於て、施さず、與へず、心の悋にして捨せざる、是を慳惜使法と名づく。
何をか非慳惜使法と謂ふ。慳惜使を除く若し餘の法、是を非慳惜使法と名づく。
(65)何をか無明使法と謂ふ。癡不善根、是を無明使法と名づく。
何をか非無明使法と謂ふ。無明使法を除く若し餘の法、是を非無明使法と名づく。
(66)何をか憍慢使法と謂ふ。若し[二四]慢を以て自ら高うする、是を憍慢使法と名づく。
何をか非憍慢使法と謂ふ。憍慢使を除く若し餘の法、是を非憍慢使法と名づく。
(67)何をか掉使法と謂ふ。若し掉・重掉・究竟掉・動・不定、奔逸にして心の寂靜ならざる、是を掉使法と名づく。

【二三】上に。十使中及び疑法として説くをさす。
【二四】慢。宋元明宮の四本には憍慢と。

何をか非掉使法と謂ふ。掉使を除く若し餘の法、是を非掉使法と名づく。

(68)何をか生法と謂ふ。若し陰の起する、是を生法と名づく。

何をか非生法と謂ふ。生を除く若し餘の法、是を非生法と名づく。

(69)何をか老法と謂ふ。若し陰の衰する、是を老法と名づく。

何をか非老法と謂ふ。老を除く若し餘の法、是を非老法と名づく。

(70)何をか死法と謂ふ。若し陰の壞する、是を死法と名づく。

何をか非死法と謂ふ。死を除く若し餘の法、是を非死法と名づく。

(71)何をか命法と謂ふ。若し衆生の住する、是を命法と名づく。

何をか非命法と謂ふ。命を除く若し餘の法、是を非命法と名づく。

(72)何をか煩惱結法と謂ふ、[二五]十結、是を煩惱結法と名づく。

何をか非煩惱結法と謂ふ。結を除く若し餘の法、是を非煩惱結法と名づく。

(73)何をか無想定法と謂ふ。若し果實天を離れて若し心・心數法の寂靜して入定する、是を無想定法と名づく。

何をか非無想定法と謂ふ。無想定を除く若し餘の法、是を非無想定法と名づく。

(74)何をか得果法と謂ふ。若し果を證する、是を得果法と名づく。

何をか非得果法と謂ふ。得〔p.663b〕果を除く若し餘の法、是を非得果法と名づく。

(75)何をか滅盡定法と謂ふ。若し非想非非想處を離れて若し心・心數法の寂靜する出世法ある、是を滅盡定法と名づく。

何をか非滅盡定法と謂ふ。滅盡定を除く若し餘の法、是を非滅盡定法と名づく。

(76)何をか非戒法と謂ふ。[二六]七種の非戒、是を非戒法と名づく。

【二五】十結。十卷初の十煩惱結を見よ。

【二六】七種の非戒。次註參照。

何をか無戒法と謂ふ。非戒法を除く若し餘の法、是を無戒法と名づく。

(77)何をか戒法と謂ふ。[二七]七種の戒、是を戒法と名づく。

何をか無戒法と謂ふ。戒を除く若し餘の法、是を無戒法と名づく。

(78)何をか有漏の身進法と謂ふ。若し有漏身を以て發起し顯出し越度する、是を有漏の身進法と名づく。

何をか非有漏身進法と謂ふ。有漏の身進を除く若し餘の法、是を非有漏身進法と名づく。

(79)何をか有漏の身除法と謂ふ。若し有漏の身樂・身調・身輕・身軟・身除、是を有漏の身除法と名づく。

何をか非有漏身除法と謂ふ。有漏の身除を除く若し餘の法、是を非有漏身除法と名づく。

(80)何をか正語法と謂ふ。若し[二八]法の口の[二九]四過に於て遠離して樂はず、守護し攝して行ずる、是を正語法と名づく。

何をか非正語法と謂ふ。正語を除く若し餘の法、是を非正語法と名づく。

(81)何をか正業法と謂ふ。若し身の[三〇]三惡を遠離して樂はず、守護し攝して行ずる、是を正業法と名づく。

何をか非正業法と謂ふ。正業を除く若し餘の法、是を非正業法と名づく。

(82)何をか正命法と謂ふ。身口の惡行を除く若し餘の 邪命を作さず 樂はず、守護し攝して行ずる、是を正命法と名づく。

何をか非正命法と謂ふ。正命を除く若し餘の法、是を非正命法と名づく。

(83)何をか正身進法と謂ふ。若し無漏身の發起・顯出・越度、是を正身進法と名づく。

何をか非正身進法と謂ふ。正身進を除く若し餘の法、是を非正身進法と名づく。

【二七】 七種の戒。一口に所謂二百五十戒を左の七種の分類するをさす。(毘曇部一、初段、p. 66〔二〇二〕以下參照)。
一、波羅夷罪――巴、Pārājika (最も重い罪で、教團外に放逸せらる。)
二、僧伽婆尸沙――巴、Saṅghādisesa. (衆除と譯し、懺悔によりて教團にとどまることは、許さるる程の戒法。)
三、不定――巴、Aniyata. (實情査定の上で罪課を決せらるべく、單なる表面的事實のみでは決せられぬ樣な戒をいふ。)
四、尼薩耆波逸提――巴、Nissaggiyā pācittiya (何れも物質に關する戒法で、その物質を教團に納めてその上、懺悔を課せらるる戒。
五、波逸提――巴、Pācittiya (懺悔すれば許さるる程度のやゝ輕戒法)。
六、提舍尼――巴、Pāṭidesaniya (對首と譯し、人の面前で對首、懺悔して改むべき戒法)。
七、衆學――巴、Sekhiya (箇條澤山の戒法で、甚だ輕い罪の戒法のみを一指していふ)。
【二八】 法の。宋元明宮の四本

(84)何をか正身除法と謂ふ。無漏の身樂・身調・身輕・身軟・身除、是を正身除法と名づく。
何をか非正身除法と謂ふ。正身除を除く若し餘の法、是を非正身除法と名づく。
(85)何をか智緣盡法と謂ふ。若し諸の因の盡きて餘無き、是を智緣盡法と名づく。
何をか無智緣盡法と謂ふ。智緣盡を除く若し餘の法、是を無智緣盡法と名づく。
(86)何をか[三一]非智緣盡法と謂ふ。若し有爲法の、衆緣の會せざる、〔p.663c〕是を非智緣盡法と名づく。
何をか非非智緣盡法と謂ふ。非智緣盡を除く若し餘の法、是を非非智緣盡法と名づく。
(87)何をか決定法と謂ふ。若し法の畢定せる、是を決定と名づく。
何をか非決定法と謂ふ。決定を除く若し餘の法、是を非決定法と名づく。
(88)何をか法住法と謂ふ。緣如爾を除く若し餘の[三二]法の[三三]如爾・不變・不異・非異物・常法・實法・法住・法定・住にして緣に非ざる、是を法住法と名づく。
何をか非法住法と謂ふ。法住法を除く若し餘の法、是を非法住法と名づく。
(89)何をか緣法と謂ふ。若し緣如爾、是を緣法と名づく。
何をか非緣法と謂ふ。緣を除く若し餘の法、是を非緣法と名づく。
(90)何をか空處法と謂ふ。空處に二種あり。或は有爲或は無爲なり。
何をか有爲の空處と謂ふ。若し空處定・空處の生なり。
何をか空處定と謂ふ。若し比丘の一切の色想を離れ、瞋恚想を滅し、若干想を思惟せず、無邊の空處を成就して行ずる、是を空處定と名づく。
何をか空處の生と謂ふ。若し定に親近し多く修學し已りて、空處の天上にて四種の我分=受・想・行・識を受く。是を空處の生と名づく。

にはこの字なし。
【二九】四過。妄語、兩舌、語、惡口をいふ。
【三〇】三惡。殺生・偸盜・邪婬をいふ。
【三一】非智緣盡。缺緣不生の非擇滅無爲のこと。
【三二】法の等。毘曇部十九、p. 323 等及び、S. 12, 20(vol. 2, p. 25); その他參照。
【三三】如爾以下。巴、tathatā, avitathatā anaññathatā idapaccayatā(S. 2, p. 26)等參照のこと。

——是の如きの空處定・空處の生、是を有爲の空處と名づく。

何をか無爲の空處と謂ふ。若し智を以て空處を斷ずる、是を無爲の空處と名づく。

(91)—(93)識處・不用處・非想非非想處も亦是の如し。

(94)何をか[三四]眼界法と謂ふ。眼入、是を眼界法と名づく。

何をか非眼界法と謂ふ。眼界を除く若し餘の法、是を非眼界法と名づく。

(95)—(111)乃至、(112)意識界も亦是の如し。

(113)何をか色陰法と謂ふ。若し十色入及び法入の色、是を色陰法と名づく。

何をか非色陰法と謂ふ。色陰を除く若し餘の法、是を非色陰法と名づく。

(114)何をか受陰法と謂ふ。若し[三五]六受、是を受陰法と名づく。

何をか非受陰法と謂ふ。受陰を除く若し餘の法、是を非受陰法と名づく。

(115)何をか想陰法と謂ふ。若し[三六]六想、是を想陰法と名づく。

何をか非想陰法と謂ふ。想陰法を除く若し餘の法、是を非想陰法と名づく。

(116)何をか行陰法と謂ふ。六思、是を行陰法と名づく。

何をか非行陰法と謂ふ。行陰を除く若し餘の法、是を非行陰法と名づく。

(117)何をか識陰法と謂ふ。六識、是を識陰法と名づく。

何をか非識陰法と謂ふ。識陰を除く若し餘の法、是を非識陰法と名づく。

(118)何をか苦聖諦法と謂ふ。[三八]八苦〔p.664a〕是を苦聖諦法と名づく。

何をか非苦聖諦法と謂ふ。苦聖諦を除く若しは餘の法、是を非苦聖諦法と名づく。

(119)何をか集聖諦法と謂ふ。謂く愛・復、欲染喜樂有り。是を集聖諦法と名づく。

何をか非集聖諦法と謂ふ。集聖諦を除く若し餘の法、是を非集聖諦法と名づく。

【三四】眼界法以下。十八界法に關說す。

【三五】六受。眼觸所生以下意識所生等の六受をいふ。

【三六】六想。右同樣の六想をいふ。

【三七】六思。右註に準知すべし。

【三八】八苦。生老病死（以上四苦）、怨憎會、恩愛別、所欲失、五受陰の八苦をいふ。

(120)何をか滅聖諦法と謂ふ。愛を離・捨・出・解脫・滅盡して餘り無き、是を滅聖諦法と名づく。
何をか非滅聖諦法と謂ふ。滅聖諦を除く若し餘の法、是を非滅聖諦法と名づく。
(121)何をか道聖諦法と謂ふ。八聖道、是を道聖諦法と名づく。
何をか非道聖諦法と謂ふ。八聖道を除く若し餘の法、是を非道聖諦法と名づく。
(122)何をか眼根法と謂ふ。眼入、是を眼根法と名づく。
何をか非眼根法と謂ふ。眼根を除く若し餘の法、是を非眼根法と名づく。
(123)—(126)耳・鼻・舌・身根も亦是の如し。
(127)何をか女根法と謂ふ。女身・女性・女相・女形、是を女根法と名づく。
何をか非女根法と謂ふ。女根を除く若し餘の法、是を非女根法と名づく。
(128)何をか男根法と謂ふ。男身・男性・男相・男形、是を男根法と名づく。
何をか非男根法と謂ふ。男根を除く若し餘の法、是を非男根法と名づく。
(129)何をか命根法と謂ふ。若し壽、是を命根法と名づく。
何をか非命根法と謂ふ。命根を除く若し若し餘の法。是を非命根法と名づく。
(130)何をか樂根法と謂ふ。受陰中の樂根、是を樂根法と名づく。
何をか非樂根法と謂ふ。樂根を除く若し餘の法、是を非樂根法と名づく。
(131)—(134)苦根・憂根・喜根・捨根も亦是の如し。
(135)何をか意根法と謂ふ。意入、是を意根法と名づく。
何をか非意根法と謂ふ。意根を除く若し餘の法、是を非意根法と名づく。
(136)何をか信根法と謂ふ。聖信・聖順信・信根、是を信根法と名づく。
何をか非信根法と謂ふ。信根を除く若し餘の法、是を非信根法と名づく。

(137)何をか進根法と謂ふ。聖心進・正身進・進根、是を進根法と名づく。
何をか非進根法と謂ふ。進根を除く若し餘の法、是を非進根法と名づく。
(138)何をか念根法と謂ふ。聖念・念根、是を念根法と名づく。
何をか非念根法と謂ふ。念根を除く若し餘の法、是を非念根法と名づく。
(139)何をか定根法と謂ふ。聖定根法、是を定根法と名づく。
何をか非定根法と謂ふ。定根を除く〔p.664b〕若し餘の法、是を非定根と名づく。
(140)何をか慧根法と謂ふ。聖見・聖慧・聖無癡根、是を慧根法と名づく。
何をか非慧根法と謂ふ。慧根を除く若し餘の法、是を非慧根法と名づく。
(141)何をか未知欲知根法と謂ふ。堅信・堅法人の聖無漏法は非根にして根と名づくるを得。謂く想・思等の分なり。是を未知欲知根法と名づく。
何をか非未知欲知根法と謂ふ。未知欲知根を除く若し餘の法、是を非未知欲知根法と名づく。
(142)―(143)知根・知已根も亦是の如し。
(144)何をか念覚法と謂ふ。聖念覚、是を念覚法と名づく。
何をか非念覚法と謂ふ。念覚を除く若し餘の法、是を非念覚法と名づく。
(145)何をか擇法覚法と謂ふ。聖見・聖慧・聖無癡・擇法覚、是を擇法覚法と名づく。
何をか非擇覚法と謂ふ。擇法覚を除く若し餘の法、是を非擇法覚法と名づく。
(146)何をか進覚法と謂ふ。聖心進・正身進の覚、是を進覚法と名づく。
何をか非進覚法と謂ふ。進覚を除く若し餘の法、是を非進覚法と名づく。
(147)何をか喜覚法と謂ふ。聖喜・喜覚、是を喜覚法と名づく。
何をか非喜覚法と謂ふ。喜覚を除く若し餘の法、是を非喜覚法と名づく。

(148)何をか除覺法と謂ふ。聖心除・除覺、是を除覺法と名づく。
何をか非除覺法と謂ふ。除覺を除く若し餘の法、是を非除覺法と名づく。
(149)何をか定覺法と謂ふ。聖定・定覺、是を定覺法と名づく。
何をか非定覺法と謂ふ。定覺を除く若し餘の法、是を非定覺法と名づく。
(150)何をか捨覺法と謂ふ。聖心捨・捨覺、是を捨覺法と名づく。
何をか非捨覺法と謂ふ。捨覺を除く若し餘の法、是を非捨覺法と名づく。
(151)何をか貪不善根法と謂ふ。若し希望、是を貪不善根法と名づく。
何をか非貪不善根法と謂ふ。貪不善根を除く若し餘の法、是を非貪不善根法と名づく。
(152)—(153)恚癡も亦是の如し。
(154)何をか無貪善根法と謂ふ。若し不希望、是を無貪善根法と名づく。
何をか非無貪善根法と謂ふ。無貪善根を除く若し餘の法、是を非無貪善根法と名づく。
(155)—(156)無恚・無癡も亦是の如し。
(157)何をか地大法と謂ふ。觸入中の地大、是を地大法と名づく。
何をか非地大法と謂ふ。地大を除く若し餘の法、是を非地大法と名づく。
(158)—(160)水・火・風大も亦〔p.164c〕是の如し。
(161)何をか不殺生戒法と謂ふ。不殺戒、是を不殺生戒法と名づく。
何をか非不殺生戒法と謂ふ。不殺生戒を除く若し餘の法、是を非不殺生戒法と名づく。
(162)—(164)[三九]乃至、(165)不飲酒・不放逸も亦是の如し。
(166)何をか色法と謂ふ。若し法の色なる、是を色法と名づく。
何をか非色法と謂ふ。色を除く若し餘の法、是を非色法と名づく。

【三九】乃至。偸盜・邪婬・妄語の三を乃至す。

(167)何をか可見法と謂ふ。色入、是を可見法と名づく。

何をか不可見法と謂ふ。色入を除く若し餘の法、是を不可見法と名づく。

(168)何をか有對法と謂ふ。十色入、是を有對法と名づく。

何をか無對法と謂ふ。意入・法入、是を無對法と名づく。

(169)何をか聖法と謂ふ。若し法の無漏なる、是を聖法と名づく。何をか非聖法と謂ふ。若し法の有漏なる、是を非聖法と名づく。

(170)―(175)有漏・無漏・有染・無染・有求・無求・當取・非當取・有取・無取・有勝・無勝も亦是の如し。

(176)何をか受法と謂ふ。若し法の內なる、是を受法と名づく。

何をか非受法と謂ふ。若し法の外なる、是を非受法と名づく。

(177)何をか內法と謂ふ。若し法の受なる、是を內法と名づく。

何をか外法と謂ふ。若し法の非受なる、是を外法と名づく。

(178)何をか有報法と謂ふ。若し[四〇]法の法報なる、是を有報法と名づく。

何をか無報法と謂ふ。若しは法報、若しは非報非報法、是を無報法と名づく。

(179)何をか心法と謂ふ、意入、是を心法と名づく。

何をか非心法と謂ふ。心を除く若し餘の法、是を非心法と名づく。

(180)何をか心相應法と謂ふ。若し法の心數なる、是を心相應法と名づく。

何をか無心相應法と謂ふ。若し法の非心數及び心なる、是を無心相應法と名づく。

(181)何をか非心相應法と謂ふ。若し法の非心數なる、是を非心相應法と名づく。

何をか非不心相應法と謂ふ。若し法の心數なる、是を非不心相應法と名づく。

【四〇】法の等。毘曇部十九、p. 67; &c. 參照。

(182)何をか非心相應非心不相應法と謂ふ。意入、是を非心相應非心不相應法と名づく。
何をか非非心相應非非不心相應法と謂ふ。若し法の心數・非心數なる、是を非非心相應非非不心相應法と名づく。
(183)何をか心數法と謂ふ。心を除く若し餘の有緣の法、是を心數法と名づく。
何をか非心數法と謂ふ。若し法の無緣及び心なる、是を非心數法と名づく。
(184)何をか有緣法と謂ふ。若し法の心數及び心なる、是を有緣法と名づく。
何をか無緣法と謂ふ。[p.665a] 心を除く若し餘の非心數法、是を無緣法と名づく。
(185)何をか共心法と謂ふ。若し法の心に隨ひて轉じ、心と共に生じ共に住し共に滅する、是を共心法と名づく。
何をか不共心法と謂ふ。若し法の心に隨ひて轉ぜず心と共に生ぜず共に住せず共に滅せさる、是を不共心法と名づく。
(186)隨心轉も亦是の如し。
(187)何をか業法と謂ふ。身・口・意業、是を業法と名づく。
何をか非業法と謂ふ。身・口・意業を除く若し餘の法、是を非業法と名づく。
(188)何をか業相應法と謂ふ。若し法の思と相應する、是を業相應法と名づく。
何をか無業相應法と謂ふ。若し思相應に非ざると及び思と、是を無業相應法と名づく。
(189)何をか非業相應法と謂ふ。若し法の思と相應するに非ざる、是を非業相應法と名づく。
何をか非無業相應法と謂ふ。若し法の思と相應する、是を非無業相應法と名づく。
(190)何をか非業相應非不業相應法と謂ふ。思、是を非業相應非不業相應法と名づく。
何をか非非業相應非非不業相應法と謂ふ。若しは思相應、若しは思相應に非ざる、是を非非業相

應非非不業相應法と名づく。

(191)何をか共業法と謂ふ。若し法の隨業轉にして業と共に生じ共に住し共に滅する、是を共業法と名づく。

何をか非共業法と謂ふ。若し法の不隨業轉にして共に生ぜず共に住せず共に滅せざる、是を不共業法と名づく。

(192)隨業轉・不隨業轉も亦是の如し。

(193)何をか因法と謂ふ。若しは法の有緣、若しは無緣・有報なる、得果を除く若し法の無緣の善報、及び四大、是を因法と名づく。

何をか無因法と謂ふ。若し法の無緣・無報、不共業・得果なる、是を無因法と名づく。

(194)何をか有因法と謂ふ。若し法の有緒なる、是を有因法と名づく。

何をか無因法と謂ふ。若し法の無緒なる、是を無因法と名づく。

(195)—(197)有緒・無緒、有緣・無緣、有爲・無爲も亦是の如し。

(148)何をか知法と謂ふ。一切法を知り相の如く知見する、是を知法と名づく。

何をか非知法と謂ふ。非知法無し。復次に、一切法を相の如く知見せざる、是を非知法と名づく。

(199)—(201)識・非識、了・非了、解・非解も亦是の如し。

(202)何をか斷智知法と謂ふ。若し法の不善なる、是を斷智知法と名づく。

何をか非斷智知法と謂ふ。若し法の善・無記なる、是を非斷智知法と名づく。

(203)斷・非斷も亦是の如し。

(204)何をか修法と謂ふ、〔p.665b〕若し法の善なる。是を修法と名づく。

何をか非修法と謂ふ。若し法の不善・無記なる、是を非修法と名づく。

(205)何をか證法と謂ふ。一切法を證し相の如く知見する、是を證法と名づく。
何をか非證法と謂ふ。非證法無し。復次に一切法を證するに非ず、相の如く知見せざる、是を非證法と名づく。
(206)何をか善法と謂ふ。若し法の修なる、是を善法と名づく。
何をか無善法と謂ふ。若し法の不善・無記なる、是を無善法と名づく。
(207)何をか不善法と謂ふ。若し法の斷なる、是を不善法と名づく。
何をか無不善法と謂ふ。若し法の善・無記なる、是を無不善法と名づく。
(208)何をか無記法と謂ふ。若しは法の受なる、若しは非報非報法なる、是を無記法と名づく。
何をか無無記法と謂ふ。若し法の善・不善なる、是を無記法と名づく。
(209)何をか學法と謂ふ。若し法の聖にして無學に非ざる、是を學法と名づく。
何をか非學法と謂ふ。若しは法の非聖若しは無學なる、是を非無學と名づく。
(210)何をか無學法と謂ふ。若し法の聖にして學に非ざる、是を無學法と名づく。
何をか非無學法と謂ふ。若しは法の非聖若しは學なる、是を非無學法と名づく。
(211)何をか非學非無學法と謂ふ。若し法の非聖なる、是を非學非無學法と名づく。
何をか非非學非非無學法と謂ふ。若し法聖なる、是を非非學非非無學法と名づく。
(212)何をか報法と謂ふ。若しは受若しは善の報なる、是を報法と名づく。
何をか非報法と謂ふ。若しは不善、若しは善の有報、若しは非報非報法なる、是を非報法と名づく。
(213)何をか報法法と謂ふ。若し法の有報なる、是を報法法と名づく。
何をか非報法法と謂ふ。若しは報、若しは非報非報法なる、是を非報法法と名づく。

(214)何をか非報非報法法と謂ふ。若し法の無記にして我分の攝に非ざる聖無爲、是を非報非報法法と名づく。
何をか非非報非非報法法と謂ふ。若しは報、若しは報法なる、是を非非報非非報法法と名づく。
(215)何をか見斷法と謂ふ。若し法の不善にして思惟斷に非ざる、是を見斷法と名づく。
何をか非見斷法と謂ふ。若しは法の善無記、若しは思惟斷なる、是を非見斷法と名づく。
(216)何をか思惟斷法と謂ふ。若し法の不善にして見斷に非ざる、是を思惟斷法と名づく。
何をか非思惟斷法と謂ふ。若しは法の善、若しは無記にして見斷なる、是を非思惟斷法と名づく。
(217)何をか非見斷非思惟斷法と謂ふ。若しは法の善・無記なる、是を非見〔p.665c〕斷非思惟斷法と名づく。
何をか非非見斷非非思惟斷法と謂ふ。若し法の不善なる、是を非非見斷非非思惟斷法と名づく。
(218)何をか見斷因法と謂ふ。若しは法の見斷、若しは見斷法の報なる、是を見斷因法と名づく。
何をか非見斷因法と謂ふ。若しは法の善、若しは善の法報、若しは思惟斷、若しは思惟斷法の報、若しは非報非報法なる、是を非見斷因法と名づく。
(219)何をか思惟斷因法と謂ふ。若しは法の思惟斷、若しは思惟斷法の報なる、是を思惟斷因法と名づく。
何をか非思惟斷因法と謂ふ。若しは法の善、若しは善法の報、若しは見斷法の報、若しは非報非報法なる、是を非思惟斷因法と名づく。
(220)何をか非見斷非思惟斷因法と謂ふ。若しは法の善、若しは善法の報、若しは非非報報法なる、是を非見斷非思惟斷因法と名づく。
何をか非非見斷非非思惟斷因法と謂ふ。若しは法の不善、若しは不善法の報なる、是を非非見斷

非非思惟斷因法と名づく。

(221)何をか欲界繫法と謂ふ。若し法の欲漏・有漏なる、是を欲界の繫法と名づく。

何をか非欲界界法と謂ふ。若しは法の色・無色界繫なる。法の若しは不繫なる、是を非欲界繫法と名づく。

(222)何をか色界繫法と謂ふ。若し法の色漏・有漏なる、是を色界の繫法と名づく。

何をか非色界繫法と謂ふ。若しは欲界・無色界繫、若しは不繫なる、是を非色界繫法と名づく。

(223)何をか無色界繫法と謂ふ。若し法の無色漏・有漏なる、是を無色界繫法と名づく。

何をか非無色界繫法と謂ふ。若しは法の欲界〔繫〕、若しは色界繫、若しは不繫なる、是を非無色界繫法と名づく。

(224)何をか不繫法と謂ふ。若し聖・無漏・無爲なる、是を不繫法と名づく。

何をか非不繫法と謂ふ。若し三界繫なる、是を非不繫法と名づく。

(225)何をか過去法と謂ふ。若し法の生じ已りて滅せる、是を過去法と名づく。

何をか非過去法と謂ふ。若し未來・現在・非過去非未來非現在なる、是を非過去法と名づく。

(226)何をか未來法と謂ふ。若し法の未だ生ぜず、未だ出でざる、是を未來法と名づく。

何をか非未來法と謂ふ。若しは過去・現在、若しは非過去非未來非現在なる、是を非未來法と名づく。

(227)何をか現在法と謂ふ。若しは法の生じて未だ滅せざる、是を現在法と名づく。

何をか非現〔p.666c〕在法と謂ふ。若し法の過去・未來・非過去非現在なる、是を非現在法と名づく。

(228)何をか非過去非未來非現在法と謂ふ。若し法の無爲なる、是を非過去非未來非現在法と名づ

く。

何をか非非過去未來現在法と謂ふ。若し法の過去・未來・現在なる、是を非非過去未來現在法と名づく。[四一]性門竟り

[四二]苦諦繫法は幾(いくばく)か[四三]陰・界・入の攝なる。――[四四]何等の法をか問ふ。苦諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非苦諦繫法を除く。

非苦諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。非苦諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。苦諦繫法を除く。

集諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。集諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非集諦繫法を除く。

非集諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。非集諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。集諦繫法を除く。

滅諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。滅諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非滅諦繫法を除く。

非滅諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。非滅諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。滅諦繫法を除く。

道諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。道諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非道諦繫法を除く。

非道諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。非道諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。道諦繫法を除く。

諸聖諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。諸聖諦繫法を問ひ、餘の法を除く。

【四一】性門。本性を說明する部門竟りの意。

【四二】苦諦云云。以下本品の特色的解說の一たる、以上諸法の攝を明す。

【四三】陰・界・入。五陰・十八界・十二入の意。

【四四】何等か等。この攝論のやり方は本論獨特のやり方にして、陰・界・入の所謂三科に攝する法について、正面的に幾陰・幾界・幾入に攝すとは解せず、正に問擇する所が云云の法（例へば第一には苦諦繫法）であつて、餘の何れの法にも非ざる點だけを明し、以下、全論を終始す。南北二傳の諸阿毘達磨中、餘り、他に類例のないやり方として一應の價ありとせむ。

何等の法をか除く。非諸聖諦繫法を除く。

非諸聖諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非諸聖諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。諸聖諦繫法を除く。

根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非根法を除く。

非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く、根法を除く。

苦諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。苦諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何〔p.666b〕等の法をか除く。非苦諦繫の根法を除き、苦諦繫の非根法を除く。

非苦諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非苦諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。苦諦繫法を除き、苦諦繫の非根法を除く。

集諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。集諦繫の根法を問ふも、集諦繫の根法無し。

非集諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非集諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く、集諦繫法を除き、非集諦繫の非根法を除く。

滅諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。滅諦繫の根法を問ふも、滅諦繫の根法無し。

非滅諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非滅諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。滅諦繫法を除き、非滅諦繫の非根法を除く。

道諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。道諦繫の根法を問ひ、餘の法を

除く。何等の法をか除く。非道諦繫法を除き、道諦繫の非根法を除く、非道諦繫の非根法無し。

非道諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非道諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。道諦繫の根法を除き、非道諦繫の非根法を除く。

諸聖諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。諸聖諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非諸聖諦繫の根法を除き、諸聖諦繫の非根法を除く。

非諸聖諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非諸聖諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。諸聖諦繫の根法を除き、非諸聖諦繫の非根法を除く。

苦諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。苦諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非苦諦繫法を除き、苦諦繫の根法を除く。

非苦諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非苦諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。苦諦繫法を除き、非苦諦繫の根法を除く。

集諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。集諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等〔p.686c〕の法をか除く。非集諦繫法を除く。集諦繫の根法を除かむも、「是は」無きなり。

非集諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非集諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。集諦繫法を除き、非集諦繫の根法を除く。

滅諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。滅諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非滅諦繫法を除く。滅諦繫の根法を除かむも、〔是は〕無きなり。

非滅諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非滅諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。滅諦繫法を除き、非滅諦繫の根法を除く。

道諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。道諦繫の非根法を問ひ、[四五]餘の法を除く。何等の法をか除く。非道諦繫法を除く。道諦繫の根法を除かむも、〔是は〕無きなり。

非道諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。非道諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。道諦繫法を除き、非道諦繫の根法を除く。

諸聖諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。諸聖諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非諸聖諦の繫法を除き、諸聖諦繫の根法を除く。

非諸聖諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。非諸聖諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。諸聖諦繫法を除き、非諸聖諦繫の根法を除く。

眼入法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。眼入法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非眼入法なり。

非眼入法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。非眼入法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。眼入法を除く。乃至、法入も亦是の如し。

眼界法は幾か陰・界・入の攝なる。何等の法をか問ふ。眼界法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非眼界法を除く。

非眼界法は幾か陰・界・入の攝なる。何等の法をか問ふ。非眼界法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。眼界法を除く。乃至、法界も亦是の如し。

色陰法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色陰法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色陰法を除く。

非色陰法は幾か陰・界・入の攝なる。何等の法をか問ふ。非色陰法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。色陰法を除く。〔p.667a〕乃至、識陰も亦是の如し。

【四五】餘の法以下、〔是は〕まで。宋元明の三本によりて補入。

苦聖諦法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。苦聖諦法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非苦聖諦法を除く。

非苦聖諦法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。非苦聖諦法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。苦聖諦法を除く。乃至、道聖諦法も亦是の如し。

眼根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。眼根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非眼根法を除く。

非眼根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。非眼根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。眼根法を除く。乃至、知已根法も亦是の如し。

念覚法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。念覚法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非念覚法を除く。

非念覚法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。非念覚法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。念覚法を除く。乃至、捨覚法も亦是の如し。

貪不善根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。貪不善根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非貪不善根法を除く。

非貪不善根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。非貪不善根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。貪不善根法を除く。恚癡も亦是の如し。

無貪善根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。無貪善根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非無貪善根法を除く。

非無貪善根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。非無貪善根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無貪善根法を除く。無恚・無癡も亦是の如し。

地大法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。地大法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非地大法を除く。

非地大法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非地大法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。地大法を除く。水・火・風大も亦是の如し。

不殺生戒法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。不殺生戒法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非不殺生戒法を除く。

非不殺生戒法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非不殺生戒法を問ひ、餘の〔P.067b〕法を除く。何等の法をか除く。不殺生戒法を除く。乃至、不飲酒・不放逸處も亦是の如し。

色法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除く。

非色法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。非色法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。色法を除く。乃至、過去・未來・現在の法も亦是の如し。單門竟り

卷の第二十二 〔p. 667c〕

攝相應分攝品第一【其の二】

色の苦諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。苦諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の苦諦繫法に非ざるを除く。

色の苦諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の苦諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の苦諦繫法なるを除く。

色の集諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の集諦繫法を問ふも、〔是は〕無きなり。

色の非集諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の非集諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除く。色の集諦繫法を除かむも、〔是は〕無きなり。

色の滅諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の滅諦繫法を問ふも、〔是は〕無きなり。

色の滅諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の非滅諦繫法を問ひ、餘の法を除く、何等の法を除く。非色法を除く。色の滅諦繫法を除かむも、〔是は〕無きなり。

色の道諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法を問ふも、色の道諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の道諦繫法に非ざるを除く。

色の非道諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。〔p. 667c〕何等の法をか問ふ。色の非道諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の道諦繫法を除く。

色の諸聖諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の非諸聖諦繫法を問ひ、餘

の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の諸聖諦繫法に非さるを除く。

色の非諸聖諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の非諸聖諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の諸聖諦繫法を除く。

色の根法は幾か陰・會・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き。色の根法に非ざるを除く。

色の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の根法を除く。

色の苦諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の苦諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の苦諦繫法に非ざるを除き、色の苦諦繫の非根法を除く。

色の非苦諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の非苦諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の苦諦繫法を除く。色の非苦諦繫の非根法を除かむも〔是は〕無きなり。

色の集諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか除く。色の集諦繫の根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

色の非集諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の非集諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く、何等の法をか除く。非色法を除く。色の集諦繫法を除かむも〔是は〕無きなり。色の非集諦繫の非根法を除く。

色の滅諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の滅諦繫の根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

色の非滅諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の非滅諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除く。色の滅諦繫法を除かむも、〔是は〕無きなり。色の非滅諦繫非根法を除く。

色の道諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の道諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色[一]法の非道諦繫の法を除く。色の道諦繫の非根法を除かむも、〔是は〕無きなり。

色の非道諦繫の根法は幾か陰〔p. 668a〕・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の非道諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、[二]道諦繫の法を除き色の非道諦繫の非根法を除く。

色の諸聖諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の諸聖諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の非諸聖諦繫法を除き、色の非諸聖諦繫の根法を除く。

色の非諸聖諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の非諸聖諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の諸聖諦繫法を除く。色の非諸聖諦繫の非根法を除かむも、〔是は〕無きなり。

色の苦諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の苦諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の非苦諦繫法を除き、色の苦諦の繫根法を除く。

色の非苦諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。色の非苦諦繫の非根法

【一】法。宋元明宮の四本にはこの字なし。
【二】道諦繫法を除き。同上四本によりて補入。

を問ふも、〔是は〕無きなり。

色の集諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の集諦繋の非根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

色の非集諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の非集諦繋の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除く。色の集諦繋法を除かむも、〔是は〕無きなり。色の非集諦繋の根法を除く。

色の滅諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。何等の法をか問ふ。色の滅諦繋の非根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

色の非滅諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の非滅諦繋の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除く。色の滅諦繋法を除かむも、〔是は〕無きなり。色の非滅諦繋の根法を除く。

色の道諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の道諦繋非根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

色の非道諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の非道諦繋の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除き、色の道諦繋法を除き、色の非道諦繋の根法を除く。

色の諸聖諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の諸聖諦繋の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。〔p. 668b〕非色法を除き、色の非諸聖諦繋法を除き、色の諸聖諦繋の根法を除く。

色の非諸聖諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。色の非諸聖諦繋の非

根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

非色法は色法の說の如く說き、乃至過去未來現在法も亦是の如し。二重二行

善色の苦諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。何等の法をか問ふ。善色の苦諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善色の非苦諦繫法を除く。

善色の非苦諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善色の非苦諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善色の苦諦繫法を除く。

善色の集諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善色の集諦繫法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善色の非集諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。何等の法をか問ふ。善色の非集諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善色の集諦繫法を除く。

問ふ、善色の滅諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善色の滅諦繫法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善色の非滅諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善色の非滅諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除く。善色の滅諦繫法を除かむも、〔是は〕無きなり。

善色の道諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善色の道諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善色の非道諦繫法を除く。

善色の非道諦繫法は幾か陰、界、入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善色の非道諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善色の道諦繫法を除く。

善色の諸聖諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善色の諸聖諦繫法を問ひ、

餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善色の非諸聖諦繫法を除く。

善色の非諸聖諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふも善色の非諸聖〔p. 468c〕諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善色の諸聖諦繫法を除く。

善の色の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善の色の非根法を除く。

善の色の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善の色の根法を除く。

善の色の苦諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の苦諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善の色の苦諦繫法を除く。善の色の非苦諦繫の非根法を除かむも、〔是は〕無きなり。[三]善の色の集諦繫根法は無きなり。

善の色の非苦諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の非苦諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善の色の苦諦繫法を除く。善の色の非苦諦繫の非根法を除かむも、〔是は〕無きなり。

善の色の集諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の集諦繫の根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の色の非集諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の非集諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除く、善の色の集諦繫法を除かむも、〔是は〕無なり。

【三】善の色の一句。下の「集諦繫の根法」下よりまぎれ込み來れる衍文なるべし。

善の色の滅諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の色の滅諦繫の根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の色の非滅諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の色の非滅諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除く。善の色の滅諦繫法を除かむも、〔是は〕無きなり。善の色の非滅諦繫の根法を除く。

善の色の道諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の色の道諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善の色の非道諦繫法を除く。善の色の道諦繫の非根法を除かむも、〔是は〕無きなり。

善の色の非道諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。〔p. 669a〕善の色の非道諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善の色の道諦繫法を除き、善の色の非道諦繫の非根法を除く。

善の色の諸聖諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の色の諸聖諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善の色の非諸聖諦繫法を除き、善の色の諸聖諦繫の根法を除く。

善の色の非諸聖諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の色の非諸聖諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善の色の諸聖諦繫の非根法を除かむも〔是は〕無きなり。

善の色の苦諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の色の苦諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善の色の非苦諦繫法を除く。善の色の非苦諦繫の根法を除かむも、〔是は〕無きなり。

善の色の非苦諦繋の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の非苦諦繋の非根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の色の集諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の集諦繋の非根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の色の非集諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の非集諦繋非根法を問ひ、餘の法を除く、何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除く。善の色の集諦繋法を除かむも、〔是は〕無きなり。善の色の非集諦繋の根法を除く。

善の色の滅諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の滅諦繋非根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の色の非滅諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の非滅諦繋の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除く。善の色の滅諦繋法を除かむも、〔是は〕無きなり。善の色の非滅諦繋の根法を除く。

善の色の道諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の道諦繋の根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の色の非道諦繋の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の非道諦繋の非根法を問ひ、餘〔p. 669b〕の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善の色の道諦繋法を除き、善の色の非道諦繋の根法を除く。

善の色の諸聖諦繋非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の色の諸聖諦繋の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非色法を除き、善の色の非諸聖諦繋の根法を除き、善の色の諸聖諦繋の根法を除く。

善の色の非諸聖諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の諸聖諦繫の非根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の非色も亦是の如く、乃至、過去未來現在法も亦是の如し。三重覓り

善の學の色の苦諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の苦諦繫法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の苦諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の苦諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を除く。善の學の色の苦諦繫法を除かむも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の集諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の集諦繫法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の非集諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の非集諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を除く。善の學の色の集諦繫法を除かむも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の滅諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。何等の法をか問ふ。善の學の色の滅諦繫法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の非滅諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の非滅諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を除く。善の學の色の滅諦繫法を除かむも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の道諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ善の學の色の道諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を

除き、善の學の色の非道諦繫法を除く。

善の學の色の非道諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の學の色の非道諦繫法を問ひ、〔p. 669c〕餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を除き、善の學の色の道諦繫法を除く。

善の學の色の諸聖諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の學の色の諸聖諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非[四]無學法を除き、善の學の非色法を除き、善の學の色の非諸聖諦繫法を除く。

善の學の色の非諸聖諦繫法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の學の色の非諸聖諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を除き、善の學の色の諸聖諦繫法を除く。

善の學の色の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の學の色の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を除く。善の學の色の非根法を除かむも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の非根は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の學の色の非根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の苦諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の學の色の苦諦繫の根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の非苦諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。——何等の法をか問ふ。善の學の色の非苦諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を除く。善の學の色の苦諦繫法を除かむも、〔是は〕無きなり。善の學の色の非苦諦繫

【四】非。宋元明宮の四本によりて補入。

の非根法を除かむも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の集諦繋の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の集諦繋の根法を問ふも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の集諦繋の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の非集諦繋の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。[五]無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を除く。善の學の色集諦繋法を除かむも、〔是は〕無きなり。善の學の色の滅諦繋の非根法を除かむも〔是は〕無きなり。

善の學の色の滅諦繋の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の滅諦繋の根法は無きなり。

善の學の色の滅諦繋の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。〔p. 670a〕善の學の色の非滅法繋の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を除く。善の學の色の滅諦繋法を除かむも、〔是は〕無きなり。善の學の色の非滅諦繋の非根法を除かむも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の道諦繋の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の道諦繋の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を除き、善の學の色の非道諦繋法を除く。善の學の色の道諦繋の非根法を除かむも〔是は〕無きなり

善の學の色の道諦繋の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の非道諦繋の根法を問ひ。餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を除き、善の學の色の道諦繋法を除く。善の學の色の非道諦繋の非根法を除かむも・〔是は〕無きなり。

【五】無善法を除き。宋元明の三本により補入。

善の學の色の諸聖諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の諸聖諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非無學法を除き、善の學の非色法を陸き、善の色の非諸聖諦繫法を除く。善の學の色の諸聖諦繫の非根法を除かむも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の非諸聖諦繫の根法は幾の陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の非諸聖諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無善法を除き、善の非[六]疑善法を除き、善の非[七]無學法を除き、善の學の非色法を除き、善の學の色の諸聖諦繫法を除く。善の學の色の非諸聖諦繫の非根法を除かむも、〔是は〕無きなり。

善の學の色の苦諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝なる。――何等の法をか問ふ。善の學の色の苦諦繫の非根法を問ふも、〔是は〕盡く無きなり。

善の非色も亦上の色法の如く說く。乃至、過去未來現在法も亦是の如し。四重竟り 攝事竟り

[八]苦諦繫法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。非苦諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。苦諦繫法を除く。

非苦諦繫法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。何等の法をか問ふ。苦諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非苦諦繫法を除く。

集諦繫法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。非集諦繫法を問ひ、〔p. 670b〕餘の法を除く。何等の法をか除く。集諦繫法を除く。

非集諦繫法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。集諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非集諦繫法を除く。

滅諦繫法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。非滅諦繫法を問ひ、餘の法を除

【六】疑。宋元明宮の四本には無に作るも、この「善の非疑善法を除き」の一句は恐らく衍文ならむ。

【七】無。同上四本により補入。

【八】苦諦繫以下。攝品の第四段（攝品全體に關する註の下に(一)、(二)、(三)とせるに、更に今のを(四)として付け加ふべし）で、上來の檢討に對する裏打ち的の再檢討である。一見、その文面が頗る變なやうなるも、事實としては、「苦諦繫法は幾か三科の攝せざる」と聞く意は「苦諦繫法」外の「非苦諦法が幾か三科の攝なる」と問ふの心だといふ文意で、從つて、完く上の諸檢討の裏打的のそれに他なるを了知すべき所である。

く。何等の法をか除く。滅諦繫法を除く。

非滅諦繫法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。滅諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非滅諦繫法を除く。

道諦繫法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。非道諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。道諦繫法を除く。

非道諦繫法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。道諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非道諦繫法を除く。

諸聖諦繫法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。非諸聖諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。諸聖諦繫法を除く。

非諸聖諦繫法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。諸聖諦繫法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非諸聖諦繫法を除く。

根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。根法を除く。

非根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非根法を除く。

苦諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。非苦諦繫法を問ひ、苦諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。苦諦繫の根法を除く。

非苦諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。苦諦繫法を問ひ、非苦諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非苦諦繫の根法を除く。

集諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。〔是は〕無きなり。

非集諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。集諦繫法を問ひ、非集諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非集諦繫の根法を除く。

滅諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる、〔是は〕無きなり。

非滅諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。何等の法をか問ふ。滅諦繫法を問ひ、非滅諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。〔p. 670c〕何等の法をか除く。非滅諦繫の根法を除く。

道諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非道諦繫法を問ふ。道諦繫の非根法を問はむも、〔是は〕無きなり。餘の法を除く。何等の法をか除く。道諦繫の根法を除く。

非道諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。道諦繫法を問ひ、非道諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非道諦繫の根法を除く。

諸聖諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非諸聖諦繫法を問ひ、諸聖諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。諸聖諦繫の根法を除く。

非諸聖諦繫の根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。諸聖諦繫法を問ひ、非諸聖諦繫の非根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非諸聖諦繫根法を除く。

苦諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非苦諦繫法を問ひ、苦諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。苦諦繫の根法を除く。

非苦諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。苦諦繫の法を問ひ、非苦諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非苦諦繫の非根法を除く。

集諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非集諦繫法を問ひ、——集諦繫の根法を問ふも、〔是は〕無きなり。——餘の法を除く。何等の法をか除く。集諦繫根法を除く。

非集諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。集諦繫法を問ひ、非集諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非集諦繫の非根法を除く。

滅諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。非滅諦繫法を問ひ、――滅諦繫の根法を問はむも、〔是は〕無きなり。――餘の法を除く。何等の法をか除く。滅諦繫の非根法を除く。

非滅諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。何等の法をか問ふ。滅諦繫法を問ひ、非滅諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非滅諦繫の非根法を除く。

道諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。〔是は〕無きなり。

非道諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。道諦繫法を問ひ、〔p. 671a〕道諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非道諦繫の非根法を除く。

諸聖諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。非諸聖諦繫法を問ひ、諸聖諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。諸聖諦繫の非根法を除く。

非諸聖諦繫の非根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。諸聖諦繫法を問ひ、非諸聖諦繫の根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非諸聖諦繫の非根法を除く。

眼入の法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。非眼入法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。眼入法を除く。乃至、法入も亦是の如し。

眼界法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。非眼界法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。眼界の法を除く。

非眼界法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。――何等の法をか問ふ。眼界法を問ひ餘の法を除く。何等の法をか除く。非眼界法を除く。乃至、法界も亦是の如し。

色陰法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非色陰法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。色陰の法を除く。

非色陰法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。色陰法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色陰法を除く。乃至、識陰も亦是の如し。

苦聖諦法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非苦聖諦法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く、苦聖諦法を除く。

非苦聖諦法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。苦聖諦法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非苦聖諦法を除く。乃至、道聖諦も亦是の如し。

眼根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非眼根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。眼根法を除く。

非眼根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。眼根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非眼根法を除く。乃至、知已根も亦是の如し。

念覚法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非念覚法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。念覚法を除く。

非念覚法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。念覚法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非念覚法を除く。乃至、捨覚法も亦(p. 671b)是の如し。

貪不善法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非貪不善根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。貪不善根法を除く。

非貪不善根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。貪不善根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非貪不善根法を除く。恚癡不善根法も亦是の如し。

無貪善根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非無貪善根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無貪善根法を除く。

非無貪善根法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。無貪善根法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非無貪善根法を除く。無恚・無癡も亦是の如し。

地大法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非地大法を問ひ、餘の法を除く。地大法を除く。

非地大法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。何等の法をか問ふ。地大法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非地大法を除く。水・火・風大も亦是の如し。

不殺生戒法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非不殺生戒法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。不殺生戒法を除く。

非不殺生戒法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。不殺生戒法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非不殺生戒法を除く。乃至、不飲酒・不放逸處も亦是の如し。

色法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。非色法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。色法を除く。

非色法は幾か陰・界・入の攝に非ざる。——何等の法をか問ふ。色法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。非色法を除く。乃至、過去未來現在[九]法も亦是の如し。

【九】法。宋元明宮の四本によりて補入。

巻の第二十三 〔p.671c〕

攝相應分相應品[一]第二【其の上】

[二]心・心數法は、當に知るべし、相應なり。當に知るべし、不相應なり。當に知るべし、無相應なり。當に知るべし、非無相應相應なり。當に知るべし、亦有相應不相應・無相應非無相應・不相應なり。當に知るべし、亦有相應・不相應・無相應・非無相應・無相應なり。當に知るべし、亦有相應・不相應・無相應・非無相應・無相應なり。當に知るべし、亦有相應・不相應・無相應・非無相應なり。

相應とは謂く心と數法と相應し、數法と心と相應し、數法・數法と數法と相應するなり。自性を除く、自性は自性と相應せず。無相應に非ず。心・心數法の相應を正に問へば、今當に說くべし。

[三](1)眼識界、(2)――(5)乃至、(6)意界・(7)意識界・(8)身觸・(9)心觸・(10)名觸・(11) 對觸・(12) 愛觸・(13)[四]憎觸・(14)・明觸・(15)無明觸・(16)明分觸・(17) 無明分觸・(18) 樂根・(19) 苦根・(20) 喜根・(21)憂根・(22)捨根・(23)受・(24)想・(25)思・(26)觸・(27)思惟・(28)覺・(29)觀・(30)・忍・(31)見・(32)智・(33)解脫・(34)無貪・(35)無恚・(36)無癡・(37)順信・(38)悔・(39)不悔・(40)悅・(41)喜・(42) 心進・(43)心除・(44)信・(45)欲・(46)不放逸・(47)念・(48)捨・(49)怖・(50)煩惱使・(51) 見使・(52) 疑・(53)戒道使・(54)愛使・(55)恚使・(56)嫉妬使・(57)慳惜使・(58)無明使・(59)慢使・(60)掉使・(61)有覺有觀定・(62)無覺有觀定・(63)無覺無觀定・(64)空定・(65)無相定・(66)無願定・(67)―(71)信根乃至慧根。是を相應門[五]と名づく。

[六](1)何をか眼識界と謂ふ。若し識の眼根が色境界を因として已生・今生・當生・不定なる、是を眼識界と名づく、(2)―(5)耳・鼻・舌・身識界も亦是の如し。

【一】 相應品。Samprayukta-varga――攝・相應分の第二六段で、相應を明す。中に(一)總序論的の一種の論母、(二)相應を論ぜらるゝ七十一門の諸法の論母、(三)その個々の解釋、(四)右諸法の相應、及び(五)右相應檢討に因み、上の攝論下に準ずる「幾法と相應する。―何等の法をか問ふ。……」流の解說―以上五段を含む。
【二】 心等。右の中の(一)、總序論的なる一種の論母をのぶ。
【三】 眼識界等。同上(二)、七十一門の諸法を列ぬる論母。
【四】 憎觸。長行中には意觸に作る。
【五】 門。大正本等には問に作る。宋元明宮の四本によりて改む。
【六】 何をか等。(三)右論母に從つての個々の法の論釋―卷一(毘曇部十九、p. 10 ff)等參照。

(6)何をか意界と謂ふ。若し意の法を知り法を念じて若し初心の已生・今生・當生・不定なる、是を意界と名づく。

(7)何をか意識界と謂ふ。彼の境界を離れずして若し餘心の彼に似て已生・今生・當生・不定なる、[p.672a] 是を意識界と名づく。

(8)何をか[七]身觸と謂ふ。若し觸の身識相應なる、是を身觸と名づく。復次に身觸とは、若し觸の五識身＝眼識、耳・鼻・舌・身識——相應なる、是を身觸と名づく。

(9)何をか[八]心觸と謂ふ。若し觸の意識相應なる、是を心觸と名づく。

(10)何をか[九]名觸と謂ふ。若し心觸は、是を名觸と名づく。

(11)何をか對觸と謂ふ。若し身觸は、是を對觸と名づく。

(12)何をか[一〇]愛觸と謂ふ。若し觸の欲染と相應する、是を愛觸と名づく。

(13)何をか恚觸と謂ふ。若し觸の瞋恚と相應する、是を恚觸と名づく。

(14)何をか[一一]明觸と謂ふ。若し觸の聖にして智と相應する、是を明觸と名づく。

(15)何をか[一二]無明觸と謂ふ。若し觸の不善にして智と相應するに非ざる、是を無明觸と名づく。

(16a)何をか明分觸と謂ふ。若し觸の、明分にして、明を生じ、明を得、能く明をして廣大ならしむる、是を明分觸と名づく。

(17b)何をか無明分觸と謂ふ。[一三]若し觸の無明を生じ、無明を得、能く無明をして廣大ならしむる、是を無明分觸と名づく。

(16b)復次に、明分觸とは、若し觸の聖にして忍と相應する、是を明分觸と名づく。

(17b)復次に、無明分觸とは、若し觸の非聖にして、煩惱と相應するに非ざる、是を無明分觸と名づく。

【七】身觸。Kāyasparśa.

【八】心觸。Cittasparśa.

【九】名觸。Nāmasparśa.

【一〇】愛觸。Tṛṣṇāsparśa.

【一一】明觸。Vidyāsparśa.

【一二】無明觸。Avidyāsparśa.

【一三】若し觸の。宋元明宮の四本により補入。

(16c)復次に明分觸とは、若し觸の聖にして能く智果を得する。是を明分觸と名づく。
(17c)復次に無明分觸とは、若しは觸の非聖、若しは善・無記なる、是を無明分觸と名づく。
(18)何をか〔一四〕樂根と謂ふ。若し身の樂を忍受する、眼觸の樂受、耳・鼻・舌・身觸の樂受、樂界、是を樂根と名づく。
(19)何をか苦根と謂ふ。若し身の苦を忍受せざる、眼觸の苦受、耳・鼻・舌・身觸の苦受、苦界、是を苦根と名づく。
(20)何をか喜根と謂ふ。若しは心の樂を忍受する、意觸の樂受、喜界、是を喜根と名づく。
(21)何をか憂根と謂ふ。若し心の苦を忍受せざる、意觸の苦受、憂界、是を憂根と名づく。
(22)何をか捨根と謂ふ。若し身心の苦樂を忍受せざる、眼觸の不苦不樂・耳・鼻・舌・身・意觸の不苦不樂受・捨界、是を捨根と名づく。
(23)何をか〔一五〕受と謂ふ。若し心受、是を受と名づく。
復次に受とは、六受＝眼觸受・耳・鼻・舌・身・意觸受なり。
何をか眼觸受と謂ふ。若し受の眼識と相應する、是を眼觸受と名づく。乃至、意受も亦是の如し。
復次に眼觸受とは、眼を緣とし色を緣として眼識を生じ、三法の和合して觸あり、〔觸〕緣にして受ある、是を眼觸受と名づく。乃至、意受も亦是の如し。
(24)何をか〔一六〕想と謂ふ。若し想・憶想・勝想、是を想と名づく。
復次に想とは、六想＝色想、聲・香・味・[p.672b] 觸・法想なり。
何をか色想と謂ふ。若しは想の眼識と相應する、是を色想と名づく。聲・香・味・觸・法も亦是の如し。

〔一四〕樂根。以下卷五、問分根品中參照。
〔一五〕受。卷三、問分陰品中(毘曇部十九、p. 77)等參照。
〔一六〕想。Saṃjñā —— 同前下參照。

復次に色想とは、色を境界とし、色を思惟するときの、若しは憶・憶想・勝想、是を色想と名づく。聲・香・味・觸・法想も亦是の如し。

(25)何をか[一七]思と謂ふ。若しは思・正思・緣思、若しは心の作有る、是を思と名づく。

復次に思とは、六思＝色思、聲・香・味・觸・法思なり。

何をか色思と謂ふ。若し思の眼識と相應する、是を色思と名づく。聲・香・味・觸法の思も亦是の如し。

復次に色思とは、色を境界とし、色を思惟するときの若しは思・正思・緣思、若しは心の作有る、是を色思と名づく。聲・香・味・觸・法思も亦是の如し。

(26)何をか[一八]觸と謂ふ。若し觸・正觸、是を觸と名づく。

復次に觸とは、六觸＝眼觸、耳・鼻・舌・身・意觸なり。

何をか眼觸と謂ふ。若し觸の眼識と相應する、是を眼觸と名づく。耳・鼻・舌・身・意觸も亦是の如し。

復次に眼觸とは、眼を緣とし色を緣として眼識を生じ、三法和合して觸ある、是を眼觸と名づく。耳・鼻・舌・身・意觸も亦是の如し。

(27)何をか思惟と謂ふ。若しは心の分別・計校・籌量・憶念、是を思惟と名づく。

復次に思惟とは、六思惟＝色・聲・香・味・觸・法思惟なり。

何をか色思惟と謂ふ。若し思惟の眼識と相應する、是を色思惟と名づく。聲・香・味・觸・法思惟も亦是の如し。

復次に色思惟とは、色を境界とし色を思惟するときの若しは心の分別・計校・籌量・憶念、是を色思惟と名づく。聲・香・味・觸・法思惟も亦是の如し。

【一七】思。Cetanā.

【一八】觸。Sparśa.

(28)何をか[19]覺と謂ふ。若しは覺・重覺・憶想、境界を緣としての心の語、是を覺と名づく。

復次に六覺＝色・聲・香・味・觸・法覺あり。

云何んが色覺なる。若し色を以て境界とし色を思惟する覺・重覺・憶想、境界を緣としての心の語、是を色覺と名づく。聲・香・味・觸・法覺も亦是の如し。

(29)何をか[20]觀と謂ふ。若し心の行・微行・微津・分別・心の隨微の轉、是を觀と名づく。

復次に六觀＝色觀・味・觸・法觀あり。

何をか色觀と謂ふ。若し色を以て境界とし色を思惟するときの若しは心の行・微行・微津・分別・心の隨微の轉、是を色觀と名づく。聲・香・味・觸・法觀も亦是の如し。

(30)何をか忍と謂ふ。貪嗜して得むことを欲し、若し順・不順の法に於て堪任・忍辱する、是を忍と名づく。

(31)何をか見と謂ふ。見に二種有り。或は見忍・或は見智なり。

何をか見忍と謂ふ。若し貪嗜して得むことを〔p.672c〕欲し、若し順・不順の法に於て堪任・忍辱する、是を見忍と名づく。

何をか見智と謂ふ。若し法を必執する、是を見智と名づく。

(32)何をか[21]智と謂ふ。若し善法を必執する、是を智と名づく。

復次に智に四智有り、[22]法智・比智・無智・他心智なり。是を智と名づく。

(33)何をか[23]解脫と謂ふ。若し解・重解究竟解あり、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に[24]傾向し、彼を以て解脫する、是を解脫と名づく。

復次に解脫とは六解脫あり。色解脫、聲・香・味・觸・法解脫なり。

云何が色解脫なる。若しは解脫の眼識と相應する、是を色解脫と名づく。聲・香・味・觸・法解脫も

【一九】覺。Vitarka.

【二〇】觀。Vicāra.

【二一】智。Iñāna.

【二二】法智等。卷九—非問分智品中(毘曇部十九、p. 278ff参照。

【二三】解脫。Vimukti.

【二四】傾。宋元明宮の四本には傾に作る。

亦是の如し。

復次に色解脱とは、若し色を以て境界とし色を思惟して若しは解・重解・究竟解あり、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て解脱する、是を色解脱と名づく。聲・香・味・觸・法解脱も亦是の如し。

(34)何をか無貪と謂ふ。若し不悕望、是を無貪と名づく。復次に若し堪忍して貪心を離るる、是を無貪と名づく。復次に若しは五欲の中の愛・喜・適意・愛色・欲染相續、眼〔所〕識の色の愛・喜・適意・愛色・欲染相續、耳・鼻・舌・身〔所〕識の觸の愛・喜・適意・愛色・欲染相續に於て、若しは他が欲・他が財・他が所須・他が婦女に於て貪取を欲せず、若しは貪重せず、貪究竟せず、貪心せず、著せず悕望せず、愛著せず、欲染せず、及び餘の貪す可きの法を若しは貪重せず、貪究竟せず、貪心せず、貪著せず、悕望せず、愛著せず、欲染せざる、是を無貪と名づく。

(35)何をか無恚と謂ふ。若し諍訟無き、是を無恚と名づく。

復次に若し堪忍して恚心を離るる、是を無恚と名づく。

復次に若しは少衆生、若しは多衆生に於て、此の衆生をして、繫せず、閉せず、傷害せさらしめ、若干苦の加ふることを爲さしむること莫れと欲する、若しは無恚重、無恚究竟、無恚心、離恚、諍訟無き惱害せざる、惱緣心無き、怨惱せざる、慈・重慈・究竟慈・矜愍して衆生を利益せむと欲する、及び餘の恚す可きの法〔に於て〕若しは恚重せず、恚究竟せず、恚心せず、恚を離れ、諍訟無く、惱害せず、惱緣心無く、怨惱せざる、慈・重慈・究竟慈あり、矜愍して利益法を欲する、是を無恚と名づく。

(36)何をか無癡と謂ふ。若し明は是を無癡と名づく。

復次に無癡とは、若し堪忍して癡心を離るる、是を無癡と名づく。

復次に若しは苦・集〔p.673c〕滅・道を知り、前際・後際を知り、前後際を知り、内を知り、外を知り、六觸入の集・滅・大過患・出要を知り、因緣を知り、業報を知り、緣生・善・不善・無記、黑・白、有緣・無緣、有明・無明、可作・不可作、可親近・不可親近を知り、若しは彼の法に於て、無癡・無闇・無忘・無失・正念あり、障礙無く、覆蓋無く、闇蔽無く、荒無く、纒無く、濁無き、明・焰・術・光・熖・解射・方便・知・見、慧眼・慧根・慧力・擇法覺・正見、及び餘の〔可〕癡の法中にての無癡・無闇・無忘・無失・正念・無障礙・無覆蓋・無闇蔽・無荒・無纒・無濁・明・焰・術・光・熖・解射・方便・知・見、慧眼・慧根・慧力・擇法覺・正見、是を無癡と名づく。

(37)何をか順信と謂ふ。若し信あり、善順にして逆ならざる、是を順信と名づく。

(38)何をか悔と謂ふ。若しは可作・不可作の處にて、若しは作し作さず已り、若し彼に於て心の燋熱し、重燋熱し、究竟燋熱する、是を悔と名づく。

(39)何をか不悔と謂ふ。若しは可作・不可作の處にて、若しは可作・不可作し已り、若し彼に於て不燋不熱・重不燋不熱・究竟不燋不熱なる、是を不悔と名づく。

(40)何をか悅と謂ふ。若し心の悅豫・觀樂・愛樂・味〔二五〕喜、是を悅と名づく。

(41)何をか喜と謂ふ。若し觀喜・踊躍・正踊躍・離恚寂靜、是を喜と名づく。

(42)何をか心進と謂ふ。若し心の發起・顯出・越度、是を心進と名づく。

(43)何をか心除と謂ふ。若し心樂・心調・心輕・心軟、是を心除と名づく。

(44)何をか信と謂ふ。若し信・入信・勝信、是を信と名づく。

(45)何をか欲と謂ふ。若し欲・重欲・悕望、欲の作・欲の發起・欲の顯出・欲度・欲得・欲觸・欲解・射・欲證、是を欲と名づく。

(46)何をか不放逸と謂ふ。若し心を覆護して、我心をして、染法に染せず、恚法に恚せず、癡法

【二五】味。大正本等には未に作るも、宋元明の三本により訂正。

に癡せず、穢法に著せず、色欲法に順ぜず、貢高法に貢高せず、放逸法に放逸せざらむと念欲する、是を不放逸と名づく。

(47)何をか念と謂ふ。若し念・憶念、是を念と名づく。

(48)何をか心捨と謂ふ。若し捨・勝捨・心の等・心の均・心の清淨・心の無作非受、[二六]是を捨と名づく。

(49)何をか怖と謂ふ。若しは色・聲・香・味・觸法に於て、若し衆生の若しは怖・重怖・究竟怖あり、心の驚き毛竪つ。是を怖と名づく。

(50)何をか煩惱使と謂ふ。十[p.673b]使＝(一)見使・(二)疑使・(三)戒道使・(四)愛使・(五)恚使・(六)嫉妬使・(七)慳惜使・(八)無明使・(九)憍慢使・(十)掉使、是を煩惱使と名づく。

(51)何をか見使と謂ふ。戒道見を除く若し餘の見は、是を見使と名づく。

復次に見使とは、六十二見及び邪見。是を見使と名づく。

(52)何をか疑使と謂ふ。若し人有り、過去を緣として疑惑すらく、我は過去に有なりや。我は過去の有に非ずや。[二七]何の性を以てするや。過去に因有りや。何か過去に緣有ると。未來を疑惑すらく、我は未來に有なりや。我は未來の有に非ざるや。何の性を以てするや。未來に因有りや。何か未來に緣有ると。現在を疑惑すらく、我は現在に有なりや。我は現在に非有なりや。何の性を以てするや。我現在に因有りや。何か現在の有——謂く我生處——なる。此の衆生は何處より來り、何の處に至つてか去ると。若しは世尊を疑惑すらく、是れ佛世尊なりや。佛世尊に非ざるや。世尊は善く說法するや。世尊は善く說法するに非ざるや。世尊の聲聞衆は善趣なりや。世尊の聲聞衆は善趣に非ざるや。常行を行ずるや。常に非ざるや。苦行を行ずるや。苦に非ざるや。無我法ありや。無我法非ざるや。寂靜涅槃ありや。寂靜涅槃非ざるや。與有りや、與無きや。施有りや、施無きや。祀有りや祀無きや。善・惡業と果報と有りや。善・惡業と果報と無きや。今世有りや、今世無きや。後

【二六】受。宋元明宮の四本には愛に作る。

【二七】何の等。卷二十初にはこゝの所を次の如く記す。參照すべく、今の文は恐らく、その混亂せる所なるべし——何の性(又は姓)か我過去の有なる。何の因が我過去の有なる。

世有りや、後世無きや。父母有りや、父母無きや。天有りや、天無きや。衆生に化生有りや、衆生に化生無きや。世に沙門・婆羅門の正趣・正至にして、若しは今世・後世を自ら證知して說くものありや。世に沙門・婆羅門の正趣・正至にして、若しは今世・後世を身に證知して說くもの無きやと。若しは彼の法に於て疑惑し、重疑惑し、究竟疑惑して、心、決定せず、猶豫し、二心あり、疑ひて心の了ぜず、無量の疑ありて盡きず、解脫せず、猶豫し、重猶豫し、究竟猶豫する、是を疑使と名づく。

(53)何をか戒道使と謂ふ。若し戒道見、是を戒道使と名づく。

復次に戒を以て淨と爲し、戒道を以て淨・解脫・無依にして一切の苦際を盡くすと爲し、若しは忍・欲・覺・觸・證ある、戒は身口を護ると謂ひ、道は邪吉と謂ひて、養髮し、水・火・日月に敬事し、牛・鹿・狗・默然等の戒を持し、力士と爲り人天中の尊を報ぜられむことを求めて、是の如く勤行し苦行し邪行ある、此を道と謂ひ、若しは戒若しは道を求覓し、求覓し已りて是を以て淨と爲し、淨と爲し已りて解脫と爲し解脫と爲し已り、是を以て聖人と爲〔p. 673c〕し羅漢と爲し、涅槃と爲し、若し彼に於て忍・欲・堪任・樂著する、是を戒道使と名づく。

(54)何をか愛使と謂ふ。若し欲染、是を愛使と名づく。

(55)何をか瞋恚使と謂ふ。若し憎恚、是を瞋恚使と名づく。

(56)何をか嫉妬使と謂ふ。若し他が利養・恭敬・尊重・讃歎・禮拜を得るを憎嫉し、瞋恚し、忿怒して心に嫉む。是を嫉妬使と名づく。

(57)何をか慳惜使と謂ふ。若し財物を悋惜して捨せず、心に貪ある、是を慳惜使と名づく。

(58)何をか無明使と謂ふ。癡不善根、是を無明使と名づく。

(59)何をか憍慢使と謂ふ。若しは慢を以て自ら高うする、是を憍慢使と名づく。

(60)何をか掉使と謂ふ。若し掉動して定まらず、發し奔逸して寂靜ならず、正寂靜ならず心の不息なる、是を掉使と名づく。

(61)有覺有觀定・(62)無覺有觀定・(63)無覺無觀定・(64)—(66)空・無相・無願定は[二八]道品の三支道中の廣く說くが如し。

(67)何をか信根と謂ふ。學人の煩惱を離れ聖心にして聖道に趣く、若しは堅信・堅法及び餘趣の人の、行の過患を見、涅槃寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じ、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲して修道し煩惱を離るゝ、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なる、觀行具足して若しは智地し、若しは解脫心を觀じ、即ち沙門果＝須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得る、無學人の阿羅漢未得なるが聖法を得むと欲して修道し、觀行具足し、若しは智地し若しは解脫心を觀じて卽ち阿羅漢果を得る如實人、如趣入の若しは信・入信・勝信・眞信・心淨、是を信根と名づく。(68)—(71)進・念・定・慧根も亦是の如し。

【二八】道品。卷十五後半より同十六に及ぶ中參照。

卷の第二十四〔p. 674〕

攝相應分相應品第二【其の下】

七十[二]二相應門分を今當に說くべし。(1)—(5)五識界は各十二、(6)(7)二識界は各六十、(8)身觸は十三、(9)(10)心觸・名觸は各五十三、(11)對觸も亦十三、[三]身觸・(12)愛觸は二十五、(13)恚觸は二十三、(14)明觸は三十五、(15)無明觸は三十四、(16)明分觸は三十五、(17)無明分觸は[四]三十、(18)樂根は十三、(19)苦根も亦是の如し。(20)喜根は五十一、(21)憂根は三十七、(22)捨根は五十六、(23)受は六十五、(24)—(27)想・思・觸・思惟は各自性を除く餘の數、(28)覺は五十九、(29)觀は六十、(30)忍は五十三、(31)見は五十四、(32)智は三十五、(33)解脫は六十九、(34)無貪は二十九。(35)無恚も亦是の如し。(36)無癡は四十二、(37)順信は四十四、(38)悔は三十四、(39)不悔は三十六、(40)悅は五十二、(41)喜も亦是の如し。(42)心進は六十、(41)心除は四十一、(44)信は五十八、(45)欲は六十一、(46)不放逸は四十六、(47)念は五十九、(48)心捨は四十一、(49)怖は二十七、(50)煩惱使は四十九、(51)見使は二十八、(52)疑使は十九、(53)戒道使は二十八、(54)愛使は二十九、(55)憎使は二十七、(56)嫉妬は二十四、(57)慳[五]惜使も亦是の如し。(58)無明[六]使は三十九、(59)(60)慢・掉[六]使も亦是の如し、(61)有覺有觀定は三十五、(62)無覺有觀定は三十四、(63)無覺無觀定は三十三、(64)空定は三十四、(65)(66)無相無願も亦是の如し。(67)信根は三十八、(68)進根は三十九、(69)念根も亦是の如し。(70)定根三十四、(71)慧根は三十六なり。

(一)何をか[七]眼識界分と謂ふ。若し法の眼識界と相應するなり。謂く(1)身觸・(2)對觸・(3)無明分觸・(4)樂根・(5)苦根・(6)捨根・(7)受・(8)想・(9)思・(10)觸・(11)思惟・(12)解脫なり。是を眼識界分と名づく。(二)—(五)耳・鼻・舌・身識界分も亦是の如し。

【一】七十一等。(四)、上來解說の諸法の相應をのぶ。今はその論母的總標。——

【二】一。大正本等には二に作る。宋元明宮內省の四本によりて改む。

【三】身觸。身觸は前巳に出てをり、且つ、後の長行中にもこゝに身觸を見ず、(但しこの一を數へれば大正本等に本來あつた通り七十二相應門となる)。

【四】三十。同前四本には四十に作る。

【五】憎使。宋元明三本には恚使と。

【六】使。宋元明の三本により補入。

【六】使。同上。

【七】眼識界。論母中、相應十二といふ。

[p. 674b]（六）何をか意界分と謂ふ。若し法の意界と相應するなり。謂く、(1)心觸・(2)名觸・(3)愛觸・(4)憎觸・(5)明觸・(6)無明觸・(7)明分觸・(8)無明分觸・(9)喜根・[八]乃至(10)慧根なり。是を意界分と名づく。（七）意識界分も亦是の如し。

（八）何をか[九]身觸分と謂ふ。若し法の身觸と相應するなり。謂く、(1)眼識界・(2)耳識界・(3)鼻識界・(4)舌識界・(5)身識界・(6)樂根・(7)苦根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思惟・(12)解脫なり。是を身觸分と名づく。

（九）何をか心觸分と謂ふ。若し法の心觸と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・觸を除く、喜根[一〇]乃至(58)慧根なり。是を心觸分と名づく。（十）名觸分も亦是の如し。

（十一）何をか對觸分と謂ふ。若し法の對觸と相應するなり。謂く、(1)眼識界・(2)―(5)耳・鼻・舌・身識界・(6)樂根・(7)苦根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)思惟・(13)解脫なり。是を對觸分と名づく。

（十二）何をか愛觸分と謂ふ。若し法の愛觸と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)喜根・(4)捨根・(5)受・(6)想・(7)思・(8)思惟・(9)覺・(10)觀・(11)忍・(12)見・(13)解脫・(14)不悔・(15)悅・(15)喜・(16)心進・(18)信・(19)欲・(20)念・(21)煩惱使・(22)愛使・(23)無明・(24)(25)慢掉使なり。是を愛觸分と名づく。

（十三）何をか恚觸分と謂ふ。若し法の恚觸と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)憂根・(4)受・(5)想・(6)思・(7)思惟・(8)覺・(9)觀・(10)忍・(11)見・(12)解脫・(13)悔・(14)心進・(15)信・(16)欲・(17)念・(18)怖・(19)煩惱使・(20)恚使・(21)無明・(22)(23)慢掉使なり。是を恚觸分と名づく。

（十四）何をか明觸分と謂ふ。若し法の明觸と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)喜根・(4)捨根・(5)受・(6)想・(7)思・(8)思惟・(9)覺・(10)觀・(11)見・(12)智・(13)解脫・(14)無擬・(15)順信・

【八】乃至。上出七十一法中の憂根以下、最後の慧根の前、即ち定根まで五十法を乃至す。

【九】身觸分。上の論母中には十三とあるが、今は十二しか上げられてゐない。思を脫せるか。

【一〇】乃至。憂根以下定根まで、五十法中觸を除いて四十九法を乃至す。

(16)悅・(17)喜・(18)心進・(19)心除・(20)信・(21)欲・(22)不放逸・(23)念・(24)心捨・(25)有覺有觀定・(26)無覺有觀定・(27)無覺無觀定・(28)空定・(29)無相定・(30)無願定・(31)—(35)信根乃至慧根なり。是を明觸分と名づく。

（十五）何をか無明觸分と謂ふ。若し法の無明觸と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)喜根・(4)憂根・(5)捨根・(6)受・(7)想・(8)思・(9)思惟・(10)覺・(11)觀・(12)忍・(13)見・(14)觧脫・(15)悔(16)不悔・(17)悅・(18)喜・(19)心進・(20)信・(21)欲・(22)念・(23)怖・(24)煩惱使及び(25)—(34)十煩惱使なり。是を無明觸分と名づく。

（十六）〔p. 674c〕何をか明分觸と謂ふ。若し法の明分觸と相應するなり。。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)喜根・(4)捨根・(5)受・(6)想・(7)思・(8)思惟・(9)覺・(10)觀・(11)忍・(12)見・(13)觧脫・(14)無癡・(15)順信・(16)悅・(17)喜・(18)心進・(19)心除・(20)信・(21)欲・(22)不放逸・(23)念・(24)心捨・(25)有覺有觀定乃至(35)慧根なり。是を明分觸と名づく。

（十七）何をか〔二〕無明分觸と謂ふ。若し法の無明分觸と相應するなり。謂く、(1)—(5)眼・耳・鼻・舌・身識界・(6)意界・(7)意識界・(8)樂根・(9)苦根・(10)喜根・(11)憂根・(12)捨根・(13)受・(14)想・(15)思・(16)思惟・(17)覺・(18)觀・(19)忍・(20)見・(21)觧脫・(22)無貪・(23)無恚・(24)無癡・(25)順信・(26)悔・(27)不悔・(28)悅・(29)喜・(30)心進・(31)信・(32)欲・(33)不放逸・(34)念・(35)心除・(36)怖・(37)有覺有觀定・(38)無覺有觀定・(39)無意無觀定なり。是を無明分觸と名づく。

（十八）何をか樂根分と謂ふ。若し法の樂根と相應するなり。謂く、(1)眼識界・(2)—(5)耳・鼻・舌・身識界・(6)樂根・(7)苦根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)思惟・(13)觧脫なり。是を樂根分と名づく。

（十九）何をか苦根分と謂ふ。若し法の苦根と相應するなり。謂く、(1)眼識界・(2)—(5)耳・鼻・舌・

【二】無明分觸。論母中には三十又は四十(四本)とあるが、今は三十九しか認められず。又、智の一を脫せるか。

身識界·(6)身觸·(7)對觸·(8)無明分觸·(9)想·(10)思·(11)觸·(12)思惟·(13)解脫なり。是を苦根分と名づく。

(二十)何をか喜根分と謂ふ。若し法の喜根と相應するなり。謂く、(1)意界·(2)意識界·(3)心觸·(4)名觸·(5)愛觸·(6)明觸·(7)無明觸·(8)明分觸·(9)無明分觸·(10)想·(11)思·(12)觸·(13)思惟·(14)覺·(15)觀·(16)忍·(17)見·(18)智·(19)解脫·(20)無貪·(21)無恚·(22)無癡·(23)順信·(24)不悔·(25)悅·(26)喜·(27)心進·(28)心除·(29)信·(30)欲·(31)不放逸·(32)念·(33)心捨·(34)煩惱使·(35)見使·(36)戒道使·(37)愛使·(38)無明·(39)慢·(40)掉使·(41)有覺有觀定乃至(51)慧根なり。是を喜根分と名づく。

(二十一)何をか憂根分と謂ふ。若し法の憂根と相應するなり。謂く、(1)意界·(2)意識界·(3)心觸·(4)名觸·(5)恚觸·(6)無明觸·(7)無明分觸·(8)想·(9)思·(10)觸·(11)思惟·(12)覺·(13)觀·(14)忍·(15)見·(16)解脫·(17)無貪·(18)無恚·(19)無癡·(20)順信·(21)悔·(22)心進·(23)信·(24)欲·(25)不放逸·(26)念·(27)怖·(28)煩惱使·(29)見使·(30)疑使·(31)戒道使·(32)恚使·(33)嫉妬〔使〕·(34)慳惜使·(35)—(37)無明·慢·掉使なり。是を憂根分と名づく。

(二十二)何をか捨根分と謂ふ。若し法の捨根と相應するなり。謂く、(1)眼識界·(2)—(5)耳·鼻·舌·身識界·(6)意界·(7)意識界·(8)眼·耳·鼻·舌·身觸·(9)心觸〔p.675a〕·(10)名觸·(11)對觸·(12)愛觸·(13)明觸·(14)無明觸·(15)明分觸·(16)無(17明分觸·(18)[一二]想·(19)思·(20)觸·(21)思惟·(22)覺·(23)〔觀〕·(24)忍·(25)見·(26)智·(27)解脫·(28)無貪·(29)無恚·(30)無癡·(31)順信·(32)心除·(33)信·(34)欲·(35)不放逸·(36)念·(37)捨·(38)煩惱使·(39)見使·(40)疑使·(41)戒道使·(42)愛使·(43)—(45)無明·慢·掉使·(46)有覺有觀定乃至(56)慧根なり。是を捨根分と名づく。

(二十三)何をか[一三]受分と謂ふ。若し法の受と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く、諸の自性、

【一二】想以下、無恚·無まで十六字。宋元明宮の四本により補入。

【一三】受分。論母中には六十五と記す。即ち七十一門中の受の自性に當る五受根及び受自らの六を除く餘の五十六をいふ意なるべし。

是を非受分と名づく。

（二十四）何をか想分と謂ふ。若し法の想と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く、諸の自性、是を非想分と名づく。

（二十五）何をか思分と謂ふ。若し法の思と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く、諸の自性、是を非思分と名づく。

（二十六）何をか觸分と謂ふ。若し法の觸と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く、諸の自性、是を非觸分と名づく。

（二十七）思惟分も想の如く說く。

（二十八）何をか[14]覺分と謂ふ。若し法の覺と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く、(1)—(5)五識界・(6)身觸・(7)對觸・(8)樂根・(9)苦根・(10)[15]自性・(11)無覺有觀定・(12)無覺無觀定なり。是を非覺分と名づく。

（二十九）何をか[16]觀分と謂ふ。若し法の觀と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く、(1)—(5)五識界・(6)身觸・(7)對觸・(8)樂根・(9)苦根・(10)自性・(11)無覺無觀定なり。是を非觀分と名づく。

（三十）何をか[17]忍分と謂ふ。若し法の忍と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く、(1)[18]身・(2)無明觸・十五・自性・忍・見・智・無癡・慧根・見・斷の三煩惱なる身見・疑・戒道なり。是を非忍分と名づく。

（三十一）何をか[19]見分と謂ふ。若し法の見と相應するなり。何をか非分と謂ふ。[20]九の一向身・五=自性・忍・智・無癡・慧根・見斷の三煩惱たる身見・疑・戒道なり。是を非見分と名づく。

（三十二）何をか智分と謂ふ。若し法の智と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明觸・(6)喜根・(7)捨根・(8)受・(9)想・(10)觸・(11)思惟・(12)覺・(13)觀・(14)解脫・(15)順信・(16)悅・(17)喜・(18)心進・(19)心除・(20)信・(21)欲・(22)不放逸・(23)念・(24)心捨・(25)有覺有觀

【一四】覺分。論母中、五十九とある。よつて、全七十一中の今の十二を引いた五十九に當ると知るべし。

【一五】自性。覺の自體のこと。

【一六】觀分。論母には六十とある。七十一中の今の十一を去れる殘り六〇と知るべし。

【一七】忍分。論母に五十三とある。

【一八】身等。餘七十一中、右註の五十三を去る殘り十八が非分なるべきなれど、今記する所は果して云何に數ふべきか、或は脫漏あるか、十度十八には數へ得ず。

【一九】見分。論母中、五十四と記す。

【二〇】九の一向身。五識身と身觸、對觸、樂根、苦根の九か。

定、乃至(35)定根なり。是を智分と名づく。

(三十三)何をか[二]解脱分と謂ふ。若し法の解脱と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く、自[p.675b]性・疑使なり。是を非解脱分と名づく。

(三十四)何をか無貪分と謂ふ。若し法の無貪と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)無明分觸・(6)喜根・(7)憂根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(16)忍・(17)見・(18)解脫・(19)無癡・(20)順信・(21)悔・(22)不悔・(23)悅・(24)喜・(25)心進・(26)信・(27)欲・(28)不放逸・(29)念なり。是を無貪分と名づく。

(三十五)何をか無恚分と謂ふ。若し法の無恚と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明分觸・(6)無明分觸・(7)喜根・(8)憂根・(9)捨根・(10)受・(11)想・(12)思・(13)觸・(14)思惟・(15)覺・(16)觀・(17)忍・(18)見・(19)解脫・(20)無癡・(21)順信・(22)悔・(23)不悔・(24)悅・(25)喜・(26)心進・(27)信・(28)欲・(29)不放逸、念なり。是を無恚分と名づく。

(三十六)何をか無癡分と謂ふ。若し法の無癡と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明觸・(6)明分觸・(7)無明分觸・(8)喜根・(9)憂根・(10)捨根・(11)受・(12)想・(13)思・(14)觸・(15)思惟・(16)覺・(17)觀・(18)解脫・(19)無貪・(20)無恚・(21)順信・(22)悔・(23)不悔・(24)悅・(25)喜・(26)心進・(27)心除・(28)信・(29)欲・(30)不放逸・(31)念・(32)心捨・(33)有覺有觀定、乃至、(42)定根なり。是を無癡分と名づく。

(三十七)何をか順信分と謂ふ。若し法の順信と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(5)名觸・(6)明觸・(7)明分觸・(8)無明分觸・(9)喜根・(10)憂根・(11)捨根・(12)受・(13)想・(14)思觸・(15)思惟・(16)覺・(17)觀・(18)忍・(19)見・(20)智・(21)解脫・(22)無貪・(23)無恚・(24)無癡・(25)悔・(26)不悔・(27)悅・(28)喜・(29)心進・(30)心除・(31)欲・(32)不放逸・(33)念・(34)心捨・信根を除く

【二】解脱。論母中、相應六十九と記す。

と、(35)有覺有觀定乃至、(44)慧根なり。是を順信分と名づく。

(三十八)何をか悔分と謂ふ。若し法の悔と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)恚觸・(6)無明觸・(7)無明分觸・(8)憂根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(16)忍・(17)見・(18)解脫・(19)無貪・(20)無癡・(21)順信・(22)心進・(23)信・(24)欲・(25)不放逸・(26)念・(27)煩惱使・(28)見使・(29)戒道使・(30)恚使・(31)—(34)無明・憍・慢掉使なり。是を悔分と名づく。

(三十九)何を非悔分と謂ふ。若し法の非悔と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)愛觸・(6)無明觸・(7)無明分觸・(8)喜根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(16)忍・(17)見・(18)解脫・(19)無貪・(20)無恚・(21)無癡・(22)順信・(23)悅・(24)喜・(25)心進・(26)信・(27)・欲(28)不放逸・(29)念・(30)煩惱使・(31)見使・(32)戒道〔p.675c〕使・(33)—(36)愛・無明・慢・掉使なり。是を非悔分と名づく。

(四十)何をか悅分[三二]と謂ふ。若し法の悅と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く、(1)—(9)身の九・(10)恚觸・(11)憂根・(12)捨根・(13)悔・(14)自性・(15)怖・(16)—(19)疑・恚・嫉妬・慳惜〔使〕なり。是を非悅分と名づく。

(四十一)何をか[三三]喜分と謂ふ。若し法の喜と相應するなり。何をか非分と謂ふ。(1)—(9)身の九・(10)恚觸・(11)憂根・(12)捨根・(13)悔・(14)自性たる喜・(15)怖・(16)—(19)疑・恚・嫉妬・慳惜〔使〕。是を非喜分と名づく。

(四十二)何をか[三四]心進分と謂ふ。若し法の心進と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く身の九・自性・進根、是を非心進分と名づく。

(四十三)何をか心除分と謂ふ。若し法の心除と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸

【三二】悅分。論母には五十二とある。故に全七十一中の今の十九を去つた殘り五十二なるを知るべし。

【三三】喜分。論母にまた五十二といふ。上に準知せよ。

【三四】心進分。論母中六〇と記す。

(4)名觸・(5)明觸・(6)明分觸・(7)無明分觸・(8)喜根・(9)捨根・(10)受・(11)想・(12)思・(13)觸・(14)思惟・(15)覺・(16)觀・(17)忍・(18)見・(19)智・(20)解脫・(21)無癡・(22)順信・(23)悅・(24)喜・(25)心進・(26)欲・(27)信・(28)不放逸・(29)念・(30)心捨・(31)有覺有觀定、乃至(41)慧根なり。是を心除分と名づく。

(四十四)何をか信分[三五]と謂ふ。若し法の信と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く身の九、順信・信・[三六]根・疑、是を非信分と名づく。

(四十五)何をか[三七]欲分と謂ふ。若し法の欲と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く、身の九・自性・[三八]疑、是を非欲分と名づく。

(四十六)何をか[三九]不放逸分と謂ふ。若し法の不放逸と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明觸・(6)明分觸・(7)無明分觸・(8)喜根・(9)憂根・(10)捨根・(11)受・(12)想・(13)思・(14)觸・(15)思惟・(16)覺・(17)觀・(18)忍・(19)見・(20)智・(21)解脫・(22)無貪・(23)無恚・(24)無癡・(25)順信・(26)悔・(27)不悔・(28)悅・(29)喜・(30)心進・(31)心除・(32)信・(33)欲・(34)念・(35)捨・(36)有覺有觀定乃至(46)[三〇]慧根なり。是を不放逸分と名づく。

(四十七)何をか[三一]念分と謂ふ。若し法の念と相應するなり。何をか非分と謂ふ。謂く、身の九・自性・念根・疑、是を非念分と名づく。

(四十八)何をか心捨分と謂ふ。若し法の心捨と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(55)明觸・(6)明分觸・(7)無明分觸・(8)喜根・(9)捨根・(10)受・(11)想・(12)思・(13)觸・(14)思惟・(15)覺・(16)觀・(17)忍・(18)見・(19)智・(20)解脫・(21)無癡・(22)順信〔p. 676a〕・(23)悅・(24)喜・(25)心進・(26)心除・(27)信・(28)欲・(29)不放逸・(30)念・(31)有覺有觀定、乃至、(41)慧根なり。是を心捨分と名づく。

【三五】信分。論母には五十八相應と。
【三六】根。この上に脫字あるべし。
【三七】欲分。論母には六十一相應と。
【三八】疑。ここには非分十一を數へ、從ってこれを全數七十一より除けば六十としかならぬが、どっちかに誤傳あるものなるべし。
【三九】不放逸分。論母には相應四十六といふ。
【三〇】慧。大正本等には定に作るも、宋元明宮の四本により、且つ、でないと數字も合はぬので、今改め記す。
【三一】念分。論母中には五十九相應といふ。

(四十九)何をか怖分と謂ふ。若し法の怖と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)恚觸・(6)無明觸・(7)無明分觸・(8)憂根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(19)忍・(17)見・(18)解脫・(19)心進・(20)信・(21)欲・(22)念・(23)煩惱使・(27)恚使・(25)—(27)無明・慢・掉使なり。是を怖分と名づく。

(五十)何をか[三二]煩惱使分と謂ふ。若し法の煩惱使と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)愛觸・(6)恚觸・(7)無明觸・(8)喜根・(9)憂根・(10)捨根・(11)受・(12)想・(13)思・(14)觸・(15)思惟・(16)覺・(17)觀・(18)忍・(19)見・(20)解脫・(21)悔・(22)不悔・(23)悅・(24)喜・(25)心進・(26)信・(27)欲・(28)念・(29)怖・(30)見使、乃至、(39)掉使なり。是を煩惱使分と名づく。

(五十一)何をか[三三]見使分と謂ふ。若し法の見[三四]使と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)無明觸・(6)喜根・(7)憂根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(16)解脫・(17)悔・(18)不悔・(19)悅・(20)喜・(21)心進・(22)信・(23)欲・(24)念・(25)煩惱使・(26)—(28)無明・慢・掉使なり。是を見使分と名づく。

(五十二)何をか[三五]疑使分と謂ふ。若し法の疑使と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)無明觸・(6)憂根・(7)捨根・(8)受・(9)想・(10)思・(11)觸・(12(思惟・(13)覺・(14)觀・(15)心進・(16)煩惱使・(17)—(19)無明・慢・掉使なり。是を疑使分と名づく。

(五十三)何をか[三六]戒道使分と謂ふ。若し法の戒道使と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)無明觸・(6)喜根・(7)憂根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(16)解脫・(17)悔・(18)不悔・(19)悅・(20)喜・(21)心進・(22)信・(23)欲・(24)念・(25)煩惱使・(26)—(28)無明・慢・掉使なり。是を戒道使分と名づく。

(五十四)何をか[三七]愛使分と謂ふ。若し法の愛使と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)

【三二】煩惱使分。論母には相應四十九とあるも、今の數は三十九ある。四は三の誤傳か。
【三三】見使分。論母には相應二十八と。
【三四】使。明本により補入。
【三五】疑使分。論母には相應十九と記す。
【三六】戒道使分。論母には相應二十八といふ。
【三七】愛。論母中、相應二十九といふ。

心觸・(4)名觸・(5)愛觸・(6)無明觸・(7)喜根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(16)忍・(17)見・(18)解脫・(19)不悔・(20)悅・(21)喜・(22)心進・(23)信・(24)欲・(25)念・(26)煩惱使・(27)—(29)無明・慢・掉使なり。是を愛使分と名づく。

（五十五）何をか[38]恚使分と謂ふ。若し法の恚使と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)恚觸・(6)無明觸・(7)憂根・(8)受・(9)想・(10)思・(11)觸・(12)思惟〔p. 676b〕・(13)覺・(14)觀・(15)忍・(16)見・(17)解脫・(18)悔・(19)心進・(20)信・(21)欲・(22)念・(23)怖・(24)煩惱使・(25)—(27)無明・慢・掉使なり。是を恚使分と名づく。

（五十六）何をか[39]嫉妬使分と謂ふ。若し法の嫉妬使と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)無明觸・(6)憂根・(7)受・(8)想・(9)思(10)觸・(11)思惟・(12)覺・(13)觀・(14)忍・(15)見・(16)解脫・(17)心進・(18)信・(19)欲・(20)念・(21)煩惱使・(22)—(24)無明・慢・掉使なり。是を嫉妬使分と名づく。

（五十七）何をか[40]慳惜使分と謂ふ。若し法の慳惜使と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)無明觸・(6)憂根・(7)受・(8)想・(9)思・(10)觸・(11)思惟・(12)覺・(13)觀・(14)忍・(15)見・(16)解脫・(17)心進・(18)信・(19)欲・(20)念・(21)煩惱使・(22)—(24)無明・慢・掉使なり。是を慳惜使分と名づく。

（五十八）何をか[41]無明使分と謂ふ。若し法の無明使と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)愛觸・(6)恚觸・(7)無明觸・(8)喜根・(9)憂根・(10)捨根・(11)受・(12)想・(13)思・(14)觸・(15)思惟・(11)覺・(17)觀・(18)忍・(19)見・(20)解脫・(21)悔・(22)不悔・(23)悅・(24)喜・(25)心進・(26)信・(27)欲・(28)念・(29)怖・(30)煩惱使・(31)見使・(32)疑使・(33)戒道使・(34)愛使・(35)恚使・(36)嫉妬使・(37)慢惜使・(38)慢使・(39)掉使なり。是を無明使分と名づく。

【三八】恚。論母中、同上二十七といふ。

【三九】嫉妬。同上二十四といふ。

【四〇】慳惜使。同上また二十四といふ。

【四一】無明使。同上三十九といふ。

(五十九)何をか慢使分と謂ふ。若し法の慢使と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)愛觸・(6)恚觸・(7)無明觸・(8)喜根・(9)憂根・(10)捨根・(11)受・(12)想・(13)思・(14)觸・(15)思惟・(16)覺・(17)觀[四二]・(18)忍・(19)見・(20)解脫・(21)悔・(22)不悔・(23)悅・(24)喜・(25)心進・(26)信・(27)欲・(28)念・(29)怖・(30)煩惱使・(31)見使・(32)疑使・(33)戒道使・(34)愛使・(35)恚使・(36)嫉妬使・(37)慳惜使・(38)無明使・(39)掉使なり。是を慢使分と名づく。

(六十)何をか掉使分と謂ふ。若し法の掉使と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)愛觸・(6)恚觸・(7)無明觸・(8)喜根・(9)憂根・(10)捨根・(11)受・(12)想・(13)思・(14)觸・(15)思惟・(16)覺・(17)觀・(18)忍・(19)見・(20)解脫・(21)悔・(22)不悔・(23)悅・(24)喜・(25)心進・(26)信・(27)欲・(28)念・(29)怖・(30)煩惱使・(31)見使・(32)疑使・(33)戒道使・(34)愛使・(35)恚使・(36)嫉妬使・(37)慳惜使・(38)無明使・(39)慢使なり。是を掉使分と名づく。

(六十一)何をか[四三]有覺有觀定分と謂ふ。若し法の有覺有觀定と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(1)明觸・(6)明分觸・(7)無明分觸・(8)喜根・(9)捨根・(10)受・(11)想・(12)思・(13)觸・(14)思惟・(15)覺・(16)觀・(17)忍・[p.676c](18)見・(19)智・(20)解脫・(21)無癡・(22)順信・(23)悅・(24)喜・(25)心進・(26)心除・(27)信・(28)欲・(29)不放逸・(30)念・(31)心捨・(32)信根・(33)進根・(34)念根・(35)慧根なり。是を有覺有觀定分と名づく。

(六十二)何をか[四四]無覺有觀定分と謂ふ。若し法の無覺有觀定と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明觸・(6)明分觸・(7)無明分觸・(8)喜根・(9)憂根・(10)捨根・(11)受・(12)想・(13)思・(14)觸・(15)思惟[四五]・(16)觀[四六]・忍・見・智・解脫・(20)無癡・(21)順信・(22)悅・(23)喜・(24)心進・(25)心除・(26)信・(27)欲・(28)不放逸・(29)念・(30)心捨・(31)信根・(32)進根・(33)念根・(34)慧根なり。是を無覺有觀定分と名づく。

【四二】觀。四本により補入。

【四三】有覺等。論母中、同上三十五といふ。

【四四】無覺等。同上三十四といふ。然るに今の文では所記の通り三十五となる。

【四五】思惟の下。大正本等には覺をおくも、無覺定の故に省く。

【四六】觀。宋元明三本には省く。

(六十三)何をか[四七]無覺無觀定分と謂ふ。若し法の無覺無觀定と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明觸・(6)明分觸・(7)無明分觸・(8)喜根・(9)捨根・(10)受・(11)想・(12)思・(13)觸・(14)[四八]思惟・(15)忍・(16)見・(17)智・(18)解脫・(19)無癡・(20)順信・(21)悅・(22)喜・(23)心進・(24)心除・(25)信・(26)欲・(27)不放逸・(28)念・(29)心捨・(30)信根・(31)念根・(32)慧根なり。是を無覺無觀定分と名づく。

(六十四)何をか[四九]空定分と謂ふ。若し法の空定と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明觸・(6)明分觸・(7)喜根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(16)忍・(17)見・(18)智・(19)解脫・(20)無癡・(21)順信・(22)悅・(23)喜・(24)心進・(25)心除・(26)信・(27)欲・(28)不放逸・(29)念・(30)心捨・(31)信根・(32)進根・(33)念根・(34)慧根なり。是を空定と名づく。

(六十五)何をか[五〇]無相定分と謂ふ。若し法の無相定と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明分觸・(6)喜根・(7)捨根・(8)受・(9)想・(10)思・(11)觸・(12)思惟・(13)覺・(14)觀・(15)忍・(16)見・(17)智・(18)解脫・(19)無癡・(20)順信・(21)悅・(22)喜・(23)心進・(24)心除・(25)信・(26)欲・(27)不放逸・(28)念・(29)心捨・(30)信根・(31)進根・(32)念根・(33)慧根なり。是を無相定分と名づく。

(六十六)何をか無願定分と謂ふ。若し法の無願定と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明觸・(6)明分觸・(7)喜根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(16)忍・(17)見・(18)智・(19)解脫・(20)無癡・(21)順信・(22)悅・(23)喜・(24)心進・(25)心除・(26)信・(27)欲・(28)不放逸・(29)念・(30)心捨・(31)信根・(32)進根・(33)念根・(34)慧根なり。是を無願定分と名づく。

【四七】無覺等。同前三十三といふ。但し本文所記では三十二にしかならぬが、これは憂根を脫せるか。

【四八】思惟。この下、大正本等覺觀をおくも、無覺無觀定につき宋元明宮の四本に從ひ除去する。

【四九】空定。論母中には相應三十四と記する。

【五〇】無相定。同上三十四といふ。今の本文中には明觸を脫す。

（六十七）〔1,677a〕何をか[五一]信根分と謂ふ。若し法の信根と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明觸・(6)明分觸・(7)喜根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思觸・(12)思惟・(13)覺・(14)觀・(15)忍・(16)見・(17)智・(18)解脫・(19)無癡・(20)悅・(21)喜・(22)心進・(23)心除・(24)信[五二]・(25)欲・(26)不放逸・(27)念・(28)心捨・信根を除いて(29)有覺有觀定より乃至、(38)慧根までなり。是を信根分と名づく。

（六十八）何をか[五三]進根分と謂ふ。若し法の進根と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)〔明觸〕・(6)明分觸・(7)喜根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(16)忍・(17)見・(18)智・(19)解脫・(20)無癡・(21)順信・(22)悅・(23)喜・(24)心除・(25)信・(26)欲・(27)不放逸・(28)念・(29)心捨・進根を除いて(30)有覺有觀定より乃至(39)慧根までなり。是を進根分と名づく。

（六十九）何をか[五四]念根分と謂ふ。若し法の念根と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明觸・(6)明分觸・(7)喜根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(16)忍・(17)見・(18)智・(19)解脫・(20)無癡・(21)順信・(22)悅・(23)喜・(24)心進・(25)心除・(26)信・(27)欲・(28)不放逸・(29)念[五五]・(30)心捨・念根を除いて(31)有覺有觀定より乃至、(40)慧根までなり。是を念根分と名づく。

（七十）何をか[五六]定根分と謂ふ。若し法の定根と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明觸・(6)明分觸・(7)喜根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(16)忍・(17)見・(18)智・(19)解脫・(20)無癡・(21)順信・(22)悅・(23)喜・(24)心進・(25)心除・(26)信・(27)欲・(28)不放逸・(29)念・(30)心捨・(31)信根・(32)進根・(33)念根・(34)慧根なり。是を定根分と名く。

【五一】信根分。同上三十八といふ。
【五二】信。四本にはこれを記せず。
【五三】進根。同上三十九といふ。
【五四】念根。右に同じ。三十九と。本文には念を一つ多く數へて四〇を記してゐる。
【五五】念。四本には省く。
【五六】定根分。同上三十四といふ。

(七十一)何をか[五七]慧根分と謂ふ。若し法の慧根と相應するなり。謂く、(1)意界・(2)意識界・(3)心觸・(4)名觸・(5)明觸・(6)明分觸・(7)喜根・(8)捨根・(9)受・(10)想・(11)思・(12)觸・(13)思惟・(14)覺・(15)觀・(16)解脫・(17)順信・(18)悅・(19)喜・(20)心進・(21)心除・(22)信・(23)欲・(24)不放逸・(25)念・(26)心捨・(27)有覺有觀定より乃至(36)定根までなり。是を慧根と名づく。

[五八]眼識界は幾法か相應する。――何等の法をか問ふ。眼識界の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。眼識界の相應に非ざる法を除く、眼識界は謂く[五九]緣法の意識分無きなり。身の四識界・――耳・鼻・舌・身識界も亦是の如し。

意界は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。意[p.677b]界相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。意界の相應に非ざる法を除く、意界は謂く[六〇]緣法の身分の意界無きなり。

意識界は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。意識界相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く意識界の相應に非ざる法を除く、意識界は謂く、緣法の身分なり。

身觸は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。身觸相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。身觸の相應に非ざる法を除く。身觸は謂く、緣法の意識分無きなり。

心觸は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。心觸相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。心觸の相應に非ざる法を除く。心觸は謂く緣法の身分無きなり。

名觸は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。名觸相應法を問ひ餘の法を除く。何の法をか除く。名觸の相應に非ざる法を除く、名觸は謂く緣法の身分無きなり。

對觸は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。對觸相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。對觸の相應に非ざる法を除く。對觸は謂く緣法の意識分無きなり。

愛觸は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。愛觸相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除

【五七】慧根分。同上三十六といふ。

【五八】眼識界等。以上七十一相應門分を明し已りて、(五)如上の裏打的檢討を叙す相應品下の註參照。

【五九】緣法の意識分。これがなければ、緣法の身分―眼識界分あることゝなる。

【六〇】緣法の身分。これがなければ、準上に緣法の意識分あることゝなる。

く。愛觸の相應に非ざるを除く。愛觸は謂く緣法の身分、意識の善・無記分・不善の非・愛觸相應・諸煩惱相應分無きなり。

恚觸は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。恚觸相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。恚觸の相應に非ざる法を除く。恚觸は謂く緣法の身分、意識の善、無記分、若しは不善の非恚觸相應、諸煩惱相應分無きなり。

明觸は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。〔六一〕明觸分相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。明觸の相應に非ざる法を除く。〔六二〕明觸分は謂く緣法の身分、意識の非聖分・聖智分無きなり。

無明觸は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。無明觸相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無明觸の相應に非ざる法を除く。無明觸は謂く緣法の身分、意識の善、無記分無きなり。

明分觸は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。明分觸相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。明分觸の相應に非ざるを除く。明分觸は謂く緣法の身分、意識の非聖分、聖智分無きなり。

無明分〔p. 677c〕觸は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。無明分觸相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無明分觸の相應に非ざる法を除く。無明分觸は謂く、緣法の意識の善・無記分・聖分無きなり。

樂根は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。樂根相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。樂根の相應に非ざる法を除く。樂根は謂く緣法の意識分、身の苦根、捨根分無きなり。

苦根は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。苦根相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。苦根の相應に非ざる法を除く。苦根は謂く緣法の意識分、身の樂根、捨根分無きなり。

喜根は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。喜根相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。喜根の相應に非ざる法を除く。喜根は謂く緣法の身分、意識・憂根・捨根分無きなり。

〔六一〕 明觸分。宋元明宮の四本には明分觸に作る。然し何れも非で、唯の明觸の誤傳なるべし。
〔六二〕 明觸分。同上。

憂根は幾法か相應す。何等の法をか問ふ。憂根相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。憂根の相應に非ざる法を除く。憂根は謂く緣法の身分・意識・喜根捨・根分無きなり。

捨根は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。捨根相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。捨根の相應に非ざる法を除く。捨根は謂く緣法の身分・樂根・苦根分・意識・喜根・憂根分無きなり。

受法は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。受相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。受の相應に非ざる法を除く。受は謂く緣法無きなり。想・思・觸・思惟も亦是の如し。

覺は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。覺相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。覺の相應に非ざる法を除く。覺は謂く緣法の身分、意識の無覺有觀分無きなり。

觀は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。觀の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。觀の相應に非ざる法を除く。觀は謂く緣法の身分、意識の無覺無觀分無きなり。

忍は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。忍の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。忍の相應に非ざる法を除く。忍は謂く緣法の身分・意識・智・疑分無きなり。

見は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。見の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。見の相應に非ざる法を除く。見は謂く緣法の身分・意識・疑分無きなり。

智は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。[p.678a]智の相應法を問ひ餘の法を除く。何等の法をか除く。智の相應に非ざる法を除く。智は謂く無緣法の身分、意識の非聖分、聖忍分無きなり。

解脱は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。解脱の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。解脱の相應に非ざる法を除く。解脱は謂く緣法の意識、疑分無きなり。

無貪は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。無貪の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか

除く。無貪の相應に[六三]非ざる法を除く。無貪は謂く、緣法の身分・意識の不善、無記分、善の非欲界分、若しは欲界の無恚分無し。復、欲界非無貪相應・無恚・無癡相應分有り。

無恚は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。無恚の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無恚の相應に非ざる法を除く。無恚は謂く緣法の身分・意識の不善・無記分・善の非欲界分・欲界の無貪分無し。復、欲界の非無恚相應・無貪・無癡相應分有り。

無癡は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。無癡相應法を[六四]問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無癡の相應に非ざる法を除く。無癡は謂く、緣法の身分、意識の不善・無記 分無きなり。

順信は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。順信の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。順信の相應に非ざる法を除く。順信は謂く、緣法の身分・意識の不善若しは無記分無きなり。

悔は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。悔の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。悔の相應に非ざる法を除く。悔は謂く、緣法の身分・意識・喜根・捨根分・非悔相應・憂根相應分無きなり。

不悔は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。不悔の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。不悔の相應に非ざる法を除く。不悔は謂く、緣法の身分・意識・憂根・捨根分・非不悔相應・喜根相應分無きなり。

悅は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。悅の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。悅の相應に非ざる法を除く。悅は謂く、緣法の身分・意識・憂根・捨根分・非悅相應・喜根相應分無きなり。

喜は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。喜の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。喜の相應に非ざる法を除く。〔p. 678b〕喜は謂く、緣法の身分・意識・憂根・捨根分・非喜相應・悅相應分無

【六三】非ざる。宋元明宮の四本により補入。

【六四】問ひ。同上四本により補入。

きなり。

心進は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。心進の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。心進相應に非ざる法を除く。心進は謂く、緣法の身分無きなり。

心除は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。心除の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。心除の相應に非ざる法を除く。心除は謂く、緣法の身分・意識不定分無きなり。

信は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。信の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。信の相應に非ざる法を除く。信は謂く、緣法の身分・意識・疑分無きなり。

欲は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。欲の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。欲の相應に非ざる法を除く。欲は謂く、緣法の身分・意識・疑分無きなり。

不放逸は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。不放逸の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。不放逸の相應に非ざる法を除く。不放逸は謂く、緣法の身分・意識の不善・無記分無きなり。

念は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。念の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。念の相應に非ざる法を除く。念は謂く、緣法の身分・意識・疑分無きなり。

心捨は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。心捨の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。心捨の相應に非ざる法を除く。心捨は謂く、緣法の身分・意識・不定分無きなり。

怖は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。怖の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。怖の相應に非ざる法を除く。怖は謂く、緣法の身分・意識・喜根・捨根分・非怖相應・憂根相應分無きなり。

煩惱使は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。煩惱使の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法

をか除く。煩惱使の相應に非ざる法を除く。煩惱使は謂く、緣法の身分・意識の善・無記分無きなり。

見使は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。見使の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。見使の相應に非ざる法を除く。見使は謂く、緣法の身分・意識の善・無記分・不善の非見使相應・諸煩惱相應分無きなり。

疑使は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。〔p. 678c〕疑使の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。疑使の相應に非ざる法を除く。疑使は謂く、緣法の身分・意識の善・無記分・不善の非疑使相應・諸煩惱相應分無きなり。

戒道使は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。戒道使の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。戒道使の相應に非ざる法を除く。戒道使は謂く、緣法の身分・意識の善・無記分・不善の非戒道使相應・諸煩惱相應分無きなり。

愛使は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。愛使の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。愛使の相應に非ざる法を除く。愛使は謂く、緣法の身分・意識の無記分・不善の非愛使相應・諸煩惱相應分無きなり。

恚使は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。恚使の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。恚使の相應に非ざる法を除く。恚使は謂く、緣法の身分・意識の善・無記分・不善の非恚使相應・諸煩惱相應分無きなり。

嫉妬使は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。嫉妬使の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。嫉妬使の相應に非ざる法を除く。嫉妬使は謂く、緣法の身分・意識の善・無記分・不善の非嫉妬使相應・諸煩惱相應分無きなり。

慳惜使は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。慳惜使の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法

をか除く。慳惜使の相應に非ざる法を除く。慳惜使は謂く、緣法の身分・意識の善・無記分・不善の非慳惜使相應・諸煩惱使相應分無きなり。

無明使は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。無明使の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無明使の相應に非ざる法を除く。無明使は謂く緣法の身分・意識の善・無記分無きなり。慢掉も亦是の如し。

有覺有觀定は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。有覺有觀定の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。有覺有觀定の相應に非ざる法を除く。有覺有觀定は謂く、緣法の身分・意識の不定分・二定相應分無きなり。

無覺有觀定は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。無覺有觀定相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無覺有觀定の相應に非ざる法を除く。無覺〔p. 679a〕有觀定は謂、く緣法の身分・意識の不定・二定相應分無きなり。

無覺無觀定は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。無覺無觀定の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無覺無觀定の相應に非ざる法を除く。無覺無觀定は謂く、緣法の身分・意識の不定分、二定相應分無きなり。

空定は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。空定の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。空定の相應に非ざる法を除く。空定は謂く、緣法の身分・意識の非聖分・無相・無願相應分無きなり。

無相定は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。無相定の相定の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無相定の相應に非ざる法を除く。無相定は謂く、緣法の身分・意識の非聖分・聖空・無願相應分無きなり。

無願定は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。無願定の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。無願定の相應に非ざる法を除く。無願定は謂く、緣法の身分・意識の非聖分・聖空・無相相應分無きなり。

信根は幾法か相應する。何等の法をか問ふ。信根の相應法を問ひ、餘の法を除く。何等の法をか除く。信根の相應に非ざる法を除く。信根は謂く、緣法の身分・意識の非聖分無きなり。進根・念根・定根・慧根も亦是の如し。[六五]

【六五】大正本等末尾に左の如き註文を載す。而して是の如きは宋元明宮の四本にはこれなし。謂く
此の卷の經の解射の字、他本又は並に是れ解脫の字なり。第十九卷並に二十一卷を勘ふるに、解射は是れ無漏の觀なり、意は云ふ、結使の煩惱は猶、矢射の如く、傷害有るが故に。無漏の觀は彼を解いて傷害さす、此の名を立つ。恐らくは後人、古來の多本、並に是れ解脫の字なるを見て、反て疑惑を生ぜむ。故に以て之を指す。是し訖て之を指す。

卷の第二十五 〔p.679b〕

[一]緒分・[二]遍品第一

[三]十緣は[四]正法の門・遍緒なり。七轉・十行解に一切法等入る。

十緣とは謂く、因緣・無間緣・境界緣・依緣・業緣・報緣・起緣・異緣・相續緣・增上緣なり。

何をか[五]因緣と謂ふ。若し法の因なる。是を因緣と名づく。復次に因緣とは、若し法の共・非共にして有報なる、是を因緣と名づく。復次に因緣とは、若しは法の有緣、若しは法の無緣にして有報なる、得果を除く、若し餘の法の無緣の善報なる、及び四大、是を因緣と名づく。

何をか[六]無間緣と謂ふ。若し法の生じて滅せる、是を無間緣と名づく。復次に無間緣とは、若しは法の已に滅せる、若しは未だ滅せざる、若しは陰・界・入の法の各自性の即ち生ぜる、若しは先に已に現在より滅せる。是を無間緣と名づく。

何をか[七]境界緣と謂ふ。一切法は境界緣にて、心・心數法を相生ずるが如き、是を境界緣と名づく。

何をか[八]依緣と謂ふ。若し法の有猗なる、是を依緣と名づく。復次に依緣とは、若し法の法に依りて生ずれば、此の法は彼の法に於て依緣たり。身に依りて身業有り、口に依りて口業有り、意に依りて意業有り、四大に依りて身口意業有り、地に依りて稼穡の業・種子聚落・衆生聚落・藥草・叢林有り、惡知識に依りて便ち惡不善法を生じ、善知識に依りて便ち善法を生じ、眼に依り色に依りて、眼識及び眼識相應法を生じ、耳・鼻・舌・身・意も亦是の如く、內の大に依りて內の大を生じ、內の大に依りて外の大を生じ、內の大に依りて內外の大を生じ、外の大に依りて內の大を生じ、外の大に依りて外の大を生じ、外の大に依りて內外の大を生じ、內外の大に依りて內の大を生じ、內外

【一】緒分。緒の字は果して云何なる意味の用法か、又、原には何とあつたかを明にし得ないが已に解題中に註出しておいた如く、道標の論序に於ては或は序とも作らるゝ所である。(一)遍品(二五—二六)、(二)因品(二六)、(三)名色品(二六)、(四)假結品(二六—二七)、(五)行品(二七)、(六)觸品(二七)、(七)假心品(二七)、(八)十不善業道品(同)、(九)十善業道品(同)及び(十)定品(二八—三〇)の全十品を攝し、從て概言する限りでは、善惡の因に關する解明を專ら目圖する一分なるものの如くである。

【二】遍品。また遍の字が果して云何なる意か、原には何とあつたか(或は緒=Nidānaか)を今、審にし難いが、所謂十緣を(一)まで列ねて、(二)個々解說し、而して(三)各二づゝの相互關係を說明する三段の組織をもつて說明するものである。而して最後に、(四)三性法を列擧し、その名々の緣としての所生を附加的に說明してゐる。所謂十緣に對しては、南傳鉢叉那論部の二十

の大に依りて外の大を生じ、内外の大に依りて内外の大を生じ、滅も亦是の如くなる、是を依縁と名づく。

[p.679c] 何をか[九]業縁と謂ふ。業は是れ業縁、若し非業も是れ業縁にして、若し業・異業の因として業を生ずる、是を業縁と名づく。

何をか[一〇]報縁と謂ふ。若し法の有報なる、是を報縁と名づく。

何をか[一一]起縁と謂ふ。若し法の能く所起を起す、是を起縁と名づく。復次に起縁とは、若し法の自ら起りて能く他を起して流津を増長する、謂く、専殺結・善根・不善根・意識想・思・覺・四大、是を起縁と名づく。

何をか[一二]異縁と謂ふ。若し法の共有なる、是を異縁と名づく。

何をか[一三]相續縁と謂ふ。若し法の増益して斷ぜざる、是を相續縁と名づく。復次に相續縁とは、若し法の初に軟を生じ、次に中を生じ、後に上を生ずるとき、軟法の上法に於けるは是れ相續縁なり。是を相續縁と名づく。

何をか[一四]増上縁と謂ふ。若し法の勝なる、是を増上縁と名づく。復次に増上縁とは、若し法の増上する所、向ふ所、歸する所、傾向して生ずる所なり。若しは欲を以て増上とし、精進を以て増上とし、心を以て増上とし、思惟を以て増上として、貪を以て増上とし、瞋恚を以て増上とし、愚癡を以て増上とし、無貪を以て増上とし、無恚を以て増上とし、無癡を以て増上とし、定を以て増上とし、定を以て増上とし、慧を以て増上とし、我を以て増上とし、世間を以て増上とし、法を以て増上とし、眼根を以て増上とし、耳・鼻・舌・身・意根を以て増上とし、増上を以て増上と爲し、境界を以て増上とし、依を以て増上とするなり。

何をか欲を以て増上とすと謂ふ。若し法の欲を以て勝として而も生ずれば、彼の欲は法に於て増

四縁を最も參照するを要す。
【三】十縁等。遍品の總示的論母なるべきも、何の意なるを明にし得ない。
【四】正法の門。宋元明宮の四本には「法の正門」とある。
【五】因縁。巴、Hetu-paccaya.
【六】無間縁。巴、Anantara-paccaya.
【七】境界縁。巴、Ārammaṇa-paccaya.
【八】依縁。巴、Nissaya-paccaya.
【九】業縁。巴、Kamma-paccaya.
【一〇】報縁。巴、Vipāka-paccaya.
【一一】起縁。巴、? Janaka-paccaya.（巴、Paṭṭhāna にはこれを見ず。Visuddhimagga p. 369 參照）。
【一二】異縁。巴、Aññamañña-paccaya.
【一三】相續縁。巴、Āsevana-paccaya.
【一四】増上縁。巴、Adhipati-paccaya.

上緣と爲す。精進の増上し心の増上、[一五]思惟。貪・瞋・恚・愚癡・無貪・無恚・無癡、戒・定・慧の増上も亦是の如し。

何をか我の増上と謂ふ。[一六]佛の經に説くが如し――[一七]三増上あり。何をか三と謂ふ。我増上・世間増上・法増上なり。何を我増上と謂ふ。如し比丘の或は樹下・露處に在りて、心に惡・不善法想を生ずるに、比丘の是の如く思惟すらく、我は設し屛處に在りて惡・不善業を作さば、惡・不善業を作し已りて心は自ら退毀すと。比丘の是の如く思惟すらく、我は禁戒を護持し威儀を成就せむと欲すと。若し微戒を犯すも畏るゝこと金剛の如く、戒を順學して行ずる、是を我増上と名づく。比丘は我増上の爲の故に、惡・不善法を斷じ、善法を修行す、是の故に我増上と名づく。何をか世間増上と謂ふ。如し比丘の或は[p.680a]樹下・露處に在りて、心に惡・不善法想を生ずるに、比丘の是の如く思惟すらく、世間の一切處に居止して天有り。天眼もて他心を見知す。天は遠くして我を見るも、我は近くして天を見ず。自ら相謂ひて言く、此の善男子を觀よ。信を以て出家し、惡・不善法を行ずることを離ると。復、諸の沙門・婆羅門有り、天眼もて他心を見知す。遠くして我を見るも、我は近くして見ず。諸の沙門・婆羅門の自ら相謂ひて言く、此の善男子を觀よ。信を以て出家して惡・不善法を行ずることを離ると。比丘の是の如く思惟すらく、我は禁戒を護持し戒儀を成就せむことを欲すと。若しは微戒を犯すも畏るゝこと金剛の如く、戒を順學して行ず。是を世間増上と名づく。比丘は世間増上の爲の故に惡・不善法を斷じて善法を修行す。是の故に世間増上と名づく。

何をか法増上と謂ふ。如し比丘の或は樹下・露處に在りて是の如く思惟すらく、世尊は善く時に隨つて説法し、慧有る者は能く受けて涅槃に趣向す。此の法を悕望者・瞋恚者・睡眠者・掉悔者・疑惑者は能く受くるに非ずと。比丘の是の如く思惟すらく、我は禁戒を護持し威儀を成就せむと欲すと。若しは微戒を犯すも、畏るゝこと金剛の如く、戒を順學して行ず。是を法増上と名づく。比丘

【一五】増上。大正本等には「進於」と記す。宋元明の三本によりて正す。
【一六】佛の等。集異門足論六―毘曇部一、初版、p. 186參照。
【一七】三増上。同上參照。

の法増上の爲の故に惡・不善法を斷じて善法を修行すれば、是を法増上と名づく。偈に說くが如し―

「一八 世間に屛處の　以て惡業を作す可き無し。
唯人の自ら若しは虛　若しは是れ實なるを證知す。
言に虛無き者は勝つ　是は則ち自ら毀せず。
若し 一九 以て違犯有らば　二〇 知りて而も覆藏せず。
賢者と及び天とは、　無の惡を作すの時を見る。」
此を以て我は勝行あり。」　世間は勝比丘あり。
二一 法勝者は順行して　實法を退せず。
降魔の威力勝れて　自ら勝寂滅を證す。
遠離して六情を捨し　苦を滅して有を受けず。
已に沒して復還らず。　永く生死を離る。――

是を三増上と名づくと。

何をか眼根増上と謂ふ。眼に色を見て色を思惟し、眼根の色境界に 二二 主として若し心數を生ずれば、此の法は眼根勝なり。是を〔p.660b〕眼根増上と名づく。耳・鼻・舌・身根の増上も亦是の如し。

何をか意根増上と謂ふ。意に法を知り法を思惟し、二三 意根を主として法を以て境界と爲して若し心數を生ずれは、此の法は意根勝なり。是を意根増上と名づく。

何をか増上を増上と爲すと謂ふ。若し法の初て起り、後に至つて法の隨つて用ある、是を増上を増上と爲すと名づく。

何をか境界増上と謂ふ。若し一切の境界は如事の中に勝なり。是を境界増上と名づく。

何をか依増上と名づく。若し一切法は如事に依り依勝なり。是を依増上と名づく。

【一八】 世間等。集異門足論六―毘曇部一、初版、p. 188 f. 參照。

【一九】 以て。宋元明の三本には「已に」に作る。

【二〇】 知りて等。同上には「而も知りて」と記す。

【二一】 此を以て等。集異門足論の譯には是の故に世増上と自・法増上との力の能く不善法を斷じて、法・隨法行を修するを……等と記す。對檢せぬ。

【二二】 主として。大正本等「を生じ」に作るも、宋元明宮の四本によりて改む。

【二三】 意根を等。同上四本には「意根の、法に主として以て境界と爲し」とある。

因に幾緣か有る。四なり。何等か四なる。共・起・増長・報、是を因に四緣有りと名づく。謂く因は生の義、母子の如し。無間は謂く、補處の義、代坐の如し。境界は謂く、的の義、箭射の的の如し。依は謂く、物の義、舍宅の如し。業は謂く、作の義、使作の如し。報は謂く、津漏の義、樹の果を生ずるが如し。起は謂く、生の義、種芽の如し。異は謂く、相ひ離れざるの義、眷屬の如し。相續は謂く、増長の義、財を長ずるが如し。増上は謂く、自在の義、人王の如し。因緣と無間緣と、――或は因緣にして即ち無間緣なり。或は因緣にして無間緣に非ず。

何をか因緣にして即ち無間緣なりと謂ふ。若し法の因にして生滅する、是を因緣にして即ち無間緣なりと名づく。

何をか因緣にして無間緣に非ずと謂ふ。若し法の因にして、生滅し若しは未だ滅せざるに非ざる、是を因緣にして無間緣に非ずと名づく。

非因緣と無間緣と――或は非因緣にして即ち無間緣なり。或は非因緣にして非無間緣なり。

何をか非因緣にして即ち無間緣なりと謂ふ。若し法の非因にして生滅する、是を非因緣にして即ち無間緣なりと名づく。

何をか非因緣にして非無間緣なりと謂ふ。若し法の非因にして、生滅し若しは未だ滅せざるに非ざる、是を非因緣にして非無間緣なりと名づく。

因緣と境界緣と――或は因緣にして即ち境界緣なり。或は因緣にして境界緣に非ず。

何をか因緣にして即ち境界緣なりと謂ふ。若し法の因にして境界有る、是を因緣にして即ち境界緣なりと名づく。

何をか因緣にして境界緣に非ずと謂ふ。若し法の因にして境界無き、是を因緣にして境界緣に非ずと名づく。

非因緣と境界緣と――或は非因緣にして卽ち境界緣なり。或は非因緣にして非境界緣なり。
何をか非因緣にして卽ち境界緣なりと謂ふ。若し法の非因にして境界有る、是を非因緣にして卽ち境界緣なりと名づく。
何をか非因緣にして非境界緣なりと謂ふ。若し法の非因にして境界ならざる、是を非因緣にして非境界緣なりと名づく。
[p.680c] 因緣と依緣と――一切の因緣は、是れ依緣なり。非因緣にして是れ依緣なるは無きなり。
因緣と業緣と――或は因緣にして卽ち業緣なり。或は因緣にして業緣に非ず。
何をか因緣にして卽ち業緣なりと謂ふ。若し法の因にして是れ業たり、能く業を生ずる、是を因緣にして卽ち業緣なりと名づく。
何をか因緣にして業緣に非ずと謂ふ。若し法の因にして業に非ず、若しは業にして業を生ずること能はざる、是を因緣にして業緣に非ずと名づく。
非因緣にして是れ業緣なるは無きなり。
因緣と報緣と――或は因緣にして卽ち報緣なり。或は因緣にして報緣に非ず。
何をか因緣にして卽ち報緣なりと謂ふ。若し法の因にして此れ有報なる、是を因緣にして卽ち報緣なりと名づく。
何をか因緣にして報緣に非ずと謂ふ。若し法の因にして無報なる、是を因緣にして報緣に非ずと名づく。
非因緣にして是れ報緣なるは無きなり。
因緣と起緣と――或は因緣にして卽ち起緣なり。或は因緣にして起緣に非ず。
何をか因緣にして卽ち起緣なりと謂ふ。若し法の因にして是れ起なる、是を因緣にして卽ち起緣

【四】ならざる。明本には「無き」と。

なりと名づく。

何をか因緣にして起緣に非ずと謂ふ。若し法の因にして起に非ざる、是を因緣にして起緣に非ずと名づく。

非因緣にして是れ起緣なるは無きなり。

因緣と異緣と——或は因緣にして卽ち異緣なり。或は因緣にして異緣に非ず。

何をか因緣にして卽ち異緣なりと謂ふ。若し法の因にして是れ共なる、是を因緣にして卽ち異緣なりと名づく。

何をか因緣にして異緣に非ずと謂ふ。若し法の因にして非共なる、是を因緣にして異緣に非ずと名づく。

非因緣にして是れ異緣なるは無きなり。

因緣と相續緣と——或は因緣にして卽ち相續緣なり。或は因緣にして相續緣に非ず。

何をか因緣にして卽ち相續緣なりと謂ふ。若し因にして增長有り、乃至第三を生ずる、是を因緣にして卽ち相續緣なりと名づく。

何をか因緣にして相續緣に非ずと謂ふ。若し因にして[二五]緣增長無き、設し增長するも、乃至第三を生ずること能はざる、是を因緣にして相續緣に非ずと名づく。

非因緣にして是れ相續緣なるは無きなり。

因緣と增上緣と——或は因緣にして卽ち增上緣なり。或は因緣にして增上緣に非ず。

何をか因緣にして卽ち增上緣なりと謂ふ。若し法の因にして是れ增上なる、是は因緣にして是れ增上緣なり。

何をか因緣にして增上緣に非ずと謂ふ。若し法の因にして增上に非ざる、是を因緣にして增上緣

【二五】緣。衍字に非ざるか。

に非ずと名づく。

非因緣と增上緣と――或は非因緣にして是れ增上緣なり。或は非因緣にして增上緣に非ず。

〔p.631a〕何をか非因緣にして是れ增上緣なりと謂ふ。若し法の非因にして是れ增上なる、是を非因緣にして卽ち增上緣なりと名づく。

何をか非因緣にして增上緣に非ずと謂ふ。若し法の非因緣にして增上に非ざる、是を非因緣にして增上緣に非ずと名づく。

無間緣と境界緣と――或は無間緣にして卽ち境界緣なり。或は無間緣にして境界緣に非ず。

何をか無間緣にして是れ境界緣なりと謂ふ。若し法の生滅して境界有る、是を無間緣にして是れ境界緣なりと名づく。

何をか無間緣にして境界緣に非ずと謂ふ。若し法の生滅して境界無き、是き無間緣にして境界緣に非ずと名づく。

非無間緣と境界緣と――或は非無間緣にして 卽ち境界緣なり。或は非無間緣にして 境界緣に非ず。

何をか非無間緣にして是れ境界緣なりと謂ふ。若し法の生滅し若しは未だ滅せざるに非ずして境界有る、是を非無間緣にして是れ境界緣なりと名づく。

何を非無間緣にして境界緣に非ずと謂ふ。若し法の生滅し、若しは未だ滅せざるに非ずして、彼の[三六]境界緣無き、是を非無間緣にして境界緣に非ずと名づく。

無間緣と依緣――無間緣は是れ依緣なり。非無間緣にして是れ依緣なるは無きなり。

無間緣と業緣と――或は無間緣にして卽ち業緣なり。或は無間緣にして業緣に非ず。

何をか無間緣にして卽ち業緣なりと謂ふ。若し法の生滅して是れ業たり、若しは業にして能く業

【三六】彼。衍字なるべし。

を生ずる、是を無間緣にして卽ち業緣なりと名づく。

何をか無間緣にして業緣に非ずと謂ふ。若し法の生滅して彼の業に非ず、若しは業にして業を生ずること能はざる、是を無間緣にして業緣に非ずと名づく。

非無間緣と業緣と——或は非無間緣にして卽ち業緣なり。或は非無間緣にして業緣に非ず。

何をか非無間緣にして是れ業緣なりと謂ふ。若し法の生滅し若しは未だ滅せざるに非ずして是れ業たり、能く業を生ずる、是を非無間緣にして是れ業緣なりと名づく。

何をか非無間緣にして業緣に非ずと謂ふ。

若し法の生滅し若しは未だ滅せざるに非ずして彼の業に非ず、若しは業にして業を生ずること能はざる、是を非無間緣にして業緣に非ずと名づく。

無間緣と報緣と——或は無間緣にして是れ報緣なり。或は無間緣にして報緣に非ず。

何をか無間緣にして是れ報緣なりと謂ふ。若し法の生滅して有報なる、是を無間緣にして卽ち報緣なりと名づく。

何をか無間緣にして報緣に非ずと謂ふ。若し法の生滅して彼の無報なる、是を無間緣にして報緣に非ずと名づく。

非無間緣と〔p.681b〕報緣と——或は非無間緣にして卽ち報緣なり。或は非無間緣にして報緣に非ず。

何をか非無間緣にして是れ報緣なりと謂ふ。若し法の生滅し若しは未だ滅せざるに非ずして有報なる。是を非無間緣にして是れ報緣なりと名づく。

何をか非無間緣にして報緣に非ずと謂ふ。若し法の生滅し若しは未だ滅せざるに非ずして彼の無報なる、是を非無間緣にして報緣に非ずと名づく。

無間縁にして是れ起縁なるは無きなり。

非無間縁と起縁と――或は非無間縁にして是れ起縁なり。或は非無間縁にして起縁に非ず。

何をか非無間縁にして是れ起縁なりと謂ふ。若し法の生滅し、未だ滅せざるに非ずして能く起する、是を非無間縁にして是れ起縁なりと名づく。

何をか非無間縁にして起縁に非ずと謂ふ。若し法の生滅し、若しは未だ滅せさるに非ずして起に非ざる、是を非無間縁にして起縁に非ずと名づく。

無間縁にして是れ異縁なるは無きなり。

非無間縁と[二七]異縁と――或は非無間縁にして是れ異縁なり。或は非無間縁にして異縁に非ず。

何をか非無間縁にして是れ異縁なりと謂ふ。若し法の生滅し若しは未だ滅せざるに非ずして此れ共なる、是を非無間縁にして是れ異縁なりと名づく。

何をか非無間縁にして異縁に非ずと謂ふ。若し法の生滅し若しは未だ滅せざるに非ずして彼の共に非ざる、是を非無間縁にして異縁に非ずと名づく。

無間縁にして是れ相續縁なるは無きなり。

非無間縁と相續縁と――或は非無間縁にして是れ相續縁なり。或は非無間縁にして相續縁に非ず。

何をか非無間縁にして是れ相續縁なりと謂ふ。若し法の生滅し、若しは未だ滅せざるに非ずして此れ増長し、乃至能く第三を生ずる、是を非無間縁にして是れ相續縁なりと名づく。

何をか非無間縁にして相續縁に非ずと謂ふ。若し法の生滅し、若しは未だ滅せざるに非ずして彼の増長するに非ず、若しは増長するも乃至第三を生ずること能はさる、是を非無間縁にして相續縁に非ずと名づく。

無間縁にして是れ増上縁なるは無きなり。

【二七】異縁の上。大正本等には「是れ」の字をおくも、宋元明三本により削除す。

或は非無間縁にして是れ增上縁なり。或は非無間縁にして增上縁に非ず。

何をか非無間縁にして是れ增上縁なりと謂ふ。若し法の生滅し、若しは未だ滅せざるに非ずして是れ增上なる、是を非無間縁にして卽ち增上縁なりと名づく。

何をか非無間縁にして增上縁に非ずと謂ふ。若し法の生滅し、若しは未だ滅せざるに非ずして彼の增上に非ざる、是は非無間縁にして〔p.681c〕增上縁に非ず。

[二八]無間縁と因縁と――或は無間縁にして是れ因縁なり。或は無間縁にして因縁に非ず。

何をか無間縁にして是れ因縁なりと謂ふ。若し法の生滅して是れ因なる、是を無間縁にして是れ因縁なりと名づく。

何をか無間縁にして因縁に非ずと謂ふ。若し法は生滅して彼の因に非ざる是を無間縁にして因縁に非ずと名づく。

非無間縁と因縁と――或は非無間縁にして是れ因縁なり。或は非無間縁にして因縁に非ず。

何をか非無間縁にして是れ因縁なりと謂ふ。若し法の生滅し、若しは未だ滅せざるに非ずして〔是れ因なる〕、是を非無間縁にして是れ因縁なりと名づく。

何をか非無間縁にして因縁に非ずと謂ふ。若し法の生滅し、若しは未だ滅せざるに非ずして彼の因に非ざる、是を非無間縁にして因縁に非ずと名づく。

境界縁と依縁と――境界縁にして是れ依縁なるは無きなり。非境界縁にして是れ依縁なるも無きなり。

境界縁と業縁と――或は境界縁にして是れ業縁なり。或は境界縁にして業縁に非ず。

何をか境界縁にして是れ業縁なりと謂ふ。若し法に境界有りて是れ業たり、若しは業にして能く業を生ずる、是を境界縁にして是れ業縁なりと名づく。

【二八】無間縁等。これらの檢討は既に一應「因縁、にして無間縁なり」等の立場から濟むだ筈なるも、改めて順を逆にし、今一應檢討するものである。從つて前の場合と個々對照的に考察を望む。

何をか境界緣にして業緣に非ずと謂ふ。若し法の境界有りて彼の業に非ず、若しは業なるも業を生ずること能はざる、是を境界緣にして業緣に非ずと名づく。

非境界緣と業緣と――或は非境界緣にして是れ業緣なり。或は非境界緣にして業緣に非ず。

何をか非境界緣にして是れ業緣なりと謂ふ。若し法の境界無くして是れ業たり、若しは業にて能く業を生ずる、是を非境界緣にして是れ業緣なりと名づく。

何をか非境界緣にして業緣に非ずと謂ふ。若し法の境界無くして彼の業に非ず、若しは業なるも業を生ずること能はざる、是を非境界緣にして[二九]業緣に非ずと名づく。

境界緣と報緣と――或は境界緣にして是れ報緣なり。或は境界緣にして報緣に非ず。

何をか境界緣にして是れ報緣なりと謂ふ。若し法の境界有りて有報なる、是を境界緣にして是れ報緣なりと名づく。

何をか境界緣にして報緣に非ずと謂ふ。若し法の境界有りて彼の無報なる、是を境界緣にして報緣に非ずと名づく。

非境界緣と報緣と――或は非境界緣にして是れ報緣なり。或は非境界緣にして報緣に非ず。

何をか非境界緣にして是れ報緣なりと謂ふ。若し法の[三〇]境界無くして有報なる、是を非境界緣にして是れ報緣なりと名づく。

何をか非境界[p.682n]緣にして報緣に非ずと名づく。若し法の境界無くして彼の無報なる、是を非境界緣にして報緣に非ずと名づく。

境界緣と起緣と――或は境界緣にして是れ起緣なり。或は境界緣にして起緣に非ず。

何をか境界緣にして是れ起緣なりと謂ふ。若し法の境界有りて是れ起なる、是を境界緣にして是れ起緣なりと名づく。

【二九】業緣の下。大正本等城の字あるも衍字につき省く。

【三〇】境界。大正本等、境界緣に作るも、四本に從ひて緣の字を取る。

何をか境界緣にして起緣に非ずと謂ふ。若し法の境界有りて彼の起に非ざる。是を境界緣にして起緣に非ずと名づく。

非境界緣と起緣と——或は非境界緣にして是れ起緣なり。或は非境界緣にして起緣に非ず。

何をか非境界緣にして是れ起緣なりと謂ふ。若し法の境界無くして是れ起なる、是を非境界緣にして是れ起緣なりと名づく。

何をか非境界緣にして起緣に非ずと謂ふ。若し法の境界無くして彼の起に非ざる、是を非境界緣にして起緣に非ずと名づく。

境界緣と異緣と——或は境界緣にして是れ異緣なり。或は境界緣にして異緣に非ず。

何をか境界緣にして是れ異緣なりと謂ふ。若し法の境界有りて是れ共なる、是を境界緣にして是れ異緣なりと名づく。

何をか境界緣にして異緣に非ずと謂ふ。若し法の境界有りて彼の共に非ざる、是を境界緣にして異緣に非ずと名づく。

非境界緣と異緣と——或は非境界緣にして是れ異緣なり。或は非境界緣にして異緣に非ず。

何をか非境界緣にして是れ異緣なりと謂ふ。若し法の境界無くして是れ共なる、是を非境界緣にして是れ異緣なりと名づく。

何をか非境界緣にして異緣に非ずと謂ふ。若し法の境界無くして彼の共に非ざる、是を非境界緣にして異緣に非ずと名づく。

境界緣と相續緣と——或は境界緣にして是れ相續緣なり。或は境界緣にして相續緣に非ず。

何をか境界緣にして是れ相續緣なりと謂ふ。若し法の境界有りて是れ增長し、乃至、能く第三を生ずる、是を境界緣にして是れ相續緣なりと名づく。

何をか境界縁にして相續縁に非ずと謂ふ。若し法の境界有りて彼の增長せず。若しは增長するも、乃至第三を生ずること能はざる、是を境界縁にして相續縁に非ずと名づく。

非境界縁と相續縁と――或は非境界縁にして是れ相續縁なり。或は非境界縁にして相續縁に非ず。

何をか非境界縁にして是れ相續縁なりと謂ふ。若し法の境界無くして是れ增長し、乃至、能く第三を生ずる、是を非境界縁にして是れ相續縁なりと名づく。

何をか非〔p.682b〕境界縁にして相續縁に非ずと謂ふ。若し法の境界無くして彼の增長せず、若しは增長するも、乃至は第三を生ずること能はざる、是を非境界縁にして相續縁に非ずと名づく。

境界縁と增上縁と――或は境界縁にして是れ增上縁なり。或は境界縁にして增上縁に非ず。

何をか境界縁にして是れ增上縁なりと謂ふ。若し法の境界有りて是れ增上なる、是を境界縁にして是れ增上縁なりと名づく。

何をか境界縁にして增上縁に非ずと謂ふ。若し法の境界有りて彼の增上に非ざる、是を境界縁にして增上縁に非ずと名づく。

非境界縁と增上縁と――或は非境界縁にして是れ增上縁なり。或は非境界縁にして增上縁に非ず。

何をか非境界縁にして是れ增上縁なりと謂ふ。若し法の境界無くして是れ增上なる、是を非境界縁にして是れ增上縁なりと名づく。

何をか非境界縁にして增上縁に非ずと謂ふ。若し法の境界無くして彼の增上に非ざる、是を非境界縁にして增上縁に非ずと名づく。

境界縁と因縁と――或は境界縁にして是れ因縁なり。或は境界縁にして因縁に非ず。

何をか境界緣にして是れ因緣なりと謂ふ。若し法の境界有りて是れ因なる、是を境界緣にして是れ因緣なりと名づく。

何をか境界緣にして因緣に非ずと謂ふ。若し法の境界有りて彼の因に非ざる、是を境界緣にして因緣に非ずと名づく。

非境界緣と因緣と——或は非境界緣にして是れ因緣なり。或は非境界緣にして因緣に非ず。

何をか非境界緣にして是れ因緣なりと謂ふ。若し法に境界無くして〔是れ因なる〕、是を非境界緣にして是れ因緣なりと名づく。

何をか非境界緣は因緣に非ずと謂ふ。若し法の境界無くして彼は因に非ざる、是を非境界緣にして因緣に非ずと名づく。

境界緣と無間緣と——或は境界緣にして是れ無間緣なり。或は境界緣にして無間緣に非ず。

何をか境界緣にして是れ無間緣なりと謂ふ。若し法の境界有りて是れ生滅する、是を境界緣にして無間緣なりと名づく。

何をか境界緣にして無間緣に非ずと謂ふ。若し法の境界有りて彼の生滅し若しは未だ滅せざるに非ざる、是を境界緣にして無間緣に非ずと名づく。

非境界緣と無間緣と——或は非境界緣にして是れ無間緣なり。或は非境界緣にして無間緣に非ず。

何をか非境界緣にして是れ無間緣なりと謂ふ。若し法の境界無くして是れ〔p.682c〕生滅する、是を非境界緣にして是れ無間緣なりと名づく。

何をか非境界緣にして無間緣に非ずと謂ふ。若し法の境界無くして彼の生滅し、若しは未だ滅せざるに非ざる、是を非境界緣にして無間緣に非ずと名づく。

依緣と業緣と——或は依緣にして是れ業緣なり。或は依緣とにして業緣に非ず。

何をか依緣にして是れ業緣なりと謂ふ。若し法の依にして是れ業たり、若しは業にして能く業を生ずる、是を依緣にして是れ業緣なりと名づく。

何をか依緣にして業緣に非ずと謂ふ。若し法の依にして彼の業に非ず、若しは業なるも業を生ずること能はざる、是を依緣にして業緣に非ずと名づく。

非依緣にして是れ業緣なるは無きなり。

依緣と報緣と――或は依緣にして是れ報緣なり。或は依緣にして報緣に非ず。

何をか依緣にして是れ報緣なりと謂ふ。若し法の依にして有報なる、是を依緣にして是れ報緣なりと名づく。

何をか依緣にして報緣に非ずと謂ふ。若し法の依にして報に非ざる、是を依緣にして報緣に非ずと名づく。

非依緣にして是れ報緣なるは無きなり。

依緣と起緣と――或は依緣にして是れ起緣なり。或は依緣にして起緣に非ず。

何をか依緣にして是れ起緣なりと謂ふ。若し法の依にして是れ起なる。是を依緣にして是れ起緣なりと名づく。

何をか依緣にして起緣に非ずと謂ふ。若し法の依にして起に非ざる、是を依緣にして起緣に非ずと名づく。

非依緣にして是れ起緣なるは無きなり。

依緣と異緣と――或は依緣にして是れ異緣なり。或は依緣にして異緣に非ず。

何をか依緣にして是れ異緣なりと謂ふ。若し法の依にして是れ共なる、是を依緣にして是れ異緣なりと名づく。

何をか依緣にして異緣に非ずと謂ふ。若し法の依にして彼の共に非ざる、是を依緣にして異緣に非ずと名づく。

非依緣にして是れ異緣なるは無きなり。

依緣と相續緣と――或は依緣にして是れ相續緣なり。或は依緣にして相續緣に非ず。

何をか依緣にして是れ相續緣なりと謂ふ。若し法の依にして增長し、乃至能く共三を生ずる、是を依緣にして是れ相續緣なりと名づく。

何をか依緣にして相續緣に非ずと謂ふ。若し法の依にして彼の增長するに非ず、若しは增長するも、乃至、第三を生ずること能はざる、是を依緣にして相續緣に非ずと名づく。

非依緣にして是れ相續緣なるは無きなり。

依緣と增上緣と――或は依緣にして是れ增上緣なり。或は依緣にして增上緣に非ず。

何をか依緣にして是れ增上緣なりと謂ふ。若し法の依にして是れ增上なる、是を依緣にして是れ增上緣なりと名づく。

何をか依緣にして增上緣に非ずと謂ふ。若し法の〔p.683a〕依にして彼の增上に非ざる、是を依緣にして增上緣に非ずと名づく。

非依緣にして是れ增上緣なるは無きなり。

依緣と因緣と――或は依緣にして是れ因緣なり。或は依緣にして因緣に非ず。

何をか依緣にして是れ因緣なりと謂ふ。若し法の依にして是れ因なる。是を依緣にして是れ因緣なりと名づく。

何をか依緣にして因緣に非ずと謂ふ。若し法の依にして因に非ざる、是を依緣にして因緣に非ずと名づく。

非依緣にして是れ因緣なるは無きなり。

依緣と無間緣と——或は依緣にして是れ無間緣なり。或は依緣にして無間緣に非ず。

何をか依緣にして是れ無間緣なりと謂ふ。若し法の依にして是れ生滅する、是を依緣にして是れ無間緣なりと名づく。

何をか依緣にして無間緣に非ずと謂ふ。若し法の依にして彼の生滅し若しは未だ滅せざるに非ざる、是を依緣にして無間緣に非ずと名づく。

非依緣にして是れ無間緣なるは無きなり。

依緣と境界緣と——或は依緣にして是れ境界緣なり。或は依緣にして境界緣に非ず。

何をか依緣にして是れ境界緣なりと謂ふ。若し法の依にして境界有る、是を依緣にして是れ境界緣なりと名づく。

何をか依緣にして境界緣に非ずと謂ふ。若し法の依にして境界無き、是を依緣にして境界緣に非ずと名づく。

非依緣にして是れ境界緣なるは無きなり。

業緣と報緣と——或は業緣にして是れ報緣なり。或は業緣にして報緣に非ず。

何をか業緣にして是れ報緣なりと謂ふ。若し法の業たり、能く業を生じて有報なる、是を業緣にして是れ報緣なりと名づく。

何をか業緣にして報緣に非ずと謂ふ。若し法の業たり、能く業を生じて無報なる、是を業緣にして報緣に非ずと名づく。

非業緣と報緣と——或は非業緣にして是れ報緣なり。或は非業緣にして報緣に非ず。

何をか非業緣にして是れ報緣なりと謂ふ。若し業に非ず、若しは業なるも業を生ずること能はず

して有報なる、是を非業緣にして是れ報緣なりと名づく。

何をか非業緣にして報緣に非ずと謂ふ。若し法の業に非ず、若しは業なるも業を生ずること能はずして無報なる、是を非業緣にして報緣に非ずと名づく。

業緣と起緣と——或は業緣にして是れ起緣なり。或は業緣にして起緣に非ず。

何をか業緣にして是れ起緣なりと謂ふ。若し法の業にして能く業を[三一]生ずる、是を業緣にして是れ起緣なりと名づく。

何をか業緣にして起緣に非ずと謂ふ。若し業なるも業を生ずること能はずして彼の[三二]起緣に非ざる、是を業緣にして起緣に非ずと名づく。

非業緣と起緣と——或は非業緣にして是れ起緣なり。或は非業緣にして起緣に非ず。

何をか〔p.683b〕非業緣にして是れ起緣なりと謂ふ。若し法の業に非ず、若しは業なるも業を生ずること[三三]能はざる、是を業緣にして是れ起緣なりと名づく。

何をか非業緣にして起緣に非ずと謂ふ。若し法の業に非ず、若しは業なるも業を生ずること能はずして起に[三四]非ざる、是を非業緣にして起緣に非ずと名づく。

業緣と異緣と——或は業緣にして是れ異緣なり。或は業緣にして異緣に非ず。

何をか業緣にして是れ異緣なりと謂ふ。若し法の業にして能く業を生じ、是れ共なる、是を業緣にして是れ異緣なりと名づく。

何をか業緣にして異緣に非ずと謂ふ。若し法の業にして能く業を生じて共に非ざる、是を業緣にして異緣に非ずと名づく。

非業緣と異緣と——或は非業緣にして是れ異緣なり。或は非業緣にして異緣に非ず。

何をか非業緣にして是れ異緣なりと謂ふ。若し法の業に非ず、若しは業なるも業を生ずること能[三五]

【三一】生ずる。「生じて是れ起なる」とあるべきではないか。

【三二】緣。衍字なるべし。

【三三】能はざるの所。「能はずして是れ起なる」とある筈であるまいか。

【三四】非ざる。大正本等は「生ずる」に作るも、宋元明の三本により正す。

はざる、是を非業緣にして是れ異緣なりと名づく。

何をか非業緣にして異緣に非ずと謂ふ。若し法の業に非ず、若しは業なるも業を生ずること能はずして[36]共に非ざる。是を非業緣にして異緣に非ずと名づく。

業緣と相續緣と――或は業緣にして是れ相續緣なり。或は業緣にして相續緣に非ず。

何をか業緣にして是れ相續緣なりと謂ふ。若し法の業にして能く業を生じ、是れ謂く[37]增長し、乃至、能く第三を生ずる、是を業緣にして是れ相續緣なりと名づく。

何をか業緣にして相續緣に非ずと謂ふ。若し法の業たり、業を生ずるも增長するに非ず、若しは增長するも〔乃〕至第三を生ずること〔能は〕ざる、是を業緣にして相續緣に非ずと名づく。

非業緣と相續緣と――或は非業緣にして是れ相續緣なり。或は非業緣にして相續緣に非ず。

何をか非業緣にして是れ相續緣なりと謂ふ。若し法の業に非ず、若しは業なるも[38]非業を生じて、是れ增長し、乃至、第三を生ずる、是を非業緣にして是れ相續緣なりと名づく。

何をか非業緣にして相續緣に非ずと謂ふ。若し法の業に非ず、[39]若しは業を生じて增長するに非ず、若しは增長するも〔乃〕至、第三を生ぜざる、是を非業緣にして相續緣に非ずと名づく。

業緣と增上緣と――或は業緣にして是れ增上緣なり。或は業緣にして增上緣に非ず。

何をか業緣にして是れ增上緣なりと謂ふ。若し法の業たり、業を生じて是れ增上なる、是を業緣にして是れ增上緣なりと名づく。

何をか業緣にして增上緣に非ずと謂ふ。若し法の業たり、業を生じて增上に非ざる、是を業緣にして增上緣に非ずと名づく。

非業緣と增上緣と――或は非業緣にして是れ增上緣なり。或は非業緣にして增上緣に非ず。

何をか非業緣にして是れ增上緣なりと謂ふ。若し法の業に非ず、〔p.683c〕若しは業なるも[40]非業

【三五】能はざるの所。「能はずして是れ共なる」に非ざるか。

【三六】共。大正本等業に作るも、宋元明の三本によりて貿す。

【三七】謂く。どこかからのまぎれ込みなるべし。

【三八】非業を生じて。大抵の他の準文は「業を生ずること能はず」と作る。對見すべし。

【三九】若しは以下。「若しは業なるも業を生ずること能はずして增長するに非ざる、若しは增長するも乃至第三を生ずること能はざる」等とある筈ではないか。

【四〇】非業。上の同準の語の註を參照せよ。

を生じて是れ增上なる、是を非業緣にして是れ增上緣なりと名づく。

何をか非業緣にして增上緣に非ずと謂ふ。若し法の[四一]業たり、若しは業なるも非業を生じて增上に非ざる、是を非業緣にして增上緣に非ずと名づく。

業緣と因緣と――業緣は是れ因緣なり。

非業緣と因緣と――或は非業緣にして是れ因緣なり。或は非業緣にして因緣に非ず。

何をか非業緣にして是れ因緣なりと謂ふ。若し法の業に非ず、若しは業なるも非業を生じて是れ因なる、是を非業緣にして是れ因緣なりと名づく。

何をか非業緣にして因緣に非ずと謂ふ。若し法の業に非ず、若しは業なるも非業を生じて因に非ざる、是を非業緣にして因緣に非ずと名づく。

業緣と無間緣と――或は業緣にして是れ無間緣なり。或は業緣にして無間緣に非ず。

何をか業緣にして是れ無間緣なりと謂ふ。若し法の[四二]業たり、業を生じて是れ生滅する、是を業緣にして是れ無間緣なりと名づく。

何をか業緣にして無間緣に非ずと謂ふ。若し法の業たり、業を生じて、生滅し若しは未だ滅せさるに非ざる、是を業緣にして無間緣に非ずと名づく。

非業緣と[四三]是れ無間緣と――或は非業緣にして是れ無間緣なり。或は非業緣にして無間緣に非ず。

何をか非業緣にして是れ無間緣なりと謂ふ。若し法の業に非ず、若しは業なるも非業を生じて是れ生滅する、是を非業緣にして是れ無間緣なりと名づく。

何をか非業緣にして無間緣に非ずと謂ふ。若し法の業に非ず、若しは業なるも非業を生じて、生滅し若しは未だ滅せざるに非ざる、是を非業緣にして無間緣に非ずと名づく。

【四一】業たり。「業に非ず」たるべき筈である。

【四二】業たり。宋元明宮の四本によりて補入。

【四三】是れ。衍字なるべし。

業縁と境界縁と――或は業縁にして是れ境界縁なり。或は業縁は境界縁に非ず。

何をか業縁にして是れ境界縁なりと謂ふ。若し法の業たり業を生じて境界有る、是を業縁にして是れ境界縁なりと名づく。

何をか業縁にして境界縁に非ずと謂ふ。若し法の業たり、業を生じて境界無き、是を業縁にして境界縁に非ずと名づく。

非業縁と境界縁と――或は非業縁にして是れ境界縁なり。或は非業縁にして境界縁に非ず。

何をか非業縁にして是れ境界縁なりと謂ふ。若し法の業に非ず、若しは業なるも非業を生じて境界有る、是を非業縁にして是れ境界縁なりと名づく。

何をか非業縁にして境界縁に非ずと謂ふ。若し法の業に非ず、若しは業なるも非業を生じて境界無き、是を非業縁にして境界縁に非ずと名づく。

業縁と依縁と――業縁は是れ依縁なり。非業縁は是れ依縁なり。

報縁にして是れ起縁なるは無きなり。

非報縁と起縁と――或は非報縁にして是れ起縁なり。或は非報縁にして起縁に非ず。

何をか非報縁にして是れ起縁なりと謂ふ。若し法の非〔p.684a〕報にして是れ起なる、是を非報縁にして是れ起縁なりと名づく。

何をか非報縁にして起縁に非ずと謂ふ。若し法の非報にして起に非ざる、是を非報縁にして起縁に非ずと名づく。

報縁にして是れ異縁なるは無きなり。

非報縁と異縁と――或は非報縁にして是れ異縁なり。或は非報縁にして異縁に非ず。

何をか非報縁にして是れ異縁なりと謂ふ。若し法の非報にして是れ共なる、是を非報縁にして是

れ異緣なりと名づく。

何をか非報緣にして異緣に非ずと謂ふ。若し法の非報にして非共に非ざる、是を非報緣にして異緣に非ずと名づく。

報緣にして是れ相續緣なるは無きなり。

非報緣と相續緣と――或は非報緣にして是れ相續緣なり。或は非報緣にして相續緣に非ず。

何をか非報緣にして是れ相續緣なりと謂ふ。若し法の非報にして是れ增長し、〔乃〕至、第三を生ずる、是を非報緣にして是れ相續緣なりと名づく。

何をか非報緣にして相續緣に非ずと謂ふ。若し法の非報にして增長するに非ず、若しは增長するも、〔乃〕至、第三を生ぜざる、是を非報緣にして相續緣に非ずと名づく。

報緣にして是れ增上緣なるは無きなり。

非報緣と增上緣と――或は非報緣にして是れ增上緣なり。或は非報緣にして增上緣に非ず。

何をか非報緣にして是れ增上緣なりと謂ふ。若し法の非報にして是れ增上なる。是を非報緣にして是れ增上緣なりと名づく。

何をか非報緣にして增上緣に非ずと謂ふ。若し法の非報にして增上に非ざる、是を非報緣にして增上緣に非ずと名づく。

報緣と因緣と――報緣は是れ因緣なり。

非報緣と因緣と――或は非報緣にして是れ因緣なり。或は非報緣にして因緣に非ず。

何をか非報緣にして是れ因緣なりと謂ふ。若し法の非報にして是れ因なる、是を非報緣にして是れ因緣なりと名づく。

何をか非報緣にして因緣に非ずと謂ふ。若し法の非報にして因に非ざる、是を非報緣にして因緣

に非ずと名づく。

報縁と無間縁と――或は報縁にして是れ無間縁なり、或は報縁にして無間縁に非ず。

何をか報縁にして是れ無間縁なりと謂ふ。若し法の有報にして是れ生滅する、是を報縁にして是れ無間縁なりと名づく。

何をか報縁にして無間縁に非ずと謂ふ。若し法の有報にして、生滅し若しは未だ滅せざるに非ざる、是を報縁にして無間縁に非ずと名づく。

非報縁と無間縁と――或は非報縁にして是れ無間縁なり、或は非報縁にして無間縁に非ず。

何をか非報縁にして是れ無間縁なりと謂ふ。若し法の非報にして是れ生滅する、是を非報縁にして是れ無間縁なりと名づく。

何をか非報[p.684b]縁にして無間縁に非ずと謂ふ。若し法の非報にして、生滅し若しは未だ滅せざるに非ざる、是を非報縁にして無間縁に非ずと名づく。

報縁と境界縁と――或は報縁にして是れ境界縁なり。或は報縁にして境界縁に非ず。

何をか報縁にして是れ境界縁なりと謂ふ。若し法の有報にして境界有り、是を報縁にして是れ境界縁なりと名づく。

何をか報縁にして境界縁に非ずと謂ふ。若し法の有報にして境界無き、是を報縁にして境界縁に非ずと名づく。

非報縁と境界縁と――或は非報縁にして是れ境界縁なり。或は非報縁にして境界縁に非ず。

何をか非報縁にして是れ境界縁なりと謂ふ。若し法の非報にして境界有る、是を非報縁にして是れ境界縁なりと名づく。

何をか非報縁にして境界縁に非ずと名づく。若し法の非報にして境界無き、是を非報縁にして境

界縁に非ずと名づく。

報縁と依縁と——報縁は是れ依縁なり。非報縁にして是れ依縁なるは無きなり。

報縁と業縁と——或は報縁にして是れ業縁なり。或は報縁にして業縁に非ず。

何をか報縁にして是れ業縁なりと謂ふ。若し法の有報にして、是れ業たり、若しは業にして〔能く業を〕生ずる、是を報縁にして是れ業縁なりと名づく。

何をか報縁にして業縁に非ずと謂ふ。若し法の有報にして業に非ず、若しは業なるも非業を生ずる、是を報縁にして業縁に非ずと名づく。

非報縁と業縁と——或は非報縁にして是れ業縁なり、或は非報縁にして業縁に非ず。

何をか非報縁にして是れ業縁なりと謂ふ。若し法の非報にして、是れ業たり、若しは業にして業を生ずる、是を非報縁にして是れ業縁なりと名づく。

何をか非報縁にして業縁に非ずと謂ふ。若し法の非報にして、業に非ず、若しは業なるも非業を生ずる、是を非報縁にして業縁に非ずと名づく。

起縁と異縁と——或は起縁にして是れ異縁なり。或は起縁にして異縁に非ず。

何をか起縁にして是れ異縁なりと謂ふ。若し法の起にして是れ共なる、是を起縁にして是れ異縁なりと名づく。

何をか起縁にして異縁に非ずと謂ふ。若し法の起にして共に非ざる、是を起縁にして異縁に非ずと名づく。

非起縁と異縁と——或は非起縁にして是れ異縁なり。或は非起縁にして異縁に非ず。

何をか非起縁にして是れ異縁なりと謂ふ。若し法の起に非ずして是れ共なる、是を非起縁にして是れ異縁なりと名づく。

何をか非起縁にして異縁に非ずと謂ふ。若し法の起に非ず共に非ざる、是を非起縁にして異縁に非ずと名づく。

〔p.684c〕 起縁にして是れ相續縁なるは無きなり。

非起縁と相續縁と――或は非起縁にして是れ相續縁なり。或は非起縁にして相續縁に非ず。

何をか非起縁にして是れ相續縁なりと謂ふ。若し法の起に非ずして是れ增長し、〔乃〕至、第三を生ずる、是を非起縁にして是れ相續縁なりと名づく。

何をか非起縁にして相續縁に非ずと謂ふ。若し法の增長に非ず、[四四]若し增長するも〔乃〕至、第三を生ぜざる、是を非起縁にして相續縁に非ずと名づく。

起縁と增上縁と――或は起縁にして是れ增上縁なり。或は起縁にして增上縁に非ず。

何をか起縁にして是れ增上縁なりと謂ふ。若し法の起にして是れ增上なる、是を起縁にして是れ增上縁なりと名づく。

何をか起縁にして增上縁に非ずと謂ふ。若し法の起にして增上に非ざる、是を起縁にして增上縁に非ずと名づく。

非起縁と增上縁と――或は非起縁にして是れ增上縁なり。或は非起縁にして增上縁に非ず。

何をか非起縁にして是れ增上縁なりと謂ふ。若し法の起に非ずして是れ增上なる、是を非起縁にして是れ增上縁なりと名づく。

何をか非起縁にして增上縁に非ずと謂ふ。若し法の起に非ず、增上に非ざる、是を非起縁にして增上縁に非ずと名づく。

起縁と因縁と――起縁は是れ因縁なり。

非起縁と因縁と――或は非起縁にして是れ因縁なり。或は非起縁にして因縁に非ず。

【四四】若し增長するも。四本により補入。

何をか非起緣にして是れ因緣なりと謂ふ。若し法の起に非ずして是れ因なる、是を非起緣にして是れ因緣なりと名づく。

何をか非起緣にして因緣に非ずと謂ふ。若し法の起に非ず因に非ざる、是を非起緣にして因緣に非ずと名づく。

起緣にして是れ無間緣なるは無きなり。

非起緣と無間緣と——或は非起緣にして是れ無間緣なり。或は非起緣にして無間緣に非ず。

何をか非起緣にして是れ無間緣なりと謂ふ。若し法の起に非ずして是れ生滅する、是を非起緣にして是れ無間緣なりと名づく。

何をか非起無緣にして無間緣に非ずと謂ふ。我し法の起に非ずして生滅し、若しは未だ滅せざるに非ざる、是を非起緣にして無間緣に非ずと名づく。

起緣と境界緣と——或は起緣にして是れ境界緣なり。或は起緣にして境界緣に非ず。

何をか起緣にして是れ境界緣なりと謂ふ。若し法の起にして境界有る、是を起緣にして是れ境界緣なりと名づく。

何をか起緣にして境界緣に非ずと謂ふ。若し法の起にして境界無き、是を起緣にして境界緣に非ずと名づく。

非起緣と境〔p.685a〕界緣と——或は非起緣にして是れ境界緣なり。或は非起緣にして境界緣に非ず。

何をか非起緣にして是れ境界緣なりと謂ふ。若し法の起に非ずして境界有る、是を非起緣にして是れ境界緣なりと名づく。

何をか非起緣にして境界緣に非ずと謂ふ。若し法の起に非ずして境界無き、是を非起緣にして境

界緣に非ずと名づく。
起緣は是れ依緣、非起緣は是れ[四五]依緣なり。
起緣と業緣と――或は起緣にして是れ業緣なり。或は起緣にして業緣に非ず。
何をか起緣にして是れ業緣なりと謂ふ。若し法の起にして、是れ業なり、業を生ずる、是を起緣にして是れ業緣なりと名づく。
何をか起緣にして業緣に非ずと謂ふ。若し法の起にして業に非ず、若しは業なるも非業を生ずる、是を起緣にして業緣に非ずと名づく。
非起緣と業緣と――或は非起緣にして是れ業緣なり。或は非起緣にして業緣に非ず。
何をか非起緣にして是れ業緣なりと謂ふ。若し法の起に非ずして是れ業たり、業を生ずる、是を非起緣にして是れ業緣なりと名づく。
何をか非起緣にして業緣に非ずと謂ふ。若し法の起に非ずして業に非ず、若しは業なるも非業を生ずる、是を非起緣にして業緣に非ずと名づく。
起緣にして是れ報緣なるは無きなり。
非起緣と報緣と――或は非起緣にして是れ報緣なり。或は非起緣にして報緣に非ず。
何をか非起緣にして是れ報緣なりと謂ふ。若し法の起に非ずして有報なる、是を非起緣にして是た報緣なりと名づく。
何をか非起緣にして報緣に非ずと謂ふ。若し法の起に非ずして報なる、是を非起緣にして報緣に非ずと名づく。
異緣にして是れ相續緣なるは無きなり。
非異緣と相續緣と――或は非異緣にして是れ相續緣なり。或は非異緣にして相續緣に非ず。

【四五】依緣なり。四本には「依緣なるは無きなり」と。

何をか非異緣にして是れ相續緣なりと謂ふ。若し法の共に非ずして是れ增長し、〔乃〕至、第三を生ずる、是を非異緣にして是れ相續緣なりと名づく。

何をか非異緣にして相續緣に非ずと謂ふ。若し法の共に非ずして增長するに非ず、若しは增長するも、〔乃〕至、第三を生ぜざる、是を非異緣にして相續緣に非ずと名づく。

異緣と增上緣と――或は異緣にして是れ增上緣なり。或は異緣にして增上緣に非ず。

何をか異緣にして是れ增上緣なりと謂ふ。若しは法の共にして是れ增上なる、是を異緣にして是れ增上緣なりと名づく。

何をか異緣にして增上緣に非ずと謂ふ。若し法の共にして增上に非ざる、是を異緣にして增上緣に非ずと名づく。

非異緣と增上緣と――或は非異緣にして是れ增上緣なり。或は非異緣にしては增上緣に非ず。

〔p.685b〕何をか非異緣にして是れ增上緣なりと謂ふ。若し法の共に非ずして是れ增上なる、是を非異緣にして是れ增上緣なりと名づく。

何をか非異緣にして增上緣に非ずと謂ふ。若し法の共に非ずして增上に非ざる。是を非異緣にして增上緣なりと名づく。

異緣と因緣と――異緣は是れ因緣なり。

非異緣と因緣と――或は非異緣にして是れ因緣なり。或は非異緣にして因緣に非ず。

何をか非異緣にして是れ因緣なりと謂ふ。若し法の共に非ずして是れ因なる、是を非異緣にして是れ因緣なりと名づく。

何をか非異緣にして因緣に非ずと謂ふ。若し法の共に非ず因に非ざる、是を非異緣にして因緣に非ずと名づく。

異緣にして是れ無間緣なるは無きなり。

非異緣と無間緣と――或は非異緣にして是れ無間緣なり。或は非異緣にして無間緣に非ず。

何をか非異緣にして是れ無間緣なりと謂ふ。若し法の共に非ずして是れ生滅する、是を非異緣にして是れ無間緣なりと名づく。

何をか非異緣にして無間緣に非ずと謂ふ。若し法の共に非ずして生滅し、若しは未だ滅せざるに非ざる、是を非異緣にして無間緣に非ずと名づく。

異緣と境界緣と――或は異緣にして是れ境界緣なり。或は異緣にして境界緣に非ず。

何をか異緣にして是れ境界緣なりと謂ふ。若し法の共にして境界有る、是を異緣にして是れ境界緣なりと名づく。

何をか異緣にして境界緣に非ずと謂ふ。若し法の共にして境界無き、是を異緣にして境界緣に非ずと名づく。

非異緣と境界緣と――或は非異緣にして是れ境界緣なり。或は非異緣にして境界緣に非ず。

何をか非異緣にして是れ境界緣なりと謂ふ。若し法の共に非ずして境界有る、是を非異緣にして是れ境界緣なりと名づく。

何をか非異緣にして境界緣に非ずと謂ふ。若し法の共に非ずして境界無き、是を非異緣にして境界緣に非ずと名づく。

異緣とは依緣と――異緣は卽ち是れ依緣非異緣は是れ依緣なり。

異緣と業緣と――或は異緣にして是れ業緣なり。或は異緣にして是れ業緣に非ず。

何をか異緣にして是れ業緣なりと謂ふ。若し法の共にして是れ業たり、業を生ずる、是を異緣にして是れ業緣なりと名づく。

何をか異縁にして業縁に非ずと謂ふ。若し法の共にして業に非ず、若しは業なるも非業を生ずる、是を異縁にして業縁に非ずと名づく。
非異縁と業縁と――或は非異縁にして是れ業縁なり。或は非異縁にして業縁に非ず。
何をか非異縁にして是れ業縁なりと謂ふ。若し法の共に非ずして是れ業たり、業を生ずる、是を非異縁にして是れ業縁なりと名づく。
何をか非異縁にして業縁に非ずと謂ふ。若し法の共に非ずして業に非ず。若し〔p.675c〕業なるも非業を生ずる、是を非異縁にして業縁に非ずと名づく。
異縁にして是れ報縁なるは無きなり。
非異縁と報縁と――或は非異縁にして是れ報縁なり。或は非異縁にして報縁に非ず。
何をか非異縁にして是れ報縁なりと謂ふ。若し法の共に非ずして有報なる、是を非異縁にして是れ報縁なりと名づく。
何をか非異縁にして報縁に非ずと謂ふ。若し法の共に非ず報に非ざる是を非異縁にして報縁に非ずと名づく。
異縁と起縁と――或は異縁にして是れ起縁なり。或は異縁にして起縁に非ず。
何をか異縁にして是れ起縁なりと謂ふ。若し法の共にして是れ起なる、是を異縁にして是れ起縁なりと名づく。
何をか異縁にして起縁に非ずと謂ふ。若し法の共にして起に非ざる、是を異縁にして起縁に非ずと名づく。
非異縁と起縁と――或は非異縁にして是れ起縁なり、或は非異縁にして起縁に非ず。
何をか非異縁にして是れ起縁なりと謂ふ。若し法の共に非ずして是れ起なる、是を非異縁にして

是れ起緣なりと名づく。
何をか非異緣にして起緣に非ずと謂ふ。若し法の共に非ず起に非ざる、是を非異緣にして起緣に非ずと名づく。
相續緣にして是れ增上緣なるは無きなり。
非相續緣と增上緣と――或は非相續緣にして「是れ增上緣なり。或は非相續緣にして增上緣に非ず。
何をか非相續緣にして是れ增上緣なりと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長するも、〔乃〕至第三を生ぜずして是れ增上なる、是を非相續緣にして是れ增上緣なりと名づく。
何をか非相續緣にして增上緣に非ずと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長するも、〔乃〕至、第三を生ぜずして增上に非ざる、是を非相續緣にして增上緣に非ずと名づく。
相續緣と因緣と――[四六]相續緣にして因緣なるは無きなり。
非相續緣と[四七]是れ因緣と――或は非相續緣にして是れ因緣なり。或は非相續緣にして因緣に非ず。
何をか非相續緣にして是れ因緣なりと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長するも、〔乃〕至、第三を生ぜずして是れ因なる、是を非相續緣にして是れ因緣なりと名づく。
何をか非相續緣にして因緣に非ずと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長なるも、〔乃〕至、第三を生ぜずして因に非ざる、是を非相續緣にして因緣に非ずと名づく。
相續緣にして是れ無間緣なるは無きなり。
非相續緣と無間緣と――或は非相續緣にして是れ無間緣なり。或は非相續緣にして無間緣に非ず。

【四六】因緣。「因緣に非ざるは」の誤ならざるか。「因緣と相續緣と」の下を反省せよ。
【四七】是れ。衍字。

何をか非相續緣にして是れ無間緣なりと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增〔p.686a〕長するも、〔乃〕至、第三を生ぜずして是れ生滅する、是を非相續緣にして是れ無間緣なりと名づく。

何をか非相續緣にして無間緣に非ずと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長なるも、〔乃〕至、第三を生ぜずして、生滅し若しは未だ滅せざるに非ざる、是を非相續緣にして無間緣に非ずと名づく。

四八 相續緣と境界緣と――或は相續緣にして是れ境界緣なり。或は相續緣にして境界緣に非ず。

何をか相續緣にして是れ境界緣なりと謂ふ。若し法の增長して、〔乃〕至、第三を生じて境界有る、是を相續緣にして是れ境界緣なりと名づく。

何をか相續緣にして境界緣に非ずと謂ふ。若し法の增長して、〔乃〕至、第三を生じて境界無き、是を相續緣にして境界緣に非ずと名づく。

非相續緣と境界緣と――或は 非相續緣にして是れ 境界緣なり。或は 非相續緣にして 境界緣に非ず。

何をか非相續緣にして是れ境界緣なりと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長するも、〔乃〕、至第三を生ぜずして境界有る、是を非相續緣にして是れ境界緣なりと名づく。

何をか非相續緣にしで境界緣に非ずと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長するも、〔乃〕至、第三を生ぜずして境界無き、是を非相續緣にして境界緣に非ずと名づく。

相續緣は是れ依緣、非相續緣は是れ依緣なり。

【四八】相續緣の上。大正本等には「何謂」の二字をおくも、四本により省く。

巻の第二十六〔p.686a〕

緒分遍品〔第一〕【其の二】

相續縁と業縁――或は相續縁にして是れ業縁なり。或は相續縁にして業縁に非ず。

何をか相續縁にして是れ業縁なりと謂ふ。若し法の增長して〔乃〕至第三を生じ、是れ業にして業を生ずる、是を相續縁にして是れ業縁なりと名づく。

何をか相續縁にして業縁に非ずと謂ふ。若し法の增長して第三を生ずるに至るも業に非ず、若しは業なるも非業を生ずる、是を相續縁にして業縁に非ずと名づく。

非相續縁と業縁と――〔p. 686b〕或は非相續縁にして是れ業縁なり。或は非相續縁にして業縁に非ず。

何をか非相續縁にして是れ業縁なりと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長するも第三を生ずるに至らずして、是れ業なり、若しは業にしては業を生ずる、是を非相續縁にして是れ業縁なりと名づく。

何をか非相續縁にして業縁に非ずと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長するも、第三を生ずるに至らずして、業に非ず、若しは業なるも非業を生ずる、是を非相續縁にして業縁に非ずと名づく。

相續縁にして是れ報縁なるは無きなり。

非相續縁と報縁と――或は非相續縁にして是れ報縁なり。或は非相續縁にして報縁に非ず。

何をか非相續縁にして是れ報縁なりと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長なるも、第三を生ずるに至らずして有報なる、是を非相續縁にして是れ報縁なりと名づく。

何をか非相續緣にして報緣に非ずと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長なるも、第三を生ずるに至らずして非報なる、是を非相續緣にして報緣に非ずと名づく。

相續緣にして是れ起緣なるは無きなり。

非相續緣と起緣と――或は非相續緣にして是れ起緣なり。或は非相續緣にして起緣に非ず。

何をか非相續緣にして是れ起緣なりと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長なるも、第三を生ずるに至らずして〔是れ起なる〕、是を非相續緣にして是れ起緣なりと名づく。

何をか非相續緣にして起緣に非ずと謂ふ。若し法の增長に非ず、若しは增長するも、若し第三を生ずるに至らずして起に非ざる、是を非相續緣にして起緣に非ずと名づく。

相續緣にして是れ異緣なるは無きなり。

非相續緣と異緣と――或は非相續緣にして是れ異緣なり。或は非相續緣にして異緣に非ず。

何をか非相續緣にして是れ異緣なりと謂ふ。若し法の增長せず、若しは增長するも第三を生ずるに至らずして是れ共なる、是を非相續緣にして是れ異緣なりと名づく。

云何が非相續緣にして異緣に非ざる。若し法の增長に非ず、若しは增長なるも、第三を生ずるに至らずして共に非ざる、是を非相續緣にして異緣に非ずと名づく。

增上緣と因緣と――或は增上緣にして是れ因緣なる。或は增上緣にして因緣に非ず。

何をか增上緣にして是れ因緣なりと謂ふ。若し法の勝にして是れ因なる、是を增上緣にして是れ因緣なりと名づく。

何をか增上緣は因緣に非ずと謂ふ。若し法の勝にして因に非ざる、是を增上緣にして因緣に非ずと名づく。

非增上緣と因緣と――或は非增上緣にして是れ因緣なり。或は非增上緣にして因緣に非ず。

何をか〔p.686b〕非増上縁にして是れ因縁なりと謂ふ。若し法の勝に非ずして是れ因なる、是を非増上縁にして是れ因縁なりと名づく。

何をか非増上縁にして因縁に非ずと謂ふ。若し法の勝に非ず因に非ざる、是を非増上縁にして因縁に非ずと名づく。

増上縁にして是れ無間縁あるは無きなり。

非増上縁と無間縁と――或は非増上縁にして是れ無間縁なり。或は非増上縁にして無間縁に非ず。

何をか非増上縁にして是れ無間縁なりと謂ふ。若し法の勝に非ずして是れ生滅する、是を非増上縁にして是れ無間縁なりと名づく。

何をか非増上縁にして無間縁に非ずと謂ふ。若し法は勝に非ずして、生滅し若しは未だ滅せざるに非ざる、是を非増上縁にして無間縁に非ずと名づく。

増上縁と境界縁と――或は増上縁にして是れ境界縁なり。或は増上縁にして境界縁に非ず。

何をか増上縁にして是れ境界縁なりと謂ふ。若し法の勝にして境界有る、是を増上縁にして是れ境界縁なりと名づく。

何をか増上縁にして境界縁に非ずと謂ふ。若し法の勝にして境界無き、是を増上縁にして境界縁に非ずと名づく。

非増上縁と境界縁と――或は非増上縁にして是れ境界縁なり。或は非増上縁にして境界縁に非ず。

何をか非増上縁にして是れ境界縁なりと謂ふ。若し法の勝に非ずして境界有る、是を非増上縁にして是れ境界縁なりと名づく。

何をか非増上縁にして境界縁に非ずと謂ふ。若し法の勝に非ずして境界無き、是を非増上縁にして境界縁に非ずと名づく。

増上緣と依緣と——増上緣は是れ依緣なり。非増上緣は是れ依緣なり。

増上緣と業緣と——或は増上緣にして是れ業緣なり。或は増上緣にして業緣に非ず。

何をか増上緣にして是れ業緣なりと謂ふ。若し法の勝にして是れ業たり、業を生ずる、是を増上緣にして是れ業緣なりと名づく。

何をか増上緣にして業緣に非ずと謂ふ。若し法の勝にして業に非ず、若しは業なるも非業を生ずる、是を増上緣にして業緣に非ずと名づく。

非増上緣と業緣と——或は非増上緣にして是れ業緣なり。或は非増上緣にして業緣に非ず。

何をか非増上緣にして是れ業緣なりと謂ふ。若し法の勝に非ずして是れ業なり、業を生ずる、是を非増上緣にして是れ業緣なりと名づく。

何をか非増上緣にして業緣に非ずと謂ふ。若し法の勝に非ずして業に非ず、若しは業なるも非業を生ずる、是を非増上緣にして業緣に非ずと名づく。

[p. 687c]増上緣にして是れ報緣なるは無きなり。

非増上緣と報緣と——或は非増上緣にして是れ報緣なり。或は非増上緣にして報緣に非ず。

何をか非増上緣にして是れ報緣なりと謂ふ。若し法の勝に非ずして有報なる、是を非増上緣にして是れ報緣なりと名づく。

何をか非増上緣にして報緣に非ずと謂ふ。若し法の勝に非ずして無報なる、是を非増上緣にして報緣に非ずと名づく。

増上緣と起緣と——或は増上緣にして是れ起緣なり。或は増上緣にして起緣に非ず。

何をか増上緣にして是れ起緣なりと謂ふ。若し法の勝にして是れ起なる、是を増上緣にして是れ起緣なりと名づく。

何をか増上緣にして起緣に非ずと謂ふ。若し法の勝にして起に非ざる。是を増上緣にして起緣に非ずと名づく。

非増上緣と起緣と――或は非増上緣にして是れ起緣なり。或は非増上緣にして起緣に非ず。

何をか非増上緣にして是れ起緣なりと謂ふ。若し法の勝に非ずして是れ起なる、是を非増上緣にして是れ起緣なりと名づく。

何をか非増上緣にして起緣に非ずと謂ふ。若し法の勝に非ず起に非ざる、是を非増上緣にして起緣に非ずと名づく。

増上緣と異緣と――或は増上緣にして是れ異緣なり。或は増上緣にして異緣に非ず。

何をか増上緣にして是れ異緣なりと謂ふ。若し法の勝にして是れ共なる、是を増上緣にして是れ異緣なりと名づく。

何をか増上緣にして異緣に非ずと謂ふ。若しは法の勝にして共に非ざる、是を増上緣にして異緣に非ずと名づく。

非増上緣と異緣と――或は非増上緣にして是れ異緣なり。或は非増上緣にして異緣に非ず。

何をか非増上緣にして是れ異緣なりと謂ふ。若し法の勝に非ずして是れ共なる、是を非増上緣にして是れ異緣なりと名づく。

何をか非増上緣にして異緣に非ずと謂ふ。若し法の勝に非ず、共に非ざる、是を非増上緣にして異緣に非ずと名づく。

増上緣にして是れ相續緣なるは無きなり。

非増上緣と相續緣と――或は非増上緣にして是れ相續緣なり。或は非増上緣にして相續に非ず。

何をか非増上緣にして是れ相續緣なりと謂ふ。若し法の勝に非ずして是れ増長し、第三を生ずる

に至る、是を非增上緣にして是れ相續緣なりと名づく。

何をか非增上緣にして相續緣に非ずと謂ふ。若し法の勝に非ずして增長に非ず、若しは增上するも、[一]第三を生ずるに至らざる、是を非增上緣にして相續緣に非ずと名づく。

[二]善法・不善法・無記法・善不善法・善無記法・不善無記法・善不善無記法あり。

[p.687b] 善法を緣として善法を生じ、不善法を生じ、無記法を生じ、善不善法を生じ、善無記法を生じ、不善無記法を生じ、善不善無記法を生ず。不善法を緣として善法を生じ、不善法を生じ、無記法を生じ、善不善法を生じ、善無記法を生じ、不善無記法を生じ、善不善無記法を生ず。無記法を緣として善法を生じ、不善法を生じ、無記法を生じ、善不善法を生じ、善無記法を生じ、不善無記法を生じ、善不善無記法を生ず。善不善法を緣として善法を生じ、不善法を生じ、無記法を生じ、善不善法を生じ、善無記法を生じ、不善無記法を生じ、善不善無記法を生ず。善無記法を緣として善法を生じ、不善法を生じ、無記法を生じ、善不善法を生じ、善無記法を生じ、不善無記法を生じ、善不善無記法を生ず。不善無記法を緣として善法を生じ、不善法を生じ、無記法を生じ、善不善法を生じ、善無記法を生じ、不善無記法を生じ、善不善無記法を生ず。善不善無記法を緣として善法を生じ、不善法を生じ、無記法を生じ、善不善法を生じ、善無記法を生じ、不善無記法を生じ、善不善無記法を生ず。

[三]緒分・[四]因品第二

[五]因とは因有り、因に由りて法を生ずるが謂く因の義なり。因に四事有り。當に知るべし、一切有爲の法は因の義有り。[六]緒・集・諸因・正門なり。

[七](1)因因・(2)無間因・(3)境界因・(4)依因・(5)業因・(6)報因・(7)起因・(8)異因・(9)相續因・(10)增上

【一】第三を等。大正本には「不生至第三」とあるも、暫く、從來の不至生第三」に同せしめて讀む。

【二】善法等。還品の(四)、三性法を列ねて、その各の緣としての生を明す。

【三】緒分の上。大正本等には、舍利弗阿毘曇論の字をおくも、今は省く。下も準ず。

【四】因品。Hetu-varga.——上の十緣に對する因を明する の段である。(一)品全體の總標、(二)因因等三十三因及び三十二非因の列名、(三)その一、一の解說、(四)因法對有因法、因法對和合因法の二種の四句分別と論釋、(五)前因入共因、前因對後因、共因對前因の三種の四句及び論釋の五段組織に成る。

【五】因とは等。因品の(一)品全體の總標文。

【六】緒等。毘曇部一、初版、p. 116【一八九】註等を參照せよ。

【七】因因以下。因品の(二)三種の因各三十三づゝの別名。

因・(11)名因・(12)色因・(13)無明因・(14)行因・(15)識因・(16)名色因・(17)六入因・(18)觸因・(19)受〔p. 687〕因・(20)愛因・(21)取因・(22)有因・(23)生因・(24)老因・(25)死因・(26)憂因・(27)悲因・(28)苦因・(29)惱因・(30)衆苦因・(31)食因・(32)漏因・(33)復有因。

(1)非因因・(2)非無間因・(3)非境界因・(4)非依因・(5)非業因・(6)非報因・(7)非起因・(8)非異因・(9)非相續因・(10)非增上因・(11)非名因・(12)非色因・(13)非無明因・(14)非行因・(15)非識因・(16)非名色因・(17)非六入因・(18)非觸因・(19)非受因・(20)非愛因・(21)非取因・(22)非有因・(23)非生因・(24)非老因・(25)非死因・(26)非憂因・(27)非悲因・(28)非苦因・(29)非惱因・(30)非衆苦因・(31)非食因・(32)非漏因・(33)非復有因。

[八]何をか[九]因因と謂ふ。若し法の因なるに是の法の因なる、是を因因と名づく。

何をか[一〇]無間因と謂ふ。若し法の過去せるが現在の因なる、是を無間因と名づく。

何をか[一一]境界因と謂ふ。一切法は境界たる如事の因、若しは有因・法因なる、是を境界因と名づく。

何をか[一二]依因と謂ふ。一切法は是れ因、若しは有爲法の因たる、是を依因と名づく。

何をか[一三]業因と謂ふ。若し法の身・口・意業の因なる、是を業因と名づく。

何をか[一四]報因と謂ふ。若し法の受及び善報の因なる、是を報因と名づく。

何をか[一五]起因と謂ふ。若し法の起因なる、是を起因と名づく。

何をか[一六]異因と謂ふ。若し法の共因なる、是を異因と名づく。

何をか[一七]相續因と謂ふ。若し法の增長の因なる、是を相續因と名づく。

何をか[一八]增上因と謂ふ。若し法の勝因なる、是を增上因と名づく。

何をか[一九]名因と謂ふ。一切の憶想を[二〇]假稱して名を制する、是を名因と謂ふ。復次に憶想に由り

【八】何をか以下。因品の(三)、三十三因の個々の說明。
【九】因因。巴、Hetu-hetu.
【一〇】無間因。巴、Anantara-hetu.
【一一】境界因。巴、Ārammaṇa-hetu.
【一二】依因。巴、Nissaya-hetu.
【一三】業因。巴、Kamma-hetu.
【一四】報因。巴、Vipāka-hetu
【一五】起因。巴、Janaka-hetu (前の起緣の下に註參照のこと)。
【一六】異因。巴、Aññamañña-hetu.
【一七】相續因。巴、Āsevana-hetu.
【一八】增上因。巴、Adhipati-hetu.
【一九】名因。巴、Nāma-hetu 南傳、鉢叉那論にも類似のものを見ず。
【二〇】假稱の字、分明を缺くも、巴、Paññāpati などいふに當るものではなきか。

て假稱し、受・想・思・觸・思惟を生ずる、是を名と謂ふ。復次に觸を首とする五法＝受・想・思・觸・思惟、是を名と稱す。復次に若し法の非色の有爲なる、是を名と謂ふ。——若し是の如き法の因なる、是を名因と名づく。

云何が[二一]色因なる。若し法の色なる、是を色と謂ふ。復次に十色入、及び[二二]法入の色、是を色と謂ふ。復次に四大及び四大の造色、是を色と謂ふ。復次に色に三種有り、——[二三]可見有對・不可見有對・不可見無對なり。是を色と謂ふ、——若し是の如き法の因なる、是を色因と名づく。

云何か[二四]無明因なる。若しは癡不善根法の因なる、是を無明因と名づく。

云何が[二五]行因なる。身行・口行・意行、此を行と謂ふ。復次に[二六]福行・非福行・不動行、此を行と謂ふ。復次に五受陰、此を行と謂ふ。復次に行陰、此を行と謂ふ。——若し是の如きの法の因、是を行因と名づく。

云何が[二七]識因なる。眼識身・耳・鼻・舌・身・意識身の因、是を識因と名づく。

云何が[二八]名色因なる。若しは憶想を假稱して名を制する、此を名と謂ひ、若し法の色なる、此を色と謂ふ。復次に若し憶想に由りて假稱して名を制し、受・想・思・觸・思惟を生ずる、此を名と謂ひ、十色入及び法入の色、此を色と謂ふ。復次に觸を首とする五法、此を名と謂ひ、四大及び〔p. 688a〕四大の造色、此を色と謂ふ。復次に若し法の非色にして有爲なる、此を名と謂ひ、色に三種有り、＝可見有對・不可見有對・不可見無對なる、〔是を色と謂ふ〕。——若し是の如きを色法と名づけ、是を名色因と謂ふ。

云何が[二九]六入因なる。若し眼入・耳・鼻・舌・身・意入法の因なる、是を六入因と名づく。

云何が[三〇]觸因なる。若し眼觸・耳・鼻・舌・身・意の身觸の觸法の因なる、是を觸因と名づく。

云何が[三一]受因なる。若し苦受・樂受・不苦不樂受法の因なる、是を受因と名づく。

【二一】色因。巴、Rūpa-hetu.（又、南傳論中にもこれを見ず）。
【二二】法入の色。この論の非問分入品中のその下參照。
【二三】可見等。集異門足論卷一中等を見よ。
【二四】無明因。巴、Avijjā-hetu.（南傳論中にも缺）
【二五】行因。巴、Saṃkhāra-hetu(同下)
【二六】福行等。法蘊足論十一、—毘曇部三、p. 293 f 等を見よ。
【二七】識因。巴、Viññāṇa-hetu.（南傳論中缺）
【二八】名色因。巴、Nāmarūpa-hetu.（同上）大正本等には名を法に作るも非。今は宋元明宮の四本によりて正す。
【二九】六入因。巴、Saḷāyatana-hetu. —（南傳論部にも例なし）。
【三〇】觸因。巴、? Samphassa-hetu—(同上)。
【三一】受因。巴、Vedanā-hetu—南傳論中には不見。

云何が[三二]愛因なる。若し欲愛・有愛・斷愛法の因なる、是を愛因と名づく。
云何が[三三]取因なる。若し欲取・見取・戒取・我取法の因なる、是を取因と名づく。
云何が[三四]有因なる。若し欲有・色有・無色法の因なる、是を有因と名づく。
云何が[三五]生因なる。若し諸の衆生中に生じ正生し、入胎し、出陰し、陰入を成就するの法因、是を生因と名づく。
云何が[三六]老因なる。若し諸の衆生中にて頭白く、歯落ち、皮皺し、身體戰掉し、諸根衰熟し、行朽ち、命促るの法因、是を老因と名づく。
云何が[三七]死因なる。若し諸の衆生中にて終沒・死喪し時過ぎ、陰捨し、身形の彼に於て變異し、本の身聚を離るるの法因、是を死因と名づく。
云何か[三八]憂因なる。若し衆生の種種の苦の爲に逼られて、若しは憂し、重憂し、究竟憂し、若しは内の燋熱し憂悴する、此の法因なる、是を憂因と名づく。
云何が[三九]悲因なる。[四〇]衆苦ありて、若しは衆生の憂し、憂の爲に逼られ、憂箭の心に入り、若しは追憶・啼哭し、狂言する口歎の法因なる、是を悲因と名づく。
云何が[四一]苦因なる。若しは身の忍受せざる苦、眼觸の苦受・耳・鼻・舌・身・觸の苦受の法因なる、是を苦因と名づく。
云何が[四二]惱因なる。若しは心の忍受せざるの苦、意觸の苦受の法因なる、是を惱因と名づく。
云何が[四三]衆苦因なる。若しは身心の苦、重苦、究竟苦ありて心の惱亂するの法因なる、是を衆苦因と名づく。
云何が[四四]食因なる。四種の食有り、——揣食の麁細なる、觸食・意思食・識食なり。——是の如きの法因、是を食因と名づく。

【三二】愛因。巴、Taṇhā-hetu—同上。
【三三】取因。巴、Upādāna-hetu—同上。
【三四】有因。巴、Bhava-hetu—同上。
【三五】生因。巴、?-Jāti-hetu—同上。
【三六】老因。巴、Jarā-hetu—同上。
【三七】死因。巴、Maraṇa-hetu—同上。
【三八】憂因。巴、?-Soka-hetu—同上。
【三九】悲因。巴、?-Paridevā-hetu—同上。
【四〇】衆苦あり。四本には不記。
【四一】苦因。巴、Dukkha-hetu—同上。
【四二】惱因。巴、? Domanassa-hetu—同上。
【四三】衆苦因。巴、Upāyāsa-hetu—同上。
【四四】食因、巴、Āhāra-hetu—鉢叉那論の二十四中緣の食緣參照。

云何が[四五]漏因なる。欲漏・有漏・無明漏の法因なる、是を漏因と名づく。
云何が[四六]復有因なる。若し法の初の陰界入の法因なる、是を復有因と名づく。
[四七]云何が非因因なる。若し法の因に非ざる、是を非因因と名づく。
云何が非無間因なる。若し法の無間因に非ざる、是を非無間因と名づく。
[p. 683b]云何が非境界因なる。非境界因無く、非依因無し。
云何が非業因なる。若し法の業因に非ざる、是を非業因と名づく。
云何が非報因なる。若し法の報因に非ざる、是を非報因と名づく。
云何が非起因なる。若し法の起因に非ざる、是を非起因と名づく。
云何が非異因なる。若し法の共因に非ざる、是を非異因と名づく。
云何が非相續因なる。若し法の增長の因に非ざる、是を非相續因と名づく。
云何が非增上因なる。若し法の勝因に非ざる、是を非增上因と名づく。
云何が非名因なる。若し法の名因に非ざる、是を非名因と名づく。
云何が非色因なる。若し法の色因に非ざる、是を非色因と名づく。
云何が非無明因なる。若し法の無明因に非ざる、是を非無明因と名づく。
云何が非識因なる。若し法の識因に非ざる、是を非識因と名づく。
云何が非行因なる。若し法の行因に非ざる、是を非行因と名づく。
云何が非名色因なる。若し法の名色因に非ざる、是を非名色因と名づく。
云何が非六入因なる。若し法の六入因に非ざる、是を非六入因と名づく。
云何が非觸因なる。若し法の觸因に非ざる、是を非觸因と名づく。
云何が非受因なる。若し法の受因に非ざる、是を非受因と名づく。

【四五】漏因。巴、Āsava-hetu—南傳諸論その他、その例を見ず。
【四六】復有因。南傳諸論等にも見へず。
【四七】云何が以下。三十三の非因等を解釋す。以下、鉢叉那等にも完くその類記を見ず。

云何が非愛因なる。若し法の愛因に非ざる、是を非愛因と名づく。
云何が非取因なる。若し法の取因に非ざる、是を非取因と名づく。
云何が非有因なる。若し法の有因に非ざる、是を非有因と名づく。
云何が非生因なる。若し法の生因に非ざる、是を非生因と名づく。
云何が非老因なる。若し法の老因に非ざる、是を非老因と名づく。
云何が非死因なる。若し法の死因に非ざる、是を非死因と名づく。
云何が非憂因なる。若し法の憂因に非ざる、是を非憂因と名づく。
云何が非悲因なる。若し法の悲因に非ざる、是を非悲因と名づく。
云何が非苦因なる。若し法の苦因に非ざる、是を非苦因と名づく。
云何が非惱因なる。若し法の惱因に非ざる、是を非惱因と名づく。
云何が非衆苦因なる。若し法の衆苦因に非ざる、是を非衆苦因と名づく。
云何が非食因なる。若し法の食因に非ざる、是を非食因と名づく。
云何が非漏因なる。若し法の漏因に非ざる、是を非漏因と名づく。
云何が非復有因なる。若し法の初の陰・界・入の因に非ざる、是を非復有因と名づく。

[四八](1)因法にして有因に非ず。(2)有因法にして因に非ず。(3)因にして有因法なり。(4)因に非ず[p. 688 c]有因法に非ず。(5)因法にして和合因に非ず。(6)[四九]和合因法にして因因に非ず。(7)因にして和合法なり。(8)因に非ず亦和合因法に非ず。

(1)[五〇]云何が因法にして有因に非ざる。因法の無非因なる、復次に善根・不善根・專敬結、是を因法にして有因に非ずと名づく。

(2)云何が有因法にして因に非ざる。若しは法の非因の有爲なる、是を有因法にして因に非ずと名

【四八】因法等。因品の(四)、因法と有因法との四句分別及び、因法と和合法との四句分別の列記。
【四九】和合等。因法と和合因法との第二句で、「和合因法にして因に非ず」の誤記。
【五〇】云何等。右列名の論釋。

づく。

(3)云何が因にして有因法なる。善根・不善根・專敬結を除く、若し餘の法、是を因にして有因法と名づく。

(4)云何が因に非ず有因法に非ざる。因にして有因法なるを除く若し餘の法、是を因に非ず有因法に非ずと名づく。

(1)因法にして和合因に非ず。(2)和合因法にして因に非ず。(3)因にして和合法になり。因に非ず亦和合因法に非ずも亦是の如し。

(1)[五一]前因法にして共因に非ず。(2)共因法にして前因に非ず。(3)前因にして共因法なり(2)。亦前因に非ず、共因法に非ず。(1)前因法にして後因に非ず、(2)後因法にして前因に非ず、(3)前因にして後因法なり。(4)亦前因に非ず後因法に非ず。(1)共因法にして後因に非ず。(2)後因法にして共因に非ず。(3)共因にして後因法なり。(4)亦共因に非ず後因法に非ず。

(1)[五二]云何が前因法にして共因に非ざる。若し法の生じて、是れ前因にして共因に非ざる、是を前因法にして共因に非ずと名づく。

(2)云何が共因法にして前因に非ざる。若し法の生じて是れ共因にして前因に非ざる、是を共因法にして前因に非ずと名づく。

(3)云何が前因にして共因法なる。若し法の生じて是れ前因にして共因なる、是を前因にして共因法なりと名づく。

(4)云何が前因に非ず共因法に非ざる。前因にして共因法なるを除く若し餘の法、是を前因に非ず共因法に非ずと名づく。

(1)復次に前因法にして共因に非ずとは、若し法の初て生じて非報なる、是を前因法にして共因に

【五一】前因法等。因品の(五)、前因對共因、前因對後因、共因對後因の三種の四句分別の列記。

【五二】云何等。同上解釋。

非ずと名づく。

(2)云何が共因法にして前因に非ざる。若し法の非因の有爲なる、是を共因法にして前因に非ずと名づく。

(3)云何が前因にして共因法なる。初生の非報を除く若し餘の共法、是を前因にして共因法なりと名づく。

[p. 689a]云何が前因に非ず共因法に非ざる。前因にして共因法なるを除く若し餘の法、是を前因に非ず共因法に非ずと名づく。

(1)前因法にして後因に非ず。(2)後因法にして前因に非ず。(3)前因にして後因法なり。(4)前因に非ず後因法に非ずも亦是の如し。

(1)云何が共因法にして後因に非ざる。若し法の生じて是れ共因にして後因に非ざる、是を共因法にして後因に非ずと名づく。

云何が後因法にして共因に非ざる。後因の法を生じて卽ち是れ共因なる、復次に。初禪を得已りて第二禪を得、後因を得て初禪の清淨遊・力・尊・自在ある、第二禪を得已りて第三禪を得、後因を得て二禪の清淨遊・力・尊・自在ある、第三禪を得已りて第四禪を得、後因を得て三禪の清淨遊・力・尊・自在ある、若しは菩薩の[五三]通・明を得已りて當に彼の通・明を覺すべきの時、便ち後因生じて觀達無邊なる、神足を得て住壽し、便ち後因を生じ若しは一劫若しは劫餘に住する、是を後因法にして共因に非ずと名づく。

(3)云何が共因にして後因法なる。若しは法の生じて是れ共因にして後因なる、是を共因にして後因法なりと名づく。

(4)云何が共因に非ず後因法に非ざる。共因にして後因法なるを除く若し餘の法、是を共[因]に非

【五三】通・明。三明六通のこと。集異門足論中等に於ける各その下を見よ。

ず後因法に非ずと名づく。因・非因の解各[五四]三十二句、此の最後に[五五]二の四句なり。

緒分　名色品[五六]　第三

[五七]人有り、世に出づ。如來・無所著・等正覺と名づけ、名色を說き、名色を解射し、名色を斷ず。

[五八]云何が色と名づくる。若し憶想を假稱して名を制する、此を名と謂ふ。何をか色と謂ふ。若し法の色なる、此を色と謂ふ。復次に憶想に由りて假稱して受・想・思・觸・思惟を生ずる、此を名と謂ひ、十色入及び法入の色、此色と謂ふ。復次に觸を首とするの五法、此を名と謂ひ、四大及び四大の造、此を色と謂ふ。復次に若しは法の非色にして有爲なる、此を名と謂ひ、色には三種有り、——可見有對・不可見有對・不可見無對なる、此を色と謂ふ。——是の如きの名色、是を名色と謂ふ。

何故にか名色と說く。此の名色をして應に正說・開解・分別・顯現・假稱せむと欲し、是の故に名色と說く。

云何が名色を解射する。若し名色に於て[p. 689b]解射の方便を知見する、是を名色を解射すと名づく。

云何が名色を斷ずる。若し名色に於て欲染を調伏し、欲染を斷ずる、是を名色を斷ずと名づく。

[五九]今當に名色の正門を集むべし。

因・起・報・共・增上・依・食・長養・持微攝・所依・所須・始胎・[六〇]住住處・生・道・所向・津・液遍滿」・不調・不堅・不護・不脩」・調・堅・護・攝・脩」・不解・不證・不斷・不盡・不滅」・解・證・斷・盡・滅」・喜處・憂處・捨處」・善・不善・無記」・學・無學・非學非無學」・報・報法・非報非報法」・見斷・思惟斷・非見斷非思惟斷」・見斷因・思惟斷因・非見斷因・非思惟斷因」・欲界繫・色界繫・無色界繫・不繫」・過去・未來・現在」——此を名色の正門と謂ふ。

【五四】三十二句。實は復有因と共に各三十三句。

【五五】二の四句。實は因品全體の註中に記せる如く、(四)に二の四句、(五)に三の四句、合計五の四句を記す。

【五六】名色品。Nāmarūpavarga — 凡そ五段より成り、名色を說明す。餘り他に例のないやり方で、それだけに留意を價す。五段とは——(一)名色提示、(二)その說明、(三)名色の正門總示、(四)その論釋、(五)右正門の一、一に約し、名、名色、名名色等幾多の組合を作り列示す——

【五七】人等。この品の(一)、名色を提示す。

【五八】云何が以下。同(二)、同上の說明。

【五九】今等。この品の(三)、名色の正門總示。

【六〇】住。住の字二ある中の一、宮本には無し。

[六一]因は謂く、因緣、起は謂く、因緣、報は謂く、因緣、共は謂く、因緣、增上は謂く、依緣、依は謂く、因緣、食は謂く、依緣・長養、持微攝・所依・所須も亦是の如し。始胎は謂く、因緣、住處は謂く依緣、生は謂く、因緣、道は謂く、因緣、[六二]求向は謂く、因緣、津は謂く、依緣、液・遍滿も亦是の如し。不調は謂く、世間を知らず世間を斷ぜざるなり。不堅・不護・不攝・不脩も亦是の如し。調は謂く、世間を知り、世間を斷ずるなり。堅・護・攝・脩も亦是の如し。不解は謂く、未だ智知せず、未だ以て斷智知せざるなり。不證は謂く、未だ知見を證せざるなり。不斷は謂く、未だ繫の斷ぜざるなり。不盡は謂く未だ究竟盡せざるなり。不滅は謂く、未だ智緣滅・非智緣滅せざるなり。解は謂く、智知し斷智知せるなり。證は謂く、知見し斷ぜるなり。斷は謂く、暫く斷ずるなり。盡は謂く、究竟して盡くすなり。滅は謂く、智緣滅・非智緣滅にして盡くすなり。喜處は謂く、喜の起因及び受報なり。憂處は謂く、憂の起因及び受報なり。捨處は謂く、捨の起因及び受報なり。善は謂く、所脩の名色なり。不善は謂く、所斷の名色なり。無記は謂く、所受の名色及び非報法なり。學は謂く聖名色の無學に非ざるなり。無學は謂く、聖名色の學に非ざるなり。非學非無學は謂く、非聖の名色なり。報は謂く、受の名色及び善報なり。報法は謂く、有報の名色なり。非報非報法は謂く、名色の無記にして我分〔p. 689c〕の攝に非ざるなり。見斷は謂く、名色の不善にして思惟斷に非ざるなり。思惟斷は謂く、色の不善にして見斷に非ざるなり。非見斷非思惟斷は謂く、名色の若しは善、若しは無記なるなり。見斷因は謂く、名色の若しは見斷、若しは見斷法の[六三]報なるなり。思惟斷因は謂く、名色の若しは思惟斷若しは思惟斷法の報なるなり。非見斷非思惟斷因は謂く、名色の若しは善、若しは善法の報、若しは非報非報法なるなり。欲界繫は謂く、名色の若しは欲漏・有漏なるなり。色界繫は謂く、名色の若しは色漏・有漏なるなり。無色界繫は謂く、名色の若しは無色漏・有漏なるあり。不繫は謂く、名色の若しは聖無漏なるなり。過去は謂く、名色の已生・已滅なるなり。未來は謂く名色の未生・未出なるなり。現在は謂く、名色の生じて未だ滅せざるなり。

【六一】因等。同上(四)、右標示に對する說明。

【六二】求。宋元明の三本には作、宮本及び上の本文中には所に作る。

【六三】報。宋元明三本には善報に作る。

〔六四〕〔六五〕名名因・名色因・名名色因・色名因・色色因・色名色因・名色名因・名色色因・名色名色因・名起・名名起・色名起・名色色起・名色起・色色起・名色名色起・名名色起・色名色起にして名色あり。

名名報・名色報・名名色報・色名報・色色報・色名色報・名色名報・名色色報・名色名色報。

名共・名名共・色名共・名色色共・名色共・色色共・名色名色共・名名色共・色名色共にして名色あり。

名名増上・名色増上・名名増上・色名増上・色色増上・色名色増上・名色名増上・名色色増上・名色名色増上、名依・名名依・色名依・名色色依・名色依・色色依・名色名色依・名名色依・色名色依にして名色なり。

名名食・名色食・名名色食・色名食・色色食・色名色食・名色名食・名色色食・名色名色食にしてあり。長養・持微攝・所依・所須も亦是の如し。

名名始胎・名色始胎・名名色始胎・色名始胎・色色始胎・色名色始胎・名色名始胎・名色[p. 690a]色始胎・名色名色始胎にしてあり。住處も亦是の如し。

名生・名名生・色名生・名色色生・名色生・色色生・名色名色生・名名色生・色名色生・名色、名名道・名色道・名名色道・色名道・色色道・色名色道・名色名道・名色色道・名色名色道にしてあり。所向も亦是の如し。

名名津・名色津・名名色津・色名津・色色津・色名色津・名色名津・名色色津・名色名色津にしてあり。液遍滿も亦是の如し。

名不調・名不調・名不調・色不調・名不調・名名不調・色不調・名不調・色不調・色不調・色不調・名色不調・名色不調・名不調・名色不調・色不調・名色不調・名色不調・不堅・不護・不攝・不脩も亦是の如し。

名調・名調・名調・色調・名調・名色調・色調・名調・色調・色調・色調・名色調・名色調・名調・名色調・色調・名色調・名色調・堅護攝脩も亦是の如し。

【六四】名名因以下。この品の(五)、上來總示し、且つ論釋せる因・起・報……等の一、一に約し、名名、名色、名名色、色名、色色、色名色……といふ風の凡て可能なだけの名對色の組合せを作りて、個々、名色因……等とし、名色の生起を明すか。

【六五】名因等。或は「名因・名色明……にして名色あり」と讀むべきかも知れず。下の同樣の文も同段。

名未辨・名未辨・名未辨・色未辨・名未辨・名色未辨・色未辨・名未辨・色未辨・色未辨・色未辨・名色未辨・名色未辨・名未辨・名色未辨・色未辨・名色未辨・名色未辨・未證・未斷・未盡・未滅も亦是の如し。名辨・名辨・名辨・色辨・名辨・名色辨・色辨・名辨・色辨・色辨・色辨・名色辨・名色辨・名辨・名色辨・色辨・名色辨・名色辨・證・斷・盡・滅も亦是の如し。

喜處の名を緣として喜處の名を生じ、喜處の色を生じ、喜處の名色を生ず。喜處の色を緣として喜處の名、喜處の色、喜處の名色あり。喜處の名色を緣として喜處の名、喜處の色、喜處の名色を生ず。憂處・捨處も亦是の如し。

緒分 假結品[六六] 第四 [p.690b]

[六七] 結諸使の根、諸煩惱の行習・微氣・行結の未だ滅せず、未だ盡きされば轉、生・死・老を受けて衆苦聚集す。今當に假結の正門を集むべし、——十結・十二入・十八界・五陰・四諦・二十二根・五道・三界の法人・人法なり。

[六八] 云何が十結なる。見結・疑結・戒道結・欲染結・瞋恚結・色染結・無色染結・無明結・慢結・掉結なり。

云何が見結なる。若し見煩惱の非心相應にして心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せず、是の因緣に由るが故に見使を生ずる、是を見結と名づく。

乃至、若し掉煩惱の非心相應にして、心と共と生ぜず、共に住せず・共に滅せず、是の因緣に由るが故に掉使を生ずる、是を掉結と名づく。

復次に在所處に於て眠沒し、微細堅著し、是の因緣に由るが故に見使を生ずる、是を見結と名づく。乃至、在所處に於て眠沒し、微細堅著し、是の因緣に由るが故に掉使を生ずる、是を掉結と名づく。

【六六】 假結品。Saṃyojana-vaṛga——(一)總序の文。(二)十結の列名及び釋說、(三)十結の斷門、界繫、及び兩者交錯等の分別、(四)十結の眠沒の諸段から成り、最後の一段は殊に長く次卷初まで亙る。

【六七】 法等。第一段、總標示の文。

【六八】 云何等。第二段—十結の列名と釋。

十二入・十八界・五陰・四諦・二十二根・三界は上說の如し。

云何が[六九]五道なる。地獄・畜生・餓鬼・人天なり。

云何が地獄なる。無間と有間と、是を地獄と名づく。

云何が畜生なる。水・陸・空を行く、是を畜生と名づく。

云何が餓鬼なる。少食・無食等、是を餓鬼と名づく。

云何が人なる。四天下の人、是を人と名づく。

云何が天なる。欲色・無色の天、是を天と名づく。

云何が法なる。色法・非色法、乃至、過去法・未來法・現在法・非過去非未來非現在法、是を法と謂ふ。

云何が人なる。未生智人の欲界を未だ竟らず、色界を未だ竟らず、無色界を未だ竟らざる、已生智人の欲界を未だ竟らず、色界・無色界を未だ竟らざるなり。復次に已生智人の欲界を已に竟りて色界・無色界を未だ竟らざる、是を人と謂ふ。

是の如きの法と、是の如きの人と、是を法人・人法と謂ふ。

[七〇]十結は幾か見斷、幾か思惟斷なる。三は見斷、七は二分して或は見斷、或は思惟斷なり。

云何が三は見斷なる。見・疑・戒道、是を三見斷と名づく。

云何が七は二分して或は見斷、或は思惟斷なる。欲染・瞋恚・色染・無色染・無明・慢・掉、是を七は二分して或は[p. 690c]見斷、或は思惟斷なりと名づく。

十結は幾か[七一]見斷なる。一切は見斷なり。幾か思惟斷なる。七は思惟斷なり。見・疑・戒道を除く。

十結は幾か[七二]欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫なる。二は欲界繫、一は色界繫、一は無色界繫、一は二分して或は欲界繫、或は色界繫、五は三分して或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫なり。

何等か二は欲界繫なる。欲染・瞋恚、此の二は欲界繫なり。

【六九】五道。集異門足論十一―毘曇部二、p. 261 等參照。

【七〇】十法等。第三段、十法の諸門分別―(一)斷門分別。

【七一】見斷等。右の(一)で已に盡きる所を今一度個別的に再分別す。

【七二】欲界繫等。同上(二)界分別。

何等か一は色界繫なる。色染、此の一は色界繫なり。

何等か一は無色界繫なる。無色の染、此の一は無色界繫なり。

何等か一は二分して或は欲界繫、或は色界繫なる。戒道、此の一は二分して或は欲界繫、或は色界繫なり。

何等か五は三分して或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫なる。見・疑・無明・慢・掉、此の五は三分して或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫なり。

十結は幾か欲界繫なる。八なり。色染と無色染とを除く。

十結は幾か色界繫なる。七なり。欲染・瞋恚・無色染を除く。

十結は幾か無色界繫なる。六なり。謂く見・疑・無色染・無明・慢・掉を除く。

[七三]欲界繫の結は幾か見斷、幾か思惟斷なる。三は見斷、五は二分して或は見斷、或は思惟斷なり。

何等か三は見斷なる。見・疑・戒道、此の三は見斷なり。

何等か五は二分して或は見斷、或は思惟斷なる。欲染・瞋恚・無明・慢・掉、此の五は二分して或は見斷或は思惟斷なり。

八の欲界繫の結は幾か見斷なる。一切は見斷なり。

幾か思惟斷なる。五は思惟斷にして見・疑・戒道を除く。

七の色界繫の結は幾か見斷、幾か思惟斷なる。三は見斷、四は二分して或は見斷、或は思惟斷なり。

何等か三は見斷なる。見・疑・戒道、此の三は見斷なり。

何等か四は二分して或は見斷、或は思惟斷なる。色染・無明・慢・掉、此の四は二分して或は見斷、或は思惟斷なり。

【七三】欲等。(三)、界繫と二斷との交錯的分別。

七の色界繋の結は幾か見斷なる。一切は見斷なり。

幾か思惟斷なる。四は思惟斷にして見・疑・戒道を除く。

六の無色界繋の結は幾か見斷、幾か思惟斷なる。二は見斷、四は二分して或は見斷、或は思惟斷なり。

何等か二の見斷なる。〔p. 691a〕見・疑、此の二は見斷なり。

何等か四は二分して或は見斷、或は思惟斷なる。無色染・無明・慢・掉、此の四は二分して、或は見斷、或は思惟斷なり。

六の無色界繋の結は幾か見斷なる。一切は見斷なり。

幾か思惟斷なる。四は思惟斷なり。謂く無色染・無明・慢・掉なり。

七四 見結の眠沒は幾結中の眠沒なる。八結中にして自性及び疑を除く。〔?疑結の〕眠沒は九結中にして自性を除く。戒道結は諸結を眠沒せず。欲染結の眠沒は五結中にして見・戒道・無明・慢・掉なり。瞋恚結の眠沒は、六結中にして、見・疑・戒道・無明・慢・掉なり。色染結の眠沒は五結中にして見・戒道・無明・慢・掉なり。無色染結の眠沒は四得中にして見・無明・慢・掉なり。無明結の眠沒は九結中にして自性を除く。慢・掉結の亦眠沒も九結にして自性を除く。

幾結か眠沒する。見結中には八にして、自性及び戒道を除く。四結の眠沒は疑結中にして瞋恚・無明・慢・掉なり。八結の眠沒は戒道中にして自性及び無色染を除く。五結の眠沒は欲染結中にして見・疑・無明・慢・掉なり。五結の眠沒は、瞋恚中にして見結、疑・無明・慢・掉なり。五結の眠沒は色染結中にして見結・疑・無明・慢・掉あり。五結の眠沒は無色染結中にして見結、疑・無明・慢・掉なり。八結の眠沒は無明結中にして自性及び戒道を除く。八結の亦眠沒も、慢・掉結中にして自性及び戒道を除く。

【七四】見結以下。第四段、十結の眠沒を明す。

八結の眠没は眼入・耳入にして戒道及び無色染を除く。七結の眠没は鼻入・舌入にして戒道・色染・無色染を除く。八結の眠没は身入にして、戒道・無色染を除く。九結の眠没は意入中にして、戒道を除く。九結の眠没は色入・聲入にして無色染を除く。七結の眠没は香・味入にして、戒道・色染・無色染を除く。八結の眠没は觸入に於てし、戒道・無色染を除く。十結の眠没は法入なり。

八結の眠没は眼界・耳界にして戒道・無色染を除く。七結の眠没は鼻界・舌界にして、戒道・色染・無色染を除く。八結の眠没は身界に於てし、戒道・無色染を除く。九結の眠没は色界・聲界にして、無色染を除く。七結の眠没は香界・味界にして戒道・色染[p. 691c]・無色染を除く。八結の眠没は觸界にして、戒道・無色染を除く。八結の眠没は眼識界・耳識界にして戒道・無色染を除く。七結の眠没は意識界・舌識界にして、戒道・色染・無色染を除く。八結の眠没は身界にして、戒道・無色染を除く。九結の眠没は意界・意識界にして、戒道を除く。十結の眠没は法界なり。

十結の眠没は色陰なり。九結の眠没は受・想・行・識陰にして戒道を除く。十結の眠没は苦諦なり。五結の眠没は集諦にして見・疑・無明・慢・掉なり。滅道諦には無きなり。

八結の眠没は眼根・耳根にして、戒道・無色染を除く。七結の眠没は鼻根・舌根にして戒道・色染・無色染を除く。八結の眠没は身根にして、戒道・無色染を除く。七結の眠没は男根・女根にして戒道・無色染を除く。九結の眠没は命根にして、戒道を除く。七結の眠没は樂根にして、戒道・瞋恚・無色染を除く。六結の眠没は苦根にして、見・疑・瞋恚・無明・慢・掉なり。七結の眠没は喜根にして戒道・色染・瞋恚・無色染を除く。六結の眠没は憂根にして疑・瞋恚・無明・慢・掉なり。八結の眠没は捨根にして、戒道・瞋恚を除く。九結の眠没は意根にして戒道を除く。諸の聖根には無きなり。

地獄には或は六、或は七あり。六結の眠没は無間地獄にして、見・疑・瞋恚・無明・慢・掉なり。七結の眠没は有間地獄にして、見・疑・欲染・瞋恚・無明・慢・掉なり。八結の眠没は畜生にして色染・無色染

を除く。八結の眠沒は餓鬼にして、色染・無色染を除く。八結の眠沒は人にして色染・無色染を除く。十結の眠沒は諸天なり。八結の眠沒は欲界天にして、色染・無色染を除く。七結の眠沒は色界天にして欲染・瞋恚・無色染を除く。六結の眠沒は無色界天にして見・疑・無色染・無明・慢・掉なり。八結の眠沒は欲界にして色染・無色染を除く。七結の眠沒は色界にして、欲染・瞋恚・無色染を除く。六結の眠沒は無色界にして、見・疑・無色染・無明・慢・掉なり。

十結の眠沒は色法なり。九結の眠沒は非色法にして戒道を除く。九結の眠沒は可見法にして無色染を除く。十結の眠沒は不可[p. 691c]見法なり。九結の眠沒は有對法にして無色染を除く。十結の眠沒は無對法にして 聖法には無きなり。十結の眠沒は非聖法なり。十結の眠沒は有漏法なり。無漏法には無きなり。有染法には十にして無染法は無し。有求法には十にして無求法には無し。當取法には十にして非當取法には無し。有取法には十にして無取法には無し。有勝法には十にして無勝法には無し。九結の眠沒は受法にして戒道を除く。十結の眠沒は非受法なり。九結の眠沒は內法にして戒道を除く。十結の眠沒は外法なり。十結の眠沒は有報法なり。十結の眠沒は無報法なり。九結の眠沒は心法にして戒道を除く。十結の眠沒は非心法なり。九結の眠沒は心相應法にして戒道を除く。十結の眠沒は非心相應法なり。九結の眠沒は心數法にして戒道を除く。十結の眠沒は非心數法なり。九結の眠沒は有緣法にして戒道を除く。十結の眠沒は無緣法なり。十結の眠沒は共心法なり。十結の眠沒は不共心法なり。隨心轉法・不隨心轉法も亦是の如し。十結の眠沒は業法なり。非業法も亦是の如し。九結の眠沒は業の相應法にして戒道を除く。十結の眠沒は非業相應法なり。十結の眠沒は共業法なり。十結の眠沒は非共業法なり。隨業轉法・不隨業轉法も亦是の如し。十結の眠沒は因法なり。十結の眠沒は非因法なり。十結の眠沒は有因法なり。無因法には無きなり。有緒法・無緒法・有緣法・無緣法・有爲法・無爲法も亦是の如し。十結の眠沒は知法なり。十結の眠沒は非知法

なり。識法・非識法、解法・非解法、了法・非了法も亦是の如し。九結の眠没は斷智知法にして戒道を除く。十結の眠没は非斷智知法なり。斷法・非斷法も亦是の如し。十結の眠没は修法なり。十結の眠没は非修法なり。十結の眠没は證法なり。十結の眠没は非證法なり。十結の眠没は善法なり。九結の眠没は不善法にして戒道を除く。十結の眠没は無記法なり。學法・無學法には無きなり。十結の眠没は非學非無學法なり。十結の眠没は報法なり。十結の眠没は報法法なり。十結の眠没は非報非報法法なり。九結の眠没は見斷法にして戒道を除く。九〔p. 692a〕結の眠没は思惟斷法にして戒道を除く。十結の眠没は非見斷非思惟斷法なり。九結の眠没は見斷因法にして戒道を除く。九結の眠没は思惟斷因法にして戒道を除く。十結の眠没は非見斷非思惟斷因法なり。八結の眠没は欲界繫法にして色染・無色染を除く。七結の眠没は色界繫法にして欲染・瞋恚・無色染を除く。六結の眠没は無色界繫法にして、見・疑・無色染・無明・慢・掉なり。不繫法には無きなり。十結の眠没は過去法なり。十結の眠没は未來法なり。十結の眠没は現在法なり。非過去非未來非現在法には無きなり。

未生智人の欲界を未だ覔らず、色界を未だ覔らず、無色界を未だ覔らざるは幾結か十を眠没する。欲界は八にして色染・無色染を除く。色界は七にして欲染・瞋恚・無色染を除く。無色界は六にして、見・疑・無色染・無明・慢・掉なり。

已生智人の欲界を未だ覔らず、色界を未だ覔らず、無色界を未だ覔らざるは、幾結か七を眠没する。欲界は五にして色染・無色染を除く。色界は四にして色染・無明・慢・掉なり。無色界は四にして無色染・無明・慢・掉なり。

復、生智人有り、欲界を已に覔り、色界を未だ覔らず、無色界を未だ覔らざるは、幾結か五を眠没する。欲界は疑、色界は四にして色染・無明・慢・掉なり。無色界は四にして無色染・無明・慢・掉なり。

未生智人の欲界を未だ竟らず、色界を未だ竟らず、無色界を未だ竟らざるは、幾結か眠沒する。見結中には八なり。自性及び戒道を除く。四結の眠沒は疑中にして瞋恚・無明・慢・掉なり。八結の眠沒は戒道にして自性及び無色染を除く。五結の眠沒は欲染結にして見・疑・無明・慢・掉なり。五結の眠沒は瞋恚結中にして見・疑・無明・慢・掉なり。五結の眠沒は色染結中にして見・疑・無明・慢・掉なり。五結の眠沒は無色染結中にして見・疑・無明・慢・掉なり。八結の眠沒は無明結中にして自性及び戒道を除く。八結の亦眠沒も慢・掉結中にして自性及び戒道を除く。八結の眠沒は眼入・耳入中にして戒道及び無色染を除く。鼻入・舌入より乃至、過去未來〔p. 692b〕現在までも亦上の如く說く。非過去非未來非現在には無きなり。

生智人の欲界を未だ竟らず、色界を未だ竟らず、無色界を未だ竟らざるは、結幾か眠沒する。見結中には無なり。疑・戒道にも亦無きなり。三結の眠沒は欲染結中にして無明・慢・掉なり。三結の眠沒は瞋恚結中にして無明・慢・掉なり。三結の眠沒は色染結中にして無明・慢・掉なり。三結の眠沒は無色染結中にして無明・慢・掉なり。六結の眠沒は無明結中にして自性を除く。六結の眠沒は慢・掉結にして自性を除く。六結の眠沒は眼入・耳入にして無色染を除く。五結の眠沒は鼻入・舌入にして色染・無色染を除く。六結の眠沒は身入にして無色染を除く。七結の眠沒は意入なり。六結の眠沒は色入・聲入にして無色染を除く。五結の眠沒は香入・味入にして色染・無色染を除く。六結の眠沒は觸入にして無色染を除く。七結の眠沒は法入なり。六結の眠沒は眼界・耳界にして無色染を除く。五結の眠沒は鼻界・舌界にして色染・無色染を除く。六結の眠沒は身界にして無色染を除く。六結の眠沒は色界・聲界にして無色染を除く。五結の眠沒は香界・味界にして色染・無色染を除く。六結の眠沒は觸界にして無色染を除く。六結の眠沒は眼識界・耳識界にして無色染を除く。五結の眠沒は鼻識界・舌識界にして色染・無色染を除く。六結の眠沒は身識界にして無色染を除く。七

結の眠沒は意界・意識界・法界なり。七結の眠沒は色陰なり。受・想・行・識陰も亦是の如し。七結の眠沒は苦諦なり。三結の眠沒は集諦にして無明・慢・掉なり。滅諦・道諦には無きなり。六結の眠沒は眼根・耳根にして無色染を除く。五結の眠沒は鼻根・舌根にして色染・無色染を除く。六結の眠沒は身根にして無色染を除く。五結の眠沒は男根・女根にして色染・無色染を除く。七結の眠沒は命根なり。五結の眠沒は樂根にして瞋恚結・無色染を除く。四結の眠沒は苦根にして瞋恚・無明・慢・掉なり。五結の眠沒は喜根にして瞋・無色染を除く。四結の眠沒は憂根にして瞋恚・無明・慢・掉なり。六結の眠沒は捨根にして瞋恚を除く。七結の眠沒は意根なり。聖根には無きなり。地獄・畜生・餓鬼にも無きなり。五[p. 692c]結の眠沒は人中にして色染・無色染を除く。天上は七結に通じ、五結の眠沒は欲界天にして色染・無色染を除く。四結の眠沒は色界天にして色染・無明・慢・掉なり。四結の眠沒は無色界天にして無色染・無明・慢・掉なり。五結の眠沒は欲界にして色染・無色染を除く。四結の眠沒は色界にして色染・無明・慢・掉なり。四結の眠沒は無色界にして無色染・無明・慢・掉なり。七結の眠沒は色法なり。非色法も亦是の如し。六結の眠沒は可見法にして無色染を除く。七結の眠沒は不可見法なり。六結の眠沒は有對法にして、無色染を除く。七結の眠沒は無對法なり。聖法には無し。七結の眠沒は非聖法なり。有漏法は七にして無漏法には無し。有染法は七にして無染法には無し。有求法は七にして無求法には無し。當取法は七にして非當取法には無し。有取法は七にして無取法には無し。有勝法は七にして無勝法には無し。受法は七、非受法は七、內法は七、外法は七、有報法は七、無報法は七、心法は七、非心法は七、心相應法は七、非心相應法は七、心數法は七、非心數法は七、有緣法は七、無緣法は七、共心法は七、非共心法は七、隨心轉法は七、不隨心轉法は七、業法は七、非業法は七、業相應法は七、非業相應法は七、共業法、不共業法は七、隨業轉法は七、不隨業轉法は七、因法は七、非因法は七、有因法は七、無因法は七、有緒法は七、無緒法は七、有

緣法は七、無緣法は七、有爲法は七、無爲法は七、知法は七、非知法は七、識法は七、非識法は七、解法は七、非解法は七、了法は七、非了法は七、斷智知法は七、非斷智知法は七なり、斷法・非斷法も亦是の如く七なり。脩法は七にして不脩法は七、證法は七にして非證法は七、善法は七にして不善法は七、無記法は七にして學法・無學法・無非學非無學法は七、報法は七、報法法は七、非報法非報法法は七、見斷法・無思惟斷法は七、非見斷非思惟斷法は七、見斷因法・無思惟斷因法は七にして非見斷[p. 693a] 非思惟斷因法は七なり。欲界繫法は五にして色染・無色染を除く。色界繫法は四にして、色染・無明・慢・掉なり。無色界繫法は四にして無色染・無明・慢・掉なり。不繫法には無し。過去法は七、未來法は七、現在法は七にして非過去非未來非現在には無きなり。

生智人の欲界を已に竟り、色界を未だ竟らず、無色界を未だ竟らざるは、幾結か眠沒する。見結中には無なり。疑・戒道・欲染・瞋恚にも無きなり。三結の眠沒は色染結中にして無明・慢・掉なり。三結の眠沒は無色染にして無明・慢・掉なり。四結の眠沒は無明結にして自性を除く。四結の眠沒は慢・掉結にして自性を除く。四結の眠沒は眼入・耳入にして無色染を除く。鼻入・舌入には無し。四結の眠沒は身入にして無色染を除く。五結の眠沒は意入なり。四結の眠沒は色入・聲入にして無色染を除く。香入・味入には無し。四結の眠沒は觸入にして無色染を除く。五結の眠沒は法入なり。四結の眠沒は眼界・耳界にして無色染を除く。鼻界・舌界には無し。四結の眠沒は身界にして無色染を除く。四結の眠沒は色界・聲界にして、無色染を除く。鼻界・舌界には無し。四結の眠沒は觸界にして無色染を除く。四結の眠沒は眼識界・耳識界にして無色染を除く。鼻識界・舌識界には無し。四結の眠沒は身識界にして無色染を除く。五結の眠沒は意界・意識界・法界なり。五結の眠沒は色陰なり。受・想・行・識陰も亦是の如し。五結の眠沒は苦諦なり。三結の眠沒は集諦にして無明・慢・掉なり。滅諦・道諦には無し。四結の眠沒は眼根・耳根にして無色染を除く。鼻根・舌根には無し。四結

の眠没は身根にして無色染を除く。男根・女根には無し。五結の眠没は命根なり。四結の眠没は樂根・喜根にして無色染を除く。苦根・憂根には無し。五結の眠没は捨根・喜根なり。諸の無漏根には無し。地獄・畜生・餓鬼・人中には無し。五結の眠没は天上に通じ欲界天には無く、四結の眠没は色天上にして無色染を除く。四結の眠没は無色天上にして色染を除く。欲界には無し。四結の眠没は色界にして無色染を除く。四結の眠没は無色界にして色[p. 693b] 染を除く。四結の眠没は色法なり。無色法も亦是の如し。四結の眠没は可見法にして無色染を除く。五結の眠没は不可見法なり。四結の眠没は有對法にして無色染を除く。五結の眠没は無對法中なり。聖法には無し。非聖[七五]法・有漏法には五にして、無漏法には無し。有染法は五にして無染法には無し。有求法は五にして、無求法には無し。當取法は五にして、非當取法は無し。有取法は五にして無取法には無し。有勝法は五にして無勝法には無し。受法は五にして非受法は五、內法は五にして外法は五、有報法は五にして、無報法は五、心法は五にして非心法は五、心相應法は五にして心不相應法は五、心數心は五にして非心數法は五、有緣法は五にして無緣法は五、共心法は五にして不共心法は五、隨心轉法は五にして不隨心轉法は五、業法は五にして非業法は五、業相應法は五にして非業相應法は五、共業法は五にして非共業法は五、隨業轉法は五にして不隨業轉法は五、因法は五にして非因法は五、有因法は五にして無因法は五、有緒法は五にして無緒法は五、有爲法は五にして無爲法は五、知法は五にして非知法は無なり。識法・非識法、解法・非解法、了法・不了法も亦是の如し。斷智知法は五にして、非斷智知法は五なり、斷法・非斷法も亦是の如し。[七六]五脩法は五にして非脩法は五、證法は五にして非證法は五、善法は五にして不善法は五、無學法は五にして學法は五、非學非無學法は五、解法は五、報法法は五にして、非報非報法法は五、見斷法・無思惟斷法は五にして非見斷・非思惟斷法は五、見斷因法・無思惟斷因法は五にして、非見斷・非思惟斷因法は五なり。欲界繫法・無色界繫法は四にし

【七五】法。宋元明の三本によりて補入。

【七六】五。衍字。四本すべて缺く。

て無色染を除く。色界繫法は四にして色染を除く。不繫法には無し。過去法は五、未來法は五、現在法は五にして非過去非未來非現在法には無し。

巻の第二十七 〔p.683c〕

緒分假結品　第四【其の二】

若し人あり、見・疑・戒道結中に眠没せば、此の人は幾結か有る。十有り。若し人あり、欲染・瞋恚、結中に眠没せば、此の人は幾結か有る。或は十、或は七あり。若し人あり。色染・無色染・無明・慢・掉結中に眠没せば、此の人は幾結か有る。或は十、或は五あり。

若し見結・疑結の法中に眠没せば、此の法中には幾結か有る。或は十、或は九、或は八、或は七、或は六、或は五あり。

若し戒道結の、法中に眠没せば、此の法中には幾結か有る。或は十、或は九、或は八、或は七あり。

若し欲染結の、法中に眠没せば、此の法中には幾結かある、或は十、或は九、或は八、或は七、或は六あり。

若し瞋恚結の、法中に眠没せば、此の法中には幾結か有る。或は十、或は九、或は八、或は七、或は六、或は五あり。

若し色染・無色染結の、法中に眠没せば、此の法中には幾結か有る。或は十、或は九、或は八、或は七、或は六あり。

若し無明・慢・掉結の、法中に眠没せば、此の法中には幾結かある。或は十、或は九、或は八、或は七、或は六、或は五、或は四あり。

若し見・結疑の、人法中に眠没せば、此の人法には幾結かある。或は十、或は九、或は八、或は七、或は六、或は五あり。

若し戒道結の、人法中に眠沒せば、此の人法には幾結かある。或は十、或は九、或は八、或は七あり。

若し欲染結の、人法中に眠沒せば、此の人法には幾結かある。或は十、或は九、或は八、或は七、或は六あり。

若し瞋恚結の、人法中に眠沒せば、此の人法には幾結かある。或は十、或は九、或は八、或は七、或は六、或は五、或は四あり。

若し色染・無色染結の、人法中に眠沒せば、此の人法には幾結かある。或は十、或は九、或は八、或は七、或は六あり。

若し無明結、慢・掉結の、人法中に眠沒せば、此の人法には幾結か有る。或は十、或は九、或は八、或は七、或は六、或は五、或は四あり。

[p.694a] [一]若し欲終・非欲終・終・非終、欲生・非欲生・生・非生あり。

欲終は謂く、最後心なり。非欲終は謂く、最後心を除く。終は謂く、最後心なり。非終は謂く、此の陰に在るなり。

欲生は謂く、初心なり。非欲生は初心を除く。生は謂く此の陰に在るなり。非生は謂く、未だ此の陰に在らざるなり。

是の如きは地獄・畜生・餓鬼・人中・天上、欲界・色界・無色界なり。

若し衆生の地獄中に於て欲終せば、幾結中にか眠沒する。若し衆生の、地獄中の於て非欲終せば、幾結中にか眠沒する。若し衆生の、地獄中に於て終らば、幾結中[二]にか眠沒する。若し衆生の、地獄中に於て非終ならば、幾結中にか眠沒する。若し衆生の、地獄中に於て始めて生ぜば、幾結をか眠沒する。若し衆生の、地獄中に於て非始生ならば、幾結をか眠沒する。若し衆生の地獄中に

【一】若し以下。第五段、欲終、欲生等と結眠沒との關係を敍す。

【二】中。宋元明の三本により補入。

於て生ぜば、幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て非生ならば、幾結をか眠没する。畜生・餓鬼・人中・天上、欲界・色界・無色界も亦是の如し。

若し衆生の地獄中に於て欲終し、畜生中に始[三]生せば、幾結をか眠没する。若し衆生の地獄中に於て欲終し、畜生中に非始生ならば、幾結をか眠没する。若し衆生の地獄中に於て欲終し、畜生中に生ぜば、幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て欲終し、畜生中に非生ならば、幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て非欲終し、畜生に始生する時は幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て非欲終し、畜生中に非始生ならば、幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て非欲終し、畜生中に生ぜば、幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て非欲終し、畜生に非[四]生ならば、幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て終し、畜生中に始生ならば、幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て終し、畜生中に非始生ならば、幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て終し、畜生中に生ぜば、幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て終し、畜生中に非生ならば、幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て非終にして、畜生中に[五]始生せば、幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て非終にして、畜生中に非始生ならば、幾結をか眠没する。若し衆生の、地獄中に於て非終にして、畜生中に[六]生ならば、幾結をか眠没する。[p.694b]〔若し衆生の、地獄中に於て非終にして畜生中に非生ならば、幾結をか眠没する〕。

地獄より鬼に至り、地獄より人中に至り、地獄より天上に至るも亦是の如し。畜生より餓鬼に至り、畜生より人中に至り、畜生より天上に至り、畜生より地獄に至り、餓鬼より人中に至り。餓鬼より天上に至り。餓鬼より地獄に至り、餓鬼より畜生に至り、人中より天上に至り、人中より地獄に至り、人中より畜生に至り、人中より餓鬼に至り、天上より地獄に至り、天上より畜生に至り、天上より餓鬼に至り、天上より人中に至り、欲界より色界に至り、欲界より無色界に至り、色界よ

【三】中。同上。

【四】非生。大正本等には始非生に作るも、同前の三本に従ひ、始をとる。

【五】始生。大正本等、非始生に作るも、同上の三本によりて正す。

【六】生。大正本等、非生に作るも、同上の三本により正す。

り無色界に至り、色界より欲界に至り、無色界より欲界に至り、無色界より色界に至るも亦是の如し。

緒分[七] 行品 第五 [p.694b]

身行・口行・意行地あり。

云何が身行なる。謂く出入息、是を身行と名づく。

云何が口行なる。謂く覺・觀、是を口行と名づく。

云何が意行なる。謂く想・思、是を意行と名づく。

身行地は出入息有る身より乃し第四禪に至る、是を身行地と名づく。

云何が非身行地なる。非出入息に身より、第四禪を若しは過ぐる、是を非身行地と名づく。

云何が口行地なる。欲界の意識、若しは色界の不定、若しは初禪及び初禪の間、是を口行地と名づく。

云何が非口行地なる。五識身若しは二禪を若しは過ぐる、是を非口行地と名づく。

云何が意行地なる。二定及び一生を除く若し餘の處、是を意行地と名づく。

云何が非意行地なる。二定及び一生、是を非意行地と名づく。

身行は何の處に於てか生じて滅せざる。非出入息身より出入息身に至り、若しは第四禪により起る、此の處に於ては身行は生じて滅せず。

身行は何の處に於てか滅して生ぜざる。出入息身より非出入息身に至り、若しは第四禪に入る、此の處に於ては身行は滅して生ぜず。

身行は何の處に於てか生じ滅する、若し出入息有るの處、此の處に於ては身行は生じ、滅す。

【七】行品。? Saṃskāra-varga— 身口意の三行に關し、解說し、その地・非地を明かし、並に(一)生じて滅せざる處、(二)滅して生ぜざる處、(三)生じ滅する處、及び(四)生ぜず、滅せざる處を査定するの一段である。

身行は何の處の[八]行に於てか生ぜず、滅せざる非出入息身中に於て、若しは第四禪を若し過ぐる、是を身行の生ぜず滅せずと名づく。

口行は何の處に於てか生じて滅せざる。離五識身より意識に至り、第二禪より起る、[p.694c] 此の處に於ては口行は生じて滅せず。

口行は何の處に於てか滅して生ぜざる。離意識身より五識身に至り。若しは第二禪に入る、此の處に於ては口行は滅して生ぜず。

口行は何處に於て生・滅する。若し覺・觀有るの處、此の處に於ては口行は生・滅す。

口行は何の處に於てか生ぜず滅せざる。五識身中に於て、若しは第二禪を若し過ぐる、此の處に於ては口行は生ぜず滅せず。

意行は何の處に於てか生じて滅せざる。二定より起ち、若しは一生處に命終する、此の處に於ては意行は生じて滅せず。

意行は何の處に於てか滅して生ぜざる。若し二定及び一生處に入る、此の處に於ては意行は滅して生ぜず。

意行は何の處に於てか生・滅する。[九]若し――意行は此の處に於ては[一〇]意行は生・滅す。

意行は何の處に於てか生ぜず滅せざる。若し二定より一生處に至る。是れ、此の處に於ては意行は生ぜず滅せず。

緒分觸品[一一] 第六 [p.694c]

愚者無明ありて覆ひ、愛煩惱の和合し、是の法に由るが故に聚集して身を成ず。彼の[一二]名色あり二法を緣として觸す。今、當に假觸の正門を集すべし。――身觸・心觸・乃至、十八觸、是を觸法と

【八】の行。衍字なるべし。

【九】若しの下―の所、全文脫落。蓋し「二空及び一生を除いて若し餘の處に在る」等ともあるべき筈か。

【一〇】意行は。衍字。

【一一】觸品。? Sparśa-varga. ―大體二段から成り、初に身觸以下十八觸までの所謂解の正門を列ね、次にその個々の解釋をのべるだけである。觸の說明分類をかく多數に掲げしものも、餘に餘り類例を見ぬであらう。

【一二】名色あり、二法を緣として等。普通は「眼・色(乃至意・法)を緣として眼識(乃至意識)あり。三事和合して觸あり」と作るを例とす。蓋し今は眼乃至身及び色乃至法の大部分は是を色とし、意及び法の成りて眼識乃至意識とは名として、名色の二緣と概稱するものか。

名づく。

云何が[一三]身觸なる。若し觸の身識相應なる、是を身觸と名づく。

云何が[一四]心觸なる。若しは觸の意識相應なる。是を心觸と名づく。

復次に若し五識[一五]身相應——眼・耳・鼻・舌・身識——なる、是を身觸と名づけ、若し心・意・識の相應なる、是を心觸と名づく。

云何が[一六]名觸なる。若し觸の心觸なる、是を名觸と名づく。

云何が對觸なる。若し觸の身觸なる、是を對觸と名づく。

云何が[一七]愛觸なる。若し觸の欲染相應なる、是を愛觸と名づく。

云何が[一八]恚觸なる。若し觸の惱相應なる、是を恚觸と名づく。

云何が[一九]明觸なる。若し觸の聖智相應なる、是を明觸と名づく。

云何が[二〇]無明觸なる。若し觸の不善・非智相應なる、是を無明觸と名づく。

云何が明分觸なる。若し觸の明分にして明を生じ、能く廣大ならしむる、是を明分觸と名づく。

云何が無明分觸なる。若し觸の無明分にして無明を生じ、能く廣大ならしむる、是を無明分觸と名づく。

復次に若し觸の聖忍相應なる、是を明分觸と名づく。若し觸の非聖・煩惱相應なる、是を無明分觸と名づく。

復次に若し觸の聖[p.695a]にして智果を得る、是を明分觸と名づく。若し觸の非聖の若しは善・無記なる、是を無明分觸と名づく。

云何が[二一]聖觸なる。若し觸の無漏なる、是を聖觸と名づく。

云何が[二二]非聖觸なる。若し觸の有漏なる、是を非聖觸と名づく。

【一三】身觸。Kāyasparśa.

【一四】心觸。Cittasparśa.

【一五】身。宋元明宮の四本に從って補入。

【一六】名觸。Nāmasparśa.

【一七】愛觸。Tṛṣṇā-sparśa.

【一八】恚觸。Pratigha-sparśa.

【一九】明觸。Vidyā-sparśa.

【二〇】無明觸。Avidyāsparśa.

【二一】聖觸。Ārya-sparśa.

【二二】非聖觸。Anārya-sparśa.

云何が有[二三]漏觸なる。若し觸の有染なる、是を有漏觸と名づく。
云何が無[二四]漏觸なる。若し觸の無染なる、是を無漏觸と名づく。
云何が有染觸なる。若し觸の有求なる、是を有染觸と名づく。
云何が無染觸なる。若し觸の無求なる、是を無染觸と名づく。
云何が有求觸なる。若し觸の當取なる、是を有求觸と名づく。
云何が無求觸なる。若し觸の非當取なる、是を無求觸と名づく。
云何が當取觸なる。若し觸の有取なる、是を當取觸と名づく。
云何が非當取觸なる。若し觸の無取なる、是を非當取觸と名づく。
云何が有取觸なる。若し觸の有勝なる、是を有取觸と名づく。
云何が無取觸なる。若し觸の無勝なる、是を無取觸と名づく。
云何が有勝觸なる。若し觸の有取なる、是を有勝觸と名づく。
云何が無勝觸なる。若し觸の無取なる、是を無勝觸と名づく。
復次に若し此の觸の餘の勝妙なるが有る、是を有勝觸と名づく。若し此の觸の更に餘の勝妙なる無き、是を無勝觸と名づく。
復次、若し如來所生の觸にして、一切法に於て無礙の知見あり、乃至、自在を成就する、此の觸を除いて若し餘の觸なる、是を有勝觸と名づく。若し上に除く所の觸、是を無勝觸と名づく。
云何が受觸なる。若し觸の內なる、是を受觸と名づく。
云何が非受觸なる。若し觸の外なる、是を非受觸と名づく。
云何が內觸なる。若し觸の受なる、是を內觸と名づく。
云何が外觸なる。若し觸の非受なる、是を外觸と名づく。

〔二三〕有漏觸。Sāsrava-sparśa
〔二四〕無漏觸。Anāsrava-S.

云何が有報觸なる。若し觸の報法なる、是を有報觸と名づく。
云何が無報觸なる。若し觸の報若しは非報・非報法なる、是を無報觸と名づく。
云何が凡夫共觸なる。若し觸の非凡夫も生得、凡夫も亦生得する、是を凡夫共觸と名づく。
云何が凡夫不共觸なる。若し彼の非凡夫の生得にして、凡夫の生得すること能はざる、是を凡夫不共觸と名づく。
〔p.695b〕云何が非凡夫共觸なる。若し觸の凡夫が生得し、非凡夫も亦生得する、是を非凡夫共觸と名づく。
云何が非凡夫不共觸なる。若し觸の凡夫の生得して、非凡夫の不生不得なる、是を非凡夫不共觸と名づく。
云何が聲聞共觸なる。若し觸の非聲聞も生得し、聲聞も亦生得する、是を聲聞共觸と名づく。
云何が聲聞不共觸なる。若し觸の非聲聞は生得して、聲聞は不生不得なる、是を聲聞不共觸と名づく。
云何が非聲聞共觸なる。若し觸の聲聞も生得し、非聲聞も亦生得する、是を非聲聞共觸と名づく。
云何が非聲聞不共觸なる。若し觸の聲聞は生得して、非聲聞は不生不得なる、是を非聲聞不共觸と名づく。
云何が如電觸なる。若し觸の少少住し少時住し、電の少少住し、少時住するが如く、觸も亦是の如くなる、是を如電觸と名づく。
云何が如金剛觸なる。若し觸の無量住し、無量時住し、金剛の無量住し、無量時住するが如く、觸も亦是の如くなる、是を如金剛觸と名づく。

復次に若し觸の生じ已りて少しの煩惱分を斷じ、電の雲中より出でて少闇分を招じ、速に滅するが如く、觸も亦是の如くなる、是を如電觸と名づく。若し觸の生じ已りて、一切煩惱を斷じて餘無く、若しは麁も若しは細も斷滅せざる無く、金剛の珠石に投じて破壞・摧折して自在ならざること無きが如く、觸も亦是の如くなる、是を如金剛觸と名づく。

復次に若し觸の生じ已りて須陀洹乃至阿那含果を得る、是を如電觸と名づく。若し觸の生じ已りて阿羅漢を得る、是を如金剛觸と名づく。

復次に若し觸の生じ已りて須陀洹乃至阿那含を得、聲聞・辟支佛・阿羅漢果を得る、是を如電觸と名づく。若し觸の生じ已りて若し如來所生の觸にして、一切法に於て無礙の知見あり、乃至、自在を成就する、是を如金剛觸と名づく。

云何が不定得觸なる。若し觸の得ること不定得にして難得・難持なる、是を不定得觸と名づく。

云何が定得觸なる。若し觸の得ること決定得なり、難得ならずして易持なる、是を定得觸と名づく。

云何が有行難持觸なる。若し觸の得ること不定得にして難得・難持なり、力・勢・自在に由ること無く、所欲の如くならず、所欲に隨はず、所欲を盡さず、有行・難生・難得にして、船の水に逆ひて難行なるが如く、觸も亦是の如くなる、是を有行難持觸と名づく。

云何が無行易持觸なる。若し觸の得ること決定得なり、難得ならず、易得にして、乃至、船の水に順じて易行なるが如く、觸も亦是くの如くなる、是を無行易持觸と名づく。

云何が一分修觸なる。若し觸の生じ已りて、想の光明有るも、然も未だ色を見ざる、若しは色を見るも、想の光明有らざる、是を一分修觸と名づく。

云何が二分修觸なる。若し觸の生じ已りて想の光明あり、亦色を見る、是を二分修觸と名づく。

復次に若し觸の生じ已りて智を生ずる、然も煩惱を斷ぜざる、若しは煩惱を斷ずるも、智を生ずるに非ざる、是を一分修觸と名づけ、若し觸の生じ已りて智の生じ、能く煩惱を斷ずる、是を二分修觸と名づく。

復次に若し觸の生じ已りて盡智の生じ無生智に非ざる、是を一分修觸と名づけ、若し觸の生じ已りて盡智生じ及び無生智なる、是を二分脩觸と名づく。

云何が有欲觸なる。若し觸の有欲人のにて、欲染相應なる、是を有欲觸と名づく。

云何が無欲觸なる。若し觸の離欲人のにて、欲染の相應に非ざる、是を無欲觸と名づく。

云何が恚觸なる。若し有恚人のにて、[二五]憎相應なる、是を有恚觸と名づく。

云何が無恚觸なる、若し觸の離恚人のにて、恚相應に非ざる、是を無恚觸と名づく。

云何が有癡觸なる。若し觸の有癡人のにて、癡相應なる、是を有癡觸と名づく。

云何が無癡觸なる。若し觸の離癡人のにて、癡相應に非ざる、是を無癡觸と名づく。

云何が沒觸なる。若し觸の睡眠相應、不共內滅念相應にして、慧を未だ成就せず、善法を分別すること能はざる、是を沒觸と名づく。

云何が散觸なる。若し觸の[二六]想欲染・共欲染にして、欲染相應たり、多欲に淨を見、外の五欲中に於て[二七]彼の染著する、是を散觸と名づく。

云何が少觸なる。若し觸の不定なる、是を少觸と名づく。

云何が多觸なる。若し觸の定なる、是を多觸と名づく。

云何が不定觸なる。若し觸の不定人のにて、定相應に非ざる、是を不定觸と名づく。

云何が定觸なる。若し觸の定人のにて、定相應なる、是を定觸と名づく。

云何が不解脫觸なる。若し觸の不解脫人のにて、解脫相應に非ざる〔p.696a〕是を不解脫の觸と名

【二五】憎。宋元明の三本には恚に作る。

【二六】想。下の假心下にはこの字なし。

【二七】彼に。同上には「彼々に」と記す。

づく。

云何が解脱觸なる。若し觸の解脱人のにて、解脱相應なる、是を解脱觸と名づく。

云何が有勝觸なる。若し觸の有勝人のにて、有勝法相應なる、是を有勝觸と名づく。

云何が無勝觸なる。若し觸の無勝人のにて、無勝法相應なる、是を無勝觸と名づく。

云何が有覺觸なる。若し觸の有覺にして覺と相應し、[三八]覺と共に生じ、共に住し、共に滅する。是を有覺觸と名づく。

云何が無覺觸なる。若し觸の覺相應に非ず、覺と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を無覺觸と名づく。

云何が有觀觸なる。若し觸の觀相應にして、觀と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を有觀觸と名づく。

云何が無觀觸なる。若し觸の觀相應に非ずして、觀と共に生ぜず、觀と共に住せず、共に滅せざる、是を無觀觸と名づく。

云何が有喜觸なる。若の觸の喜相應にして喜と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を有喜觸と名づく。

云何が無喜觸なる。若し觸の喜相應に非ずして、喜に共に生ぜず、喜と共に住せず、共に滅せざる、是を無喜觸と名づく。

云何が共味觸なる。若し觸の樂受相應なる、是を共味觸と名づく。

云何が共捨觸なる。若し觸の不苦不樂受相應なる、是を共捨觸と名づく。

云何が忍相應觸なる。若し觸の忍と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を忍相應觸と名づく。

云何が非忍相應觸なる。若し觸の忍と共に生じ、共に住し、共に滅するに非ざる、是を非忍相應

[三八] 覺の字の上。大正本等には共の字あるも、宋元明の三本によりて取去る。

觸と名づく。

云何が智相應觸なる。若し觸の智と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を智相應觸と名づく。

云何が非智相應觸なる。若し觸の智と共に生じ、共に住し、共に滅するに非ざる、是を非智相應觸と名づく。

云何が初忍觸なる。若し觸の聖無漏にして堅信・堅法人の所修なる、是を初忍觸と名づく。

云何が初智觸なる。若し觸の聖無漏にして見道人の所修なる、是を初智觸と名づく。

云何が欲終觸なる。若し觸の最後識相應なる、是を欲終觸と名づく。

云何が始生觸なる。若し觸の初識相應なる、是を始生觸と名づく。

云何が善觸なる。若し觸の修なる、是を善觸と名づく。

云何が不善觸なる。若し觸の斷なる、是を不善觸と名づく。

云何が無記觸なる。若し觸の受若しは非報非報法なる、是を無記觸と名づく。

[p.696b] 云何が學觸なる。若し觸の聖にして無學に非ざる、是を學觸と名づく。

云何が無學觸なる。若し觸の聖にして學に非ざる、是を無學觸と名づく。

云何が非學非無學觸なる。若し觸の非聖なる、是を非學非無學觸と名づく。

云何が報觸なる。若し觸の受の善報なる、是を報觸と名づく。

云何が報法觸なる。若し觸の有報なる、是を報法觸と名づく。

云何が非報、非報法觸なる。若し觸の無記にして我分の攝に非ざる、是を非報、非報法觸と名づく。

云何が見斷觸なる。若し觸の不善にして思惟斷に非ざる、是を見斷觸と名づく。

云何が思惟斷觸なる。若し觸の不善にして見斷に非ざる、是を思惟斷觸と名づく。

云何が非見斷、非思惟斷觸なる。若し觸の善の無記なる、是を非見斷非思惟斷觸と名づく。
云何が見斷因觸なる。若し觸の見斷若しは見斷法の報なる、是を見斷因觸と名づく。
云何が思惟斷因觸なる。若し觸の思惟斷若しは思惟斷法の報なる、是を思惟斷因觸と名づく。
云何が非見斷因非思惟斷因觸なる。若し觸の善若しは法報若しは非報非報法なる、是を非見斷非思惟斷因觸と名づく。
云何が軟觸なる。若し觸の不善なる、是を軟觸と名づく。
云何が中觸なる。若し觸の無記なる、是を中觸と名づく。
云何が上觸なる。若し觸の善なる、是を上觸と名づく。
復次に若し觸の不善若しは無記なる、是を軟觸と名づく。
若し觸の聖・善に非ざる、是を中觸と名づく。
若し觸の聖無漏なる、是を上觸と名づく。
云何が麁觸なる。若し觸の欲界繋なる、是を麁觸と名づく。
云何が細觸なる。若し觸の色界繋若しは不繋なる、是を細觸と名づく。
云何が微觸なる。若し觸の無色界繋なる、是を微觸と名づく。
復次に若し觸の色界繋なる、是を麁觸と名づけ、若し觸の空處繋・識處繋・不用處繋、若しは不繋なる、是を細觸と名づけ、若し非想・非非想處繋なる、是を微觸と名づく。
復次に若し觸の欲界繋・色界繋・空處繋・識處繋・不用處繋なる、是を麁觸と名づけ、若し觸の不繋なる、是を細觸と名づけ、若し觸の非想・非非想處繋なる、是を微觸と名づく。
云何が樂受觸なる。若し觸の樂受相應なる、是を樂觸と名づく。
云何が苦受觸なる。若し觸の苦受相應なる、是を苦受觸と名づく。

云何が〔p.696c〕不苦不樂觸なる。若し觸の不苦不樂受相應なる、是を不苦不樂受觸と名づく。

復次に若し觸の樂報を受くる、是を樂受觸と名づく。

若し觸の苦報を受くる、是を苦受觸と名づく。

若し觸の不苦不樂報を受くる、是を不苦不樂受觸と名づく。

復次に不苦不樂受觸を除く、若し餘の觸の善・有報なる、是を樂受觸と名づけ、若し觸の不善になる、是を苦受觸と名づけ、樂受觸を除く、若し餘の觸の善・有報なる、是を不苦不樂受觸と名づく。

復次に若し觸の善・有報なる、是を樂受觸と名づけ、若し觸の不善なる、是を苦受觸と名づけ、樂受と苦・受との觸を除き、若し餘の觸なる、是を非苦非樂受觸と名づく。

云何が喜處觸なる。若し觸の始めて起り已りて喜を生ずる、是を喜處觸と名づく。

云何が憂處觸なる。若し觸の始めて起り已りて憂を生ずる、是を憂處觸と名づく。

云何が捨處觸なる。若し觸の始めて起り已りて捨を生ずる、是を捨處觸と名づく。

復次に捨處觸を除き、若し餘の觸の善・有報なる、是を喜處觸と名づけ、若し觸の不善なる、是を憂處觸と名づけ、喜處觸を除き、若し觸の餘の善・有報なる、是を捨處觸と名づく。

復次に若し觸の善・有報なる、是を喜處觸と名づけ、若し觸の不善なる、是を憂處觸と名づけ、喜處・憂處の觸を除く、若し餘の觸は、是を非喜處・非憂處觸と名づく。

云何が有覺有觀觸なる。若し觸の有覺有觀定相應なる、是を有覺有觀觸と名づく。

云何が無覺有觀觸なる。若し觸の無覺有觀定相應なる、是を無覺有觀觸と名づく。

云何が無覺無觀觸なる。若し觸の無覺無觀定相應なる、是を無覺無觀觸と名づく。

云何が空相應觸なる。若し觸の空定と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を空相應觸と名づ

く。

云何が無相相應觸なる。若し觸の、無相定と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を無相相應觸と名づく。

云何が無願相應觸なる。若し觸の、無願定と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を無願相應觸と名づく。

云何が現報觸なる。若しは觸の卽ち生じて我分の攝たり、若しは起作成就する所の卽ち生じて我分の攝たるが報を受くる、是を現報觸と名づく。

云何が生報觸なる。若しは觸の生じて我分の攝たり、若しは起作・成就する所の無間の〔p.697a〕生に報を受くる、是を生報觸と名づく。

云何が後報觸なる。若しは觸の生じて我分の攝たり、若しは起作・成就する所の第三・第四の生に報を受け、或は過ぐる、是を後報觸と名づく。

云何が與樂觸なる。若し觸の樂果ある、是を與樂觸と名づく。

云何が與苦觸なる。若し觸の、苦果ある、是を與苦觸と名づく。

云何が不與樂不與苦觸なる。與樂與苦の觸を除き、若し餘の觸なる、是を不與樂不與苦觸と名づく。

復次に若し觸の善・有報なる、是を與樂觸と名づけ、若し觸不善なる、是を與苦觸と名づけ、與樂與苦の觸を除き、若し餘の觸なる、是を非與樂・非與苦觸と名づく。

云何が樂果觸なる。若し觸の樂報ある、是を樂果觸と名づく。

云何が苦果觸なる。若し觸の苦報ある、是を苦果觸と名づく。

云何が非樂果非苦果なる。樂果・苦果の觸を除き、若し餘の觸なる、是を非樂果・非苦果觸と名づく。

復次に若し觸の善・有報なる、是を樂果觸と名づけ、若し觸の不善・有報なる、是を苦果觸と名づけ、樂果苦果の觸を除き若し餘の觸なる、是を非樂果・非苦果觸と名づく。

樂報觸・苦報觸・非樂報・非苦報觸も亦是の如し。

如何が過去觸なる。若し觸の生じ已りて滅せる、是を過去觸と名づく。

云何が未來觸なる。若し觸の未生・未起なる、是を未來觸と名づく。

云何が現在觸なる。若し觸の生じて未だ滅せざる、是を現在觸と名づく。

云何が過去境界觸なる。過去法を思惟して若し觸を生ずる、是を過去境界觸と名づく。

云何が未來境界觸なる。未來法を思惟して若し觸を生ぜる、是を未來境界觸と名づく。

云何が現在境界觸なる。現在法を思惟して若し觸を生ぜる、是を現在境界觸と名づく。

云何が非過去非未來非現在觸なる。非過去非未來非現在法を思惟して若し觸を生ぜる、是を非過去未來現在境界觸と名づく。

云何が欲界繫觸なる。若し觸の欲漏・有漏なる、是を欲界繫觸と名づく。

云何が色界繫觸なる。若し觸の色漏・有漏なる、是を色界繫觸と名づく。

云何が無色界繫觸なる。若し觸の無色漏・有漏なる、是を〔p.697b〕無色界繫觸と名づく。

云何が不繫觸なる。若し觸の聖無漏なる、是を不繫觸と名づく。

云何が共慈觸なる。若し觸の、慈俤心と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を共慈觸と名づく。

共悲觸・共喜觸・共捨觸も亦是の如し。

云何が樂根相應觸なる。樂根と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を樂根相應觸名づく。苦根・喜根・憂根・捨根相應も亦是の如し。

云何が眼觸なる。若し觸の眼識相應なる、是を眼觸と名づく。耳・鼻・舌・身、意も亦是の如し。

復次に色を緣じて眼識を生じ、三法の和合して觸を生ずる、是を眼觸と名づく。耳・鼻・舌・身・意も亦是の如し。

云何が眼識界相應觸なる。若し觸の眼識界と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を眼識界相應觸と名づく。耳・鼻・舌・識界も亦是の如し。

云何が意界相應觸なる。若し觸の意識と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を意界相應觸と名づく。意識界相應觸も亦是の如し。

云何が十八觸なる。眼觸樂受・眼觸苦受・眼觸不苦・不樂受・耳・鼻・舌・身・意も亦是の如くなる、是を十八觸と名づく。

二九 緒分假心品　第七 〔p.697b〕

三〇 心性は清淨にして、客塵の爲に染せらる。凡夫は未だ聞かざるが故に、如實の知見すること能はず。亦修心も無し。聖人は聞くが故に、如實の知見し、亦修心有り。心性は清淨にして、客塵の垢を離る。凡夫は未だ聞かざるが故に、如實の知見すること能はず。亦修心も無し。聖人は聞くが故に能く如實に知見し。亦修心有り。——今當に假心の正門を集すべし。——聖心、非聖心、乃至、六識界・七識界心なり。

(1)云何が聖心なる。若し心の無漏なる、是を聖心と名づく。

(2)云何が非聖心なる。若し心の有漏なる、是を非聖心と名づく。

(3)云何が有漏心なる。若し心の有染なる、是を有漏心と名づく。

(4)云何が無漏心なる。若し心の無染なる、是を無漏心と名づく。

(5)云何が有染心なる。若し心の有求なる、是を有染心と名づく。

【二九】假心品。? Citta-varga—大體(一)、序論たる總說、(二)種々の心、一百四十六を論釋するの二段組織に成り、殊に後者の法數は大體、前の觸品に準ず。この中に心性本淨の大衆部思想を含むこと、左註の如くなるは留意すべし。

【三〇】心性は清淨等。有名な、非論藏派の大衆部に於ける特色的教義にして、遂に發展してこれらを一焦點に、大乘佛教とまでなりたる所である。かくして、本論にこれあるは、本論不一論藏として上座部系有部系の畢竟雰圍氣內に在りながらも、大衆部のかゝる影響を受けたことの甚大なのを物語るものに外ならず、かの成實論のまた同段なると併せ、甚だ佛教史的興味に富む所と稱すべし。

(6) 云何が無染心なる。若し心の無求なる、是を無染心と名づく。

(7) [p.697c] 云何が有求心なる。若し心の當取なる、是を有求心と名づく。

(8) 云何が無求心なる。若し心の非當取なる、是を無求心と名づく。

(9) 云何が當取心なる。若し心の有取なる、是を當取心と名づく。

(10) 云何が非當取心なる。若し心の無取なる、是を非當取心と名づく。

(11) 云何が有取心なる。若し心の有勝なる、是を有取心と名づく。

(12) 云何が無取心なる。若し心の無勝なる、是を無取心と名づく。

(13) 云何が有勝心なる。若し心の有取なる、是を有勝心と名づく。

(14) 云何が無勝心なる。若し心の無取なる、是を無勝心と名づく。

復次に若し此の心より餘の心の過ぎて勝妙なる有る、是を有勝心と名づけ、若し此の心より更に餘の心の過ぎて勝妙なる無き、是を無勝心と名づく。

復次に若し如來所生の心の、一切法に於て、無礙に知見し、乃至は自在を成就する、此の心を除く、若し餘の心は是を有勝心と名づけ、若し[三]餘さるゝ無きの心、是を無勝心と名づく。

(15) 云何が受心なる。若し心の內なる、是を受心と名づく。

(16) 云何が非受心なる。若し心の外なる、是を非受心と名づく。

(17) 云何が內心なる。若し心の受なる、是を內心と名づく。

(18) 云何が外心なる。若し心の非受なる、是を外心と名づく。

(19) 云何が有報心なる。若し心の報法なる、是を有報心と名づく。

(20) 云何が無報心なる。若し心の非報非報法なる、是を無報心と名づく。

(21) 云何が凡夫共心なる。若し心の、[非]凡夫の生得にして、凡夫も亦生得する、是を凡夫共心と

【三】餘さるゝ。四本には「餘かるゝ」に作る。尙、上の觸の場合には「上に除く所の觸」とありしを反省せよ。或は今の無は上の誤傳なるやも知れず。(もし然らば原の無所餘心とあるから、「上に餘す所又は除く所の心」となる)。

名づく。

(22)云何が凡夫不共心なる。若し心の、非凡夫の生得にして、凡夫の生得すること能はざる、是を凡夫不共心と名づく。

(23)云何が非凡夫共心なる。若し心の凡夫の生得にして、非凡夫も亦生得する、是を非凡夫共心と名づく。

(24)云何が非凡夫不共心なる。若し心の凡夫の生得にして、非凡夫の不生不得なる、是を非凡夫不共心と名づく。

(25)云何が聲聞共心なる。若し心の〔非〕聲聞の生得にして、聲聞も亦生得する、是を聲聞共心と名づく。

(26)云何が聲聞不共心なる。若し心の非聲聞の生得にして、聲聞は生得せざる、是を聲聞不共心と名づく。

(27)云何が非聲聞共心なる。若し心の聲聞の生得にして、非聲聞も亦生得する、〔p.698a〕是を非聲聞共心と名づく。

(28)云何が非聲聞不共心なる。若し心の、聲聞の生得にして、非聲聞は不生不得なる、是を非聲聞不共心と名づく。

(29)云何が如電心なる。若し心の少少住し、少時住し、電の少少住し、少時住するが如くなる、是を如電心と名づく。

(30)云何が如金剛心なる。若し心の無量住し無量時住し、金剛の無量住し、無量時住するが如くなる、是を如金剛心と名づく。

復次に、若し心の生じ已りに少しの煩惱分を斷じ、電の、雲中より出でゝ、少闇分を焰じ、速に

滅するが如く、心も亦是の如くなる、是を如電心と名づけ、若し心の生じ已りて、一切の煩惱を斷じて餘無く、煩惱の若しは麁、若しは微も斷滅せざるもの無く、金剛の、珠石に投じて破壞摧折せざるもの無きが如くなる、是を如金剛心と名づく。

復次に若し心の生じ已りて須陀洹果・乃至、阿那含果を得る、是を如電心と名づけ、若し心の生じ已りて、阿羅漢果を得る、是を如金剛心と名づく。

復次に若し心の生じ已りて須陀洹果乃至阿那含果を得、聲聞・辟支佛・阿羅漢果を得る、是を如電心と名づけ、若し心の生じ已りて、若し如來所生の心にして、一切法に於て、無礙に知見し、乃至、自在を成就する、是を如金剛心と名づく。

(31)云何が不定得心なる。若し心を得ることの不定得にして、難得、難持なる、是を不定得心と名づく。

(32)云何が定得心なる。上とは相違する、是を定得心と名づく。

(33)云何が有行難持心なる。若し心を得ることの不定得にして、難得・難持なり、力・尊・自在に由ること無く、所欲の如くならず、所欲に隨はず、所欲を盡さず、有行・難生・難[三三]行にして、船の水に逆ひて難行するが如く、心も亦是の如くなる、是を有行難持心と名づく。

(34)云何が無行易持心なる。上と相違する、是を無行易持心と名づく。

(35)云何が一分修心なる。若し心の生じ已りて想の、光明有り、然も色を見ざる、若しは色を見るも想の、光明有らざる、是を一分修心と名づく。

(36)云何が二分修心なる。若し心の生じ、已りて想の、光明有り、亦色を見る、是を二分修心と名づく。

復次に若し心の生じ已りて智を生じ、然も、煩惱を斷ぜざる、〔p.698b〕若しは煩惱を斷じて智を

【三三】行。四本には得に作る。

生ぜざる、是を一分修心と名づけ、若し心の生じ已りて智の生じ、能く煩惱を斷ずる、是を二分修心と名づく。

復次に若し心の生じ已りて盡智あり、無生智に非ざる、是を一分修心と名づけ、若し心の生じ已りて、盡智生じ、及び無き智もなる、是を二分修心と名づく。

(37)云何が有欲心なる。若し心の有欲人のにて、欲染相應なる、是を有欲心と名づく。

(38)云何が無欲心なる。若し心の離欲人のにて欲染相應に非ざる、是を無欲心と名づく。

(39)云何が有恚心なる。若し心の、有恚人のにて、恚相應なる、是を有恚心と名づく。

(40)云何が無恚なる。若し心の離恚人のにて、恚相應に非ざる、是を無恚心と名づく。

(41)云何が有癡心なる。若し心の有癡人のにて癡相應なる、是を有癡心と名づく。

(42)云何が無癡心なる。若し心の離癡人のにて、癡相應に非ざる、是を無癡心と名づく。

(43)云何が沒心なる。若し心の睡眠相應、不共內滅念相應にして、慧を未だ成就せず、善法を分別すること能はざる、是を沒心と名づく。

(44)云何が散心なる。若し心の欲染共欲染欲染相應なり、多欲に淨を見、外の五欲中に於て彼に染著する、是を散心と名づく。

(45)云何が少心なる。若し心の不定なる、是を少心と名づく。

(46)云何が多心なる。若し心の定なる、是を多心と名づく。

(47)云何が不定心なる。若し心の不定人のにて、定相應に非ざる、是を不定心と名づく。

(48)云何が定心なる。若し心の定人のにて、定相應なる、是を定心と名づく。

(49)云何が不解脫心なる。若し心の不解脫人のにて、解脫相應に非ざる、是を不解脫心と名づく。

(50)云何が解脫心なる。若し心の解脫人のにて、解脫相應なる、是を解脫心と名づく。

(51) 云何が有勝心なる。若し心の有勝人のにて、有勝法相應なる、是を有勝心と名づく。

(52) 云何が無勝心なる。若し心の無勝人のにて、無勝法相應なる、是を無勝心と名づく。

(53) 云何が有覺心なる。若し心の覺相應にして、覺と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を有覺心と名づく。

(54) 云何が無覺心なる。若し心の覺相應に非ずして、覺と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を無覺心と名づく。

(55) 云何が有觀心なる。若し心の觀相應にして、觀と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を有〔p.698c〕觀心と名づく。

(56) 云何が無觀心なる。若し心の觀相應に非ずして、觀と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を無觀心と名づく。

(57) 云何か有喜心なる。若し心の喜相應にして、喜と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を有喜心と名づく。

(58) 云何が無喜心なる。若し心の喜相應に非ず、喜と共に生ぜず。共に住せず、共に滅せざる 是を無喜心と名づく。

(59) 云何が共味心なる。若し心の樂受相應なる、是を共味心と名づく。

(60) 云何が共捨心なる。若し心の不苦、不樂受相應なる、是を共捨心と名づく。

(61) 云何が忍相應心なる。若し心の忍と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を忍の相應心と名づく。

(62) 云何が非忍相應心なる。若し心の忍と共に生じ、共に住し、共に滅するに非ざる、是を非忍相應心と名づく。

(63)云何が智相應心なる。若し心の智と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を智の相應心と名づく。

(64)云何が非智相應心なる。若し心の智と共に生じ、共に住し、共に滅するに非ざる、是を非智相應心と名づく。

(65)云何が忍爲始心なる。若し心の聖無漏にして、堅信・堅法の所修なる、是を忍爲始心と名づく。

(66)云何が智爲始心なる。若し心の聖無漏にして、見道人の所修なる、是を智爲始心と爲す。

(67)云何が欲終心なる。若し最後識なる、是を欲終心と名づく。

(68)云何が始生心なる。若し心の初識なる、是を始生心と名づく。

(69)云何が善心なる。若し心の修なる、是を善心と名づく。

(70)云何が不善心なる、若し心の斷なる、是を不善心と名づく。

(71)云何が無記心なる。若しは心の受なる、若しは心の非報非報法なる、是を無記心と名づく。

(72)云何が學心なる。若し心の聖にして無學に非ざる、是を學心と名づく。

(73)云何が無學心なる。若し心の聖にして學に非ざる、是を無學心と名づく。

(74)云何が非學非無學心なる。若し心の非聖なる、是を非學・非無學心と名づく。

(75)云何が報心なる。若しは心の受なる、若しは心の善報なる、是を報心と名づく。

(76)云何が報法心なる。若しは心の有報なる、是を報法心と名づく。

(77)云何が非報・非報法心なる。若し心の無記にして、我分の攝に非ざる、是を非報・非報法心と名づく。

(78)云何が見斷心なる。若し心の不善にして、思惟斷に非ざる、是を見斷〔p.699a〕心と名づく。

(79)云何が思惟斷心なる。若し心の不善にして、見斷に非ざる、是を思惟斷心と名づく。

(80)云何が非見斷・非思惟斷心なる。若しは心の善、若しは無記なる、是を非見斷非思惟斷心と名づく。

(81)云何が見斷因心なる。若しは心の見斷、若しは見斷法の報なる、是を見斷因心と名づく。

(82)云何が思惟斷因心なる。若しは心の思惟斷なる、若しは思惟斷法の報なる、是を思惟斷因心と名づく。

(83)云何が非見斷非思惟斷因心なる。若しは心の善法の報なる、若しは非報非報法なる、是を非見斷非思惟斷因心名づく。

(84)云何が軟心なる。若し心の不善なる、是を軟心と名づく。

(85)云何が中心なる。若し心の無記なる、是を中心と名づく。

(86)云何が上心なる。若し心の善なる、是を上心と名づく。

復次に若しは心の不善、若しは無記なる、是を軟心と名づけ、若し心の非聖にして善なる、是を中心と名づけ、若し心の聖・無漏なる、是を上心と名づく。

(87)云何が麁心なる。若し心の欲界繫なる、是を麁心と名づく。

(88)云何が細心なる。若しは心の色界繫若しは不繫なる、是を細心と名づく。

(89)云何が微心なる。若しは心の無色界繫なる、是を微心と名づく。

復次に若しは心の欲界繫、若しは色界繫なる、是を麁心と名づけ、若しは心の空處繫・識處繫・不用處繫、若しは不繫なる、是を細心と名づけ、若しは心の非想非非想處繫なる、是を微心と名づく。

復次に若しは心の欲界繫、若しは色界繫、若しは空處繫・識處繫・不用處繫なる、是を麁心と名づけ、若し心の不繫なる、是を細心と名づけ、若しは心の非想非非想處繫なる、是を微心と名づく。

(90)云何が樂受心なる。若し心の樂受相應なる、是を樂受心と名づく。
(91)云何が苦受心なる。若し心の苦受相應なる、是を苦受心と名づく。
(92)云何が不苦不樂受心なる。若し心の不苦、不樂受相應なる、是を不苦不樂受心と名づく。
復次に若し心の樂報を受くる、是を樂受心と名づけ、若し心の苦報を受くる、是を苦受心と名づけ、若し心の不苦・不樂報を受くる、是を不苦・不樂受心と名づく。
復次に不苦・不樂・受心を除き、若し餘の心の善にして有報なる、是を樂受心と名づけ、若し心の不善なる、是を苦受心と名づけ、樂受心を除き、若し餘の心の善にして有報なる、〔p.690〕是を不苦・不樂・受心と名づく。
復次に若し心の善にして有報なる、是を樂受心と名づけ、若し心の不善なる、是を苦受心と名づけ、苦受・樂受の心を除き若し餘の心なる、是を非苦・非樂受心と名づく。
(93)云何が喜心處なる。若し心の始めて起りて喜を生ずる、是を喜處心と名づく。
(94)云何が憂處心なる。若し心の始めて起りて憂を生ずる、是を憂處心と名づく。
(95)云何が捨處心なる。若し心の始めて起りて捨を生ずる、是を捨處心と名づく。
復次に捨處心を除き、若し餘の心の善にして有報なる、是を喜處心と名づけ、若し心の不善なる、是を憂處心と名づけ、喜處心を除き、若し餘の心の善にして有報なる、是を捨處心と名づく。
復次に若し心の善にして有報なる、是を喜處心と名づけ、若し心の不善なる、是を憂處心と名づけ、喜處・憂處を除き、若し餘の心は、是を非喜處・非憂處心と名づく。
(96)云何が有覺有觀心なる。若し心の有覺有觀定相應なる、是を有覺有觀心と名づく。
(97)云何が無覺有觀心なる。若し心の無覺有觀定相應なる、是を無覺有觀心と名づく。
(98)云何が無覺無觀心なる。若し心の無覺無觀定相應なる、是を無覺無觀心と名づく。

(99)云何が空相應心なる。若し心の空定と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を空相應心と名づく。

(100)云何が無相相應心なる。若し心の無相定と共に生じ、共に住し共に滅する、是を無相相應心と名づく。

(101)云何が無願相應心なる。若し心の無願定と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を無願相應心と名づく。

(102)云何が現報心なる。若しは心の卽ち生じて我分の攝たり、若しは心の起作成就の卽ち生じて、我分の攝なるに、此の起作する所の報を受くる、是を現報心と名づく。

(103)云何が生報心なる。若しは心の報を生じて我分の攝たり若しは起作成就する所の、無間の生に報を受くる、是を生報心と名づく。

(104)云何が後報心なる。若しは心の生じて我分の攝たり、若しは起作成就する所の、第一生乃至第四生に報を受け、或は過ぐる、是を後報心と名づく。

(105)云何が與樂心なる。若し心の樂果ある、是を與樂心と名づく。

(106)云何が與苦心なる。若し心の苦果ある、是を與苦心と名づく。

(107)云何が不與樂不與苦心なる。與樂與苦の心を除く、若し餘の心なる、是を不與〔p.699c〕苦不與樂心と名づく。

復次に若し心の善・有報なる、是を與樂心と名づけ、若し心の不善・有報なる、是を與苦心と名づけ、與苦・與樂を除く、若し餘の心なる是を不與苦不與樂心と名づく。

(108)云何が樂果心なる。若し心の樂報ある、是を樂果心と名づく。

(109)云何が苦果心なる。若し心の苦報ある、是を苦果心と名づく。

(110)云何が非樂果非苦果心なる。苦果・樂果の心を除く、若し餘の心なる、是を非樂果非苦果心と名づく。

復次に、若し心の善にして有報なる、是を樂果心と名づけ、若し心の不善にして有報なる、是を苦果心と名づけ、樂果・苦果の心を除き、若し餘の心なる、是を非樂果非苦果心と名づく。(111)樂報心、(112)苦報心、(113)非樂非苦報心も亦是の如し。

(114)云何が過去心なる。若し心の生じ已りて滅せる、是を過去心と名づく。

(115)云何が未來心なる。若し心の未生・未起なる、是を未來心と名づく。

(116)云何が現在心なる。若し心の生じて未だ滅せざる、是を現在心と名づく。

(117)云何が過去境界心なる。若し過去法を思惟して若し心を生ずる、是を過去境界心と名づく。

(118)云何が未來境界心なる。未來法を思惟して若し心を生ずる、是を未來境界心と名づく。

(119)云何が現在境界心なる。現在法を思惟して若し心を生ずる、是を現在境界心と名づく。

(120) 云何が非過去非未來非現在境界心なる。非過 去非未 來非現在法を 思惟して 若し心を 生ずる。

是を非過去非未來非現在境界心と名づく。

(121)云何が欲界繫心なる。若し心の欲漏・有漏なる、是を欲界繫心と名づく。

(122)云何が色界繫心なる。若し心の色漏・有漏なる、是を色界繫心と名づく。

(123)云何が無色界繫心なる。若し心の無色漏・有漏なる、是を無色界繫心と名づく。

(124)云何が不繫心なる。若し心の聖・無漏なる、是を不繫心と名づく。

(125)云何が共慈心なる。若し心の慈解心と共に生じ、共に住し、共に 滅する、是を共慈心と名づく。

(126)共悲心、(127)共喜心、(128)共捨心も亦是の如し。

(129)云何が樂根相應心なる。若し心の樂根と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を樂根相應心と名づく。(130)—(133)苦根・喜根・憂根・捨根相應心〔p.700a〕も亦是の如し。

(134)—(139)云何が六識身なる。眼識身乃至、意識身なり。

云何が眼識身なる。眼に緣り、色に緣り、明に緣り、思惟に緣り——此の四緣の和合するを以て、識の已生・今生・當生・不定なる、是を眼識身と名づく。耳・鼻・舌・身・意識身も亦是の如し。是を六識身と名づく。

(140)—(146)云何が七識界なる。眼識界、乃至、意識界なり。

云何が眼識界なる。若し識の、眼根が色境界に[三三]主として、已生・今生・當生・不定なる、是を眼識界と名づく。耳・鼻・舌・身・意識界も亦是の如し。

云何が意界なる。意の法を[三四]知り、法を思惟して、若し初心の已生・今生・當生・不定なる、是を意界と名づく。

云何が意識界なる。彼の境界を離れず若し餘の心の彼に似て、已生・今生・當生・不定なる、是を意識界と名づく。

[三五]緒分[三六]　十不善業道品　第八〔p.700a〕

[三七]問うて曰く、我が不善業道なる。答へて曰く、十——殺生、乃至、邪見なり。

[三八]云何が殺生なる。若し人の悪心を以て殺生し、慈愍有ること無く、専ら殺害に在る、是を殺生と名づく。

云何が[三九]盗竊なる。若し人の、聚落中及び山野の間に於て、他の財物を盗む、是を盗竊と名づく。

【三三】主として。大正本等には生に作るも、已に數註の如く、他本には概ねかゝる場合、主に作るをもつて今もこれに倣らふ。

【三四】知り。大正本等には「生じ」に作る。間分・界品の同準下の文に照らし、暫く同前に改め讀む。

【三五】緒分の上。例により大正本等、舎利弗阿毘曇論の字あるも、上來に準じすべて省く。

【三六】十不善業道品。? Daśa-akuśala-karmapatha-varga—十不善業に關してその列名、別稱及びその因と報とを明すの一段である。

【三七】問ふ以下。第一段、十不善業を列ぬ。

【三八】云何等。第二段同上を別稱す。

【三九】殺生。Prāṇātipāta.

【四〇】盗竊。Adattādāna.

云何が[四一]邪婬なる。若し女人の父母の爲に護られ、兄弟・姉妹に護られ、自ら護り、法に護られ、姓[四二]に護られ、親里及び諸の知識、乃至[四三]花鬘の護を受くる。若し此等を犯す、是を邪婬と名づく。

云何が[四四]妄語なる。若し人の知らざるを知ると言ひ、知るを知らずと言ひ、見ざるを見ると言ひ、見るを見ずと言ひ、或は己身の爲め、或は他人の爲め、或は財物の爲の故に妄語を作す、是を妄語と名づく。

云何が[四五]兩舌なる。若し人の、此に在りて聞いて彼に至りて語る、此の人を壞せむと欲するが故に。彼に在りて聞いて此に至りて語る、彼の人を壞せむと欲するが故に。未だ破せざる者は[四六]破せしめ、巳に破せる者は盡く散ぜしめむと欲し、他を別離せしめむことを樂ふ。是を兩舌と名づく。

云何が[四七]惡口なる。若し人の言を出すに、麁獷・苦切にして、他人の聞き已りて喜ばず悅ばざる、是を惡口と名づく。

云何が[四八]綺語なる。若し人の、非時の[四九]言・無義の語・非法の語・非調伏の語・不寂靜の語を出す、是を綺語と名づく。

云何が[五〇]貪欲なる。若し人の、他の村邑、他の財物に於て、悕望心を生じ、他が物をして己の有と作さむと欲する、是を貪欲と名づく。

云何が[五一]瞋恚なる。若し人の、瞋恚して、前の衆生をして〔p.700b〕繫閉・傷害を得しめ、種々の苦の加はることを爲さむと欲する、是を瞋恚と名づく。

云何が[五二]邪見なる。若し人の、邪見にして、施無く、祠祀無く、善惡の業・報無く、此世・他世無く、父母無く、天無く、化生の衆生無く、沙門・婆羅門無しと言ふ、是を邪見と名づく。

[五三]殺生は何の因を以てし、殺生が誰が因と爲す。殺生は貪因を以てし、瞋因を以てし、癡因を以てし、心・心數法因を以てす。殺生は是れ地獄・畜生・餓鬼の因なり。是れ鬼神・人中の貧賤の因なり。

【四一】邪婬。Kāmamithyācāra.
【四二】姓。宋元明宮の四本には王に作り、普通經文等―例へば巴、M. 114 (3, p. 54)等には Sassāmikā (having a master, belonging to Somebody)等と記する。
【四三】華鬘の護を受くる。巴、Mālāguḷa Parikkhittā.
【四四】妄語。Mṛṣāvāda.
【四五】兩舌。Paiśunya.
【四六】破せしめ(原、令破)。宋元宮の三本には「今破」に作る。
【四七】惡口。Pāruṣya.
【四八】綺語。Saṃbhinnapralāpa.
【四九】言。宋元明の三本には語に作る。
【五〇】貪欲。Abhidhyāya.
【五一】瞋恚。Vyāpāda.
【五二】邪見。Mithyādṛṣṭi.
【五三】殺生は以下。第三段、十不善、の因及び報果を明かす。

若し餘の報あり、人中に生むれば、短壽なり。

竊盜は何の因を以てし、竊盜は誰が因と爲す。竊盜は貪因を以てし、乃至、心・心數法因を以てす。盜竊は是れ地獄・畜生・餓鬼の因なり。是れ鬼神・人中の貪財の因なり。若し餘の報ありて、人中に生ぜば、財物消耗す。

邪婬は何の因を以てし、邪婬は誰が因と爲す。邪因は貪因を以てし、乃至、心・心教法因を以てす。邪婬は是れ地獄・畜生・餓鬼の因なり。是れ鬼神・人中の貧賤の因なり。若し餘の報ありて、人中に生ぜば諍競す。

妄語は何の因を以てし、妄語は誰が因と爲す。妄語は貪因を以てし、乃至、心・心數法因を以てす。妄語は是れ地獄・畜生・餓鬼の因なり。是れ鬼神・人中の貧賤の因なり。若し餘の報ありて人中に生ぜば、常に誹謗を被る。

兩舌は何の因を以てし、[五四]兩舌は誰が因と爲す。兩舌は貪因を以てし、乃至、心・心數法因を以てす。兩舌は誰が因と爲す。是れ地獄・畜生・餓鬼の因なり。是れ鬼神・人中の貧賤の因なり。若し餘の報あり、人中に生ぜば、眷屬・親厚の、想憎嫉し破壞す。

惡口は何の因を以てし、惡口は誰が因と爲す。惡口は貪因を以てし。乃至、心・心數法因を以てす。惡口は誰が因と爲す。惡口は是れ地獄・畜生・餓鬼の因なり。是れ鬼神・人中の貧賤の因なり。若し餘の報あり。人中に生ぜば、不適意の聲を聞く。

綺語は何の因を以てし、綺語は誰が因と爲す。綺語は貪因を以てし。乃至、心、心教法因を以てす。綺語は誰が因と爲す。是れ地獄・畜生・餓鬼の因なり。是れ鬼神・人中の貧賤の因なり。若し餘の報あり、人中に生ぜば、言を貴重せられず。

貪欲は何の因を以てし。貪欲は誰が因と爲す、貪欲は結因を以てし、使因を以てし、心・心數法因

【五四】兩舌等。この一問、宋元明宮の四本には不記（下文中に別記するが故に）。

を以てす。貪欲は誰が因と爲す。是れ地獄・畜生・餓鬼の因なり。是れ鬼神・人中の貧賤の因なり。若し餘の報あり〔p.700c〕人中に生ぜば諸の緣事多し。

瞋恚は何の因を以てし、瞋恚は誰が因と爲す。瞋恚は結因を以てし、使因を以てし、心・心數法因を以てす、瞋恚は誰が因と爲す。是れ地獄・畜生・餓鬼の因なり。是れ鬼神・人中の貧賤の因なり。若し餘の報あり、人中に生ぜば、多く怨憎有り。

邪見は何の因を以てし、邪見は誰が因と爲す。邪見は結因を以てし、使因を以てし、心・心數法因を以てす。邪見は誰が因と爲す。是れ地獄・畜生・餓鬼の因なり。是れ鬼神・人中の貧賤の因なり。若し餘の報あり、人中に生ぜば、邪を以て吉と爲す。

緒分[五五] 十善業道品[五六] 第九〔p.700c〕

問うて曰く、幾か善業道なる。答へて曰く十なり。何等か十なる。不殺生、乃至、正見なり。

云何が不殺生なる。若し人の、殺生を離れ、刀杖を棄捨し、慚愧して一切衆生を慈悲・哀愍する、是を不殺生と名づく。

云何が不盜竊なる。若し人の、竊盜を離れ、他が物を盜まざる、是を不盜竊と名づく。

云何が不邪婬なる。若し人の、邪婬を離れ、他が所護の女を終に婬犯せざる、是を不邪婬と名づく。

云何が不妄語なる。若し人の、妄語を離れ、知らざるを知らずと言ひ、知るを知ると言ひ、見ざるを見ずと言ひ、見るを見ると言ひ、[五七]己身の爲他人の爲財物の爲に而も妄語を作さゞる、是を不妄語と名づく。

云何が不兩舌なる。若し人の、兩舌を離れ、此に在りて聞いて彼に至りて說かず、此を壞するこ

【五五】緒分の上。上の同章下の註を見よ。

【五六】十善業道品。? Daśa-Kuśala-Karmapatha-varga. 上の不善の下に準知すべし。

【五七】己身の爲等。原漢典のまゝにすれば「己身の爲にせず、他人の爲にせず、財物の爲に而も妄語を作さず」とすべきなれど、これは梵典の直譯形なれば、今暫く改め讀む。

とを欲せざればなり。彼に在りて聞いて此に至りて說かず、彼を壞することを欲せざればなり。若し破壞せる者は和合せしめむと欲し、已に和合せる者は歡喜を增し、共に相ひ娛樂せしめむと欲する、是を不兩舌と名づく。

云何が不惡口なる。若し人の、惡口を離れ、麁獷の言を離れ、語言の、柔軟にして衆人の愛喜する、是を不惡口と名づく。

云何が不綺語なる。若し人の應時の語・眞實の語・有義の語・調伏の語・寂靜の語を時に順じて善語する、是を不綺語と名づく。

云何が無貪なる。若し人の貪を離れ、他の村邑・財物を、是をして我が有たらしめむと悕望せざる、是を無貪と名づく。

云何が無瞋なる。若し人の、瞋恚を離れ、心の、此の衆生をして傷害・繫閉せられ、種々の苦を受けしめざることを欲せざる、是を無瞋と名づく。

云何が正見なる。若し人の、正見ありて、施有り、祠祀有り、乃至、世に沙門婆羅門の正見・正趣・にして、今世・後世を證知する者有るを信ずる。是を正見と名づく。

[p.701c] 不殺生は何の因を以てし、不殺生は誰が因と爲す。不殺生は無貪因を以てし、無恚因を以てし、無癡因を以てし、心・心數法因を以てす。不殺生は誰が因と爲す。是れ天上・人中の受樂の因なり。若し餘の報あり、人中に生ぜば、長壽なり。

不竊盜は何の因を以てし、不竊盜は誰が因と爲す。不竊盜は無貪因を以てし、乃至、心・心敎法因を以てす。不竊盜は是れ天上・人中の受樂の因なり。若し餘の報あり、人中に生ぜば、財物・消耗せず。

不邪婬は何の因を以てし、不邪婬は誰が因と爲す。不邪婬は無貪因を以てし、乃至、心・心數法因

を以てす。不邪婬は是れ天上・人中の受樂の因なり。若し餘の報あり、人中に生ぜば、諍競せず。

不妄語は何の因を以てし、不妄語は誰が因と爲す。不妄語は無貪因を以てし、乃至、心・心數法因を以てす。不妄語は是れ天上・人中の受樂の因なり。若し餘の報あり、人中に生ぜば誹謗を蒙らず。

不兩舌は何の因を以てし、不兩舌は誰が因と爲す。不兩舌は無貪因を以てし、乃至、心・心數法因を以てす。不兩舌は是れ天上・人中の受樂の因なり。若し餘の報あり、人中に生ぜば、眷屬・親厚は相ひ憎嫉〔せず〕[五八]破壞せず。

不惡口は何の因を以てし、不惡口は誰が因と爲す。不惡口は無貪因を以てし、乃至、心・心數法因を以てす。不惡口は是れ天上・人中の受樂の因なり。若し餘の報あり、人中に生ぜば、適意の聲を聞く。

不綺語は何の因を以てし、不綺語は誰が因と爲る。不綺語は無貪因を以てし、乃至、心・心數法因を以てす。不綺語は是れ天上・人中の受樂の因なり。若し餘の報あり、人中に生ぜば、言、貴重せらる。

無貪は何の因を以てし、無貪は誰が因と爲す。無貪は專敬因を以てし、專敬は善根因を以てし、心・心數法因を以てす。無貪は是れ天上・人中の受樂の因なり。若し餘の報あり、人中に生ずるも、諸の緣事無し。

無恚は何の因を以てし、無恚は誰が因と爲す。無恚は專敬因を以てし、乃至、心・心數法因を以てす。無恚は是れ天上・人中の受樂の因なり。若し餘の報あり、人中に生ずるも、多くの怨憎無し。

正見は何の因を以てし、正見は誰が因と爲す。正見は專敬因を以てし、乃至、心・心數法因を以てす。正見は是れ天上・人中の受樂の因なり。若しは餘の報あり、人中に生ずるも邪を以て吉と爲さず。

【五八】〔せず〕。原漢文には「不相憎嫉破壞」とあり、不の字が一にして兩方にかかり得るも、和文ではかく都合よく行かぬ故、かりに今の如く作る。

卷の第二十八 [p. 701b]

緒分定品[一]　第十【其の一】

(1)五支定・(2)五智定・(3)[二]共念出息入息定・(4)共不淨想定・(5)入火定・(6)共證知神足定・(7)共證知天耳定・(8)共證知他心定・(9)共證知宿命定・(10)[三]共明想定・(11)無間定・(12)根定・(13)力定・(14)正覺定・(15)正定・(16)邪定・(17)聖定・(18)非聖定・(19)有漏定・(20)無漏定・(21)有染定・(22)無染定・(23)有求定・(24)無求定・(25)當取定・(26)非當取定・(27)有取定・(28)無取定・(29)有勝定・(30)無勝定・(31)受定・(32)非受定・(33)內定・(34)外定・(35)有報定・(36)無報定・(37)凡夫共定・(38)凡夫不共定・(39)非凡夫共定・(40)非凡夫不共定・(41)聲聞共定・(42)聲聞不共定・(43)非聲聞共定・(44)非聲聞不共定・(45)如電定・(46)如金剛定・(47)不定得定・(48)定得定・(49)有行難持定・(50)無行易持定・(51)一分修定・(52)二分修定・(53)有想定・(54)無想定・(55)如事定・(56)憶想定・(57)離色想定・(58)不離色想定・(59)無勝入定・(60)遍入定・(61)有覺定・(62)無覺定・(63)有觀定・(64)無觀定・(65)有喜定・(66)無喜定・(67)共味定・(68)共捨定・(69)忍相應定・(70)非忍相應定・(71)智相應定・(72)非智相應定・(73)忍僞始定・(74)智僞始定・(75)欲終定・(76)始生定・(77)善定・(78)不善定・(79)無記定・(80)學定・(81)無學定・(82)非學非無學定・(88)報定・(84)報法定・(85)非報非報法定・(86)見斷定・(87)思惟斷定・(87)非見斷非思惟斷定・(89)見斷因定・(90)思惟斷因定・(91)非見斷非思惟斷因定・(92)下定・(93)中定・(94)上定・(95)麁定・(96)細定・(97)微定・(98)有覺有觀定・(99)無覺有[p. 701c]觀定・(100)無覺無觀定・(101)空定・(102)無相定・(103)無願定・(104)三願得定・(105)非三願得定・(106)內身觀內身定・(107)外身觀外身定・(108)內外身觀內外身定・(109)內受觀內受定・(110)外受觀外受定・(111)內外受觀內外受定・(112)內心觀內心定・(113)外心觀外心定・(114)內外心觀內外心定・(115)內法觀內

【一】定品。? Samādhi-varga. 一全體で二百七十種程の定を、(一)論母、(二)論種の形で紹介し、三卷に跨る。中には前說のものと隨分重複するものも少くはない。

【二】共念出息入息定の途中より。第二十九卷。

【三】共明想定。以下卷第三〇。

法定•(116)外法觀外法定•(117)內外法觀內外法定•(118)內境界定•(119)外境界定•(120)內外境界定•(121)內定境界定•(122)外定境界定•(123)衆生境界定•(124)色境界定•(125)無色境界定•(126)衆生境界定•(127)有爲境界定•(128)無爲境界定•(129)法境界定•(130)無境界定•(131)衆生境界定•(132)少定•(133)中定•(134)無量定•(135)少境界定•(136)中境界定•(137)無量境界定•(138)少定少境界•(139)少定中境界•(140)少定無量境界•(141)中定少境界•(142)中定中境界•(143)中定無量境界•(144)無量定少境界•(145)無量定中境界•(146)無量定無量境界•(147)少住定•(148)中住定•(149)無量住定•(150)少定少住•(151)少定中住•(152)少定無量住•(153)中定少住•(154)中定中住•(155)中定無量住•(156)無量定少住•(157)無量定中住•(158)無量定無量住•(189)過去定•(160)未來定•(161)現在定•(162)過去境界定•(163)未來境界定•(164)現在境界定•(165)非過去非未來非現在境界定•(166)欲界繫定•(167)色界繫定•(168)無色界繫定•(169)不繫定•(180)作定非離定•(181)非作作離定•(182)亦非作離定•(183)取定非出出定•(184)非取取出定•(185)亦非取非出定•(186)有染定•(187)非離染離染定•(188)非有染有染離染定•(189)亦非有染非離染定•(190)有枙定•(191)非離枙離枙定•(191)非有枙有枙離枙定•(192)亦非有枙非離枙定•(193)智果定非斷果•(194)斷果定非智果•(195)智果斷果定•(196)亦非智果非斷果定•(197)智果定非得果•(198)得果定非智果•(199)智果得果定•(200)亦非智果非得果定•(201)盡定非覺[p. 702a](202)覺定非盡•(203)盡覺定•(204)亦非盡非覺定•(205)射定非解•(206)解定非射•(207)射解定•(208)亦非射非解定•(209)退分定•(210)住分定•(211)增長分定•(212)射分定•(213)退分定非住分•(214)住分定非退分•(215)退分住分定•(216)亦非退分非住分定•(217)退分定非增長分•(218)增長分上非退分•(219)增長分定•(220)亦非退分非增長分定•(221)退分定非射分•(222)射分定非退分•(223)射分定•(224)亦非退分射分定•(225)住分定非增長分•(226)增長分定非住分•(227)住分增長分定•(228)亦非住分非增長分定•(229)住分定非射分•(230)射分定非住

分・(231)住分射分定・(232)亦非住分非射分定・(233)增長分定非射分・(234)射分定非增長分・(235)增長分射分定・(236)亦非增長分非射分定・(237)四念處・(238)四正斷・(239)四神足・(240)四禪・(241)四無量・(242)四無色定・(243)四向道・(244)四果・(245)四修定・(246)四斷・(247)五根・(248)五力・(249)五解脫入・(250)五出界・(251)五觀定・(252)五生解脫法・(253)六念・(254)六定・(255)六出界・(256)六明分法・(257)六悅根法・(258)六無喜正覺・(259)七覺・(260)七想・(261)七定所須・(262)八聖道・(263)八解脫・(264)八勝入・(265)九滅・(266)九次第滅定・(267)九想・(268)十正法・(269)十遍入・(270)十一解脫入。

(1)云何が[四]五支定なる。[五]佛の諸比丘に告ぐるが如し、「諦聽せよ、諦聽せよ。善く之を思念すべし。吾、當に汝が爲に聖五支定を說かむ」と。諸の比丘の言く、「唯然(ゆゐねん)。教を受くべし。云何が[六]聖五支正定修することを得む」と。(一)如し[七]比丘の欲の惡・不善を離れ、賢有り、觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ずるに、[八]此の身に離生の喜樂の[九]津・液・遍・滿し、此の身に盡く離生の喜樂の津液遍滿して減少有ること無し。善澡浴師、若しは善く澡浴師の弟子の細澡豆を以て器中に盛著し、水を以て之に灑ぎて調適に摶を作るに、此の摶の津・液・遍・滿して乾ならず、濕ならず、內外の和調なるが如く、是の如く、比丘も身に離生の喜樂の津・液・遍・滿して減少有ること無し。是を聖五支の初支定を修すと名づく。(二)復次に比丘の覺・觀を滅し、內に正信・一〔p. 702b〕心あり、覺無く、觀無く、定生の喜樂ありて、二禪を成就して行ずるに、此の身に定生の喜樂の津・液・遍・滿し、此の身に、盡く定生の喜樂の津・液・遍・滿して減少有ること無し。陂湖の水は底より涌出するに、東方・南・西・北方より來らず、此の水は底より涌出し、能く池をして津・液・遍・滿して減少有ること無からしむるが如く、是の如く、比丘も此の身に定生の喜樂の津・液・遍・滿し、此の身に定生の喜樂の津・液・遍・滿して減少有ること無し。是を聖五支の第二支定を修すと謂ふ。(三)復次に比丘の喜を離

【四】五支定。巴、Pañcaṅgika Sammāsamādhi
【五】佛の。A. V. 28(3, p. 25ff)
【六】聖五支正定。巴、Ariya Pañcaṅgika Sammāsamādhi.
【七】比丘の以下。卷十四の準文を參照せよ。
【八】此の。宋元明三本により補入。
【九】津・液・遍・滿。巴、abhisandeti, parisandeti, paripūreti, parippharati.

れて捨行じ、念・正智あり、身に樂を受す、諸の聖人の捨・念・樂行ずと解するが如し。〔是の〕三禪を成就して行ずるに此の身に無喜の樂の津・液・遍・滿し、此の身に無喜の樂の津・液・遍・滿して減少有ること無し。[10]優波羅華池・[11]鳩頭摩華池・[12]鉢頭摩華池・[13]分陀利華池の泥中より出でて未だ水を出づること能はざれば、此らの華の根より頭に至り、頭より根に至るまで、皆、津・液・遍・滿して減少有ること無きが如く、是の如く、比丘も此の身に[14]無量喜の樂の津・液・遍・滿し、此の身に津・液・遍・滿して減少有ること無し。是を聖五支の第三支定と謂ふ。(四)復次に比丘の苦・樂を斷じ、先に憂・喜を滅し、不苦不樂にして捨・念・淨ありて、四禪を成就して行ずるに、此の身は清淨心を以て遍解して行じ。此の身は[15]清淨心を以て[16]遍解して行じて減少有ること無し。男子・女人の白淨衣を著け、頭より足に至り、足より頭に至るまで、覆はざる處無きが如く、是の如く、比丘は清淨心を以て遍解して行じ。此の身は清淨〔心〕を以て遍解して行じて減少有ること無し。是を聖五支の第四支定を修すと謂ふ。(五)復次に比丘あり、善く[17]觀相を取り、善く思惟し、善く解す。立てる人の坐せる者を觀るが如く、坐する人の臥する者を觀るが如く、是の如く、比丘あり、善く觀相を取り、善く思惟し、善く解す。是を聖五支の第五支定を修すと謂ふ。是の如く比丘あり、聖五支定を修し、親近し、多修學し已りて[18]通法を證せむと欲し、悕望して證せむと欲せば、心の欲する所に隨つて卽ち能く證することを得、自ら無礙を知る。四衢處に善調の馬有り、善く駕し已るに、善く御乘する者有り、乘り已つて隨意自在なるが如く、是の如く比丘あり、聖五支定に親近し、多修學し已りて、遍法を證せむと欲し、悕望して證せむことを欲せば、心の欲する所に隨つて卽ち能く證することを得、自在無礙なり。水を盛る瓶の堅牢不漏なれば、盛るに淨水を以てし、平滿にして〔p. 702c〕隨つて人の傾用せむと欲することを爲すに、如意自在なるが如く、是の如く、比丘あり、聖五支定に親近し、多修學し已り遍法を證せむと欲し、悕望して證せむことを欲せば、心の

【一〇】優波羅。Utpala.
【一一】鳩頭摩。Kumuda.
【一二】鉢頭摩。Padma.
【一三】分陀利。Puṇḍarika.
【一四】無量喜の樂。無喜の樂の誤傳なるべし。
【一五】清淨心。巴、Parisuddhena Cetasā Pariyodātena (inst.)
【一六】遍解して行じ。巴、pharitvā nisinno hoti (遍滿して坐す)。
【一七】觀相。巴、Paccavekkhanānimittaṃ.
【一八】通法。巴、Abhiññā.

欲する所に隨つて自在無礙なり。比丘あり、如し陂泉の漏水平滿なるより、飲むことを爲すに、人の決用するが如に、如意自在にして、決する所に隨ひて卽ち出づるが如く、是の如く、比丘あり、聖五支定に親近し多修學し已り遍法を證せむと欲し、悕望して證せむことを欲せば、心の欲する所に隨つて卽ち能く證することを得、自在無礙なり。如し比丘あり、無量若干の神足を受けて地を動かし、能く一を以て多と爲し、多を以て一と爲し、乃至梵天まで身の自在を得むと欲せば、隨所に能く入る——[一九]智品に說くが如し。如し比丘あり、天耳の淸淨にして人に過ぐを受け、能く人・非人の聲を聞かむと欲せば、隨所に能く入る。如し比丘あり、他の衆生心を知り、——有欲心は如實に有欲心と知り、無欲心は如實に無欲心と知り、乃至、無勝心は如實に無勝心と知ることを受けむと欲せば、隨所に能く入る。[二〇]智品に說くが如し。如し比丘あり、無量の宿命を憶念す——能く一生・二生・三生・四生・五生を憶し、乃至、此を成就して行ずることを欲せば、隨所に能く入る。[二一]智品に說くが如し、如し賢比丘あり、天眼の淸淨にして人に過ぐるを受け、能く衆生の生死、乃至、如所の業報を見ることを受けむと欲せば、隨所に能く入る。[二二]智品に說くが如し。如し賢比丘あり、有漏を盡し無漏を成じ、心解脫・慧解脫を得、現世に自ら智證し成就して行ず——我が生、已に盡き、梵行、已に立ち、所作已に辦じ、更に有を受けずと——〔是を〕受けむと欲せば、隨所に能く入る。——是の如く、聖五支定を修し、親近し多く修學し已りて是の如きの果報を[二三]得」と。

[二四]云何が比丘あり、欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ずなる。如し比丘ありて一切の有爲法、若しは一處の有爲法に、無常を思惟し、無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く不放逸に觀じて欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。是の如くにして、比丘あり、欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪行を成就す。是の如く、乃至、死屍の火聚の上に在るを見て觀ずること[二五]道

【一九】智品。卷十一—毘曇部、十九、P. 286 參照。
【二〇】智品。同上。
【二一】智品。同上。
【二二】智品。同上—P. 287 を見。
【二三】「得」と。以上、經文終り。
【二四】云何以下。以上の經文の論釋。
【二五】道品。卷十五中參照。

品の一支[二六]道に廣く說くが如し。

復次に比丘あり、是の如く思惟すらく、我は內に欲染有れば如實に內に欲染有りと知り若し內に欲染無ければ、如實に內に欲染無しと知り、〔p. 703a〕如し欲染の未生なれば如實に未生なりと知り、如し欲染の未生なるが生ずれば、如實に生なりと知り如し欲染生じ已りて斷ずと知り、如し欲染斷じ已れば、如實に更に、復、生ぜずと知ると。內に、瞋恚・睡眠・掉・悔・疑有るも亦是の如し。是の如く不放逸に觀じて、欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂有りて初禪を成就して行ず。比丘あり、是の如くにして欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。

復次に、比丘あり、是の如く思惟すらく、我は內の眼〔所〕の識の色に欲染・瞋恚有れば、如實に內の眼識の色に欲染・瞋恚有りと知り、內の眼識の色に欲染・瞋恚無ければ、〔內の眼識の色に欲染・瞋恚無しと知り〕、如し未だ眼識の色に欲染・瞋恚を生ぜざれば、如實に未だ生ぜずと知り、如し未生の眼識の色に欲染・瞋恚の生ずれば、如實に生ずと知り、如し眼識の色に欲染・瞋恚を生じて斷じ已れば如實に斷ずと知り、如し眼識の色に欲染・瞋恚の斷じ已れば、如實に、更に、復、生ぜずと知る」と。耳識の聲、鼻識の香、舌識の味、身識の觸、意識の法も亦是の如し。〔是の如く〕不放逸に觀じて、欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。比丘あり是の如くにして欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。

復次に、比丘あり、是の如く思惟すらく、我は內に[二七]念正覺有れば如實に內に念正覺有りと知り、內に念正覺無ければ如實に內に念正覺無しと知り、如し念正覺の未生なれば、如實に未生なりと知り、如し念正覺の未生なるの生ぜば、如實に生ずと知り、如し念正覺の生じ已りて具足・修すれば、如實に具足すと知る」と。擇法正覺・精進正覺・喜正覺・除正覺・定正覺・捨正覺を修するも亦是の如

【二六】道。宋元明宮の四本には定に作る。

【二七】念正覺。以下、七覺支についてのぶ。

し。是の如く不放逸に觀じて、欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。比丘あり、是の如くにして欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて初禪を成就して行ず。

復次に、比丘あり、如實に苦苦の集・苦の滅・苦滅の道を知り、如實に漏・漏の集・漏の滅・漏滅の道を知り、是の如く不放逸に觀じて、欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。比丘は謂く、是の如くにして欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ずるなり。

復次に、比丘あり[p. 703c]心の畏怖するが故に一切の有爲を出でて甘露界に入る。此は寂靜・妙・勝なり。一切の有爲を離れ、愛盡・涅槃あり。——是の如く不放逸に觀じて欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。比丘は是の如くにして欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂有りて、初禪を成就して行ず。

第二禪・第三禪・第四禪も亦是の如く說く。

云何が比丘あり、善く觀相を取り、善く思惟し善く解するなる。如し比丘あり、一切の有爲法、若しは一處の有爲法に無常を思惟し、無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く不放逸に觀じて欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。如し比丘あり、若しは行、若しは法相にて欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。若しは法相に善く相を取り、善く思惟し、善く解し、善識し順識し、緣識し、分別し、順分別し、緣分別し、比丘は是の如くにして善く觀相を取り、善く思惟し、善く解す。

復次に、比丘あり、若しは一處の有爲法にて、是れ苦・患・癰・箭・味・過・依緣壞法・不定・不滿・可衰・苦・空・無我なりと思惟し、緣を思惟し、緣を知り、緣を受す、——卽ち無明緣にして行あり、行

緣にして識あり、識緣にして名色あり、名色緣にして六入あり、六入緣にして觸あり、觸緣にして受あり、受緣にして愛あり、愛緣にじて取あり、取緣にして有あり、有緣にして生あり、生緣にして老・死・憂・悲・苦・惱・衆苦の聚集ありと思惟し、是の如く不放逸に觀じて欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。如し比丘は若しは法相ありて、欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。若しは行、若しは法相に、善く相を取り、善く思惟し、善く解し、善識し順識し、緣識し、分別し、順分別し、緣分別す。比丘は是の如くにして善く觀相を取り、善く思惟し、善く解す。

復次に比丘あり、一切の有爲法、若しは一處の有爲法に法の滅を思惟し、滅を知り、滅を解し、滅を受す――無明滅すれば則ち行滅す。行滅すれば則ち識滅す。識滅すれば則ち名色滅す。名色滅すれば則ち六入滅す。六入滅すれば則ち觸滅す。觸滅すれば則ち受滅す。受滅すれば則ち愛滅す。愛滅すれば則ち取滅す。取滅すれば則ち有滅す。有滅すれば則ち生滅す。生滅すれば則ち老・死・憂・悲・苦・惱・衆苦の聚集滅す」と。是の〔p. 703c〕如し不放逸に觀じて、欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂あり、初禪を成就して行ず。如し比丘あり、若しは行法相にて、欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂あり、初禪を成就して行ず。若しは行、若しは法相に、善く相を取り、善く思惟し、善く解し、善識し、順識し、緣識し、分別し、順分別し、緣分別し、比丘は是の如くにして善く觀相を取り、善く思惟し、善く解す。

復次に比丘あり、行を知り、行を樂び、住を知り、住を樂び、坐を知り、坐を樂び、臥を知り、臥を樂び、是の如くにして身の住の樂は如實に住の樂と知り、是の如く不放逸に觀じて欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。如し比丘は若しは行、若しは法相に欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂あり、初禪を成就して行ず。若しは行、若

しは法相に、善く相を取り善く思惟し、善く解し、善識し、順識し、緣識し、分別し、順分別し、緣分別す。比丘は是の如くにして善く觀相を取り、善く思惟し、善く解す。

復次に比丘あり、去來・屈伸より乃至、心の怖畏の故に、一切の有爲を出で甘露界に入るも亦是の如く說く。第二禪・第三禪・第四禪も亦是の如く說く。

何をか善く觀相を取り、善く思惟し善く解すと謂ふ。如し比丘あり、一切の有爲法、若しは一處の有爲法に、無常を思惟し、無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く不放逸に觀じて、欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂あり、初禪を成就して行ず。如し比丘の若し色・受・想・行・識有るに、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、善く識し、順識し、緣識し、分別し、順分別し、緣分別す。比丘は是の如くにして善く觀相を取り善く思惟し、善く解す。

復次に比丘あり。一切の有爲法、若しは一處の有爲法に、是れ苦・患・癰・箭と思惟するより、乃至、心、畏怖の故に、一切の有爲を出でて甘露界に入る。此の寂靜なり。此の妙・勝なり。一切の有爲を離れ、愛盡・涅槃なり——是の如く不放逸に觀じ欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行ず。如し比丘の、若しは色・受・想・行・識有り、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、善く識し、順識し、緣識し、分別し、順分別し、緣分別す。[p. 704a]比丘は、是の如くにして善く觀相を取り、善く思惟し、善く解す。第二禪・第三禪・第四禪も亦上の如く說く。——是の如きの五支、是を五支定と名づく。

(2)云何が五智定なる。[二八] 世尊の說くが如し、——諸比丘よ、定を修して無量・明了なるべし。諸比丘よ、若し定を修して無量・明了たり已りて、緣つて五種の智を生ず。何等か五なる。(一)若しは定有り、現に樂にして、後に樂報ありと此に緣りて智を生ず。(二)若しは定有り、聖・無染なりと、此に緣りて智を生ず。(三)若しは定有り、[二九]不怯弱者の能く親近すと、此に緣りて智を生ず。(四)若しは

【二八】世尊。A. V. 27(3, P. 24)—卷の一〇—毘曇部十九、p. 285 參照。

【二九】不怯弱者。卷一〇には聖人。巴、akāpurisa.

定有り、寂靜・勝妙にして獨修・除得なりと、此に緣りて智を生ず。若しは定有り、[三〇]念に入り、[三一]正念より起ると、此に緣りて智を生ず――と。

（一）云何が定の現に樂にして後に樂報ありと、此に緣りて智を生ずなる。――云何が現樂定なる。比丘あるが如し、欲・惡・不善法を離れ、覺有り觀有り、離生の喜樂ありて、初禪を成就して行じ、若し身に離生の喜樂の津・液・遍・滿し、此の身に盡く離生の喜樂の津・液・遍・滿して減少有ること無し。善澡浴師、若しは善澡浴師の弟子の、細澡豆を以て器中に盛著し、水を以て灑ぎ已りて調適に摶を作るに、此の摶に津・液・遍・滿して燥ならず、濕ならず、外の利潤なるが如く、是の如く比丘も、身に離生の喜樂の津・液・遍・滿し、身に盡く離生の喜樂の、津・液・遍・滿して減少有ること無し。

如し比丘は增益して離生の喜樂出世の樂、寂靜の樂、滅の樂、正覺の樂、沙門果の樂、涅槃の樂を受く。此の定の是の如きを現樂と謂ふ。

〔二〕復次に比丘あり、覺・觀を滅し、內に淨信・一心ありて、覺無く觀なく、定生の喜樂あり、二禪を成[三二]就して行ずるに、若し身に定生の喜樂の津・液・遍・滿し、此の身に盡く定生の喜樂の津・液・遍滿して減少有ること無し。大陂湖の山を以て圍遶せられ、水の底より涌出して、東方・南・西北方より來らざれば、此の陂は水の津・液・遍・滿し、此の陂の盡く津・液・遍・滿して減少有ること無きが如く、是の如く、比丘は、身に定生の喜樂の津・液・遍・滿し、此の身に盡く津・液・遍・滿して減少有ること無し。如し比丘は增益して[三三]無喜の樂、出世の樂、寂靜の樂、滅の樂、正覺の樂、沙門果の樂、涅槃の樂を受く。此の定の是の如きを現樂と謂ふ。

復次に比丘あり、喜を離れて捨行じ、念・正智あり、身に樂を受く。諸の聖人の捨・念・樂行ずと解するが如し。〔是の〕三禪を成就して行ずるに、若し〔p. 704b〕身に無喜の樂の津・液・遍・滿し、身に無喜の樂の津・液・遍・滿して減少有る無し。優鉢雜花池・波頭摩花池・鳩頭摩花池・分陀利花池の、泥

【三〇】念に入り。巴、Sato'va Samāpajjāmi.（四本には正念に作る）。
【三一】正念より起る。巴、Sato'va vuṭṭhahāmi.
【三二】就。四本によりて補入。
【三三】無喜の樂。定生の喜樂の誤なるべし。

より稍ゝ出づるも未だ能く水を出でざれば、此の花の若しは根、若しは頭に、水の津・液・遍・滿し、根より頭に至り、頭從り根に至るまで津・液・遍・滿して減少有る無きが如く、是の如く、比丘は若し身に無喜の樂の津・液・遍・滿し、此の身に盡く津・液・遍・滿して減少有る無し。如し比丘は增益して無喜の樂、出世の樂、寂靜の樂、滅の樂、正覺の樂、沙門果の樂、涅槃の樂を受く。此の定の是の如きを現樂と謂ふ。

復次に比丘あり、苦を斷じ、樂を斷じ、先に憂・喜を滅し、不苦不樂にして捨・念・淨あり、四禪を成就して行ずるに、若し身を清淨心を以て遍辨して行じ、此の身は清淨にして遍からざる處無し。男子・女人の、白淨衣を著け上下具足し、頭より足に至り、足より頭に至るまで覆はざる處無きが如く、是の如く、比丘は若し身を清淨心を以て遍辨して行じ、此の身は清淨にして遍からざる處無し。如く比丘は增益して寂靜、妙の樂、出世の樂、寂靜の樂、滅の樂、正覺の樂、沙門果の樂、涅槃の樂を受く。是の如きの定を現樂と謂ふ。

云何が定の後の樂報なる。如し比丘あり、無常・苦・空・無我を思惟し、涅槃の寂靜を思惟し、定心を得て住し正住す。如し比丘の定を得已りて卽ち初聖の五根を得。初聖の五根を得已りて、上正決定して凡夫地を捨す。若し須陀洹果を得ずして而も中にして命終するは是の處（ことわり）有ること無し。須陀洹果を得ずして惡を化し惡業を作し已りて、命終して三塗に墮するは、是の處有ること無し。如し比丘の此の定に親近し、多く修學せば多く修學し已りて三煩惱を見斷し、須陀洹果を得て觸證し、觸證し已りて地獄・畜生・餓鬼の苦を斷じ、七、人天に生ずるの報を受け、餘に天・人中に生ずるの苦を斷ず。是の如きの定を後の樂報を謂ふ。如し比丘の此の定に親近し、多く修學せば、多く修學し已りては、欲・染・瞋恚煩惱分を思惟斷し、欲染・瞋恚煩惱分を斷じ已りて斯陀含果を得て觸證し、觸證し已りて、地獄・畜生・餓鬼の苦を斷じ、天上・人中の生を受け、餘に天上・人中に生ずるの苦を斷

ず。是の如きの定を後の業報と謂ふ。如し比丘の此の定に親近し、多く修學せば、多く修學し已りて〔p. 704c〕欲染・瞋恚・を思惟斷じ、盡くして餘り無く、餘無からしめ已りて阿那含果を得て觸證し、觸證し已りて地獄・畜生・餓鬼・人中の苦を斷じ、若しは一天の生・若しは五生を受け、餘の天上の苦は皆、斷ず。是の如きの定を後の業報と謂ふ。如し比丘の此の定に親近し多く修學せば、多く修學し已りて、色界、無色界の煩惱を思惟斷じ盡くして餘り無く、餘無からしめ已りて阿羅觀果を得て觸證し、觸證し已りて、地獄・畜生・餓鬼・人中・天上の苦を斷じ、一切の有・一切の道・一切の生・一切の繋縛・一切の結使・煩惱の苦を斷じ、皆斷じて餘無し。是の如きの定を後の業報と謂ふ。

何をか此に緣りて智を生ずと謂ふ。若しは內分別・若しは外分別を知見・覺證する此を、此に緣りて智を生ずと謂ふ。

(二)何をか定有り聖にして無染なりと此に緣りて智を生ずと謂ふ。——何をか非聖の定と謂ふ。若し定の有漏なる、是を非聖の定と謂ふ。復次に非聖の定とは、若し定の非學非無學なる、此を非聖の定と謂ふ。復次に非聖定とは、空・無相・無願定を除く若し餘の定を非聖定と謂ふ。

何をか聖定と謂ふ。若し定の無漏なる、是を聖定と名づく。復次に聖定とは、若し定の學・無學なる、此を聖定と謂ふ。復次に聖定とは空・無相・無願定・此を聖定と謂ふ

何の義を以てか聖と謂ふ。貪欲・瞋恚・愚癡・諸の結煩惱を斷離するを以ての故に[三四]聖と謂ふ。

云何が有染定なる。若し定の有求なる、此を有染定と謂ふ。復次に有染定とは、若しは定の非學非無學なる、此を有染定と謂ふ。復次に有染定とは空・無相・無願定を除く若し餘の定なる、此を有染定と名づく。

何の義を以てか有染なる。染とは謂く愛なり。愛の、此の定中に於て得・正得・緣得せられ、定も亦愛中に於て得・正得・緣得せられば、此を有染定と謂ふ。

【三四】聖。大正本等、聖定に作るも、四本に從つて定の字を去る。

云何が無染定なる。若し定の無求なる、是を無染定と謂ふ。復次に無染定とは若し定の學・無學なる、此を染定と名づく。復次に無染定とは、空・無相・無願定、此を無染定と謂ふ。何の義を以てか無染なる。染とは謂く愛なり。愛の定中に不得・不正得・不緣得なり。定の、愛中に不得・不正得・不緣得なる、是を無染定と謂ふ。

何をか此に緣りて智を生ずと謂ふ。若しは內分別、若しは外分別を知見・覺證する、此を、此に緣りて智を生ずと謂ふ。

(三)云何が定有り、不怯弱者、親近すと、此に緣りて智を生ずなる。――云何が怯弱者なる。若しは信〔p. 705a〕心無く、無慚・無愧・學問せず、懈怠・失念にして慧無き、此を怯弱者と謂ふ。復次に怯弱は是れ凡夫なり。何の義を以てか怯弱と名づく。未だ身見を知らず、未だ身見を斷ぜず、是の義を以て怯弱者と謂ふ。

云何が非怯弱者なる。不怯弱は謂く、信・慚・愧有り。多聞・懃進・事念・多慧なり。此を不怯弱者と謂ふ。復次に不怯弱は、若しは佛及び佛の聲聞弟子なり。何の義を以ての故に不怯弱と名づく。身見を知るを以て、身見を斷ずるを以て、此の義を以て不怯弱者と謂ふ。

是の如きの不怯弱者は定を得て親近し多く修學す。是の義を以ての故に非怯弱者の親近すと謂ふ。何をか此に緣りて智を生ずと謂ふ。若しは內分別、若しは外分別知見・覺證する、是を、此に緣りて智を生ずと謂ふ。

(四)何をか定有り、寂靜・勝妙・獨修・除得なりと、此に緣りて智を生ずと謂ふ。――云何が寂靜なる。若し定の共果報なる、是を寂靜と名づく。

云何が勝妙定なる。若し定の聖・有報にして、能く煩惱を斷ずる、是を勝妙定と名づく。

復次に、寂靜定とは、若し定の聖・有報にして能く煩惱を斷ずる。是を寂靜定と名づく。

復次に勝妙定とは、若し定の共果報なる、是れを勝妙定と名づく。
復次に寂靜は卽ち勝妙、勝妙は卽ち是れ寂靜なる、是を寂靜・勝妙と謂ふ。
何をか獨修と謂ふ。若しは心の一向に定住し正止し、獨り定に處する、是を獨修と謂ふ。
何をか除得と謂ふ。——云何が不除得定なる。若し定を得ることの不定得・難得なり、是を不除得定と名づく。
云何が除得定なる。若し定を得ることの決定得にして難得ならざる、是を除得定と謂ふ。
何をか此に緣りて智を生ずと謂ふ。若しは內分別、若しは外內別を知見・覺證する、是を、此に緣りて智を生ずと謂ふ。
(五)何をか定有り、正念に入り、正念より起ると、此に緣りて智を生ずと謂ふ。若し正智に入り正智より起り、正智に入り、正智より起り已る、是の故に正念に入り、正念より起ると謂ふ。專身念に入り專身念より起り、專身念に入り、專身念より起り已る、是を正念に入り、正念より起ると謂ふ。
何をか此に緣りて智を生ずと謂ふ。若しは內分別、若しは外分別を知見・覺證する、是を此に緣りて智を生ずと謂ふ。
——是の如きの五智は是れ五智定なり。
(3)何をか共念出息入息定と謂ふ。世尊の說くが如し——出息入息念を修し、親近し多く修學せば、多く修學し已りて大果(p. 705b)報を得、乃至、甘露を得と。
云何が出息入息念を修し、親近し多く修學せば、大果報を得、乃至甘露を得なる。如し比丘の寂靜處・林中・樹下に住し、或は空處に在り、山窟中に在りて、露處に草を敷き、或は塚間・巖岸に在り、如し比丘の、朝に村に詣りて乞食し、食し已りて、日の中を過ぎ、衣鉢を擧げ、足を洗ひ、洗足

し已りて比丘は結[三五]加趺坐し、端身・繋念して悕望を思惟斷し、心に、悕望・貪著無くして行じ、悕望・貪著に於て清淨を得。瞋恚を斷じ、慈心を行じ、心に瞋恚を離れて清淨を得、睡眠を斷じて睡眠無く、正知明想ありて、心に睡眠を離れて清淨を得、掉・悔を斷じ、掉・悔無くして行じ、內心寂靜に、掉・悔を離れて清淨を得、疑を斷じ疑無くして行じ、善法に一定して、心は疑を離れて清淨を得。如し比丘の五蓋――、是れ心の垢損なるを斷じ、智慧ありて出息を正念し、入息を正念す。如し比丘は出息の長ならば、出息の長なりと知り、入息の長ならば入息の長なりと知り、出息の短ならば、出息の短なりと知り、入息の短ならば、入息の短なりと知る。一切身に入息を覺知することを學し、一切身に出息を覺知することを學し――除身行出息を學し、除身行入息を學し、喜出息覺知を學し喜入息覺知を學し、樂出息覺知を學し、樂入息覺知を學し、心行出息覺知を學し、心行入息覺知を學し、除心行出息覺知を學し、除心行入息覺知を學し、心出息覺知を學し、心入覺息知を學し、悅心出息を學し、悅心入息を學し、定心出息を學し、定心入息を學し、解脫心出息を學し、解脫心入息を學し、無常觀出息を學し、無常觀入息を學し、離欲觀出息を學し、離欲觀入息を學し、滅觀出息を學し、滅觀入息を學し、出世觀出息を學し、出世觀入息を學するなり。

[三六]何をか出息を正念し、入息を正念すと謂ふ。若しは出息を正知し、入息を正知し、出息を正知し、入息を正知し已る、是を出息を正念し入息を正念すと謂ふ。身出息を專念し、身入息を專念し、身出息を專念し、身入息を專念し已る、是を出息を正念し入息を正念すと謂ふ。

何をか比丘の、出息の長ならば出息の長なりと知り、入息の長ならば[p. 705c]、入息の長なりと知ると謂ふ。如し、比丘の、法を思惟して長き出息・入息を生じ、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法を思惟し、長き出息・入息を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く長き出息・入息を生じ、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、比丘は法を

【三五】加。四本には跏に作る。

【三六】何等。右の諸釋の文論釋。

思惟して、長き出息・入息の覺知を生じて、善く法相を取り善く思惟し善く解し、若しは法を思惟して長き出息・入息の覺知を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く長き出息・入息の覺知を生じて、善く法相を取り善く思惟し善く解し、如し比丘の法を思惟して長き出息・入息を生ずるも法を思惟して若しは生ぜざるも、彼の法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の、法を思惟して長き出息・入息の覺知を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近し、不勝法に親近せず、比丘の應所修の法を思惟して、勝法に親近して不勝法に親近せず、長き出息・入息、及び、長き出息、入息の覺知ありて悅喜心を得る、是を比丘の、出息の長ならば、出息の長なりと知り入息の長ならば、入息の長なりと知ると謂ふ。

何をか出息・入息の長なりと謂ふ。若し無量に出息し、無量に入息し、無量に出息し無量に入息し已る。是の故に出息の長く入息の長しと謂ふ。疾く出息せず、疾く入息せず。疾く出息せず、疾く入息せずし已る。是の故に出息の長く、入息の長しと謂ふ。連速に出息・入息せず、連速に出息・入息せずし已る。是の故に出息・入息の長しと謂ふ。[三七]力めて厲身して出息せず、力めて厲身して入息せず。力めて厲身して出息せず、力めて厲身して入息せずし已る。是の故に出息・入息の長しと謂ふ。續いて出息・入息せず。續きて出息・入息せずし已る。是の故に出息・入息の長しと謂ふ。――是を出息・入息の長しと名づく。一事覚り

何をか出息の短ならば、出息の短なりと知り、入息の短ならば、入息の短なりと知ると謂ふ。如し比丘の法を思惟して短き出息・入息を生じ、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法を思惟して短き出息・入息を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く短き出息・入息を生じ、善く法相を取り善く思惟し善く解し、比丘の法を思惟して [p. 706a]

【三七】厲。宋元明の三本には勵に作る。

短き出息・入息の覺知を生じて、善く法相を取り善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟して短き出息・入息の覺知を生ぜずして善く法相を取り善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして、[三八]短き出息・入息の覺知を生じ、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、比丘の法を思惟して短き出息・入息を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。如し比丘の、法を思惟して短き出息・入息の覺知を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の不應所修法を思惟せず應所修法を思惟し、勝法に親近して不勝法に親近せず。短き出息・入息及び、短き出息・入息の覺知ありて悅喜を得る。是を出息の短ならば、出息の短なりと知り、入息の短ならば、入息の短なりと知ると謂ふ。

何をか出息・入息の短なりと謂ふ。有量に出息し、有量に入息し、有量に出息し有量に入息し已る。是の故に、出息・入息の短なりと謂ふ。[三九]疾く出息し、疾く入息し、疾く出息し、疾く出息し已る。是の故に出息・入息の短なりと謂ふ。連速に出息し、[四〇]連速に入息し、連速に出息し、連速に入息し已る、是の故に出息・入息の短なりと謂ふ。力めて厲身して出息・入息し、力めて厲身して出息・入息し已る。是の故に出息・入息の短なりと謂ふ。續いて出息・入息し續いて出息・入息し已る。是の故に出息・入息の短なりと謂ふ。身の、出息入息を除かず、身の、出息・入息を除かずし已る。是の故に出息・入息の短なりと謂ふ。――是を出息・入息の短なりと名づく。二事覺り

何をか一切身に出息を覺知することを學し、一切身に入息を覺知することを學すと謂ふ。如し、比丘の息を以て一切身に滿て[四一]已りて出息し、若しは一切身內を空にし已つて入息す。巧藥師・藥師の弟子、藥嚢をして滿てしめ已りて按じて氣を出でしめ、若しは藥嚢を空にし已つて還つて其の口を開き、氣をして滿つることを得しむるが如く、比丘も是の如く、一切身をして中に息を滿てし

[三八] 短き。四本には「能く短き」と作る。

[三九] 疾く入息し、疾く出息し。宋元明の三本により補入。

[四〇] 連速に入息し、連速に出息し。同上及び宮の三本により補入。

[四一] 已りて。四本により補入。

め已りて出息し、若しは一切身內を空にし已つて入息し、若しは法を思惟して一切身に出息・入息を生じて善く法相を取り善く思惟し善く解し、若しは法を思惟して一切身中に出息・入息を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして、一切身中に能く出息・入息を生じて[p. 706b]善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、如し比丘の、法を思惟して一切身中に出息・入息の覺知を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟して一切身中に出息・入息の覺知を生ぜずして善く法相を取り善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く一切身中に出息・入息の覺知を生じて善く法相を取り、善く思惟し善く解し、如し比丘の、法を思惟して一切身中に出息・入息を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の法を思惟して一切身中に出息・入息を生ぜるを覺知するも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の應所修法を思惟し、不應所修法を思惟せず、勝法に親近して不勝法に親近せず。一切身中に出息・入息し、及び一切身中に出息・入息の覺知ありて、悅喜を得る。是を一切身に出息の覺知を學し、一切身に入息の覺知を學すと謂ふ。三事覚り

何をか除身行出息を學し、除身行入息をと學すと謂ふ。身行は謂く出息・入息にして麁有り、細有り。云何が麁身行なる。若し掉動、是を麁身行と名づく。云何が細身行なる。若し寂靜、是を細身行と名づく。如し比丘の、細身行を以て麁身行を調伏し、降勝・除出す。巧匠と巧匠の弟子との小[四三]楔を以て大楔を出すが如く、是の如く、比丘も細身行を以て麁身行を調伏す。人の馳走して自ら思惟するが如し——我は何を以ての故に走る。我は當に安除行すべしと。便ち安詳に行く。此の人の復、是の如く思惟すらく、我は何を以て安詳にして行く。我は應に當に住すべしと。便ち住す。此の人の復、思惟すらく、我は何の故に住する。我は當に坐すべしと。便ち坐す。此の人の復、是

【四三】楔。四本には榍に作る。

の如く思惟すらく、我は何の故に坐する。我は當に臥すべしと。便ち臥す。此の人は是の如くして麁身行を除きて細身行に親近す。比丘も是の如く、麁身行を除いて細身行に親近す。比丘の、法を思惟して麁身行を生じ、善く彼の法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟して麁身行を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く麁身行を生じて善く法相を取り、善く思惟し善く解し、比丘の、法を思惟して[p. 706c]細身行を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟して細身行を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く細身行を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、比丘の、若しは法を思惟して麁身行を除きて、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法を思惟して麁身行を除かずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く麁身行を除きて善く法相を取り、善く思惟し善く解し、比丘の、法を思惟して身行を除くの出息・入息を生じて、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法を思惟して身行を除くの出息・入息を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く身行を除くの出息・入息を生じて、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、比丘の、法を思惟して身行を除く出息・入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し　身行を除く出息・入息の覺知を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く身行を除く出息・入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、比丘の、法を思惟して麁身行ずるも、法を思惟[四三]せずして若しは生ぜざるも、[四四]法を思惟するも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の、法を思惟して細身行を生ずるも、彼の法を思惟して若しは生ぜざるも、彼の法思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の、法を思惟して麁身行を除くも、法を思惟し若しは除かざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。

【四三】せず。「して」の誤ならざるか。

【四四】法を思惟するも。「せざるも」の誤で、右と混合せるものなるべし。

比丘の、法を思惟して身行を除くの出息・入息を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の、法を思惟して身を除くの出息・入息の覺知を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の、不應所修法を思惟せず。應所修法思惟し、勝法に親近して不勝法に親近せず。身行を除くの出息・入息あり、及び身行を除くの出息・入息覺知ありて悦喜を得る、是を除身行出息入息を學すと謂ふ。四事竟り

何をか喜出息覺知を學し、喜入息覺知を學すと謂ふ。——云何が喜なる。〔p. 707a〕若し心の歡喜・踊躍、是を喜と名づく。

比丘の、法を思惟して喜を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟して喜を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く喜を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、比丘の、法を思惟して喜出息入息を生じて、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法を思惟して喜出息入息を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く喜出息入息を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、比丘の、法を思惟して喜出息入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法を思惟して喜出息入息の覺知を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く喜出息入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、比丘の、法を思惟して喜を生ずるも、法を思惟して若し生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の、法を思惟して喜出息入息を生ずるも、若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の、法を思惟して喜出息入息の覺知を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。

比丘の應所修法を思惟せずして勝法に親近して不勝法に親近せず。喜出息入息あり、及び、喜出息入息あるを覺知して悅喜を得る、是を喜出息覺知を學し、喜入息覺知を學すと謂ふ。五事覺り

云何をか樂出息覺知を學し、樂入息覺知を學すと謂ふ。——云何が樂なる。若しは心の忍受する樂、意觸は樂受、是を樂と名づく。

如し比丘の、法を思惟して樂を生じ、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは思惟するも樂を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若し法の勝・非勝にして能く樂を生じて善く法相を取り、善く思惟し善く解し、比丘の、法を思惟して樂出息入息を生じて、〔善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟して樂出息・入息を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く樂出息・入息を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、比丘の、法を思惟して樂出息・入息の覺知を生じて、善く〔p. 707b〕法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟して樂出・息入息の覺知を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く樂出息・入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、比丘の、法を思惟して〔樂を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず〕。[四五] 比丘の法を思惟して樂出息・入息を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の、法を思惟して樂出息・入息の覺知を生ずるも、彼の法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の應所修法を思惟し、不應所修法を思惟せず、勝法に親近して不勝法に親近せず。樂出息・入息あり、及び樂出息・入息の覺知ありて悅喜を得る、是を樂出息覺知を學し、樂入息覺知を學すと謂ふ。六事覺り

【四五】比丘の等。この一文を大正本等すべて、二度繰返すも、今は省く（上の〔 〕中を省きたる結果の混亂なるべし）。

何をか心行出息覺知を學し、心行入息覺知を學すと謂ふ。心行は謂く想思にして麁細有り。云何が麁心行なる。若し心行の掉動なる、是を麁心行と名づく。云何が細心行なる。若し心行の寂靜なる、是を細心行と名づく。

如し比丘の、細心行麁心行あるに、細心行を以て麁心行を調伏し、降勝・除出す。巧匠と巧匠の弟子との小楔を以て大楔を出すが如く、是の如く、比丘は細心行を以て麁心行を調伏し、比丘は、法を思惟して麁心行を生じ、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟して麁心行を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く麁心行を生じ、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、比丘の、法を思惟し細心行を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し、細心行を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く細心行を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、比丘の、法を思惟し、心行出息入息を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟して心行出息入息を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く心行出息入息を生じて善く法相を取り〔p. 707c〕善く思惟し、善く解し、比丘の、法を思惟し、心行出息入息の覺知を生じて善く彼の法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟して心行出息入息の覺知を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く心行出息入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、比丘の、法を思惟して麁心行を生ずるも、[四六]法を思惟せざるも、若しは思惟を生ぜざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の、法を思惟して細心行を生ずるも、法を思惟して、若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の、法を思惟して心行出息入息の覺を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘の不應所修法

【四六】法を以下。「法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも」の誤ならむ。

を思惟せず、應所修法を思惟し、勝法に親近して不勝法に親近せず。心行出息入息あり、及び心行出息入息の覺知ありて悅喜を得る、是を心行出息覺知を學し、心行入息覺知を學すと謂ふ。[四七]七事竟り

【四七】七事。大正本「第七」に作るも、宋元明三本により今の如く改む。

卷の第二十九 〔p. 707c〕

緒分定品 〔第十〕【其の二】

[一]何をか[二]除心行出息を學し、除心行入息を學すと謂ふ。心行は謂く想・思にして麁・細有り。云何が麁心行なる。若し掉動なる。是を麁心行と名づく。〔云何が細心行なる〕。若し心行の寂靜なる、是を細心行と名づく。

如し比丘あり、細心行を以て麁心行を調伏し、降勝・除出す。巧匠と巧匠の弟子との小楔を以て大楔を出すが如く、是の如く、比丘も細心行を以て麁心行を調伏す。人の馳走して自ら思惟するが如し、——我は何の故に走るや。我は當に安除として行くべしと。便ち安除として行く。自ら思惟すらく、我は何の故に安除として行くや。〔p. 708a〕我は當に住すべしと。便ち住す。自ら思惟すらく我は何の故に住するや。我は當に坐すべしと。便ち坐す。自ら思惟すらく我は何の故に坐するや。我は當に臥すべしと。卽ち臥す。是の如く麁心行を除き、細心行に親近す。比丘あり是の如く麁心行を除き、細心行に親近す。

比丘あり、法を思惟し、麁心行を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し、麁心行を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く麁心行を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し細心行を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し細心行を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く細心行を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し、麁心行を除いて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し、麁心行を除かずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・

【一】何をか等。前卷の、(3)共念出息入息定(巴)Ānāpāna-sati-Samādhi)の下に於ける「世尊の說くが如し」の出故を註出することを逸したが、此に因よつて出しおくと—雜29,7(大正、99, 803—2. p. 206 a)=S. 54, 1 (5p. 311 f)—理解上の便益少からざれば、上來、論釋せられたる主なる文句の巴文を出しおかむ——

一、正念出息正念入息—So sato va assasati, sato va passasati.

二、出息長知出息長、入息長知入息長— Dīghaṃ vā assasanto Dīghaṃ assasāmīti pajānāti; dīghaṃ vā passasanto Dīghaṃ passasāmīti pajānāti.

三、出息短知出息短、入息短知入息短—右のDīghaṃの代にrassaṃをおくだけの相違。

四、學一切身出息覺知、學一切身入息覺知—Sabbakāyapaṭisaṃvedī Assasissāmīti sikkhati, Sabbakāyapaṭisaṃvedī passasissāmīti sikkhati,

非勝にして能く麁心行を除いて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し心行を除く出息入息を〔三〕知りて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し〔四〕心行を除く出息・入息生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く〔五〕心行を除く出息入息を生じて、善く法相を取り善く思惟し善く解す。比丘あり、法を思惟し心行を除く出息・入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し心行を除く出息・入息の覺知を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く心行を除く出息・入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟して麁心行を生ずるも、〔六〕法を思惟せずして若し生ぜざるも、法を思惟するも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して細心行を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり法を思惟し麁心行を除くも、法を思惟して若しは除せざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟し心行を除く出息・入息を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して心行を除く出息入〔p. 708b〕息の覺知を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、不應所修法を思惟せずして應所修法を思惟し、勝法に親近して不勝法に親近せず、心行を除く出息入息及び心行息を除く出入の息覺知ありて悅喜を得る、是を除心行出息を學し除心行入息を學すと謂ふ。八事覺り

何をか〔七〕心出息覺知を學し、心入息覺知を學すと謂ふ。心は謂く心・意・識・六識身・七識界、是を心と名づく。彼の心に善・不善有り。

如し比丘あり、法を思惟し不善心を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法

五、學除身行出息、學除身行入息—Passambhayaṃ Kāyasaṃkhāraṃ Assasissāmiti sikkhati; Passambhayaṃ Kāyasaṅkhāraṃ Passasissāmiti sikkhati.

六、學喜出息覺知、學喜入息覺知—Pītipaṭisaṃvedī Assasissāmiti sikkhati; Pītip. Passasissāmiti sikkhati,

七、學樂出息覺知、學樂入息覺知 — Sukhapaṭisaṃvedī Assasissāmiti……準ず。

八、學心行出息覺知、學心行入息覺知—Cittasaṅkhāra paṭisaṃvedī……

【二】除心行出息を學し、除心行入息を學す。Passambhayaṃ Cittasaṅkhāraṃ Assasissāmiti sikkhati; Passambhayaṃ Cittasaṅkhāraṃ Passasissāmiti sikkhati.

【三】知りて。宋元明の三本又は更に生の字をおくも、前來の文に反省せば、「知って」は「生じて」の誤ならむ。

【四】心行を除く。大正本等には「心除行」に作るも、同上三本によりて正す。

【五】心行等。同上。以下、この章にはすべて同ず。

【六】法を以下。又、恐らく誤傳で「法を思惟して若しは生ぜざるも」とあるべきならむ。

【七】心出息覺知を學し、心

を思惟し不善心を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く不善心を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し善心を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し善心を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く善心を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す、比丘あり、法を思惟し、心出息入息を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し心出息・入息を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法の勝・非勝にして、能く心出息入息を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し心出息入息の覺知を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し心出息入息の覺知を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く心出息入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し不善心を生ずるも、[八]法を思惟せずして若しは生ぜざるも、法を[九]思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して善心を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して心出息入息を生ずるも、法を思惟して生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して心出息入息の覺知を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近し不勝法に親近せず。比丘あり〔p. 708c〕、不應所修法を思惟せず。應所修法を思惟して、勝法に親近し、不勝法に親近せず、心出息入息あり及び心出息入息の覺知ありて悅喜を得る、是を心出息覺知を學し、心入息覚知を學すと謂ふ。九事覚り

何をか[一〇]悅心出息を學し、悅心入息を學すと謂ふ。[一一]悅心とは謂く、悅豫・重悅豫・究竟悅豫なり。但、喜を是れ悅と名づくるに非ず。

入息覺知を學す。巴、Cittapaṭisaṃvedī Assasissāmīti sikkhati; Cittapaṭisaṃvedī Passasissāmīti sikkhati.

【八】法を等。前の同然下の註參照。

【九】思惟せざるも。麗、宮二本には「思惟するも」に作る。

【一〇】悅心出息を學し、悅心入息を學す。巴、Abhippamodayaṃ Cittaṃ Assasissāmīti sikkhati; abhippamodayaṃ cittaṃ Passasissāmīti sikkhati

【一一】悅心。巴、Abhippamodayaṃ cittaṃ

比丘あり、法を思惟し悅を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し悅を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く悅を生じ、善く法相を取り、善く思惟し善く解す。比丘あり、法を思惟し悅心を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し悅心を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く悅心を生じ、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し悅心出息入息を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し悅心出息入息を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く悅心出息入息を生じ、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。[一二]此に比丘あり、若しは法を思惟し悅心出息入息の覺知を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し悅心出息入息の覺知を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く悅心出息入息の覺知を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し悅心思惟法を生ずるも、法を思惟して生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して悅心出息入息を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して悅心出息入息の覺知を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、應所修法を思惟して不應所修法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず、悅心出息入息あり、及び悅心出息入息の覺知ありて悅喜を得る、是を悅心出息を學し、悅心入息を學すと謂ふ。十專覺り

[p. 709a] 何をか[一三]定心出息を學し、定心入息を學すと謂ふ。定とは謂く心の住・正住、是を定と名づく。如し比丘あり、法を思惟し[一四]定心を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を

【一二】此に。巴、ddhu(now, here)にあてしものか。

【一三】定心等。巴、Samādahaṃ cittaṃ Assasissāmīti sikkhati; Samādahaṃ cittaṃ Passasissāmīti sikkhati.

【一四】定心。巴、Samādahaṃ cittaṃ

思惟し定心を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く定心を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し定心を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し定心を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く定心を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し定心出息入息を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し定心出息入息を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く定心出息入惟を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し定心出息入息の覺知を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し定心出息入息の覺知を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く定心出息入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し善く解す。比丘あり、法を思惟し定心思惟法を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して定心出息入息を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して定心出息入息の覺知を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、應所修法を思惟し、不應所修法を思惟せず、勝法に親近して不勝法に親近せず、定心出息入息あり、及び定心出息入息の覺知ありて悦喜を得る、是を定心出息を學し、定心入息を學すと謂ふ。十一事覺り

何をか[一五]解脱心出息を學し、[一六]解脱心入息を學すと謂ふ。解脱とは謂く心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を以て解脱する、是を[p. 709b]解脱と名づく。

如し比丘あり、法を思惟し解脱を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思

【一五】解脱心等。巴、Vimocanaṃ cittaṃ Assasissāmīti sikkhati; vimocayaṃ cittaṃ Passasissāmīti sikkhati.

【一六】解脱。巴、Vimocaya.

惟し解脫を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く解脫を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し[一七]解脫心を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し解脫心を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く解脫心を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し解脫心出息入息を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し解脫心出息入息を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く解脫心出息入息を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し、解脫心出息入息の覺知を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し解脫心出息入息の覺知を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く解脫心出息入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟して解脫心を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して解脫心出息入息を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して解脫心出息入息の覺知を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、應所修法を思惟し、不應所修法を思惟せずして、勝法に親近して不勝法に親近せず、解脫心出息息入息あり及び解脫心出息入息の覺知ありて悅喜を得る、是を解脫心出息を學し解脫心入息を學すと謂ふ。十二事竟り

何をか[一八]無常觀出息を學し、無常觀入息を學すと謂ふ。——何をか[一九]無常想と謂ふ。比丘あるが如し、或は樹下・露處に在りて是の如く思惟すらく、色は無常なり。受・想・行・識は無常なりと。如實人の若しは想・憶想、是を無常想と名づく。云何が[二〇]觀なる。[二一]如實人の若しは觀・正觀・微觀・分別・

【一七】解脫心。巴、Vimocaya citta.

【一八】無常觀等。巴、Aniccānu;assi Assasissāmiti sikkhati; Aniccānupassi Passasissāmiti sikkhati

【一九】無常想。巴、Aniccānupassanā(無常觀)又は Anicca-Saññā(無常想)?

【二〇】觀。巴、Anupassanā.

【二一】如。大正本等、知に作るも、四本に從つて改む。

【p. 709c】解[二二]射、是を觀と名づく。

比丘あり、法を思惟し無常想を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し無常想を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く無常想を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し無常想を生じて、善く法想を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し無常觀を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く無常觀を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し無常觀出息入息を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し無常觀出息入息を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く無常觀出息入息を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟して無常觀出息入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し無常觀出息入息の覺知を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは[二三]法の勝・非勝にして能く無常觀出息入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し無常想を生ずるも、法を思惟して若しは無常觀を生ぜざるも、法を思惟[二四]することを生ぜざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、[二五]無常觀思惟を生ずるも、若しは[二六]思惟を生ぜざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、思惟して無常觀出息入息を生ずるも、[二七]法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近し不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して無常觀出息入息の覺知を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、應所修法を思惟し、不應所修法を思惟せず、勝法に親近して不勝法に親近せず、無常觀出息入息あり、無常觀出息入息の覺知ありて悅喜を得る、是を無常觀出息を學し、無常觀入息を學すと謂ふ。十三事竟り

【二二】射。同上四本には脫に作る。
【二三】法の。宋元明の三本により補入。
【二四】することを生。衍句ならむ。
【二五】無常等。又、脫文あるべきこと推して知るべし。
【二六】思惟。宋元明の三本には「思惟法」と記す。
【二七】法。大正本等には不に作る。宋元明の三本により、改む。

何をか[二八]離欲觀出息を學し、離欲觀入息を學すと謂ふ。――何をか[二九]離欲想と謂ふ。比丘あるが如し、或は樹下・露處に在りて是の如く思惟すらく、若しは愛盡・離欲の涅槃は寂靜・妙・勝なりと。如實人の若しは想・憶想、是を[p. 710a] 離欲想と名づく。何をか觀と謂ふ。如實人の若しは觀・正觀微觀・分別・解[三〇]射、是を觀と名づく。

比丘あり、法を思惟し涅槃離欲想を生じて善く法想を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟して離欲想を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く離欲想を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し離欲觀を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し離欲觀を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く離欲觀を生じて、善く法相を取り、善く思惟し善く解す。比丘あり、法を思惟し離欲觀出息入息を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し離欲觀出息入息を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く離欲觀出息入息を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟して離欲觀出息入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し離欲觀出息入息の覺知を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く離欲觀出息入息の覺知を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法と思惟して離欲想を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して離欲觀を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して離欲觀出息入息を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して離欲觀出息入息の覺知を生ずるも、法を思惟して

[二八] 離欲觀等。巴、Virāgānupassī Assasissāmīti sikkhati; Virāgānupassī Passasissāmīti sikkhati.
[二九] 離欲想。巴、Virāga-saññā.
[三〇] 射。前註參照。

若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘ある應所修法を思惟し、不應所修法を思惟せずして、勝法に親近して不勝法に親近せず、離欲觀出息入息あり、及び離欲觀出息入息の覺知ありて悅喜を得る、是を離欲觀出息を學し、離欲觀入息を學すと謂ふ。十四事竟り

〔p. 710b〕何をか[三一]滅觀出息を學し、滅觀入息を學すと謂ふ。――何をか[三二]滅想と謂ふ。比丘あるが如し、或は樹下・露處に在りて是の如く思惟すらく、若しは愛盡・涅槃は寂靜・妙・勝なりと。如實人の、若しは想・憶想、是を滅想と名づく。何をか觀と謂ふ。如實人の觀・正觀・微觀・分別・解[三三]射、を觀ずる、是を觀と名づく。

比丘あり、法を思惟し滅想を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは思惟して滅想を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く滅想を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟して滅觀を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し滅觀を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く滅觀を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し滅觀出息入息を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し滅觀出息入息を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く滅觀出息入息を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟して滅觀出息入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し滅觀出息入息の覺知を生ぜずして善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く滅觀出息入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟して滅想を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して滅觀を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざる

【三一】滅觀出息等。巴、Nirodhānupassi Assasissāmîti sikkhati, Nirodhānupassi Passasissāmîti sikkhati.
【三二】滅想。巴、Nirodha-saññā.
【三三】射。前註を見るべし。

も、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して滅觀出息入息を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、應所修法を思惟し、不應所修法を思惟せずして、勝法に親近して不勝法に親近せず。滅觀出息入息あり、及び滅觀出息入息の覺知ありて悅喜を得る、是を滅觀出息を學し、滅觀入息を學すと名づく。十五事覺り

何をか[三四]出世觀出息を學し、出世觀入息を學すと謂ふ。——何をか[三五]出世想と謂ふ。比丘あるが如し、或は樹下、露處に在りて是の如く思惟あらく、一切 [p. 710c] の流を捨して、愛盡・涅槃は寂靜・妙・勝なりと。如實人の若しは想、憶想、是を出世想と名づく。云何が觀なる。如實人の若しは觀・正觀・微觀・分別・解脫、是を觀と名づく。

比丘あり、法を思惟し出世想を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し、出世想を生ぜずして、善く法想を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く出世想を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し出世觀を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し出世觀を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く出世觀出息入息を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟し出世觀出息入息の覺知を生じて、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法を思惟し出世觀出息入息の覺知を生ぜずして、善く法相を取り、善く思惟し、善く解し、若しは法の勝・非勝にして能く出世觀出息入息の覺知を生じて善く法相を取り、善く思惟し、善く解す。比丘あり、法を思惟して出世想を生ずるも、法を思惟して、若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して出世觀を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜ[三六]ざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して出世觀出息入息を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せ

【三四】出世觀等。巴、Paṭinissaggānupassī Assasissāmī-ti sikkhati; Paṭinissaggānupassī Passasissāmī-ti sikkhati.
【三五】出世想。巴、Paṭinissagga-Saññā.
【三六】ざるも。宋元明の三本によりて補入。

ざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、法を思惟して出世觀出息入息の覺知を生ずるも、法を思惟して若しは生ぜざるも、法を思惟せざるも、勝法に親近して不勝法に親近せず。比丘あり、應所修法を思惟し、不應所修法を思惟せずして、勝法に親近して不勝法に親近せず、出世觀出息入息あり及び出世觀出息入息の覺知ありて悅喜を得る、是を出世觀出息を學し、出世觀入息を學すと謂ふ。

是を共念出息入息定と名づく。

何をか[三七]共念出息入息と謂ふ。出は謂く[三八]出息なり。人は謂く[三九]入息なり。若しは出息を以て境界と爲すの念、若し入息を以て境界と爲すの念の、定と共に住し共に滅する、若しは念を出息に繫し念を入息に繫する有りて心の共住を得る、是を共念出息入息と名づく。十六事覚り

(4)[p. 711b]何をか共不淨想定と謂ふ。(一)比丘あるが如し、自身を觀察して頂より足に至り、足より頂に至り、乃至、皮膚まで皆、是れ不淨なり。謂く、骨・齒・爪・髮・薄皮・厚皮・血・肉・筋・脈・脾・腎・心・肺・大小便利・涕・唾・膿血・膏肪・腦膜・淚・汗・骨髓なり。明眼人の、倉中に穀・胡麻・麥・豆の種々の別異を觀ずるが如く、是の如く、比丘も自身を觀じて頂より足に至るまで皆是れ不淨なる、如實人の若しは想・憶想、是を[四〇]不淨想と謂ふ。若し定の、此の想と共生・共住・共滅する、是を共不淨想定と名づく。

(二)復次に比丘あり、骨を思惟し、骨を知り、骨を解し、骨を受し、乃至、淚汗を思惟し、淚汗を知り、淚汗を解し、淚汗を受する、如實人の若しは想・憶想、是を共不淨想定と名づく。

(三)復次に比丘あり、四大身を觀ずらく、此の身は地大・水・火・風大有りと。屠牛師と屠師の弟子の牛を屠りて四分し、若しは坐し、若しは立ちて此の四分を觀ずるが如く、是の如く、比丘も四大身に地大・水・火・風大有るを觀じ、此の諸大の各各相違す——此の身の諸大は外の大に依る。飲食の

【三七】共念出息入息。巴、Ānā-pāna-sati.
【三八】出息。巴、Apāna
【三九】入息。巴、Āna.
【四〇】不淨想。巴、Asubha-saññā.

長養して羸劣・不堅なり。念念に磨滅し、暫住して久しからずと。如實人の若しは想・憶想、乃至、是を共不淨想定と名づく。

（四）復次に比丘あり、身の盡空俱空を觀じ、念を以て遍知解行す。猶、竹・葦の盡空俱空なるが如く、是の如く、比丘も身の盡空俱空なるを觀じ、念を以て遍知解行する、如實人の若しは想・憶想、乃至、是を共不淨想定と名づく。

（五）復次に比丘あり、癰瘡の如くなるを觀ずらく、身に九瘡津漏門有り。所出の津漏は皆、是れ不淨の津漏たり。是れ胎始膜、是れ腐敗、是れ臭穢、是れ惡むべき漏なり。眼は眵・涙・膿血の津漏を出し、耳は[四二]耵・聹・膿血の津漏を出し、鼻は涕・唾・膿血の津漏を出し、口は涎・唾・膿血の津漏を出し、二處には便利・膿血の津漏を出す。人の癰瘡の乾痂して久住するが如く、是の如く、九瘡津漏門の所出は皆、是れ不淨の津漏たり、是れ胎始膜 是れ腐敗、是れ臭穢、是れ惡むべき津漏なり。乃至、摩訶迦葉の說く所の如し――四大身は是れ衰耗・相違津漏たり。衆病の居する處、衆苦の依る處。身を愛護する者は死屍を愛護するが如し。壽命は短促なりと。――如實人の若しは想・憶想、乃[p. 711b]至、是を共不淨想定と名づく。

（六）復次に比丘あり、若しは死屍の棄てられて塚間に在り、若しは一日より三日に至るを見、自身も是の如きの法あり、是の如きの相ありて未だ是の法を離れざるを觀ずる、如實人の、若しは想・憶、乃至、是を共不淨想定と名づく。

（七）復次に、比丘あり、若しは死屍の棄てられて塚間に在り、若しは一日・二日にして膖脹・青瘀あるを見て、自身も是の如きの法あり、是の如きの相ありて未だ此の法を離れざるを觀ずる、如實人の若しは想・憶想、乃至、是を共不淨想定と名づく。

（八）復次に比丘あり、若しは死屍の棄てられて塚間に在り、若しは一日より三日に至り、烏・

【四二】耵。四本には粘に作る。

鳥・虎・狼、[四二]若干の諸獸の食噉する所と爲るを見、自身も是の如きの法あり、是の如きの相ありて、未だ是の法を離れざるを觀ずる、如實人の、若しは想・憶想、乃至、是を共不淨想定と名づく。

(九)復次に比丘あり、若しは死屍の、骨節相ひ連り、青・赤に爛壞し、膿血不淨にして臭穢惡むべきを見、自身も是の如きの法あり、是の如きの相ありて、未だ是の法を離れざるを觀ずる、如實人の若しは想・憶想、乃至、是を共不淨想定と名づく。

(一〇)復次に比丘あり、若しは死屍の骨節は相ひ連るも、血肉は已に離れて筋脈の未だ斷ぜざるを見、自身も是の如きの法あり、是の如きの相ありて未だ是の法を離れざるを觀ずる、如實人の若しは想・憶想、乃至、是を共不淨想定と名づく。

(一一)復次に比丘あり、若しは死屍の骨節已に壞し、未だ本處を離れざるを見、自身も是の如きの法あり、是の如きの相ありて未だ是の法を離れざるを觀ずる、如實人の若しは想・憶想、乃至、是を共不淨想定と名づく。

(一二)復次に比丘あり、若しは死屍の骨節已に壞して遠く本處を離れ、脚・髀・膊・臗・脊・脇・肋・手・足・肩・臂・項・髑髏の各々處を異にするを見、自身も是の如きの法あり、是の如きの相ありて未だこの法を離れざるを觀ずる如實人の、若しは想・憶想、乃至、是を共不淨想定と名づく。

(一三)復次に比丘あり、若しは死屍の骨節久しきが故に色の白きこと貝の如く、色の青きこと鴿の如く、朽敗・碎壞するを見、自身も是の如きの法あり、是の如きの相ありて未だ是の法を離れざるを觀ずる如實人の、若しは想・憶想、乃至、是を共不淨想定と名づく。

(一四)復次に比丘あり、骨・胞の膖脹・青瘀あり、上は赤爛有りて相ひ離散するを觀ずる如實人の若しは想・憶想、乃至、是を共不淨想定と名づく。

(一五)復次に比丘あり、骨を知り、骨を解し、骨を受し、乃至、散を思惟し、散を知り、散を

【四二】若干。宋元明の三本には野干に作る。

解し、散を受する如實人の、若しは想・憶想〔p. 711c〕乃至、是を共不淨想定と名づく。

(a)何をか共不淨想定と謂ふ。若し比丘ありて頂より足に至り、足より頂に至るまで、乃至、皮膚の皆、是れ不淨なり。謂く骨・齒・爪・髮・薄皮・厚皮・乃至、涙・汗・骨髓なり。明眼人の、倉中の穀・胡麻・麥・豆の種々の別異を觀ずるが如く、是の如く比丘も自身を見て頂より足に至るまで皆、是れ不淨なりと觀ずる、如實人の若しは想・憶想、是を不淨想と名づけ、此の想を以て、心を調伏し修して柔軟ならしめ、心を定して住せしむる、是を共不淨想定と名づく。

(b)復次に比丘あり、身の四大を觀じ、乃至、骨を思惟し骨を解し、骨を受し、乃至、散を思惟し、散を知り、散を解し、散を受する。如實人の若しは想・憶想、是を不淨想と謂ひ、此の想を以て心を調伏し、修して柔軟ならしめ、空を得て心の住し正住する、是を共不淨想定と名づく。

(5)何をか入火定と謂ふ。(一)比丘あるが如し、內の火大を受して火と爲し、內の地・水・風大を受して薪と爲し。比丘は內の火大、內の地・水・風大を以て烟を思惟し、烟を知り、烟を解し、烟を受し、炎を思惟し、炎を知り、炎を解し、衆を受す。比丘の是の如く、不放逸に觀じて、烟・炎は大火聚の如し。若し此の定を修し已りて烟・炎の大火聚の如くなる、是を入火定と名づく。

(二)復次に比丘あり、內の火大を受して火と爲し、外の地・水・風大、草・本の枝・葉を受して薪と爲し、比丘は內の火大、外の地・水・風大、草・木の枝葉を以て烟を思惟し、烟を知り、烟を解し、烟を受し、乃至、是を入火定と名づく。

(三)復次に比丘あり、內の火大を受して火と爲し、內外の地・水・風大、草・木の枝・葉を受して薪と爲し、比丘は內の火大、內外の地・水・風大、草・木の枝・葉を以て、烟を思惟し、烟を知り、烟を解し、烟を受し、乃至、是を入火定と名づく。

(四)復次に比丘あり、外の火大を受して火と爲し、內の地・水・風大を受して薪と爲し、比丘は

外の火大、內の地・水・風大を以て烟を思惟し、烟を知り、烟を解し、烟を受し、乃至、是を入火定と名づく。

(五)復次に、比丘あり、外の火大を受して火と爲し、外の地・水・風大、草・木の枝・葉を受して薪と爲し、比丘は外の火大、外の地・水・風大、草・木の枝・葉を以て烟を思惟し、烟を知り、烟を解し烟を受し、乃至、是を入火定と名づく。

(六)復次に比丘あり、內外の火大を受して火と爲し、內外の地・水・風大、草木〔p. 712a〕の枝葉を受して薪と爲し、比丘は內外の火大、內・外の地・水・風大、草・木の枝・葉を以て烟を思惟し烟を知り、烟を解し、烟を受し、乃至、是を入火定と名づく。

(七)復次に比丘あり、內外の火大を受して火と爲し、外の地・水・風大を受して薪と爲し、比丘は內外の火大を受して火と爲し、內の地・水・風大を以て烟を思惟し、烟を知り、烟を解し、烟を受し、乃至、是を入火定と名づく。

(八)復次に、比丘あり、內外の火大を受して火と爲し、外の地・水・風大、草・木の枝・葉を受して薪と爲し、比丘は內外の火大、外の地・水・風大、草・木の枝・葉を以て、烟を思惟し、烟を知り、烟を解し、烟を受し、乃至、是を入火定と名づく。

(九)復次に比丘あり、內外の火大を受して、火と爲し、內外の地・水・風大、草・木の枝・葉を受して薪と爲し、比丘は內外の火大、內外の地・水・風大、草・木の枝・葉を以て、烟を思惟し、烟を知り、烟を解し、烟を受し、乃至、是を入火定と名づく。

(6)何をか共證知神足定と謂ふ。[四三]欲定斷行成就修神足、精進・定心・定慧・定斷行成就修神足あらば、種々の神足を受けて[四四]大地を震動し、一を以て多と爲し、多を以て一と爲し、若しは近も若しは遠も、高山・牆壁を徹過して[四五]閡り無きこと、虛空を行くが如く、結[四六]加趺坐して空を陵ぐこと鳥の如

【四三】欲定等。所謂四神足で、道品中—卷第十六—を參照せよ。
【四四】大地以下。集異門足論以來、諸處に註記しおきたれば參照せよ。
【四五】閡。四本には礙に作る。
【四六】加。同上には跏と記す。以下も同ず。

く、地中に出入すること水に出沒するが如し。水を履むこと地の如く、身より烟炎を出すこと大火聚の如し。日月までも威德あつて手を以て捫摸し、乃至、梵天まで身の、自在を得。

[四七]云何が地を動かす。比丘あるが如し、少地想を受け、無量水想を受けて若し動かさむと欲せば地の動き正動して、所欲の如く、所欲に隨ひ、所欲を盡くす。沽酒師と沽酒師の弟子との酒を壓し已つて嚢を以て大水中に投じ、手に兩角を執り、擡擧するに、意に隨つて牽挽、自在に、所欲の如く、所欲に隨ひ所欲を盡くすが如く、是の如く、比丘も少地想を受け、無量水想を受け、若し動かさむと欲せば、地は動・正動して所欲の如く、所欲に隨ひ、所欲を盡くす是を地動定と名づく。

云何が一を以て多と爲す。比丘あるが如し、定に親近し、多く修學し已つて、自身に於て心を起して、化して餘の色身と爲り、支節具足し、諸根缺くる無し。陶師と陶師の弟子との治成調泥して種々の器と爲すに、悉く能く成辦して能く財利を得るが如く、是の如く、比丘も、自身に於て心を起して、化して餘の色身と爲り、支[p. 712b]節具足し、諸根缺くる無し。是の如く思惟すらく、此の四大色身と所化の色身と、四大色身異り所化色身異る。此の四大色身に於て心を起し、化して餘の色身と爲る。支節具足し、諸根缺くる無しと。人の、箱中の衣を出すが如し。是の如く思惟すらく、此は是れ箱なり。此は是れ衣なり。箱は異り、衣は異る。箱を以ての故に衣を出すと。是の如く比丘も思惟すらく、此は四大色身なり。此は所化の色身なり。四大色身異り、所化の[四八]色身異る。此の四大色身に於て化心を起して、化して餘の色身と爲る。支節具足し、諸根缺くる無しと。若しは化して二身・三身、乃至百身・千身と爲り、所欲に隨つて化して種々の身と爲る。——是を、一を以て多と爲すの定と名づく。

云何が多を以て一と爲す。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて、神足を以て化して無量身となり、還つて一身と爲る。人の種々の穀子を散じて地に布き、還、攝して一聚と爲すが如く、

【四七】云何等。以上の文の論釋。

【四八】色身。大正本等には身色と記す。宋元明の三本により改む。

是の如く、比丘も神足を以て無量身を化作し、還、攝して一身と爲る。是を多を以て一と爲すの定と名づく。

云何が徹過無[四九]閡なる。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて、若しは近、若しは遠の高山・牆壁を徹過すること無礙にして、虚空に遊ぶが如し。近は謂く光明の眼に來至して現在已前し、不滅・不歿・不除・不盡なるなり。遠は謂く光明の眼に來至せず、現在前せず、滅・歿・除・盡するなり。山に二種有り。土山・石山なり。巖窟・沙石、是を山と名づく。牆壁に二種あり。木牆壁と土牆壁となり。――若しは近・若しは遠の高山・牆壁あるに、一切の高山・牆壁を皆、空なりと思惟し、如し、比丘は此の地の山岸・棘刺處・幽險深河に於て悉く思惟せず、但、平等なること地の如く、礫牛の皮を釘して平地に布くに襵皺有ること無きが如しと思惟す。比丘あり、是の如く不放逸に觀するが故に、能く近き物も遠き物も高山・牆壁を徹過すること無閡にして、虚空に遊ぶが如し。是を徹過無閡定と名づく。

云何が結跏趺坐して虚を[五〇]陵ぐこと鳥の如くなる。比丘あるが如し、定に親近し、多く修學し已りて、[五一]空虚に上昇して結[五二]加趺坐し、東方、南・西・北方、四維・上下に遊ぶこと猶、飛鳥の地を離れて空に至るが如く、是の如く、比丘も不放逸に觀するが故に結加趺坐して空に遊ぶこと鳥の如し。是を遊空定と名づく。

云何が地中に出入すること、水に出歿するが如くなる。比丘あるが如し、定に親近し、多く修學し[p. 712c]已りて、地中に出入すること、水に出歿するが如く、比丘は地を思惟して水と爲し、水を知り、水を併し、水を受く。是の如く、比丘は不放逸に觀するが故に、地に出入すること水の如くなり。是を出入地如水定と名づく。

云何が水を履むこと、地の如くなる。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて、水を履む

【四九】閡。上註參照。下もすべて準ず。
【五〇】陵。四本には凌に作る。
【五一】空虚。明本、虚空に作る。
【五二】加。上註を見よ。下も準ず。

こと地の如く、比丘は水を思惟して地と爲し、地を知り、地を解し、地を受く。比丘の、是の如く不放逸に觀ずるが故に水を履むこと地の如し。是を水を履むこと地の如きの定と名づく。

云何が身より烟炎を出すこと大火聚の如くなる。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて、身より烟炎を出して大火聚の如し。比丘は內の火大を受して火と爲し、內の地・水・風大を受して薪と爲し、內の火大、地・水・風大を以て、出烟を思惟し、烟を知り、烟を解し、烟を受し、出炎を思惟し、炎を知り炎を解し炎を受し、比丘は是の如く、不放逸に觀ずるが故に身より烟炎を出して大火聚の如し。是を身より烟炎を出すこと大火聚の如くなるの定と名づく。

云何が日月まで威德ありて手を以て捫摸すなる。比丘あるが如し、定に親近し、多く修學し已りて、日月まで威德ありて手を以て捫摸す。比丘は日月を思惟して近と爲し、近を知り、近を解し、近を受し、比丘は閻浮提に住して、能く右手を舒べて日月を捫摸す。復次に比丘は自身に心を起して、化して餘の色身と爲る。支節具足し、諸根缺くること無し。此の化身を以て四天王上に至り、手を以て日月を捫摸す。又、此の四大色、身を以て四天王上に至り、手を以て日月を捫摸す。――是を日月まで、威德ありて手を以て捫摸するの定と名づく。

云何が乃至、梵天まで、身の、自在を得なる。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて、乃至、梵天まで、の身自在を得。比丘は自身より心を起して、化して餘の色身と爲り、支節具足し、諸根缺くる無し。此の化身を以て梵天上に至り、梵天に親近し、共に住し、共に坐し、共に去・來し、共に入定・知見し共に言說す。又、此の四大色身を以て飛むで梵天に到り梵天に親近し、共に住し共に坐し共に去來し共に入定・知見し共に言說す。是を乃至、梵天まで、身の、自在を得るの定と名づく。

若しは比丘は定に親近し多く修學し已りて、報定を得、若しは入定するも、入定せさるも能く種

種無量の神足を作す。謂く地を動かし、乃至、梵天まで身の、自在を得。是を共證知神足定と名づく。

(7)〔p. 713a〕何をか共證知天耳定と謂ふ。比丘あるが如し、若し野雀狹聲想を取る。比丘は心に麁の野雀狹聲より離れ、心をして細の野雀狹聲に入らしむ。比丘は細の野雀狹聲を以て心を調へ柔軟にし、心をして天耳智證に入らしむ。是の如く不放逸に觀ずるが故に共證知天耳を得。定を得て心は住し正住す。比丘は定を得已りて心をして人聲に向はしむ。――人は何をか論ずる所ぞ。何をか說く所ぞと。比丘は是の如く不放逸に觀ずるが故に人聲を聞くことを得、人の所論、所說の如く、悉く皆、之を聞く。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて、心をして地獄・畜生・餓鬼・天聲に向はしむ。――天は何をか論ずる所ぞ。何をか說く所ぞと。比丘は是の如く不放逸に觀ずるが故に天聲を聞くを得、所論・所說の如く、悉く皆、之を聞く。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて天耳の清淨なること人に過ぐるを以て一時に二種の聲を聞く、人と非人との聲なり。若し比丘は定に親近し多く修學し已りて報定を得、若しは入定するも入定せざるも、天耳の清淨なること人に過ぐるを以て一時に二聲を聞く。人と非人との聲なり。是を共證知天耳定と名づく。

(8)何をか共證知他心定と謂ふ。比丘あるが如し、自心の相を取る、――我が心は何に因りてか生じ、何に由りてか滅し、何にか親近し、何をか遠離すと。比丘の、是の如く自心の相を取り已つて、心をして他心に向ひ證知せしむ。比丘の是の如く不放逸に觀じて共證知他心定を得、心は住し正住す。比丘の、定を得已つて人の心の何の所思なりや、何の所覺なりや、何の所思惟なりやを知らむと欲す。比丘は是の如く不放逸に觀じて能く、人の心を所思の如く、所覺の如く、所思惟の如く知り、悉く皆之を知る。比丘あるが如し、定に親近し、多く修學し已りて地獄・畜生・餓鬼・天心の、何の所思・何の所覺・何の所思惟なるやを知らむと欲し、比丘は是の如く不放逸に觀じて、能く

地獄・餓鬼・畜生・天心を所思の如く、所覺の如く、所思惟の如く知り、悉く皆之を知る。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて能く他の人、他の衆生の心を知る。——有欲心は如實に有欲心なりと知り、無欲心は如實に無欲心なりと知り、有恚心は如實に有恚心なりと知り。無恚心は如實に無恚心なりと知り、有癡心は如實に有癡心なりと知り、無癡心は如實に無癡心なりと知り、沒心は如實に沒心なりと知り、散心は如實に散〔p. 713b〕心なりと知り。少心は如實に少心なりと知り、多心は如實に多心なりと知り、不定心は如實に不定心なりと知り、定心は如實に定心なりと知り、不解脫心は如實に不解脫心なりと知り、解脫心は如實に解脫心なりと知り、有勝心は如實に有勝心なりと知り、無勝心は如實に無勝心なりと知る。若しは比丘の定に親近し多く修學し已りて報定を得、若しは入定するも入定せざるも、能く他の人、他の衆生の心を知る。——有欲心は如實に有欲心なりと知り、乃至、有勝心・無勝心は如實に有勝心・無勝心なりと知る。是を共證知他心定と名づく。

(9)何をか共證知宿命定と謂ふ。比丘あるが如し、無間心を思惟す。後心と前心と、漸々に無間なるなり。比丘の是の如く無間心を思惟して證知共心無間定を得、心は住し正住す。比丘の定を得已つて、一心・二心・三心・四心・五心・十心・乃至、百心・千心、若しは過ぐる、或は母腹中に初識を生ずること有るを憶念す。比丘の是の如く思惟すらく、何の心の滅し已つてか母腹中に初識を生ずると。比丘は心をして宿命の證知に向はしむ。比丘の是の如く不放逸に觀ずるが故に共宿命證知定を得、心は住し正住す。比丘は定を得て憶念すること難からず。彼の本生、本有、本の居處・本の所起・本の我分、若しは欲終心、若しは心の滅し已つて母腹中に初識を受く〔等〕なり。若し此の定を修して憶念すること難からず。比丘は是の如く、思惟すらく、我は本・何の名・何の姓・何の生・何の食・何の壽命・何の究竟住たり、何の苦樂を受くると。比丘は若し此の定を修して、我は本、是の如き名、是の如き姓、是の如き生、是の如き食、是の如き壽命、是の如き究竟住たり、是の如く苦樂を受くと

知る。是を共證宿命定と名づく。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて一生・二生・乃至、百生・千生、若しは過ぐるを憶念す。或は曾つて無想天上に在りて住み、無間心の障閡を知る。凡夫は未だ聞かざるを以ての故に、我は本、曾つて彼に在らず、忽然として自ら生ずと言ふ。聖人は聞くを以ての故に、是の如く思惟す。――我が宿命は始め、心に由りて證知するに、是の如きの天有り。是の色は無想・無受・無心の住處なりと。比丘の是の如く思惟すらく、我は若しは宿命色を憶念すと。比丘あり、無間色を思惟す、後色と前色と漸々に無間なるなり。比丘の、是の如く〔p. 713c〕無間色を思惟して、共證知宿命色無間定を得心は住し正住す。比丘は定を得已りて憶念すること難からず。是を共證知宿命定と名づく。比丘あるが如し、[五三]定に親近し多く修學し已りて、一生・二生・乃至、百生・千生、若しは過ぐるを憶念す。或は曾つて無色天上に在る有り。無間色を以て障閡す。凡夫の未だ聞かざるを以ての故に、我は本曾つて彼に在らず、忽然として自ら生ずと言ふ。聖人の聞くを以ての故に是の如く思惟すらく、我が宿命は、色に由りて證知するに、是の如き無色有り、有想有受なり、若しは無色地なりと。比丘の、是の如く思惟すらく、我は若しは宿命心を憶念すと。比丘は後心と前心との漸々に無間なるを思惟す。比丘は是の如く無間心を思惟して共宿命心無間定を得、心は住し、正住す。比丘は定を得已つて憶念すること難からず。是を共證知宿命定と名づく。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて種々無量の宿命を憶念し、若しは、一生・二生・乃至、百生・千生、若しは劫成、若しは劫壞、若しは劫成壞を憶念し、我は本、曾つて彼に在り、是の如き名、是の如き姓あり、乃至、是の如く苦樂を受く。我は此に命終して彼に生れ彼に命終して此に生じ、此に於て成就して行ずと。種々無量の宿命を憶念す。若し比丘の定に親近し多く修學し已りて報定を得、若しは入定するも、入定せざるも種々無量の宿命を憶念し、一生より乃至此に於て成就して行ずる、是を共證知宿命定と名づく。

【五三】定、大正本等、定想に作るも、宋元明の三本により想の字を去る。

卷の第三十 〔p.713c〕

緒分定品 〔第十〕【其の下】

(10)何をか共明想定と謂ふ。比丘あるが如し、諸の明相を取る。謂く、火光・日・月・星宿光、[一]摩尼珠光なり。諸の光明相を取り已りて若しは樹〔p.714a〕下・露處に、光明を思惟し、光明を知り。光明を受する、如實人の若しは想・憶念、是を光明想と名づけ、若し定の此の想と共生・共住・共滅なる、是を共明想定と名づく。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて若しは樹下・露處に・清淨心を以て遍解行し、明勝心有る、如實人の若しは想・憶想、是を明想と名づけ。若し定の此の想と共生・共住・共滅なる、是を共明想定と名づく。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて若しは一樹下に若しは二・三乃至十樹下にて清淨心を以て遍解行して明勝心有る如實人の若しは想・憶想、是を明想と名づけ、若しは定の此の想と共生・共住共滅する、是を共明想定と名づく。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて、若しは[二]一園・二・三乃至、十園にて、清淨心を以て遍解行して明勝心有る。如實人の若しは想・憶想、是を明想と名づけ、若し定の此の想と共生・共住共滅する、是を共明想定と名づく。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて、若しは一園・二・三乃至十園にて清淨心を以て遍解行して[三]明勝心有る如實人の若しは想・憶想、是を明想と名づけ、若し定の此の想と共生・共住・共滅する、是を共明想定と名づく。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて、若しは一聚落・二・三、乃至、十聚落にて、清淨心を以て遍解行して[四]明勝心有る、如實人の若しは想・憶想、是を明想と名づけ、若し定の此の想と共生・共住共滅する、是を共明想定と名づく。比丘あるが如し、定に親近し多く修學し已りて、若しは一園・二・三乃至、十園にて、清淨心を以て遍解行し、明勝心有るの如實人の若しは想・憶想、是を明想と名づけ、若し定の此の想と共

【一】摩尼珠。Maṇi.

【二】二・三乃至、十園にて。四本には缺く。[illegible]

【三】明勝心。大正本には明心勝に作る。今敢て改む。但し左記參照。

【四】明勝心。大正本には明心勝と記す。宋元明の三本により改む。以下も同じ。

生・共住・共滅する、是を共明想定と名づく。比丘あるが如し、定に親近し、多く修學し已りて、水陸を周匝して清淨心を以て遍解行し、明勝心有る如實人の若しは想・憶想、是を明想と名づけ、若し定の此の想と共生・共住・共滅する、是を共明想定と名づく。比丘あるが如し、定に親近し、多く修學し已りて、天眼の清淨なること人に過ぐを以て、衆生の生死・好色・惡色・善道・惡道・卑・勝を見、衆生の造業を知る。――此の衆生は身惡行を成就し、口意惡行を成就し、賢〔p.714b〕聖を謗り、邪見にして邪見業を造り、身壞命終して地獄・餓鬼・畜生に墮す。此の衆生は身善行を成就し、口・意善行を成就し、賢聖を謗らず、正見ありて正[五]見業を造り、身壞命終して天上・人中に生ずと。是の如く天眼の清淨にして人に過ぐるを以て衆生の生死・好色・惡色・善道・惡道を見、衆生の造業を知る。此の定を修し已りて、天眼の清淨にして人に過ぐるを以て衆生の生死を見、乃至、所造の業を知る、是を共明想定と名づく。若し比丘の定に親近し多く修學し已りて、報定を得、若しは入定するも入定せざるも、天眼の清淨にして人に過ぐるを以て、衆生の生死を見、乃至、衆生が所造の業を知る、是を共明想定と名づく。

〔一一〕何をか無間定と謂ふ。比丘あり、無常・苦・空・無我、涅槃寂靜を思惟して定を得、心住し、定を得已つて、初聖の五根を得、初聖の五根を得るを以ての故に上正決定し、凡夫地を離れて未だ須陀洹果を得ず、若し中にして命終するは、是の處有ること無し。若しは未だ須陀洹果を得ずして地獄・畜生・餓鬼に墮するは、是の處有ること無し。若し比丘は定に親近し、多く修學し已りて、無間定を得、斯陀含果に向ひ、若し此の定の無間に滅し已つて、須陀洹果を得る、是を無間定と名づく。若し比丘の定に親近し多く修學し已りて、無間定を得、斯陀含果に向ひ、若し此の定の無間に滅し已りて、斯陀含果を得る、是を無間定と名づく。若しは比丘の定に親近し多く修學し已りて、無間定を得、阿那含果に向ひ、若し此の定の無間に滅し已りて、阿那含果を得る、是を無間定と名づ

【五】見。大正本等、身に作る。宋元明三本に傚つて見に改む。

く。若しは比丘の定に親近し多く修學し已りて、無間定を得、阿羅漢果に向ひ、若し此の定の無間に滅し已りて、阿羅漢果を得る、是を無間定と名づく。

(12)云何が[六]定根なる。學人の煩惱を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる、是を定根と名づく。

云何が定根なる。學人の煩惱を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる、及び餘の趣の人、行の過患を見、涅槃の寂靜を觀ずる若し實人の苦・集・滅・道を觀じて、未得を得むと欲し、未解を解せむと欲し、未證を證せむと欲し、道を修して煩惱を離るゝ、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが觀智具足し、若しは[p.714c]智地し若しは觀解脱心して、若し四沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得る、無學人の阿羅漢を未だ得ずして、聖法を得むと欲して道を修し、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脱心して阿羅漢果を得已れる如實人の・如趣人の、若しは心の住し正住し專住し緣住し、心の一定・一樂にして分散せず、捨せず、心は意に依り、心の獨處する、定力・定覺・正定、是を定根と名づく。

(13)云何が[七]定力なる。定根、是を定力と名づく。

(14)云何が[八]定覺なる。定力、是を定覺と名づく。

(15)云何が正定なる。若しは定善順にして逆ならざる、是を正定と名づく。

(16)云何が邪定なる。若し定の不善にして不順にして逆なる、是を邪定と名づく。

(17)云何が聖定なる。若し定の無漏なる、是を聖定と名づく。

(18)云何が非聖定なる。若し定の有漏なる、是を非聖定と名づく。

(19)云何が有漏定なる。若し定の有染なる、是を有漏定と名づく。

(20)云何が無漏定なる。若し定の無染なる、是を無漏定と名づく。

【六】定根。論母中には根定と記す。蓋し、定根は五根(集異門足論のその下參照)の一。

【七】定力。論母中には又、力定と見ゆ。蓋し、定力は五力の一(集異門足論のその下を見よ)。

【八】定覺。論母中には又、正覺定と記す。蓋し七覺分の一で、その下參照。

(21)云何が有染定なる。若しは定の有求なる、是を有染定と名づく。
(22)云何が無染定なる。若し定の無求なる、是を無染定と名づく。
(23)云何が有求定なる。若し定の當取なる、是を有求定と名づく。
(24)云何が無求定なる。若し定の非當取なる、是を無求定と名づく。
(25)云何が當取定なる。若し定の有取なる、是を當取定と名づく。
(26)云何が非當取定なる。若し定の無取なる、是を非當取定と名づく。
(27)云何が有取定なる。若し定の有勝なる、是を有取定と名づく。
(28)云何が無取定なる。若し定の無勝なる、是を無取定と名づく。
(29)云何が有勝定なる。若し定の有取なる、是を有勝定と名づく。
(30)云何が無勝定なる。若し定の不取なる、是を無勝定と名づく。
復次に若し定の餘の定の勝妙にして過ぐるもの有る、是を有勝定と名づけ、若し定の餘の定の勝妙にして過ぐるもの無き、是を無勝定と名づく。
復次に若し定を修し已りて如來の一切法に於て無礙の知見を得力に由り、尊勝なり、無上の正覺あり、如來の十力を成就し、四無所畏・大慈・大悲ありて法輪を轉じ、自在を成就する、此の定を除いて若し餘の定なる、是を有勝定と名づけ、若し上に除く所の定、是を無勝定と名づく。
(31)〔p.715b〕云何が受定なる。若し定の內なる、是を受定と名づく。
(32)云何が非受定なる。若し定の外なる、是を非受定と名づく。
(33)云何が內定なる。若し定の受なる、是を內定と名づく。
(34)云何が外定なる。若し定の非受なる、是を外定と名づく。
(35)云何が有報定なる。若し定の報法なる、是を有報定と名づく。

(36)云何が無報定なる。若しは定の報、若しは非報非報法なる、是を無報定と名づく。

(37)云何が共凡夫定なる。若し定の非凡夫も入出し、凡夫も亦入出する、是を共凡夫定と名づく。

(38)云何が不共凡夫定なる。若し定の非凡夫の入出する、是を不共凡夫定と名づく。

(39)云何が非凡夫共定なる。若し定の凡夫の入出し、非凡夫も亦入出する、是を非凡夫定と名づく。

(40)云何が非凡夫不共定なる。若し定の凡夫の入出して、非凡夫の入出せさる、是を非凡夫不共定と名づく。

(41)云何が共聲聞定なる。若し定の非聲聞の入出し、聲聞も亦入出する、是を共聲聞定と名づく。

(42)云何が不共聲聞定なる。若し定の非聲聞の入出して、聲聞は入出せざる、是を不共聲聞定と名づく。

(43)云何が非聲聞共定なる。若し定の聲聞の入出し、非聲聞も亦入出する、是を非聲聞共定と名づく。

(44)云何が非聲聞不共定なる。若し定の聲聞の入生し、非聲聞の入生せざる、是を非聲聞不共定と名づく。

(45)云何が如電定なる。若し定の少々住し、少時住し、電の少々住し、少時住するが如く、定も亦是の如くなる、是を如電定と名づく。

(46)云何が如金剛定なる。若し定の無量、無量住し、無量時住し、金剛の無量、無量住し、無量時住するが如く、定も亦是の如くなる。是を如金剛定と名づく。

復次に若しは定の修し已りて少煩惱分を斷ず[九]。電の雲中より出でて少闇分を焰し、便ち速に滅するが如く、定も亦是の如くなる、是を如電定と名づけ、若し定の修し已りて一切の煩惱を斷じ、

【九】斷。大正本等、漸に作るも、宋元明の三本によりて改む。

若しは麁も、若しは微も〔〇〕斷滅せざる無し。金剛の珠石に投ずるに、破壞・摧折せざるもの無きが如く、定も亦是の如くなる、是を金剛定と名づく。

復次に若し定を修して須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得る、是を如電定と名づけ、若し定を修して阿羅漢果を得る、是を如金剛定と名づく。

〔p.715b〕復次に若しは定を修して須陀洹果、乃至、阿羅漢果・辟支佛道を得る、是を如電定と名づけ、若し定を修して若し如來所修の定にして、一切法に於て無礙の知見を得、力に由り尊勝たり、無上の正覺あり、如來十力を成就し、四無所畏・大慈・大悲あり、法輪を轉じ、自在に成就する、是を如金剛定と名づく。

(47)云何が不定得定なる。若し定を得ることの不定得・難得・難持なる、是を不定得定と名づく。

(48)云何が定得定なる。若し定を得ることの決定得にして難得ならず、易持なる、是を定得定と名づく。

(49)云何が有行難持定なる。若し定を得ることの不定得・難得・難持にして、由力・尊・自在無く、所欲の如くならず、所欲に隨はず、所欲を盡さず、有行にして入出し難し。船の水に逆うて難行するが如く、定も亦是の如くなる、是を有行難持定と名づく。

(50)云何が無行易持定なる。若し定を得ることの決定得にして、難得・ならず、易得にして、由力、尊・自在なり、所欲の如く、所欲に隨ひ所欲を盡くし、無行にして入出す。船の水に順て易行するが如く、定も亦是の如くなる、是を無行易持定と名づく。

(51)云何が一分修定なる。若し定を修し已りて、想の光明有り、但、色を見ず、若し色を見るも、想の光明有らざる、是を一分修定と名づく。

(52)云何が二分修定なる。若し定を修し已りて、想の光明有り、亦、色を見る、是を二分修定と

【〇】斷滅せざる無し。大正本等、二回繰り返すも、今少し省記す。恐らくは衍文ならむ。

名づく。

復次に若しは定を修し已りて、智を生ずるも、但、煩惱を斷ぜず 若しは煩惱を斷ずるも、智を生ぜざる、是を一分修定と名づけ、若し定を修し已りて智を生じ、能く煩惱を斷ずる、是を二分修定と名づく。

復次に若し定を修し已りて盡智生じ、無生智に非ざる、是を一分修定と名づけ、若し定を修し已りて、盡智生じ、及び無生智もなる、是を二分修定と名づく。

(53)云何が有想定なる。若し定の境界有る、是を有想定と名づく。

(54)云何が無想定なる。若し定の境界無き、是を無想定と名づく。

復次に無想定・滅盡定を除く、若し餘の定、是を有想定と名づけ、若し無想定・滅盡定、是を無想定と名づく。

(55)云何が如事定なる。若し法の法の如く狀貌の如く、自性の如く、隨緣所起の如く、相ひ入〔一〕出するが如くなる、是を如事定と名づく。

(56)〔p.715c〕云何が憶想定なる。若し法の法相の如く、狀貌の如く、自性の如く、隨緣起の如く、若しは法相の如く、若しは法の相ひ入出するが如くに非ざる、是を憶想定と名づく。

(57)云何が離色想定なる。若しは定の色想を離れて入り、若しは色想を離れて入定する、是を離色想定と名づく。

(58)云何が不離無想定なる。若しは定の色想を離れずして入り、若しは色想を離れずして入定する、是を不離色想定と名づく。

復次に若し定の無色界なる、是を離色想定と名づけ、若し定の色界及び聖なる、是を不離色想定と名づく。

【一】出。四本にはこの字を見ず。

(59)云何が勝入定なる。若し[二二]八勝入、是を勝入定と名づく。

(60)云何が[二三]一切入定なる。若し[二四]十一切入、是を一切入定と名づく。

(61)云何が有覺定なる。若し定の覺と相應し、覺と共生・共住・共滅する、是を有覺定と名づく。

(62)云何が無覺定なる。若し定の覺の相應に非ず、覺と共生せず、共住せず、共滅せざる、是を無覺定と名づく。

(63)云何が有觀定なる。若し定の觀相應にして、觀と共生・共住・共滅する、是を有觀定と名づく。

(64)云何が無觀定なる。若し定の觀相應に非ず、觀と共生せず、共住せず、共滅せざる、是を無觀定と名づく。

(65)云何が有喜定なる。若し定の喜相應にして喜と共生・共住・共滅する、是を有喜定と名づく。

(66)云何が無喜定なる。若し定の喜相應に非ずして喜と共生せず、共住せず、共滅せざる、是を無喜定と名づく。

(67)云何が共味定なる。若し定の染行相應なる、是を共味定と名づく。

(68)云何が共捨定なる。若し定の不苦不樂受相應なる、是を共捨定と名づく。

(69)云何が忍相應定なる。若し定の忍と共生・共住・共滅する、是を忍相應定と名づく。

(70)云何が非忍相應定なる。若し定の忍と共生・共住・共滅に非ざる、是を非忍相應定と名づく。

(71)云何が智相應定なる。若し定の智と共生・共住・共滅する、是を智相應定と名づく。

(72)云何が非智相應定なる。若し定の智と共生・共住・共滅するに非ざる、是を非智相應定と名づく。

(73)云何が忍始定なる。若し定の聖・無漏にして堅信・堅法の所修なる、是を〔p.716:〕忍始定と名づく。

【二二】八勝入。巻十八中を見よ。
【二三】一切入定。論母には遍入處に作る。
【二四】十一切入。同上巻十八中參照。

(74)云何が智始定なる。若し定の聖・無漏にして、見道人の所修なる、是を智始定と名づく。
(75)云何が欲終定なる。若し定の最後識相應なる、是を欲終定と名づく。
(76)云何が始生定なる。若し定の初識相應なる、是を始生定と名づく。
(77)云何が善定なる。若し定の修なる、是を善定と名づく。
(78)云何が不善定なる。若し定の斷なる、是を不善定と名づく、
(79)云何が無記定なる。若し定の非報非報法を受くる、是を無記定と名づく。
(80)云何が學定なる。若し定の聖にして、無學に非ざる、是を學定と名づく。
(81)云何が無學定なる。若し定の聖にして學に非ざる、是を無學定と名づく。
(82)云何が非學非無學定なる。若し定の非聖なる、是を非學非無學定と名づく。
(83)云何が報定なる。若し定の受、若しは定の善報なる、是を報定と名づく。
(84)云何が報法定なる。若し定の有報なる、是を報法定と名づく。
(85)云何が非報非報法なる。若し定の無記にして我分の攝に非ざる、是を非報非報法定と名づく。
(86)云何が見斷定なる。若し定の不善にして思惟斷に非ざる、是を見斷定と名づく。
(87)云何が思惟斷定なる。若し定の不善にして非見斷に非ざる、是を思惟斷定と名づく。
(88)云何が非見斷非思惟斷定なる。若し定の善・無記なる、是を非見斷非思惟斷定と名づく。
(89)云何が見斷因定なる。若し定の見斷、若しは見斷法の報なる、是を見斷因定と名づく。
(90)云何が思惟斷因定なる。若し定の思惟斷、若しは思惟斷法の報なる、是を思惟斷因定と名づく。
(91)云何が非見斷非思惟斷因定なる。若し定の善、若しは善法の報、若しは非報非報法なる、是を非見斷非思惟斷因定と名づく。

(92)云何が不定なる。若し定の不善なる、是を下定と名づく。
(93)云何が中定なる。若し定の無記なる、是を中定と名づく。
(94)云何が上定なる。若し定の善なる、是を上定と名づく。
復次に若し定の不善・無記なる、是を下定と名づけ、若し定の非聖の善なる、是を中定と名づけ、若し定の聖・無漏なる、是を上定と名づく。
(95)云何が麁定なる。若し定の欲界繫なる、是を麁定と名づく。
(96)云何が細定なる。若し定の色界繫なる、若しは不繫、是を細定と名づく。
(97)云何が微定なる。若し〔p.716b〕定の無色界繫なる、是を微定と名づく。
復次に若し定の欲界繫・色界繫なる、是を麁定と名づけ、若し定の空處繫・識處繫・不用處繫・若しは不繫なる、是を細定と名づけ、若し定の非想非非想處繫なる、是を微定と名づく。
復次に若し定の欲界繫・色界繫・空處繫・識處繫・不用處繫なる、是を麁定と名づけ、若し定の不繫なる、是を細定と名づけ、若し定の非想非々想處繫なる、是を微定と名づく。
(98)云何が有覺有觀定、(99)無覺有觀定、(100)無覺無觀定、(101)空定、(102)、無相定、(103)無非定なる。[15]道品の三支道中に廣く說くが如し。
(104)云何が三願得定なる。若しは願果得定、若しは願得定、若しは寂靜願得定なり、(a)若し比丘の一・二定を得、若しは空・無相・無心定なり。比丘の是の如く思惟すらく、我は應に此の定に親近し、多く修學すべし、四沙門果を得むことを願欲するが故にと。比丘は定に親近し多く修學す、四沙門果を得むことを願欲するが故に。比丘は定に親近し、[16]多く修學して四沙門果を願得す。若し是の如くにして定を得る、是を願果得定と名づく。
(b)若し比丘あり、懃進にして行ず、或は有欲・無欲・有進・無進なり。比丘の是の如く思惟すらく、

【一五】道品。卷一五—一六中を見よ。
【一六】多く。四本により補入。

我は應に此の欲及び進を修し親近し多く修學すべしと。比丘は欲及び進に親近し多く修學す。應に懃進して定心すべければなり。若し是の如くにして定を得る、是を願得定と名づく。

(c)若し比丘の一・二定を得ること、不[一七]得定・難得・難持なり。比丘の是の如く思惟すらく、我は應に此の定に親近し多く修學し、我をして由力・尊・自在を得せしむべしと。比丘は定に親近し多く修學す。我をして由力・尊・自在を得せしむとなり。若し是の如くにして定を得る、是を寂靜願得定と名づく。――是を三願得定と名づく。

(105)云何が非三願得定なる。不願果得定・不願得定・不寂靜願得定なり。

(a)若し比丘あり、一・二定を得、若しは空・無相・無作定なり。比丘は是の如く思惟せず、「我は應に此の定に親近し多く修學すべし。四沙門果を得むことを願欲せざるが故に」と。比丘は定に親近し多く修學す。四沙門果を得むことを願欲せざるが故に。比丘は定に親近し多く修學し已りて、沙門果を得。若し是の如くにして定を得る、是を不願果得定と名づく。

(b)若しは比丘あり、懃進して行じ、或は有欲・無欲・有進・無進なり。比丘は是の如く思惟せず、「我は應に[p.716c]欲・及び進を修し、親近し多く修學すべし」と。比丘は欲及び進に親近し多く修學す、應に懃心・定心すべしとなり。若し是の如くにして定を得る、是を不願得定と名づく。

(c)若し比丘の一・二定を[一八]得ること、不得定・難得・難持なり。比丘の是の如く思惟せず。「我は應に此の定に親近し多く修學し、我をして定を得、由力・尊・自在ならしむべし」と。比丘は定に親近し多く修學す、我をして定を得、由力・尊・自在ならしむべしとなり。若し是の如くにして定を得る、是を不寂靜願得定と名づく。――是を非三願得定と名づく。

(106)云何が內身觀內身定なる。若しは比丘あり、一切の內の四大色身の攝法、若しは一處の內の四大色身の攝法に、無常・苦・空・無我を觀じて定を得、心の住・正住する。是を內身觀內身定と名づく。

【一七】得定。定得ならざるか。上の有行附持、無行品持兩定の下節參照。

【一八】得。大正本、近得とあるも、宋元明三本には近字なく、宮本には得背に作る。今は上來の文に合せて、平直に近字を暫く去る。

(107)云何が外身觀外身定なる。若しは比丘あり、一切の外の四大色身の攝法、若しは一處の外の四大色身の攝法に、無常・苦・空・無我を觀じて定を得、心の住・正住する、是を外身觀外身定と名づく。

(108)云何が內外身觀內外身定なる。若しは比丘あり、一切の內外の四大色身の攝法、若しは一處の內外の四大色身の攝法に、無常・苦・空・無我を觀じて定を得、心の住・正住する、是を內外身觀內外身定と名づく。

(109)云何が內受觀內受定なる。若しは比丘あり、一切の內受、若しは一處の內受に無常・苦・空・無我を觀じて定を得、心の住・正住する、是を內受觀內受定と名づく。

(110)云何が外受觀外受定なる。若しは比丘あり、一切の外の受、若しは一處の外の受に無常・苦・空・無我を觀じて定を得、心の住・正住する、是を外受觀外受定と名づく。

(111)云何が內外受觀內外受定なる。若しは比丘あり、一切の內外の受、若しは一處の內外の受に無常・苦・空・無我を觀じて定を得、心の住・正住する、是を內外受觀內外受定と名づく。

(112)云何が內心觀內心定なる。若しは比丘あり、一切の內の心、若しは一處の內の心に、無常・苦・空・無我を觀じて定を得、心の住・正住する、是を內心觀內心定と名づく。

(113)云何が外心觀外心定なる。若しは比丘あり、一切の外の心、若しは一處の外の心に、無常・苦・空・無我を觀じて定を得、心の住・正住する、是を外心觀外心定と名づく。

(114)云何が內〔p.717a〕外心觀內外心定なる。若しは比丘あり、一切の內外の心、若しは一處の內外の心に無常・苦・空・無我を觀じて定を得、心の住・正住する、是を內外心觀內外心定と名づく。

(115)云何が內法觀內法定なる。若しは比丘あり、四大色身の攝法と及び受と心とを除く餘の一切の內の法、若しは一處の內の法に無常・苦・空・無我を觀じて定を得、心の住・正住する、是を內法觀

內法定と名づく。

(116)云何が外法觀外法定なる。若しは比丘あり。四大色身の攝法及び受・心を除く餘の一切の外の法、若しは一處の外の法に無常・苦・空・無我を觀じて定を得、心の住・正住する、是を外法觀外心定と名づく。

(117)云何が內外法觀內外法定なる。若しは比丘あり、四大色身の攝法及び受・心を除く、餘の一切の內外の法、若しは一處の內外の法に無常・苦・空・無我を觀じて定を得、心の住・正住する、是を內外法觀內外法定と名づく。

(118)云何が內境界定なる。內の法を思惟して若し定の生ずる、是を內境界定と名づく。

(119)云何が外境界定なる。外の法を思惟して若し定の生ずる、是を外境界定と名づく。

(120)云何が內外境界定なる。若し內外の法を思惟して、若し定の生ずる、是を內外境界定と名づく。

(121)[一九]云何が衆生境界定なる。衆生境界定無し。復次に若し慈悲・喜・捨を以て衆生を思惟し、若し定の生ずる、是を衆生境界定と名づく。

(122)云何が色境界定なる。色法を思惟して若し定の生ずる、是を色境界定と名づく。

(123)云何が無色境界定なる。無色法と思惟して若し定の生ずる、是を無色境界定と名づく。

(124)云何が衆生境界定なる。上に說くが如し。

(125)云何が有爲境界定なる。有爲法を思惟して若し定の生ずる、是を有爲境界定と名づく。

(126)云何が無爲境界定なる。無爲法を思惟して若し定の生ずる、是を無爲境界定と名づく。

(127)云何が衆生境界定なる。上に說くが如し。

(128)云何が法境界定なる。法を思惟して若し定の生ずる、是を法境界定と名づく。

【一九】(122)。こゝに(120)―(121)を省くは、論母中には、(120)內定境界定、(121)外定境界定とあつて、今の(122)衆生境界定と三者一連なるものゝ如く、今、これを逸せるによる。蓋し、落脫なるべし。

(129)云何が無境無界定なる。〔p.717b〕無境界定無し。復次に過去・未來法を思惟して若し定の生ずる、是を無境界定と名づく。
(130)[10]云何が衆生境界定なる。上に說くが如し。
(131)云何が少定なる。若し定の少少住・少間住なる、是を少定と名づく。
(132)云何が中定なる。若し定の中中住・中間住なる、是を中定と名づく。
(133)云何が無量定なる。若し定の無量無量住・無量間住なる、是を無量定と名づく。
復次に、若し定の少住・少軟・少境界なる、是を少定と名づけ、若し定の中住・中軟・中境界なる、是を中定と名づけ、若し定の無量住・無量勝・無量境界なる、是を無量定と名づく。
(134)云何が少境界定なる。若し定の一衆生・一法・一行を緣とするが故に生じて如來及び涅槃を除く、是を少境界定と名づく。
(135)云何が中境界定なる。若し定の有量の衆生・有量の法を緣とするが故に生じて、如來及び涅槃を除く、是を中境界定と名づく。
(136)云何が無量境界定なる。若し定の無量の衆生・無量の法、如來及び涅槃を緣とするが故に生ずる、是を無量境界定と名づく。
(137)云何が少定少境界なる。若し定の少住・少軟・一衆生・一法・一行を緣とするが故に生じて如來及び涅槃を除く、是を少定少境界と名づく。
(138)云何が少定中境界なる。若し定の少住・少軟・有量の衆生・有量の法緣とするが故に生じ、如來及び涅槃を除く、是を少定中境界と名づく。
(139)云何が少定無量境界なる。若し定の少住・少軟・無量の衆生・無量の法、如來及び涅槃を緣とするが故に生ずる、是を少定無量境界と名づく。

【10】云何等。論母中、これあるをもつて、宋元明の三本に從ひ、補入。

(140)云何が中定少境界なる。若し定の中住・中軟・一衆生・一法・一行を緣とするが故に生じ、如來及び涅槃を除く、是を中定少境界と名づく。

(141)云何が中定中境界なる。若し定の中住・中軟・有量の衆生・有量の法を緣とするが故に生じ、如來及び涅槃を除く、是を中定中境界と名づく。

(142)云何が中定無量境界なる。若し定の中住・中軟・無量の衆生・無量の法、如來及び涅槃を緣とするが故に生ずる、是を中定無量境界と名づく。

(143)云何が無量定少境界なる。若し定の無量住・無量勝・一衆生・一法・一行を緣として如來及び涅槃を除く、是を無量定〔p.717c〕少境界と名づく。

(144)云何が無量定中境界なる。若し定の無量住・無量勝・有量の衆生・有量の法に緣るが故に〔生じ〕、如來及び涅槃を除く、是を無量定中境界と名づく。

(145)云何が無量定無量境界なる。若し定の無量住・無量勝・無量の衆生・無量の法、如來及び涅槃を緣とする、是を無量定・無量境界と名づく。

(146)云何が少住定なる。若し定の少間住し彈指頃の如く、或は多にして[三]搆牛頃の如く、或は多に非ざる、是を少住定と名づく。

(147)云何が中住定なる。若し定の中間住し、搆牛頃の如く、或は多にして、七日或は多に非ざる、是を中住定と名づく。

(148)云何が無量住定なる。若し定の無量間住し七日或は多なる、是を無量住定と名づく。

(149)云何が少定少住なる。若し定の少境界・少軟にして、若し少間住し、彈指頃の如く、或は多にして搆牛頃の如く、或は多に非ざる、是を少定少住と名づく。

(150)云何が少定中住なる。若し定の、少境界・少軟にして、若し中間住し、搆牛頃の如く或は多

【三】搆。宋元明宮の四本には𣫍に作る。下も同様。

にして、七日或は多に非ざる、是を少定中住と名づく。

(151)云何が少定無量住なる。若し定の、少境界・少軟にして、若し無量間住し、七日或は多なる、是を少定無量住と名づく。

(152)云何が中定少住なる。若し定の中境界・中軟にして、若し少間住し、彈指頃或は多にして、搆牛頃の如く或は多に非ざる、是を中定少住と名づく。

(153)云何が中定中住なる。若し定の、中境界・中軟にして、若し中間住し、搆牛頃の如く或は多にして、七日或は多に非ざる、是を中定中住と名づく。

(154)云何が中定無量住なる。若し定の、中境界・中軟にして、若し無量間住し、七日或は多なる、是を中定無量住と名づく。

(155)云何が無量定少住なる。若し定の、無量境界・無量勝にして、若し少間住し、彈指頃の如く、或は多にして搆牛頃の如く、或は多に非ざる、是を無量定少住と名づく。

(156)云何が無量定中住なる。若し定の、無量境界・無量勝にして、[三]中間住し、搆牛頃の如く、或は多にして七日或は多に非ざる、是を無量定中住と名づく。

(157)云何が無量定・無量住なる。若しは定の、無量境界・無量勝にして、無量間住し、七日或は多なる、是を無量定・無量住と名づく。

(158)云何が過去定なる。若し定の生じ已りて滅せる、是を過去定と名づく。

(159)云何が〔p.718a〕未來定なる。若し定の未生・未出なる、是を未來定と名づく。

(160)云何が現在定なる。若し定の生じて未だ滅せざる、是を現在定と名づく。

(161)云何が過去境界定なる。過去法を思惟して若し定の生ぜる、是を過去境界定と名づく。

(162)云何が未來境界定なる。未來法を思惟して若し定の生ぜる、是を未來境界定と名づく。

【三】中。大正本等すべて少に作るも、上來の文面に反省して、敢へて改む。

(163)云何が現在境界定なる。現在法を思惟して若し定の生ぜる、是を現在境界定と名づく。

(164)云何が非過去非未來非現在境界定なる。非過去非未來非現在法を思惟して若し定の生ぜる、是を非過去非未來非現在境界定と名づく。

(165)云何が欲界繫定なる。若し定の欲漏・有漏なる、是を欲界繫定と名づく。

(166)云何が色界繫定なる。若し定の色漏有漏なる、是を色界繫定と名づく。

(167)云何が無色界繫定なる。若し定の無色漏・有漏なる、是を無色界繫定と名づく。

(168)云何が不繫定なる。若し定の聖・無漏なる、是を不繫定と名づく。

(169)云何が作定非離なる。若し定の非聖にして有報なる、是を作定非離と名づく。

(170)云何が離定非作なる。若しは定の聖・有報にして能く煩惱を斷ずる、是を離定非作と名づく。

(171)云何が作離定なる。一定の若しは作・若しは離なる無く、若しは作定非離、若しは離定非作なり、是を作離定と名づく。

(172)云何が非作非離定なる。作離定を除く若し餘の定、是を非作非離定と名づく。復次に作定非離とは若し定の欲界の有報なる、是を作定非離と名づけ、若し定の聖・有報にして、能く煩惱を斷ずる、是を離定非作と名づけ、若し定を修して欲界の煩惱を斷じ、色・無色界の有を受くる、是を作離定と名づけ、若しは定の無報、若しは定の聖・有報なるも、煩惱を斷ずるに非ざる、是を非作非離定と名づく。

(173)取定・(174)非[二三]出出定・(175)非取出取定・(176)非取非出定・(177)有染定・(178)非離染離染定・(176)非有染有染離染定・(180)非有染非離染定・(181)有[二四]軶定・(182)非離軶離軶定・(183)非有軶有軶離軶定・(184)非有軶非離軶定も亦是の如し。

【二三】出。取に非ざるか。

【二四】軶。以下すべて、大正本等には扼に作り、四本には今の如く作る。

(185)云何が智果定非斷果なる。若し定を修して智を生ずるも、能く煩〔p.718b〕惱を斷ずるに非ざる、是を智果定非斷果と名づく。

(186)云何が斷果定非智果なる。若し定を修して煩惱を斷ずるも智を生ぜざる、是を斷果定非智果と名づく。

(187)云何が智果斷果定なる。一定の若しは智果・若しは斷果なる無く、若しは智果定非斷果、若しは斷果定非智果なり。是を智果斷果定と名づく。

(988)云何が非智果非斷果定なる。智果斷果定を除く若し餘の定、是を非智果非斷果定と名づく。

復次に智果定非斷果とは、若し定を修して非聖の五通の或は一或は二を得る、是を智果定非斷果と名づけ、若し定を修して斯陀含果を得る、是を斷果定非智果と名づけ、若し定を修して須陀洹果・阿那含果・阿羅漢果を得る、是を智果斷果定と名づけ、若し定の無報若しは定の有報にして、智を生ずるに非ず、能く煩惱を斷ずるに非ざる、是を非智果・非斷果定と名づく。

(189)智果定非得果定・(190)得果定非智・(191)果智果得果定・(192)非智果非得果定も亦是の如し。

(193)云何が盡定非覺なる。若し定を修して煩惱を斷じ、智を生ぜざる、是を盡定非覺と名づく。

(194)云何が覺定非盡なる。若し定を修して智を生じ、煩惱を斷ぜざる、是を覺定非盡と名づく。

(195)云何が盡覺定なる。一定の、若しは盡、若しは覺なる無く、若しは盡定非覺、若しは覺定非盡なり。是を盡覺定と名づく。

(196)云何が非盡非覺定なる。盡覺定を除く若しは餘の定、是を非盡非覺定と名づく。

復次に若し定を修して斯陀含果を得る、是を盡定非覺と名づけ、若し定を修して非聖の五通の或は一或は二を得る、是を覺定非盡と名づけ、若し定を修して須陀洹果・阿那含果・阿羅漢果を得る、是を盡覺定と名づく、若し定の非報、若しは定の有報なるも、能く煩惱を斷ずるに非ず、智を生ず

るに非ざる、是を非盡非覺定と名づく。

(198)射定・(198)[三五]非解定・(199)非射射解定・(200)非射解定も亦是の如し。

(201)云何が退分定なる。若し定の不善なる、是を退分定と名づく。(202)云何が住分定なる。若し定の無記なる、是を住分定と名づく。

(203)云何が增長分定なる。若し定の非聖の善なる、是を增長分定と名づく。

(204)云何が射分定なる。若し定の聖有漏にして能く煩惱を斷ずる、是を射分定と名づく。

復〔p. 718c〕次に、若し定を修して非聖の善法の、非住、不增長なる、是を退分定と名づけ、若し定を修して非聖の善法の住して不退なるも增長せざる、是を住分定と名づけ、若し定の共射相應なる、是を射分定と名づく。

(205)云何が退分定非住分なる。若し定の有退にして住に非ざる、是を退分定非住分と名づく。

(206)云何が住分定非退分なる、若し定の住にして有退に非ざる、是を住分定非退分と名づく。

(207)云何が退分住分定なる。一定の退分にして住分なる無く、若しは退分非住分、若しは住分非退分なり。是を退分住分定と名づく。

(208)云何が非退非住分定なる。退分住分定を除く若しは餘の定なる、是を非退分非住分定と名づく。

(209)云何が退分定非增長分なる。若し定の有退にして增長に非ざる、是を退分定非增長分と名づく。

(210)云何が增長分定非退分なる。若し定の增長にして退に非ざる、是を增長分定非退分と名づく。

(211)云何が退分增長分定なる。一定の退分にして增長分なる無く、若しは退分非增長分、若しは增長分非退分なり。是を退分增長分定と名づく。

【三五】解。四本には脫に作る。

(212)云何が非退分非増長分定なる。 退分増長分を除く若し餘の定なる、是を非退分非増長分定と名づく。

(213)云何が退分定非射分なる。 若し定の有退にして射に非ざる、是を退分定非射分と名づく。

(214)云何が射分定非退分なる。 若し定の有射にして退に非ざる、是を射分定非退分と名づく。

(216)云何が退分射分定なる。 一定の退分にして射分なる無く、若しは退分・定非射分定、若しは射分定非退分なり。 是を退分射分定と名づく。

(216)云何が非退分非射分定なる。 退分射分定を除く若し餘の定なる、是を非退分非射分定と名づく。

(217)云何が住分定非増長分なる。 若し定の有住にして増長に非ざる、是を住分定非増長分と名づく。

(218)云何が増長分定非住分なる。 若し定の有増長なる、是を増長分定非住分と名づく。

(219)云何が住分増長分定なる。 一定の住分にして増長分なる無く、若しは住分定非増長分定、 若しは増長分非住分なり。 是を住分増長分定と名づく。

(220)云何が非住分非増長分定なる。 住分増長分定を除く若しは餘の定なる、 〔p. 719c〕是を非住分非増長分定と名づく。

(221)云何が[二六]有住分定非射分なる。若し定の有住にして射に非ざる、是を住分定非射分と名づく。

(222)云何が射分定非住分定なる。 若し射にして住に非ざる、是を射分定非住分と名づく。

(223)云何が住分射分定なる。 一定の若し住分にして射分なる無く、若しは住分定非射分、 若しは射分定非住分なり。 是を住分射分定と名づく。

(224)云何が非住分非射分定なる。 住分射分定を除く若し餘の定なる、是を非住分非射分定と名づ

【二六】 有。 宋元明の三本には缺く。

く。

(225)云何が增長分定非射分なる。若し定の有增長にして射に非ざる、是を增長分定非射分と名づく。

(226)云何が射分定非增長分なる。若し定の有射にして增長に非ざる、是を射分定非增長分と名づく。

(227)云何が增長分射分定なる。一定の若し增長分にして射分なる無く、若しは增長分定非射分、若しは射分定非增長分無なり、是を增長分・射分定と名づく。

(228)云何が非增長分非射分定なる。增長分射分定を除く若し餘の定なる、是を非增長分非射分定と名づく。

(229)四念處・(230)四正懃・(231)四神足・(232)四禪・(233)四無量心・(234)四無色定・(235)四向・(236)四果・(237)四修定・(238)四斷・(239)五根・(240)五力・(241)五解脫入・(242)五出界・(243)五觀定・(244)五生解脫法・(245)六念・(246)六空・(247)六出界・(248)六明分法・(249)六悅根法・(251)六無喜正覺・(251)七覺・(252)七想・(253)七定所須・(254)八聖道・(255)八解脫・(256)八勝處・(257)九滅・(258)九次第滅定・(259)九想・(260)十想・(261)十正法・(262)十一切入・(263)十一解脫入は上の道品に廣く說くが如し。

舍利弗阿毘曇論(終)

後記

一、この後巻の譯は實はもつと早く出來る筈であつたが、助力者の光地英學君が汎太平洋佛教青年會大會等に活躍し、多忙をきはめた爲に慮外なる遲延をして終つた。そしてそれが爲に、同光地君の親友で、また愛する學生の一人なる餘語翠巖君に甚大なる資助を蒙ることとなつた。同君には內々、前卷に於ても少からざる助力を受けた相であるが、こゝに便をもつて篤く謝意を表したい。

一、かくてこの譯は先九月初旬から、小生も加筆し、正味一ヶ月位の間に於て大成せる所であるが、時日のかやうに短かつた上に、已にいへる如く(前卷序中)所譯舊譯であり、その上、近代になつては殆ど讀み手も碌々なかつたといふ譯で、本書後半以降のは、每卷、脫文衍文、脫句衍句その他の無いのはないといつた事實も存し、努力の割合に酬ひらるゝもの無き所以も少くないことと思ふ。幸に諸學者の示教、御叱正を得ば冥福この上もなく、こゝに謹むで所願をのべて、譯業完成の筆を擱く。

昭和九年十月十二日

渡邊楳雄誌